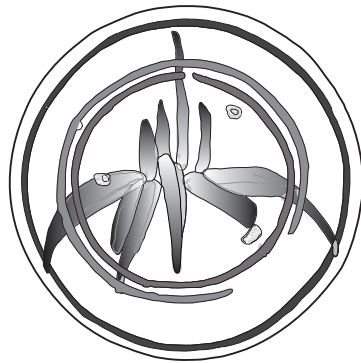


愛知県東海市

平成22年度 畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告



2012年

愛知県東海市教育委員会

# 序

知多半島の付け根に位置する愛知県東海市は、沿岸部に展開する工業地帯に代表される「鉄」と全国有数の生産量を誇る「洋ラン」のまちとして、発展を遂げてきました。

現在では沿岸部の埋め立てによって海岸線が変化し、古代の景観を想起することは難しくなっていますが、古代から中世にかけては「あゆち潟」と呼ばれた広大な遠浅の海が広がっていました。

市では、名古屋鉄道太田川駅周辺を市の中心市街地と位置づけ、平成4年度より土地区画整理事業を進めてきました。これに伴い事業区域内に所在する遺跡の発掘調査を平成11年度より行っています。この発掘調査によって、かつて「あゆち潟」と共に生きた太古の人々の暮らしが少しずつ明らかになってきました。

本報告書では平成22年度に実施した調査成果を報告します。本年度の調査では中世から近世初頭にかけての土地利用の一端を知ることができました。今後、本報告書が地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

愛知県東海市教育委員会

教育長 加藤 朝夫



## 例 言

1. 本報告書は平成22年度東海市中心街整備事業に伴う埋蔵文化財調査として行われた畑間・東畑・郷中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は平成22年度におこなわれ、東海市教育委員会監督のもと、株式会社島田組が実施した。
3. 発掘調査は計4地点で行われ、それぞれ1・2地点（郷中遺跡）、3地点（東畑遺跡）、4地点（畑間遺跡）の3つの遺跡にわけられる。
4. 発掘調査期間は各地点、以下のとおりである。
  - 【1地点】平成22年8月17日～9月30日
  - 【2地点】平成22年8月19日～9月30日
  - 【3地点】平成22年6月28日～8月17日
  - 【4地点】平成23年1月11日～2月28日
5. 発掘調査面積は各地点、以下のとおりである。
  - 【1地点】410㎡      【2地点】380㎡
  - 【3地点】950㎡      【4地点】160㎡
6. 発掘作業は東海市教育委員会宮澤浩司監督のもと筧和也（株式会社島田組調査員）が主体となり、以下の者の協力でおこなわれた。  
飯田サシ子、生駒信子、笠井義夫、加藤雄二、清沢亮太、斉藤勝亮、シオネ・ホロプル、須藤 悠、須藤由美、田中信也、平野光男、平野武光、藤井恭彦、山崎久男、山本 學、
7. 発掘調査における記録のうち、測量に関しては北島誠司（株式会社島田組主任測量士）がおこなった。
8. 本報告書の本文執筆は、東海市教育委員会宮澤浩司監督のもと、筧和也、丹生泰雪・萩原美香（株式会社島田組調査補助員）が分担しておこなった。内訳は、第1章を宮澤、第2章第1節～第3節、第3章第1節～第2節、第4章第1節～第2節、第6章を筧、第2章4節～5節を丹生、第3章第3節、第4章第3節を萩原が担当した。また、第5章の自然科学分析については辻本裕也（パリノ・サーヴェイ）管理のもと、金井慎司・松元美由紀が担当した。なお、編集は筧がおこなった。
9. 本報告書の遺物接合・復元・実測・トレースは安孫子雅史（株式会社島田組主任調査員）、樽谷雅幸、丹生雅子（株式会社島田組調査補助員）、萩原美香がおこなった。
10. 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析の内容は、出土した貝殻の同定とこれらが出土した土壌、含有物の分析である。
11. 本報告書に掲載した遺物写真は、安孫子雅史・筧和也が撮影した。
12. 発掘調査により作成された図面・写真等の記録類、および出土遺物はすべて、東海市教育委員会で保管している。
13. 本報告書にて作成した図面・写真類はすべて東海市教育委員会で保管している。

## 凡 例

1. 遺跡の略称は、それぞれ、HM（畑間遺跡）、HH（東畑遺跡）、GN（郷中遺跡）とした。これらは、遺物注記や写真フィルム注記などに使用した。
2. 遺構記号は東海市教育委員会の指示により、愛知県埋蔵文化財センター発行の「埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル」に準じた。凡例は以下に記す。  
SK：土坑 SE：井戸 SB：建物 ST：耕作地（水田・畑地） SD：溝 SX：その他（性格不詳）
3. 遺構番号は、発掘調査時に遺構の種類に関係なく調査区毎に4桁の通し番号で付与（1地点：1001、1002、1003… 2地点：2001、2002、2003…、3地点：3001、3002、3003…、4地点：4001、4002、4003…）して管理した。本報告書では、この番号に遺構記号を合わせて提示している。
4. 本調査において測量記録の測地系は、世界測地系第V系に準じ、方位は平面直角座標を基準とした。なお、標高はすべてT. P.（東京湾平均海面高度）を基準としている。
5. 発掘調査時における土層の土色および、遺物の色調は『新版標準土色帖』を用いてJIS notationと日本語の対応土色名を示した。
6. 遺物図面（挿図）の各遺物に対する番号は遺跡ごとに通し番号を付与した。
7. 本報告書掲載の遺物の番号は、図面（挿図）、写真番号は、遺物観察表において共通するが、遺物によって、写真のみとしたものや、図面だけ掲載したものがあるため、本文中には図面番号と、写真番号をそれぞれ掲載している。
8. 本報告書掲載遺物の年代比定は以下の文献を参照しておこなった。  
山茶碗 … 藤沢良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 三重県埋蔵文化財センター  
常滑焼 … 赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『シンポジウム 中世常滑焼を追って』資料集  
煮炊具 … 1996 『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム資料集 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会  
瀬戸美濃 … 愛知県史編纂委員会 2007 『愛知県史』別篇2（中世・近世 瀬戸系）愛知県
9. 発掘調査時の遺構の検出について1～3地点は地山直上で1面調査をおこなった。そのため、掘削面が判明しえない遺構があるが、調査区壁面の断面観察から確認できるものに関しては、本文中で掘削層を記した。
10. 遺物実測図の縮尺は1/3を基本としているが、遺物の大きさによって異なるものがある。この場合別途スケールを変えて掲載している。
11. 遺物観察表に記載した法量について、（ ）内の数値は残存値を示す。また、口径など復元可能なものは復元した数値を掲載している。

# 目 次

## 第1章 調査の経緯と歴史的環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位地と環境	2
第3節 畑間・東畑・郷中遺跡における既往の調査	5
第4節 調査経過	7

## 第2章 郷中遺跡（1・2地点）の調査

第1節 概要と基本層序	9
第2節 1地点の検出遺構	14
第3節 2地点の検出遺構	18
第4節 1地点の出土遺物	21
第5節 2地点の出土遺物	28

## 第3章 東畑遺跡（3地点）の調査

第1節 概要と基本層序	31
第2節 検出遺構	38
第3節 出土遺物	45

## 第4章 畑間遺跡（4地点）の調査

第1節 概要と基本層序	50
第2節 検出遺構	53
第3節 出土遺物	61

## 第5章 自然科学

第1節 郷中遺跡	64
第2節 畑間遺跡	75

## 第6章 まとめ

第1節 郷中遺跡の調査成果	82
第2節 東畑遺跡の調査成果	85
第3節 畑間遺跡の調査成果	86

付表 遺物観察表	90
----------	----

## 遺構・遺物挿図

図 1	畑・東畑・郷中遺跡の位地	2
図 2	調査地位置図	2
図 3	周辺遺跡	4
図 4	既存の調査地	6
図 5	1 地点西壁土層断面図	10
図 6	1 地点南壁土層断面図	11
図 7	2 地点東壁土層断面図	12
図 8	2 地点北壁土層断面図	13
図 9	SD1003平面・土層断面図	14
図10	SD1002平面・土層断面図	15
図11	SE1012完掘・断面図	16
図12	1 地点遺構平面図	17
図13	SD2002・2036平面・断面図	18
図14	SD2042平面・面図	19
図15	2 地点遺構平面図	20
図16	SD1002・1003出土土器	22
図17	SD1002・1003出土土器 A	23
図18	1 地点出土の土器類①	25
図19	1 地点出土土器類 A	26
図20	1 地点その他出土遺物	27
図21	2 地点出土土器類	29
図22	2 地点出土山茶碗	30
図23	3 地点 1 tr. 東壁～2 tr. 北壁土層断面図	32・33
図24	3 地点 3 tr. 北壁土層断面図	34・35
図25	3 地点 1 tr. 東壁～2 tr. 北壁土層断面	36・37
図26	SD3016・SK3015平面・断面図	38
図27	SD3023・SK3127・SX3114平面・断面図	39
図28	SK3025平面・断面図	40
図29	SK3073平面・断面図	40
図30	SK3075平面・断面図	41
図31	SK3120平面・断面図	41
図32	ST3128平面図	42
図33	1 tr. 北部ピット群 (SX3129)	43
図34	2 tr. 中央部東ピット群 (SX3130)	43

図35	3 地点遺構平面図	44
図36	3 地点出土山茶碗	46
図37	3 地点出土陶器・土師皿	47
図38	3 地点出土の常滑焼甕・壺	48
図39	3 地点出土の常滑焼甕・鉢・その他	49
図40	4 地点南壁土層断面図	51
図41	4 地点西壁土層断面図	52
図42	SB4081・SD4014平面・断面図	54
図43	SX4010・4043・4045平面・断面図	55
図44	SX4038平面・断面図	55
図45	SX4004平面・断面図	56
図46	SX4076平面・断面図	56
図47	SK4001平面・断面図	57
図48	SK4026平面・断面図	57
図49	SD4075平面・断面図	58
図50	SD4077・SX4078平面・断面図	58
図51	4 地点上層遺構平面図	59
図52	4 地点下層平面図	60
図53	4 地点出土山茶碗	61
図54	4 地点出土陶磁器類	62
図55	4 地点出土須恵器	62
図56	4 地点出土土製品・金属製品	63
図57	郷中遺跡出土のサルボウガイおよびアサリの殻長分布	68
図58	郷中遺跡SD1002出土貝殻の種類構成	73
図59	畑間遺跡出土のシオフキ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリの殻長分布	78
図60	畑間遺跡出土の遺構別種類構成	81
図61	知多郡大里村絵図	83

## 写真図版

写真1～4	郷中遺跡（1地点）
写真5～7	郷中遺跡（2地点）
写真8～12	東畑遺跡（3地点）
写真13～17	畑間遺跡（4地点）
写真18～22	郷中遺跡（1地点）出土遺物
写真23～24	郷中遺跡（2地点）出土遺物

- 写真25～27 東畑遺跡（3地点）出土遺物  
写真28～29 畑間遺跡（4地点）出土遺物  
写真30～31 郷中遺跡出土骨  
写真32 郷中遺跡出土貝  
写真33～34 郷中遺跡出土大型植物遺体  
写真35 畑間遺跡出土貝

## 表関係

表 1	郷中遺跡検出動物分類群の一覧	65
表 2	郷中遺跡の骨貝類同定結果	66・67
表 3	郷中遺跡の微細物分析結果	72
表 4	畑間遺跡検出動物分類群の一覧	75
表 5	畑間遺跡の貝類同定結果	76・77

## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

### 第1節 調査にいたる経緯

畑間遺跡、東畑遺跡および郷中遺跡は愛知県東海市内大田町に位置する（第1図）。平成8年から10年にかけて愛知県教育委員会によって実施された詳細分布調査（注1）によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての散布地、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての散布地、郷中遺跡は弥生時代から中世にかけての散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を中心市街地として位置づけ、平成4年度より土地区画整理事業および鉄道高架事業を実施している。これらの事業に伴い事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するために平成8年度に試掘調査を実施した（注2）。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することが確認された。この試掘調査の結果に基づき土地区画整理事業担当部局である中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会により主に道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成22年度末時点での調査済み面積は14,100㎡である。

平成22年度は畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡範囲内の5地点2,190㎡について、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者である東海市長より平成22年4月9日付け中第26号にて発掘調査依頼があり、現地調査、1次整理作業について、平成22年6月16日に株式会社島田組中部営業所と業務委託契約を締結した。

現地調査は6月28日より着手し、3地点、1地点、2地点、4地点の順に調査を実施した。5地点（290㎡）については家屋移転交渉が遅れたことから年度内の調査着手が困難となったため、調査を実施しなかった。平成23年3月14日に現地調査は終了し、その後整理作業を実施、3月30日付けで成果品の納入を受けた。

報告書作成については、調査を実施した株式会社島田組中部営業所と2次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を平成23年6月15日に締結し、株式会社島田組の整理事務所において、2次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

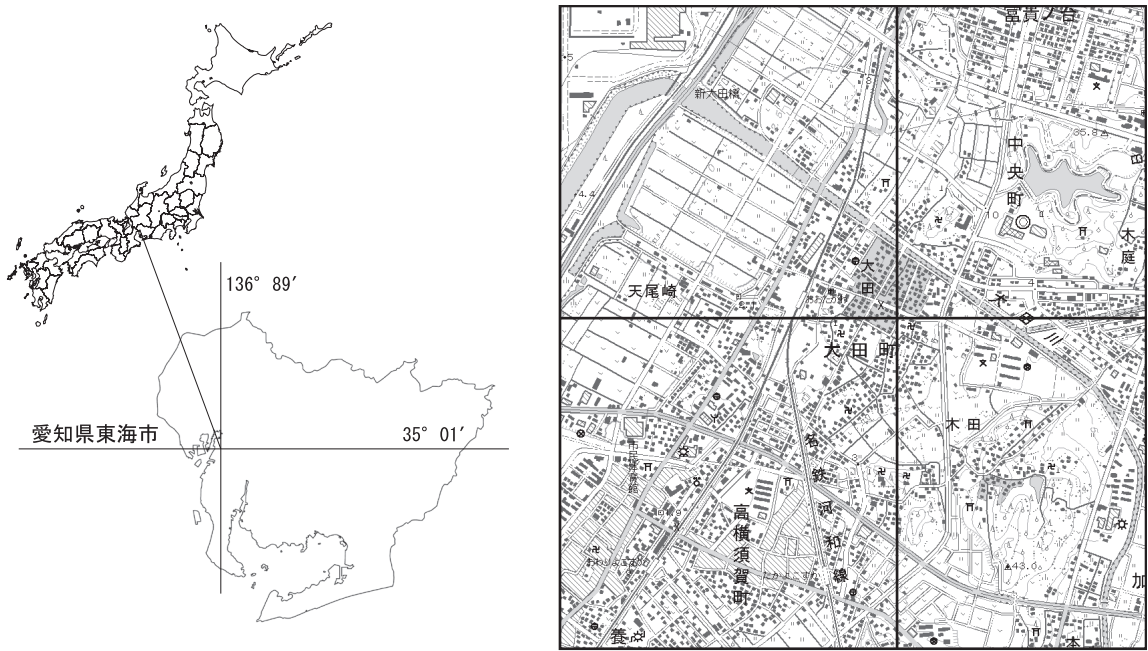


図1 畑・東畑・郷中遺跡の位地

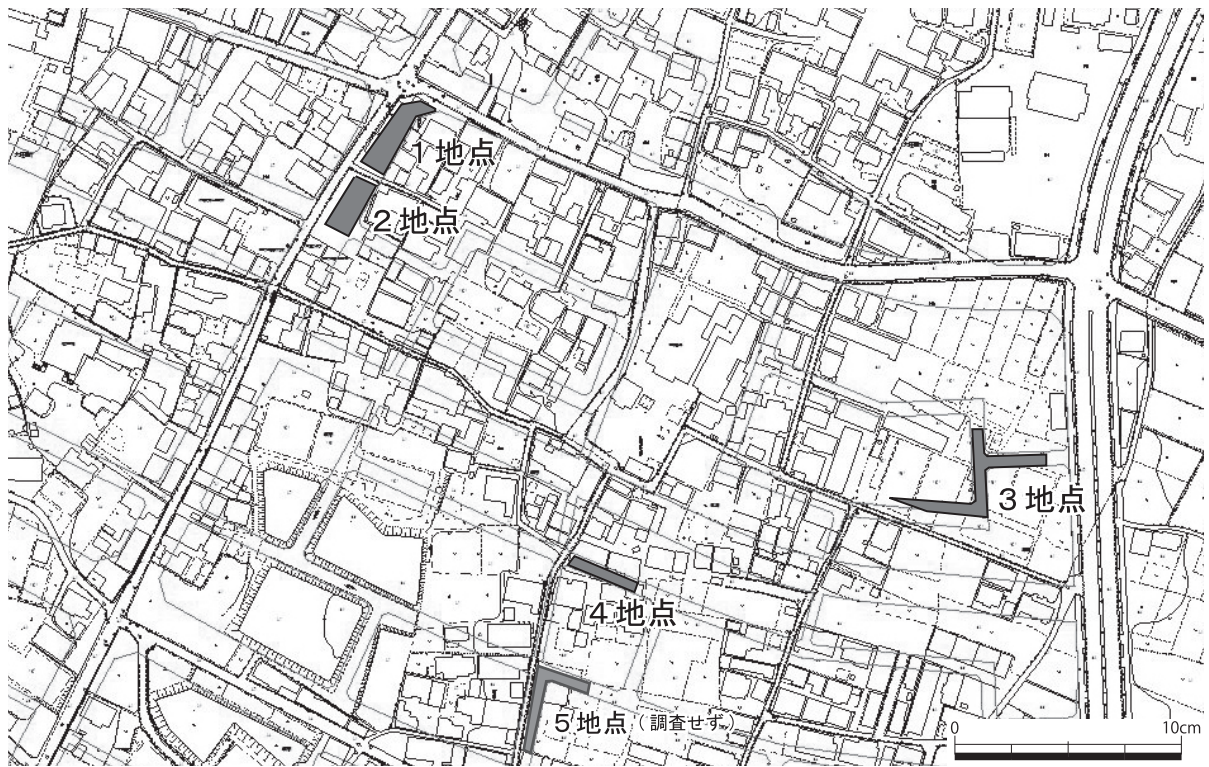


図2 調査地位置図

### 第2節 遺跡の位置と環境

畑間、東畑、郷中遺跡は知多半島西岸、伊勢湾に面した海岸平地に展開する砂堆上に立地する遺跡である。

知多半島西岸部には海岸部に向けて開けた平地がいくつか展開するが、畑間、東畑、郷中遺跡の立地する東海市大田町周辺から、知多市北部の寺本にかけて南北に延びる海岸平地は最大のものである。こ



の平地は沖積層であり、縄文海進の時期には水面下にあったとみられる。その証左として、畑間、東畑、郷中遺跡の東側に延びる丘陵上に展開する高ノ御前遺跡がある。高ノ御前遺跡からは市内最古の縄文時代前期の土器が出土しており、現標高は12m程である。

その後、畑間、東畑、郷中遺跡周辺が陸地化したのは、海水面が後退する縄文時代中期から後期にかけてとみられ、この頃までには砂堆と呼ばれる砂の高まりが形成されている。

砂堆とは、木曾川や、知多半島の丘陵部から流れる河川や、波による浸食によって供給された砂が、伊勢湾の沿岸流などによって運ばれて海岸に沿って堆積したもので、その形成時期によって本遺跡周辺では3条の砂堆列がみられる。最も海岸から奥の砂堆列から順に第1、第2、第3砂堆と呼んでおり、畑間、東畑、郷中遺跡は第1砂堆に位置する。第1砂堆は最も東西幅が広く大規模であるが、南北方向は丘陵部に規制され、1km程にとどまる。この丘陵部には北側の丘陵上に真言宗の古刹である弥勒寺が、南側丘陵状には天台宗の古刹である観福寺が所在し、両者に挟まれた位置に集落が展開することは注目に値する。この他第1砂堆上には、最も北側の弥勒寺の立地する丘陵山裾に王塚古墳（古墳時代・滅失）、神宮前遺跡（古墳～中世）が所在する。王塚古墳は、昭和初期の道路の拡幅の際に石室などが出土したと伝えられ、出土遺物の一部（須恵器短頸壺・坏蓋）が東海市立郷土資料館に所蔵されている他は詳らかではない。同じく神宮前遺跡についても遺物散布地として知られてはいるが、発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。しかしながら、両遺跡のすぐ南を流れる大田川は江戸時代初期に尾張藩2代藩主徳川光友によって、横須賀御殿の建築に伴って新たに開削された流路であり、近世までは畑間、東畑、郷中遺跡とつながっていたことから、現在の景観とは異なった、一体のものとして遺跡をとらえる必要がある。

第2砂堆は第3砂堆と比べて幅が狭く小規模である。名鉄太田川駅の辺りから北側の大宮神社辺りまで広がっている。この砂堆上には後田遺跡（古墳～平安）が位置する。後田遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、製塩土器が採集されており、後述する上浜田遺跡、下浜田遺跡と密接に関連した遺跡であると考えられる。この砂堆の北端に位置する大宮神社は創建時期が不詳であるが、東海市史によると平安時代に大郷（大田町周辺）が熱田神宮の荘園となるに伴って、荘園鎮守神として熱田から勧請されたと推定されている。

第1砂堆は形成時期が最も新しいが、旧海岸線沿いに知多市北部まで延びている。知多市域ではこの第1砂堆上に弥生時代以降、大規模な集落が形成された。本市域では古墳時代中期以降に著名な製塩遺跡として知られる松崎遺跡（古墳～平安）や上浜田遺跡（古墳～平安）、下浜田遺跡（奈良～平安）が存在する。

概観すると、畑間、東畑、郷中遺跡の所在する大田町周辺では、最も奥側の第1砂堆上に中心的な集落が立地し、第2、第3砂堆が利用されるのは古墳時代以降ということになる。これは第3砂堆上に弥生集落が展開する知多市などとは様相を異にする。その理由としては、大田町周辺では内陸側に奥まった、いわば谷状地形であったことから、第1砂堆が大きく発達し、居住に適していたことが考えられる。

この大田町周辺には上記の遺跡の他、主に弥生時代の集落である烏帽子遺跡（縄文～近世）、尾張藩2代藩主徳川光友の浜御殿である横須賀御殿跡などの遺跡が所在する。また、近世には第3砂堆の先海岸部が新田開発されて埋め立てられた。川北新田、川南新田、浜新田がそれである。中でも浜新田からは圃場整備に伴って新田堤防の埝（いり）が出土している。こうした近世の新田開発や大田川の付け替



- |           |              |            |            |
|-----------|--------------|------------|------------|
| 36 浜新田堤防  | 51 龍雲院遺跡     | 62 烏帽子遺跡   | 135 上浜田遺跡  |
| 37 松崎貝塚   | 52 東畑遺跡      | 116 上前田遺跡  | 136 御州浜庭園跡 |
| 41 後浜新田堤防 | 53 高ノ御前遺跡    | 117 西広1号遺跡 | 140 川南新田堤防 |
| 42 下浜田遺跡  | 54 太田川第3踏切貝塚 | 118 西広2号遺跡 | 143 滝川半斎屋敷 |
| 43 後田遺跡   | 55 庄之脇遺跡     | 119 山畑遺跡   | 144 横須賀代官所 |
| 44 神宮前遺跡  | 56 木田城跡      | 121 横須賀御殿跡 |            |
| 45 王塚古墳   | 57 木田遺跡      | 122 郷中遺跡   |            |
| 46 峰畑貝塚   | 58 下畑遺跡      | 123 弥勒寺遺跡  |            |
| 47 北屋敷遺跡  | 59 前畑遺跡      | 133 丸根古墳   |            |
| 50 畑間遺跡   | 60 北広遺跡      | 134 大池北貝塚  |            |

図3 周辺遺跡

えに加え、現代の埋立てによって弥生時代以来の景観は失われているが、遺跡の分布や僅かに残る砂堆の痕跡などから、かつての環境を復元することができる。



### 第3節 畑間・東畑・郷中遺跡における既往の調査

畑間遺跡、東畑遺跡および郷中遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、これまで発掘調査は実施されていなかった。初めて調査されたのは、前述したとおり平成8年度に実施された中心街整備事業に先立つ試掘調査である。調査では土地区画整理事業が予定されていた区域内に20箇所のトレンチを試掘した。このうち畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡に関係するトレンチは16箇所に上る。この試掘調査によって従前範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが遺跡の範囲を特定することができた。各遺跡の時期については、畑間遺跡については中世から近世の時期、東畑遺跡については弥生時代中期から古墳時代前期の時期と古代から中世の時期、郷中遺跡については弥生時代前期の遺物も出土しているが中世を中心とする時期であることが推測された。

その後、平成11年度から中心街整備事業に伴う緊急発掘調査により畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡それぞれの発掘調査が行われ、各遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第4図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗に応じて調査を実施しており、小規模な調査とならざるを得ない。平成22年度末の調査済面積は14,100㎡である。この内平成11年度から平成19年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については現在報告書刊行に向けて整理作業を実施しているが、概要については報告済みである（注3）。

これによれば畑間遺跡を中心とした調査区からは平成8年度実施の試掘調査での様相とはやや異なり、弥生時代から近世にかけての広範な時期の遺構・遺物が出土した。特に砂堆の海側の落ち際にあたる畑間遺跡の西側を中心に遠賀川系土器や条痕文系土器といった弥生時代前期に属する時代の土器が出土しており、明確な弥生時代前期の遺構は確認されていないものの、砂堆の海岸側に弥生時代前期の生活の痕跡が窺える。また、遺跡範囲のほぼ中央部には弥生中期から後期段階の方形周溝墓群を確認している。現在のところ道路工事の進捗に応じて調査を行っているため、方形周溝墓群の東西方向の範囲は確認しているものの、南北方向については十分な調査が住んでいない状況である。

また、東畑遺跡の畑間遺跡と接する北側区域からは平成21年度の調査の際に弥生後期から古墳時代にかけての竪穴住居跡を複数確認している。北側には先述の方形周溝墓群が広がることから、居住域の中心と考えられる。

他方、畑間遺跡の北半分及び郷中遺跡からは弥生時代から古墳時代に属する遺物の出土は稀である。この地区での出土遺物の中心は古代から中世にかけての時期のものであり、時代の変遷に伴って明確に場所を変えて土地利用がなされていることが窺える。特筆すべき事項として東畑遺跡の北側、今回報告する3地点の調査区の北側において平成20年度の調査で確認した区画溝がある。周辺からは瓦や墨書土師皿埋納遺構などを確認しており、出土遺物から屋敷地とは考えにくい状況がある。周辺の調査例の増加を待つしかないが、小規模な持仏堂など、仏教に関係した遺構が存在する可能性が考えられよう（注4）。



図4 既存の調査地

注1：『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』 愛知県教育委員会 1999

注2：『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』 東海市教育委員会 1997

注3：「伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概報—」東海市教育委員会（永井伸明・宮澤浩司）  
『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会 2007

注4：『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』 東海市教育委員会 2009



#### 第4節 調査経過

畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査業務委託は、平成22年6月16日に契約を締結。同6月28日から現場事務所設営などの作業を開始した。最初に着工した発掘現場は3地点（東畑遺跡）であり、7月6日に重機により表土掘削を開始した。事前打合せでは、中世遺物包含層の上面までを機械掘削をおこない、以下人力で遺物を取り上げつつ、地山直上まで掘削し、この面で遺構検出をおこなうことで合意していた。しかし、3地点では一部を除き、包含層と思われる堆積が、後世の攪乱土により削平されていた状況が判明した。この時、慎重に調査を進めるため、残存した包含層と同じレベルで機械掘削を止めたが、この面での検出作業時にビニールなどの現代遺物が出土したため、該当する層が昭和期の耕作土と判明。あらためてこの層を機械掘削する方針に変更した。その結果、地山のほぼ直上まで耕土層が削平している状況が明らかになった。機械掘削後、7月16日には部分的に残存していた包含層掘削作業が終了し、遺構精査作業および記録作業に移行した。遺構掘削および記録作業は、8月5日にほとんど終了し、翌8月6日に高所作業車での撮影をおこない、調査は終了。翌週の8月9日からは1・2地点（郷中遺跡）の準備を進めながら、3地点の埋め戻し、機材撤去をおこなった。途中、盆休み（8月11～16日）を経て、17日から1地点の重機掘削を開始した。1・2地点は調査区が道路を挟んで隣接しており、平行して作業が行えるように、機械掘削を継続しておこなった。1・2地点ともに、機械掘削の際に多くの攪乱が遺構検出面である地山面より深くおよんでいる状況を確認し、事前協議で機械掘削を止めるとした包含層の残存が良好ではないと判断した。こうした状況から、包含層掘削は機械掘削が終了した18日の翌19日および、20日の午前中には終了し、20日の午後には遺構検出および、検出状況の記録写真・測量まで終了した。ただし、この時点で地山上面よりさらに深く掘りこまれた攪乱を掘削した結果、湧水が激しく、週明けの8月23日には、遺構面全面が浸水している状況であった。1・2地点では、排水ポンプの夜間の稼働は騒音になると考え、周辺住民への配慮から常時排水を行う予定はなかった。しかし、23日に一度完全に排水したのち、湧水の量を確認するため24日の朝までの浸水度合いを調べた結果、排水作業に半日以上を要するほどの量があることが判明した。そこで、周辺住民に了解を得たのち、常時排水ができるように配電盤を設置することに決め、この作業が終了するまで、現地作業を中止した。その後、30日に配電盤を設置、常時排水の準備が整い、同日午前より遺構検出作業を開始した。1・2地点ともに、主だった遺構は溝のみであった。これらは、出土遺物から近世のものと確認でき、それ以前と断定できる遺構は皆無であった。1地点に関しては9月2日に遺構掘削および記録作業が終了。2地点は9月13日に遺構掘削および記録作業を終了し、翌14日に高所作業車による記録写真撮影をおこない調査は終了した。なお、1・2地点は廃土を場外に搬出したため、埋め戻しにはやや時間がかかり、9月24日に埋め戻しが終了した。また、埋め戻しの間に1～3地点の遺物洗浄をおこなった。9月30日には1・2地点から機材を撤収し、当該調査は終了した。

1・2地点の現地調査は終了したため、本来残る4・5地点に着手へと移行する予定であった。しかし、両地点とも既存の家屋の移転が進んでおらず、現地調査は一旦中止となった。なお、5地点に関してはこの時点で、契約期間内の調査が難しいことが判明し、今回の委託業務からは切り離し、翌年度の事業に持ち越されることが決定した。

4地点は、12月中旬頃に家屋の移転が終了した旨の連絡があったため、東海市と島田組で協議した上

で、平成23年1月11日から着手することとなった。

4地点は都市ガスの埋設管が横断する可能性があったため、12月17日に東邦ガスとの立会をおこなった。その結果、調査区内にガス管が存在する可能性があり、さらにこの埋設管が停栓されていないことを指摘されたため、地表面で埋設管付近に印をつけ、その周辺は慎重工事となった。

1月11日は調査地にフェンス設営をおこない、フェンス設営後、機械掘削を開始した。翌12日、機械掘削中に予想されたガス管が想定外の位地で確認され、さらに枝管がそのまま残っていたため、枝管の除去と、蓋栓の処置を東邦ガスに依頼した。ガスの枝管出土という想定外の事件はあったものの事故はなく、12日中には機械掘削を包含層と思しき層位の上面まで終了した。

翌13日に包含層出土遺物に攪乱出土の遺物の混入を避けるため、攪乱掘削および、包含層上面の検出をおこなった。その結果、包含層上面で土坑やピットなどの遺構が多く検出できた。本来、他の地点同様に地山面での1面調査を予定していたが、包含層上面の遺構が多いため、東海市と協議した上でこの面で遺構検出および掘削・記録をおこない、包含層を除去したのち、地山上面で調査をおこなう2面調査の方針を改めた。この方針変更に従い、同13日には包含層上面の遺構群（以下上層遺構）の検出状況を記録した。

翌週19日からは上層遺構の掘削、記録作業を開始。同作業を26日までおこなったのち、27日に高所作業車により全景写真撮影をおこなった。翌28日には包含層掘削作業を開始し、同時に地山直上での遺構検出を開始した。31日からは、上層遺構の見落としと考えられる遺構掘削・記録作業をする一方で、包含層掘削を終了させた。2月1日からは地山直上（下層遺構）での検出をおこなった。2日に遺構の検出状況を記録し、遺構掘削を開始。その後、遺構掘削・記録調査を9日までおこない、翌10日に高所作業車による記録撮影をおこなった。なお、この時点で半截などの記録調査を行っていない遺構や、地山と考えていた土が部分的に異なる可能性があることから断割調査をおこない、できるだけ多くの情報を記録する作業を進めた。こうした作業を2月21日までに完了し、調査を終了。翌22日から埋め戻しを開始。同月28までに埋め戻し、機材撤収を終了し、現地作業を終えた。なお、4地点から出土した遺物は少なく、調査地を埋め戻ししている際に洗浄を終了した。

その後、現場事務所で、遺物注記、写真整理、台帳整理、図面整理作業を進め、3月11日に遺物を東海市に納品した。3月14日から、現場事務所から機材の撤去等を開始。18日には事務所の解体、資材搬出を終了し、東海市での現地作業を終了した。

その後、大阪府八尾市の島田組本社で成果品納品に向けての整理作業を開始し、30日に東海市に成果品を納入。平成22年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査業務委託はこの日をもって完全に終了した。

平成23年度は本書を刊行するため、6月15日に契約を締結し、遺物の2次整理および、報告書作成を開始し、平成23年3月30日に本書を刊行するに至った。

## 第2章 郷中遺跡の調査

### 第1節 基本層序

郷中遺跡は本調査の区割り上、1地点、2地点に該当する。両者は隣接しており、基本層序はともに共通するが、両地点共に、上位層は後世の削平を受けており、地山より上層の層位的つながりが把握しづらい状況であった。そのため、中世遺物包含層（10YR3/3 暗褐色砂質土）（以下「包含層」）より上位層に関してはほとんどが攪乱層と解釈した。こうした解釈から両地点の基本層序は以下の3層に大別できる。

- 1：攪乱または近代以降の客土
- 2：近世の遺物を含む包含層（10YR3/3 暗褐色砂質土）
- 3：地山（2.5Y7/3 浅黄色砂～粗砂）

上記の基本層序は各調査区の壁面観察からみえる堆積状況であるが、1の客土が下層までおよんでいない場所については、包含層の上に包含層と酷似した暗褐色砂質土の堆積層が見受けられた。これについては、分層発掘を行っていないため詳細は不明であるが、1地点西壁にみられた同層位から常滑焼の「赤物」甕や連房式登窯期の天目茶碗を確認しており、近世の遺物を含む遺物包含層である可能性を指摘しておく。また、これより上位層に関しても、若干の色調の違いが認められる、酷似した土性の堆積層であり、後世の削平を受ける以前はこのような暗褐色を基調とする砂質土層が堆積していたものと考えられる。こうした状況は断面観察で部分的に確認することができた。

両地点共に、包含層の上面まで機械掘削をおこない、以下人力掘削をおこない、地山直上で遺構検出をおこなう予定であった。しかし、調査区全域（特に2地点）に近代以降の攪乱がおよんでおり、包含層の堆積は希薄であったが、残存している部分で機械掘削を止め、以下人力で掘削をおこなった。なお、包含層より上位層から掘削されている遺構に関しては、包含層上面で検出していないため、包含層と区別して掘削をしていない。そのため、「包含層」として取上げた遺物の中には本来包含層に含まれる遺物より新しい時期の遺物を含んでいる可能性がある。つまり、今回「包含層」とした層位の年代については、この層をベースとする遺構と区別しなければ判明しないため、それをおこなっていない今回の調査では決めてを欠いている。よって、包含層の年代を把握するのであれば、包含層上面と地山面の2面の調査が必要となろう。

遺構検出のベースとなった地山は2.5Y7/3 浅黄色を基調とする砂～粗砂であったが、場所により一定ではなく、特に2地点では、数メートル間隔で色調が異なる状況を確認している。この状況は、砂堆形成時に部分的に海岸に流れ込む流路が形成され、その鉄分沈殿により、褐色に変色し、このような状況になったと考えられる。こうした砂浜に小川が注ぐ状況は現在の砂浜でも確認でき、愛知県や静岡県太平洋沿いの砂浜でよくみられる。現在のそうした砂浜に見られる小川でも、鉄分の沈殿により底が褐色に変色しているものも観察できる。2地点で地山の変色がみられたのは、同じような事情であったものと推定される。

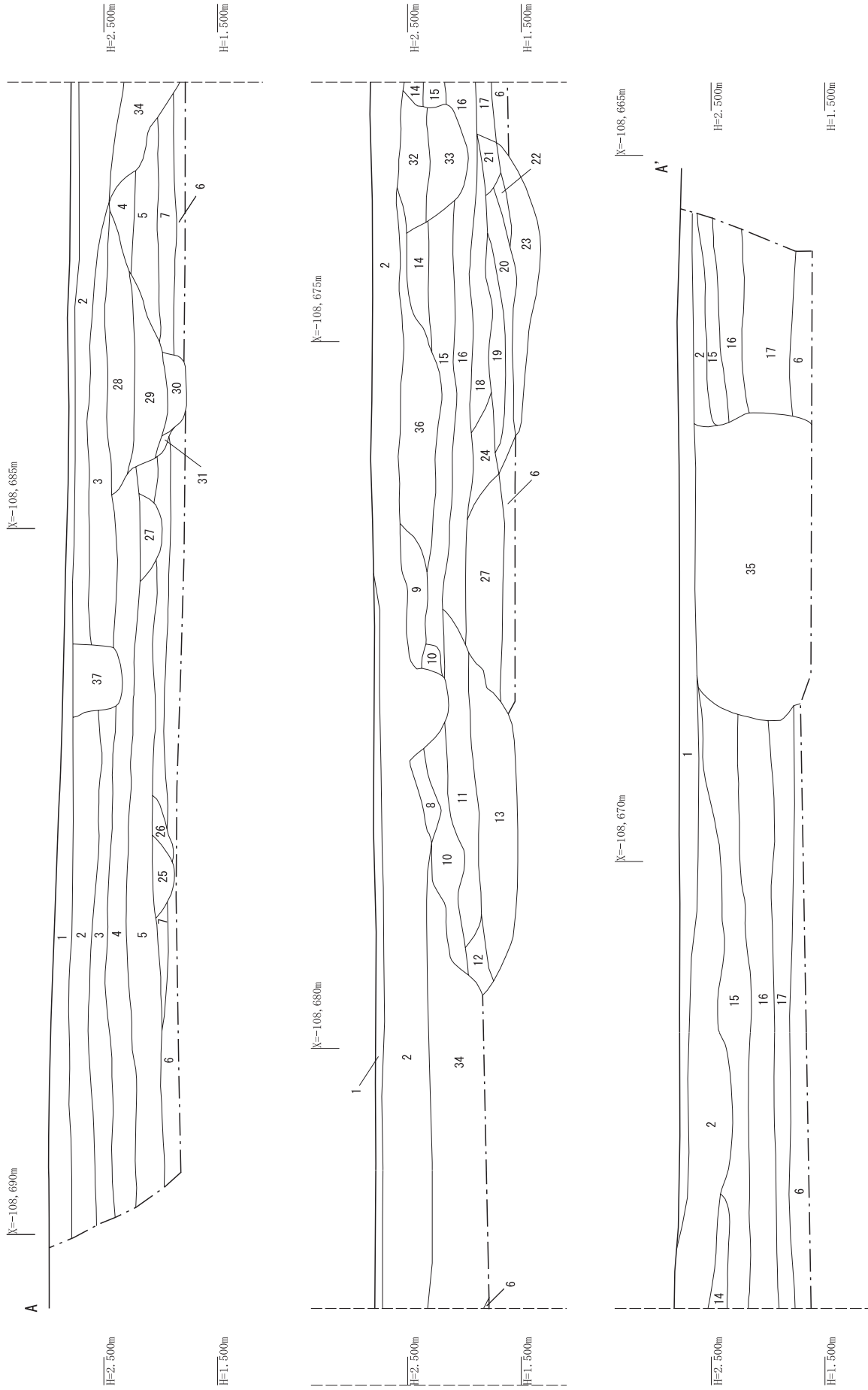


図5 1地点西壁土層断面図



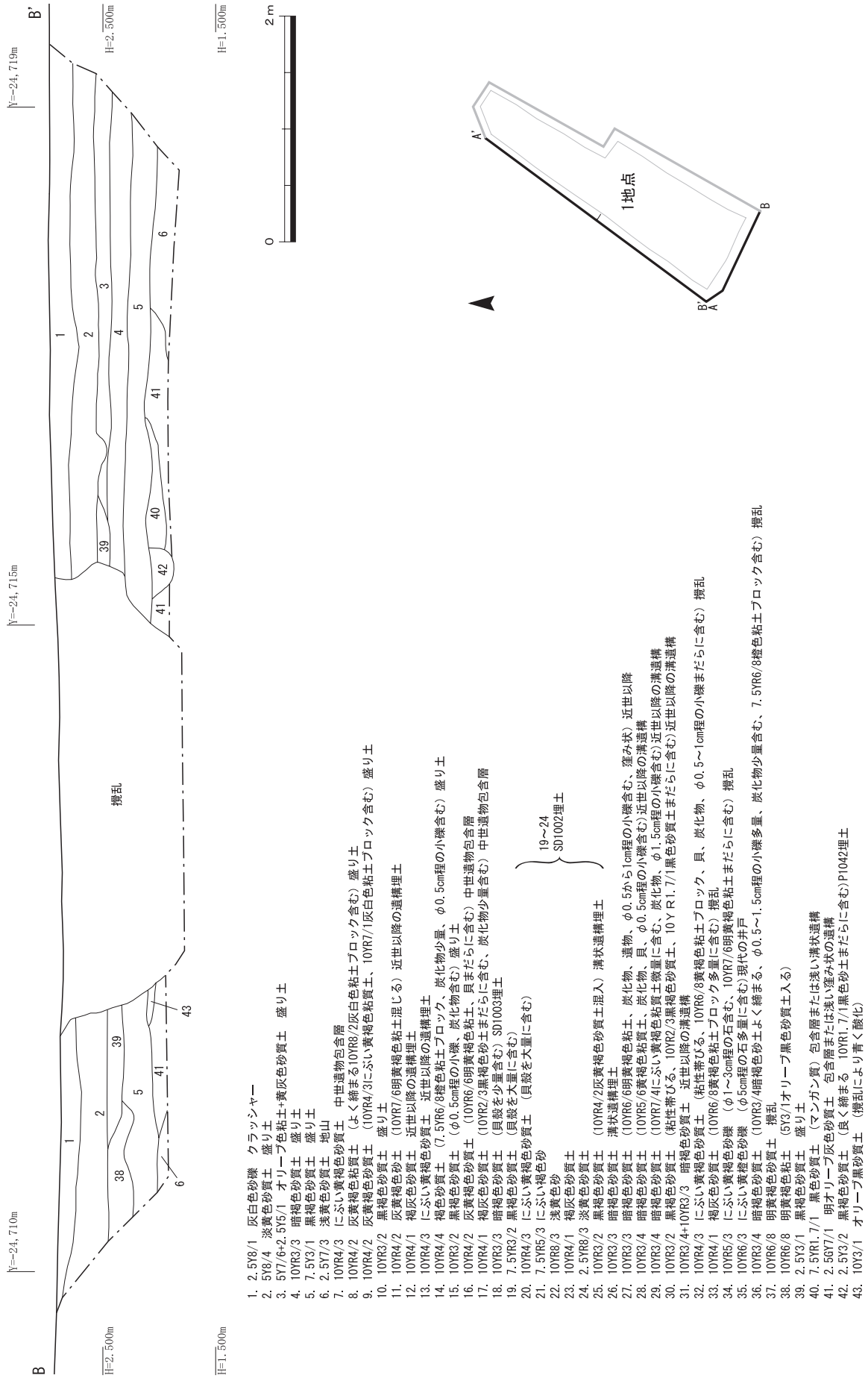


図 6 1地点南壁土層断面図

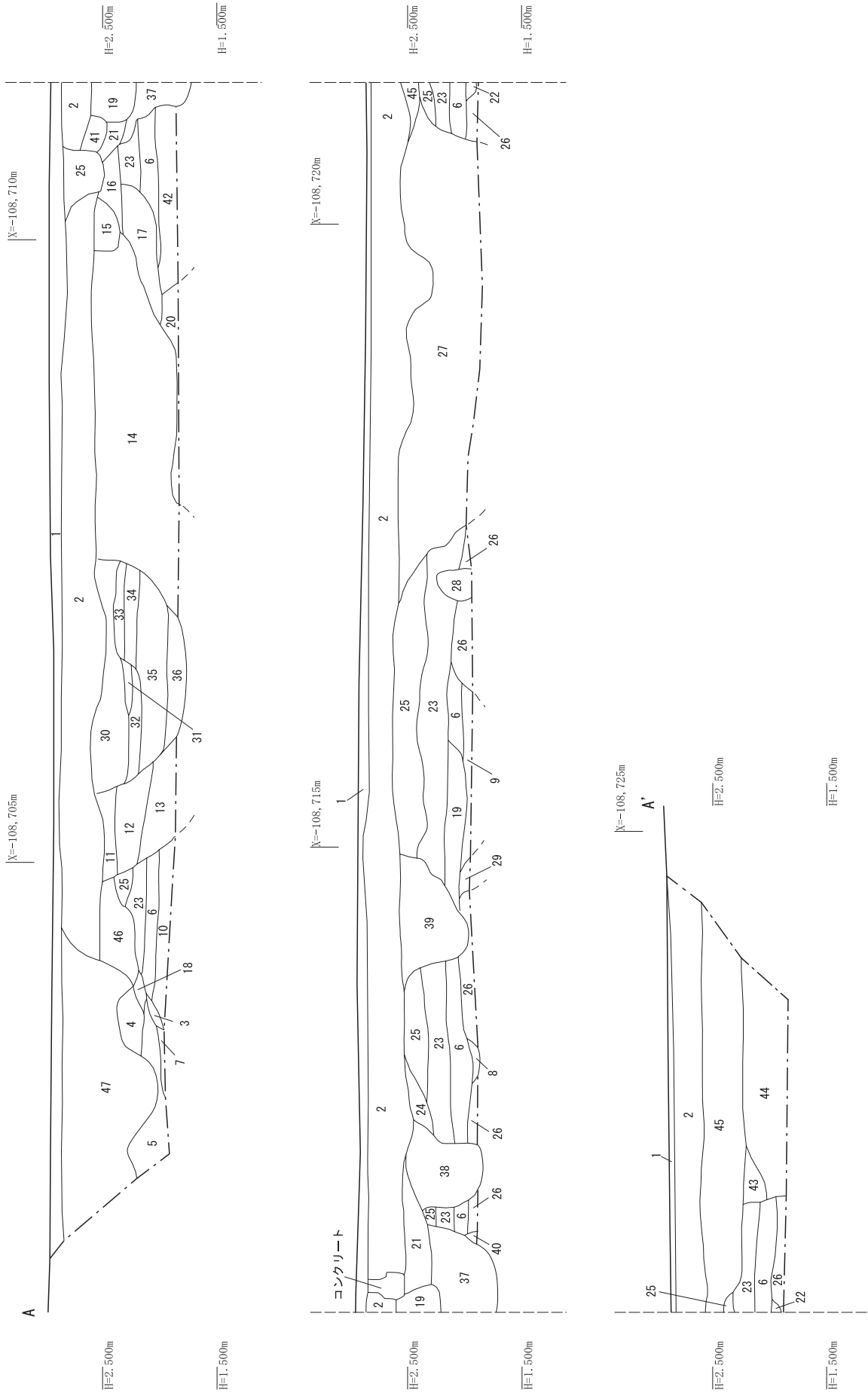
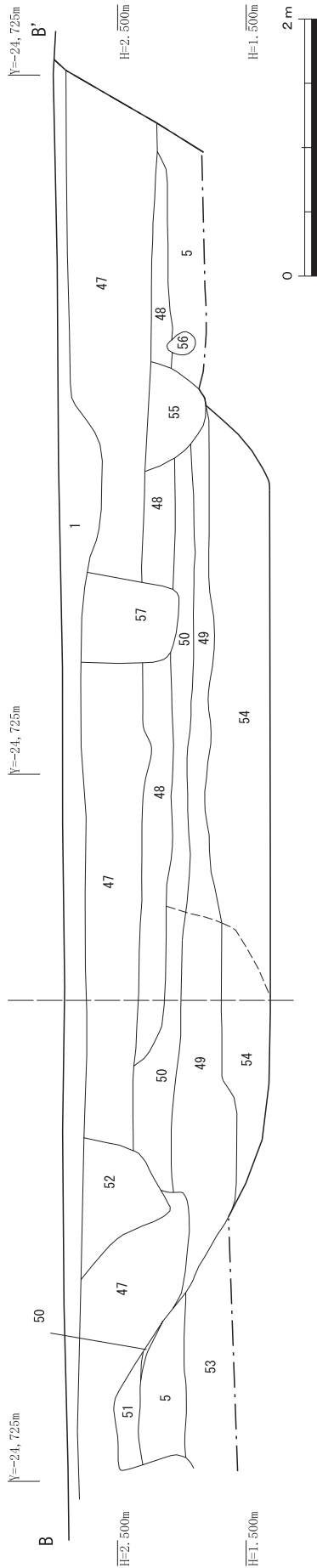
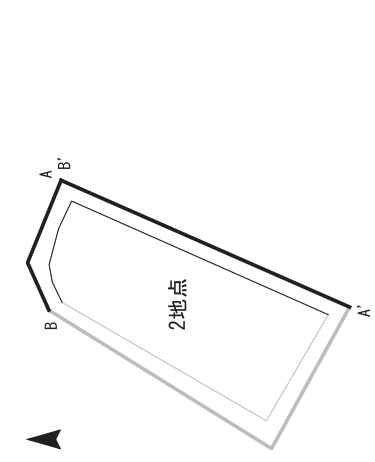


図7 2地点東壁土層断面図



1. 2.5G/8/1 灰白色砂礫 掘乱 整地用のクラッシャー
2. 10R3/4 暗褐色粘土 掘乱 現代の整地土
3. 10R4/3 にぶい黄褐色砂質土
4. 10R2/3 黒褐色砂質土 (貝、炭化物少量含む)
5. 10R2/3 黒褐色砂質土 (貝少量含む) 包含層
6. 10R3/3 暗褐色砂質土 包含層
7. 10R3/3 暗褐色粘土 包含層か?
8. 5R3/2 暗赤褐色砂質土 pitまたは窪み
9. 7.5R5/3 にぶい褐色砂質土 (10R8/2)灰白色砂を含む、窪み状の落ち込み、無遺物 地山の色の違いか?
10. 10R2/3 黒褐色砂質土 (10R4/3)にぶい黄褐色砂土またらに含む) 地山
11. 10R5/4 にぶい黄褐色砂質土 (10R5/4)にぶい黄褐色砂土を含む) 掘乱
12. 10R3/2 黒褐色砂質土 掘乱
13. 10R3/4 暗褐色砂質土 掘乱
14. 10R3/2+10R3/3 黒褐色砂質土+暗褐色砂質土 (10R3/3)暗褐色) 掘乱
15. 10R4/1 褐灰色砂質土 (10R8/2)灰白色粘土含む、φ1cm程の砂粒含む、φ5cm程の石含む) 掘乱
16. 10R5/6 黄褐色砂質土 掘乱
17. 10R3/4 暗褐色砂質土 (10R5/6)黄褐色粘土混じり、炭化物、φ0.5~1cm程の小礫含む、φ5cm程の石含む) 掘乱
18. 10R3/3 暗褐色砂質土 掘乱
19. 10R3/4 暗褐色砂質土 (10R8/6)黄褐色粘土+プロック含む) 包含層
20. 10R3/4 暗褐色砂質土 (φ0.5cm程の小礫含む) 地山
21. 10R4/3+10R5/6 にぶい黄褐色砂質土+黄褐色砂質土 (10R5/6)黄褐色) 掘乱
22. 10R5/3 にぶい黄褐色砂質土 地山直上で検出できる窪み
23. 10R3/2 黒褐色砂質土 包含層
24. 10R3/2 黒褐色砂質土 掘乱
25. 10R3/4 暗褐色砂質土 (10R6/2)灰黄褐色粘土含む) 包含層
26. 10R3/4 暗褐色砂質土 (よく締まる) 地山
27. 10R4/4 褐色砂質土 掘乱
28. 10R3/4 暗褐色砂質土 (10R8/6)黄褐色粘土+プロック含む) パイル状の掘乱穴?
29. 10R3/4 暗褐色砂質土 (φ0.5~1cmの小礫含む) 地山
30. 10R3/3 暗褐色砂質土 (よく締まる) 掘乱
31. 10R5/3 にぶい黄褐色砂質土 掘乱
32. 10R5/3 にぶい黄褐色砂質土 掘乱
33. 10R5/3 にぶい黄褐色砂質土 掘乱
34. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 (炭化物少量含む) 掘乱
35. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 掘乱
36. 10R4/2 灰黄褐色砂質土 (2.5Y3/2)黒褐色粘土、粘質帯びるを含む) 掘乱
37. 10R4/4 褐色砂質土 SD2036埋土
38. 10R4/2 灰黄褐色砂質土 (よく締まる、10R/6)暗黄褐色砂土微量を含む) 溝状遺構、地山直下では検出できなかった
39. 10R4/2 灰黄褐色砂質土 (φ0.5~1cmの小礫含む) 掘乱
40. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 (10R3/2)黒褐色粘土+帯状に含む) SD2036またはSD2022埋土か?別遺構の可能性も



41. 10R4/2 灰黄褐色砂質土 掘乱
42. 10R4/1 褐灰色砂質土 地山か?
43. 10R4/2 灰黄褐色砂質土 (φ0.5~3cm小礫多量に含む)
44. 7.5Y4/1 褐色砂質土 掘乱
45. 10R4/4 褐色砂質土 (貝、炭化物少量含む) 掘乱
46. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (よく締まる)掘乱
47. 10R3/2 黒褐色砂質土 (貝多量に含む)掘乱
48. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 (貝多量に含む)掘乱
49. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 SD2042埋土
50. 10R2/2 黒褐色粘土 SD2042埋土
51. 10R3/4 暗褐色砂質土 (貝少量含む) 包含層か?
52. 10R8/2 灰白色砂質土 掘乱
53. 10R2/3 黒褐色砂質土 包含層
54. 10R3/2 暗褐色砂質土 (よく締まる、10R5/4)にぶい黄褐色粘土多量に含む)掘乱
55. 10R3/3 暗褐色砂質土 (よく締まる、10R5/4)にぶい黄褐色粘土多量に含む)掘乱
56. 10R4/2 灰黄褐色砂質土 包含層を切る遺構か?
57. 10R4/2 灰黄褐色粘土 (7.5YR4/4)褐色またらに含む)掘乱

図8 2地点北壁土層断面図

第2節 1地点の検出遺構

1地点では主にピット、土坑、井戸、溝を検出している。これらは地山直上で検出したことや、年代が把握できる遺物が出土しておらず、時期や性格の特定ができないものが多い。調査区南側では比較的多くのピットを検出したが、単層のものが多く、建物の柱穴や杭または柵列として並ぶ様相は確認できなかった。そのため、これらについては、全体図で提示し、文章は割愛した。以下、その中でも、性格や時期などの考証が可能なものや、特記しておきたい遺構を中心に報告する。

SD1002・1003 (図9・10・写真1～3・1～9) 調査区北方で検出した幅1.44m、深さ0.60mの溝。調査区中央付近で西に屈曲し調査区外に展開する。SD1003は堆積土が明瞭に異なることから、SD1002の直上で検出し、幅0.90m、深さ0.11mの溝としてSD1002と区別して掘削したが、断面観察から、SD1002の堆積の一部であった可能性は残る。いずれも南側が低く、南流したのと考えられる。

SD1003からは180点の土器類が出土したが、小片が多く、年代の特定できるものは少なかったが、SD1002と著しく年代が異なるものは出土していない。SD1002の下層では同時期に比定できる土器や陶器がまとまって出土しており、溝底付近で出土していることから、これらの土器の年代が、この溝の機能した時期と考えられる。これらの土器類の内訳は主に17世紀初頭～中葉にかけての常滑焼の甕・くどや天目茶碗・志野丸皿、鉄絵皿、播鉢など瀬戸美濃陶器類および、羽釜、内耳鍋など土師質土器であっ

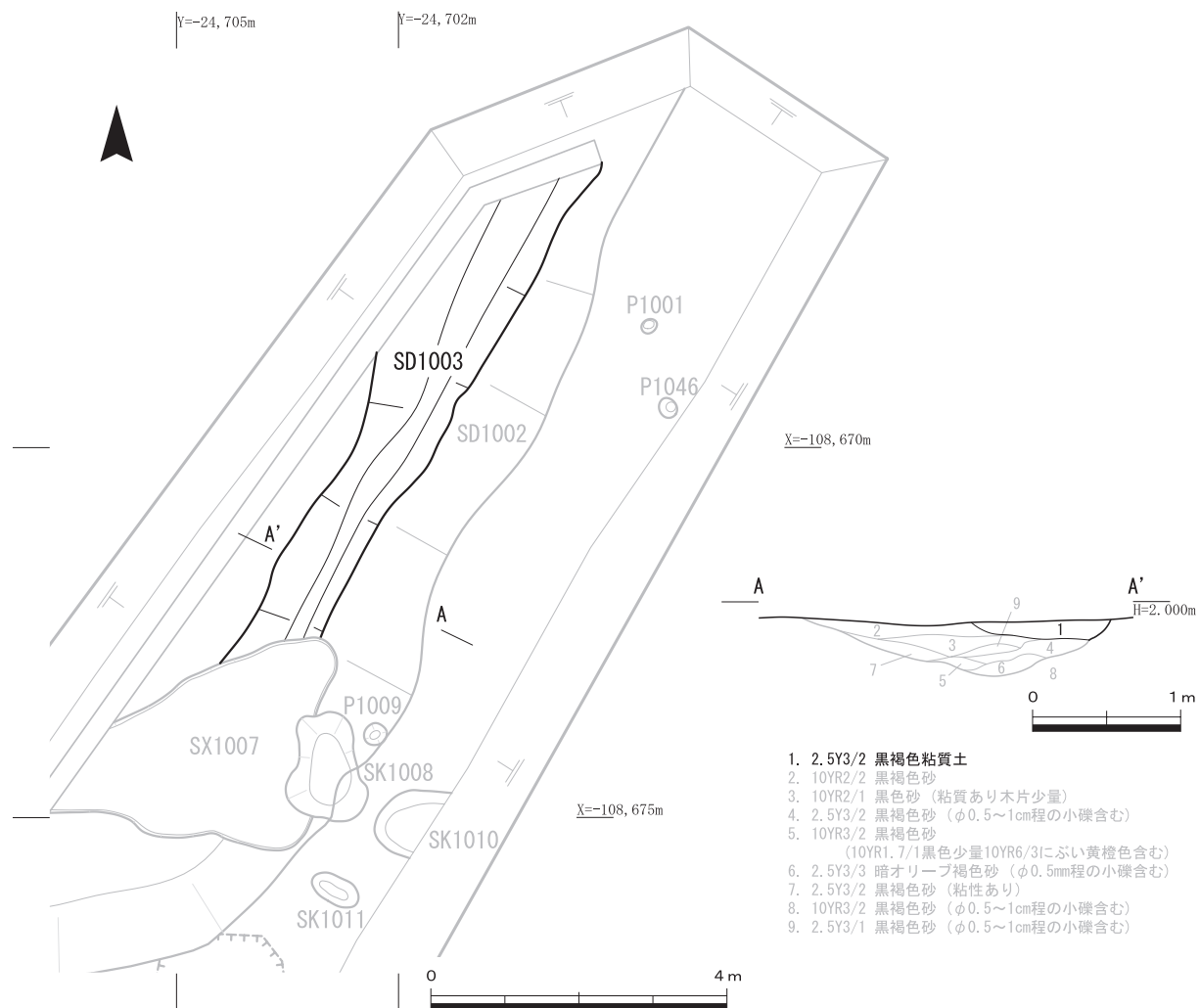
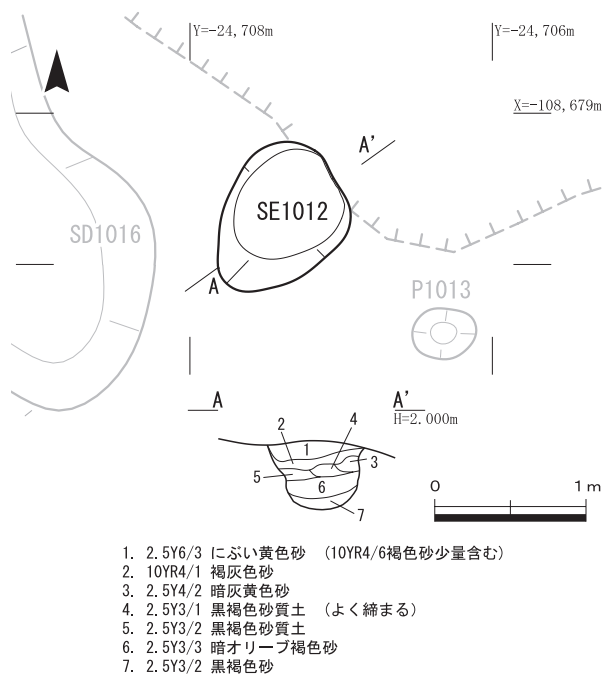


図9 SD1003平面・土層断面図



図10 SD1002平面・土層断面図



1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 (10YR4/6褐色砂少量含む)
2. 10YR4/1 褐灰色砂
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (よく締まる)
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂

図11 SE1012完掘・断面図

た。これらは、瀬戸美濃の連房式登窯で生産されたものであり、当該時期が、この溝の機能した年代と捉えることができる。

また、調査区中央付近の溝のコーナー周辺に貝層が確認できた。これらの貝殻の中に食用としては小ぶりの小型のイトカケガイ科の一種や、小型のウミナナ科の一種などを含んでいることから、食用の貝を廃棄したのではなく、流水の緩むコーナー付近の内側に沈殿して堆積した状況のほか、土器など他の遺物が出土していることを考え合わせると、この場所が恒常的なゴミ等の廃棄場として利用されたと考えられ、貝殻については、食べ殻以外に、採取後に選別して食用にならないものを捨てる場所であったことも考えられる。

なお、注目できる点は、貝殻が堆積していた溝

のコーナー部では、比定時期が比較的まとまった志野丸皿や鉄絵皿、天目茶碗などが出土しているが、これらは完形に近いものが多いほか、志野丸皿の底部に墨書（「米」か？）されたものなどが出土しており、何らかの儀礼の痕跡である可能性が指摘できる。こうした状況から、集落の中でかなり重要な意味をもつものであったものと思われる。

SE1012（図11・写真4-10） 調査区中央付近で検出した長軸残存幅1.05m、短軸幅0.81、深さ0.50mの素掘井戸である。北西の一部を攪乱により破壊されていた。掘削深度が滞水層までおよんでいることから井戸である蓋然性が高い。出土遺物は少なく土器類が4点、瓦が1点出土した。このうち、瓦は近世以降のものであり、遺構の年代も近世以降に比定できる。

SK1007（図9） SD1003の南で検出した幅2.25m、深さ0.18mの不整形な大型土坑である。SD1003の屈曲部を削平し、後述するSK1008に東側を削平されている。性格は不明だが、鉄釘や石、土錘、土器片等が計46点出土している。出土した遺物に規則性はないので廃棄土坑とは考えにくい。したがって、SD1003埋没後の「ぬかるみ」のような窪みであった可能性が高い。

SK1008（図9） SD1002のコーナー付近で検出した長軸幅1.52m、短軸幅0.75m、深さ0.16mの土坑。SD1002と重複し、SD1002の一部を破壊する。土師質土器、常滑焼甕、天目茶碗など15点が出土。これもSK1007と同様に窪みのようなものであった可能性がある。

SK1010（写真4-12） 調査区北方、調査区東壁付近で検出した幅1.0m、深さ0.07mの土坑である。東壁の断面観察から、1地点の中では唯一包含層に覆われた遺構であったため報告する。性格、年代は不明だが、包含層より古いため、中世の遺構である可能性もある。砥石が1点出土。

P1001（写真4-13） 調査区北側で検出した長軸0.23m、短軸0.19m、深さ0.14mの柱穴である。柱痕跡または、抜取痕が残存していたため、報告しておく。出土遺物はなく、時期についても不明。なお、これに並ぶ柱穴は調査区内では検出していないが、建物などの一部と考えた場合、SD1002との関係から、SD1002の東側に集落が展開した可能性もあり注目すべき遺構であろう。

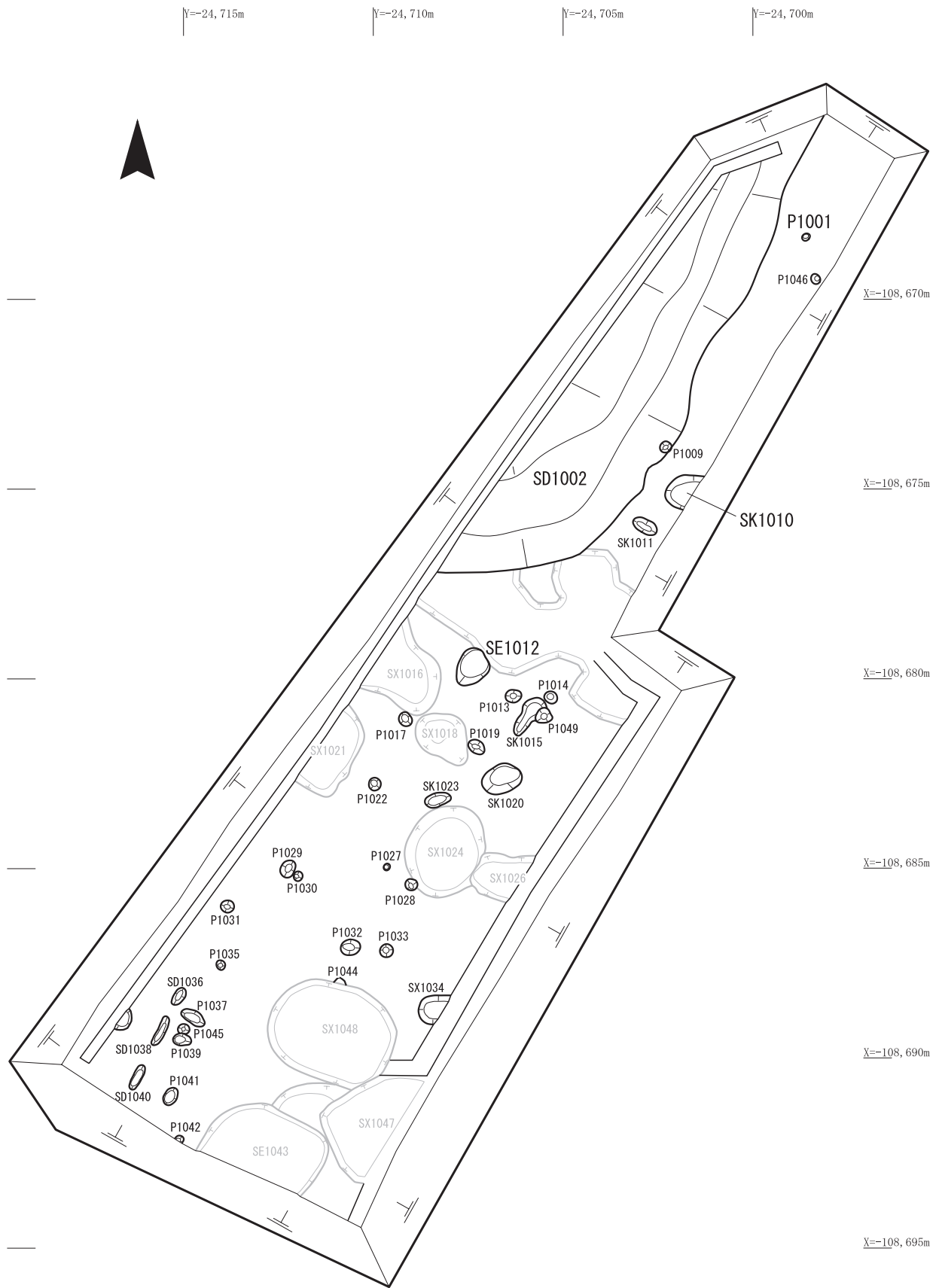


図12 1 地点遺構平面図



第3節 2地点の検出遺構

2地点では土坑、柱穴、井戸、ピット、溝などを検出した。このうち、柱穴や土坑の多くは近・現代のものであった。以下重要と考えた遺構に関して報告する。

SD2036 (図13・写真5・6-15~18) 2地点の西側中央付近にて地山直上で検出した幅0.82m、深さ0.27mのL字型の溝。調査区中央付近で屈曲し、東側では調査区外におよぶ。調査区中央部から南に延びるが、南側は調査区南部が攪乱により破壊されており、溝の掘削深度よりさらに深くまでおよんで削平されていた。南側と東側の高低差は南側が低く、東側から調査区中央部の屈曲を経て、南側に流水していたものと考えられる。調査区東壁の断面観察から、包含層よりさらに上位層から掘削されており、近世以降の遺構と判断できる。なお、出土遺物は土師器、須恵器、常滑焼甕、山茶碗、陶器類の小片99点が出土しているが近世以降の遺物は少なかった。

SD2022 (図13・写真5・6-15~18) SD2036の東側で検出した幅1.03m、深さ0.25mの溝である。SD2036と並行して南北に延びるが、SD2036同様に南側は攪乱により削平され、北側は東西方向に屈曲したSD2036と重複する。ただし、調査区東壁の断面観察から、SD2036の南に分かれる形で検出できおり、同時期に併存したのではなく、掘り直しにより新旧が分けられるものと考えられる。なお、屈曲部の断面観察では、SD2022が上位に堆積しているため、両者の新旧関係はSD2022が先行することが判明している。なお、出土遺物は28点と少量であったが、その中に江戸時代の瓦片がみられたことから、出土遺物の観点でも当該時期以降に比定できる。

SD2035 (写真5・6-18) 調査区西端で検出した南北溝。調査区の端で検出したため、規模不明。深さは調査区端部で0.13mを測った。埋土はSD2022やSD2036と酷似する。

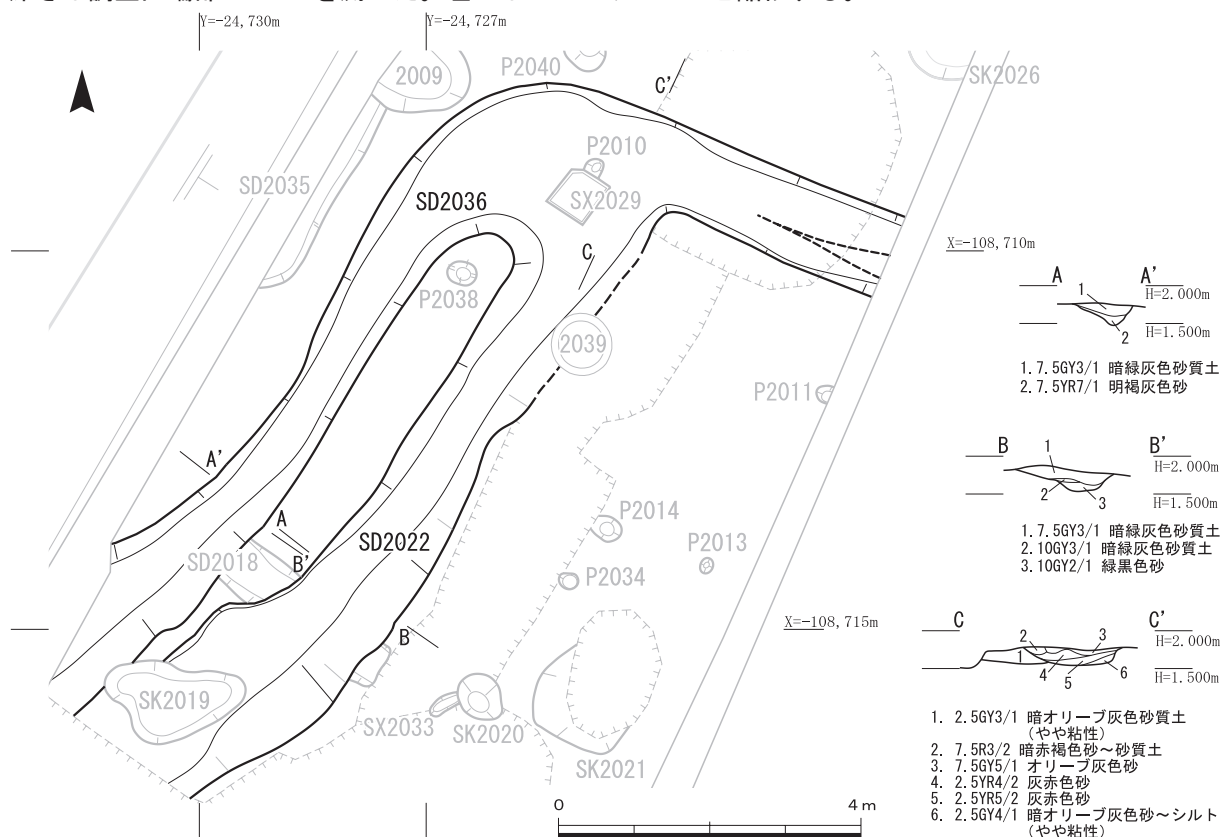


図13 SD2022・2036平面・断面図



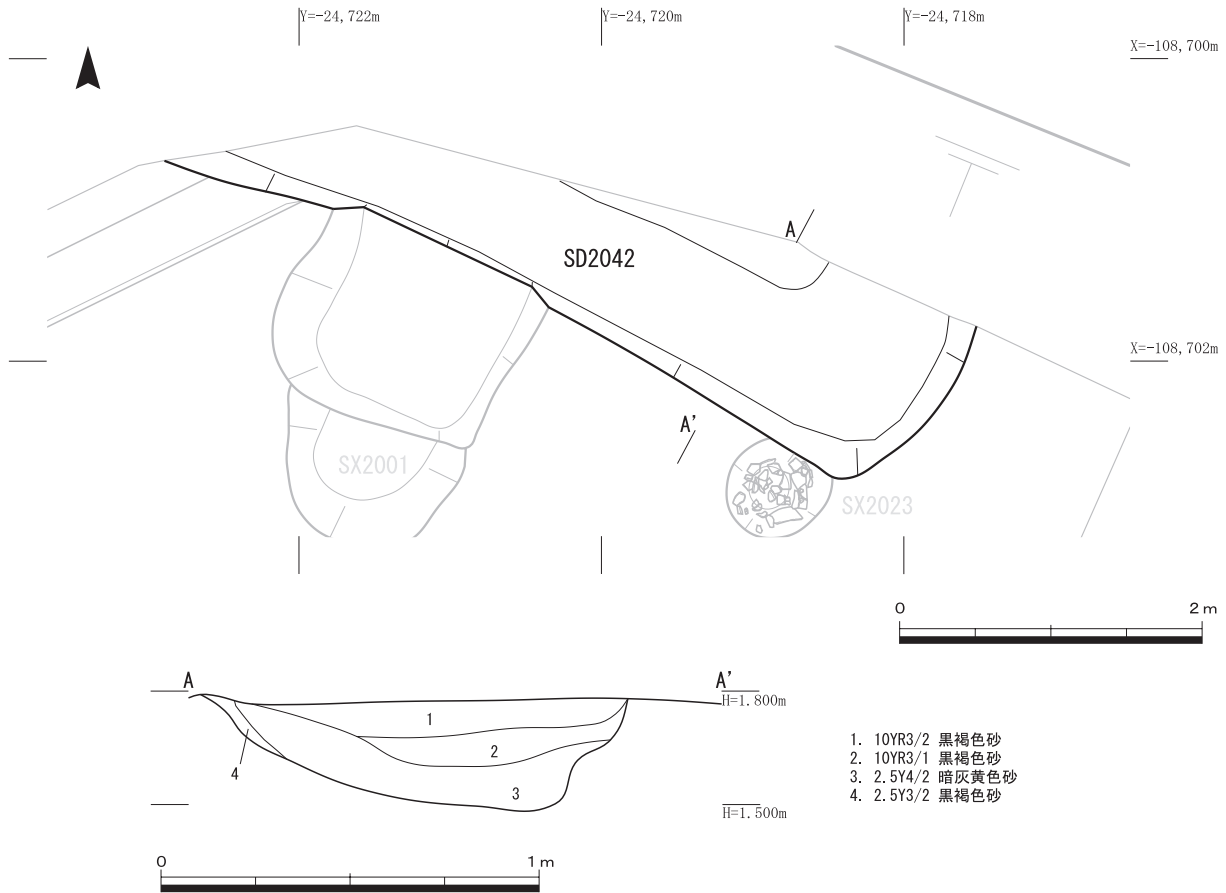


図14 SD2042平面・断面図

SD2042（図14） 調査区北端で検出した幅0.70m、深さ0.27m溝である。検出状況から調査区北端で屈曲し、北側に曲がるものと考えられる。西側はそのまま調査区外におよぶ。小片のため時期が不明だが、中世に比定できる土器類が4点出土している。

SX2023（写真7-19～20） 調査区北方で検出した直径0.66m、深さ0.18mの瓦溜まりである。破片数で107点出土。すべて棧瓦であった。瓦の詳細な年代は不明だが、江戸時代後期以降の棧瓦である。瓦はすべて破片であり、葺き足痕跡が残るため、少なくとも一度屋根に葺かれた事が考えられる。したがって、これらの瓦は、瓦葺建物を解体した折に出た廃材であり、人為的に埋められたものと考えられる。

SE2039（写真7-21） 調査区中央部で検出した井戸である。直径約0.8mの土管形の井筒が出土している。帰属時期は近代または現代と考えられ、本来、出土した井筒の上に少なくともさらに一段以上、同じ井筒が重ねられていたと考えられるが、上段の井筒は抜き取られており、重複部の一部に破片が残存していた。掘形は円形と思われるが、西半部が攪乱により削平されていたため詳細は不明。掘形残存部での復元直径は約2.0m。

SE2041（写真7-22） 調査区南東部で検出した井戸と考えらる遺構である。2地点の南側は攪乱が地山上面よりさらに深くおよんでいたため、掘形などは削平されていたが、常滑焼の井筒が出土した。取上げていないため詳細は不明だが、いわゆる「赤物」と呼ばれる近世以降のものであった。また、井筒内部から鉄線が朽ちていない状態で出土していたため、埋没時期は近代以降と考えられる。掘形の形状、規模は攪乱に削平されており不明。

第2章 郷中遺跡の調査

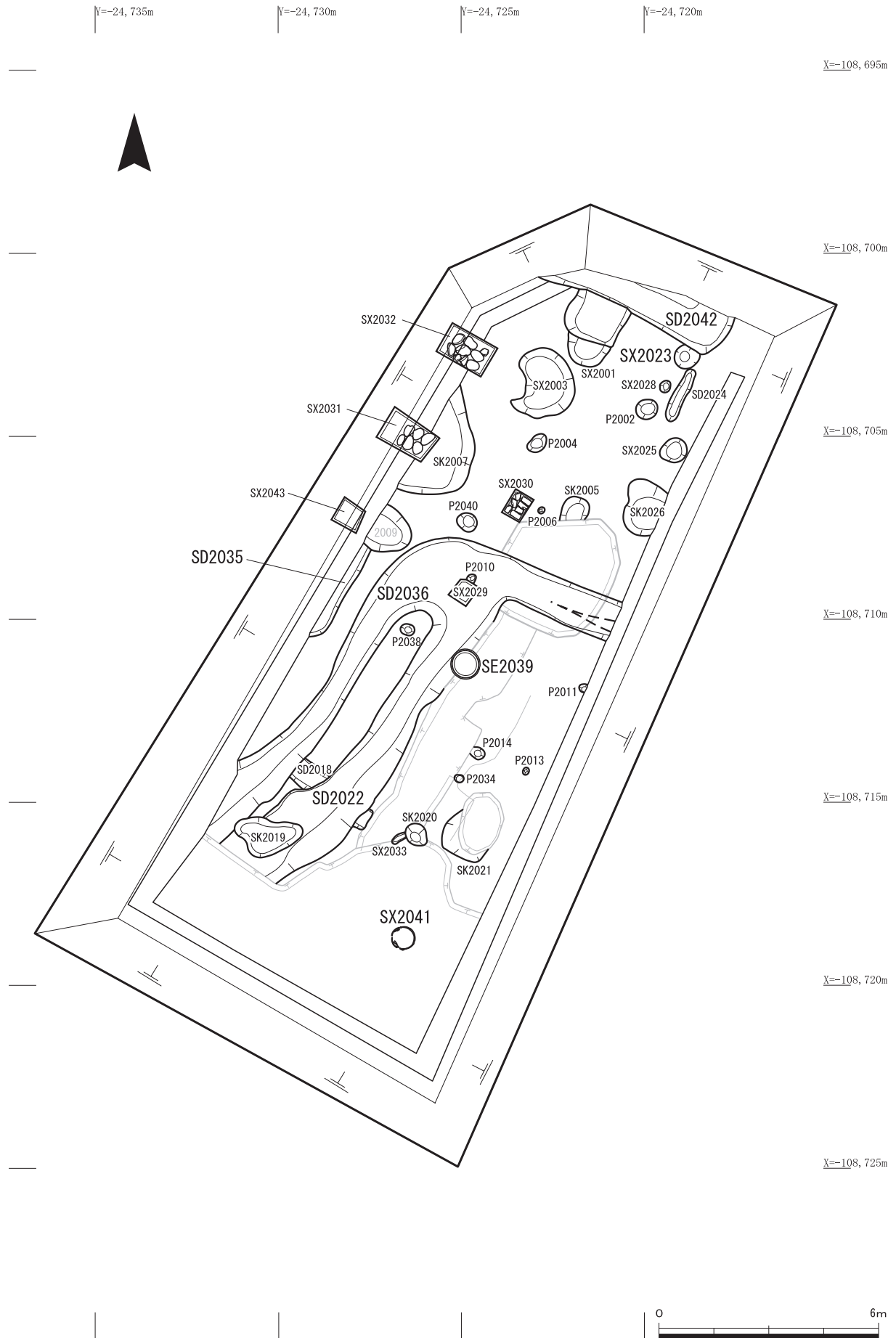


図15 2地点遺構平面図

## 第4節 1 地点の出土遺物

プラスチックコンテナで6箱分(総点数799点)の遺物が出土している。主に土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・常滑焼(甕・すり鉢など)・天目茶碗・染付・土製品・瓦などが出土した。以下、種別ごとに報告する。

### i. 土器類

土器類は土師器・須恵器・山茶碗・常滑焼・瀬戸美濃産陶器・磁器などが出土しており、SD1002・SD1003出土の遺物が全出土遺物の61.2%を占める。ここではSD1002・SD1003出土の遺物とSD1002・SD1003以外の遺物を一括して報告する。

#### A. SD1002・1003出土土器

SD1002・1003から出土した土器類の多くは土師質土器であった。ただし、土師質土器の多くは羽釜や内耳鍋などの煮炊き具であり、これらは破碎しやすいために破片資料の数としては最も多い状況であった。土師質土器以外で目立ったものとしては、瀬戸美濃陶器類である。特に、これらの陶器類は、SD1002コーナー部分から出土したものが多く、一括資料として注目できるものである。以下、これらの出土資料を中心に器種ごとに報告する。

志野丸皿(図16-1~4・写真18-1~4) 長石釉を施釉した丸皿である。外面は回転ヘラケズリで調整されるが、口縁付近のみ内側から摘まむようにしてナデ調整が入る。底部は回転ケズリにより、削り出し高台が造られる。高台より内側は施釉していない個体が多い。内外面ともに融着防止のため三カ所にトチ痕跡がみられる。焼成前の割れ口に釉薬がかけられたいわゆる「粗悪品」として流通したものもみられる(写真18-15)。また、4の底部裏面には墨書(「米?」)が見られる。連房式登窯第1~3小期に比定。9点出土。

鉄絵皿(図16-5~6・写真18-5~6) 内面中心部に蘭竹紋を飾り、底部外周に2条、口縁部に1条の圏線を飾った鉄絵皿。内面は丁寧なナデ調整。外面は回転ヘラケズリで調整されるが、口縁付近のみ内側から摘まむようにしてナデ調整が入り、口縁部がゆるやかに外反する。底部は回転ケズリにより、削り出し高台が造られる。連房式登窯第1~3小期に比定。3点出土。

天目茶碗(図16-7~12・写真18-7~9) 鉄釉で施釉した茶碗である。口縁直下で外反し、その下部で内反する特徴がある。いずれも削り出し高台。口縁部の割れ口に釉薬がかけられたいわゆる「粗悪品」もみられた(写真18-16)。連房式登窯第1~3小期に比定。8点出土。

志野碗(図16-13・写真10) 長石釉を施釉した碗形陶器である。体部下方に丸みを持ち、体部中央部にかけて上方向に括れ、口縁部は極僅かに外反する「せんじ」に近い特徴をもつ。貼り付けの高台が1.2cmと高い特徴がある。1点出土。

灰釉丸碗(図16-14) 瀬戸美濃産の灰釉を施釉した丸碗である。高台は削り出し。1点出土。

鉄釉香炉(図16-15・写真18-12) 内面口縁部付近および外面くびれ部にかけて鉄釉を施釉した香炉である。体部に屈曲部を持ち、屈曲部から口縁部まで直線的に内傾する。口縁は外面折り曲げ。底部は残存していないため不明だが、類例が名古屋三の丸遺跡などで確認されており、それらには高台がみられるため、本例に関しても同様に底部に高台が付くものと考えられる。1点出土。

灰釉鉢(図16-16・写真19-18) やや薄手の灰釉鉢である。体部は緩やかに外反し、口縁部に反りが

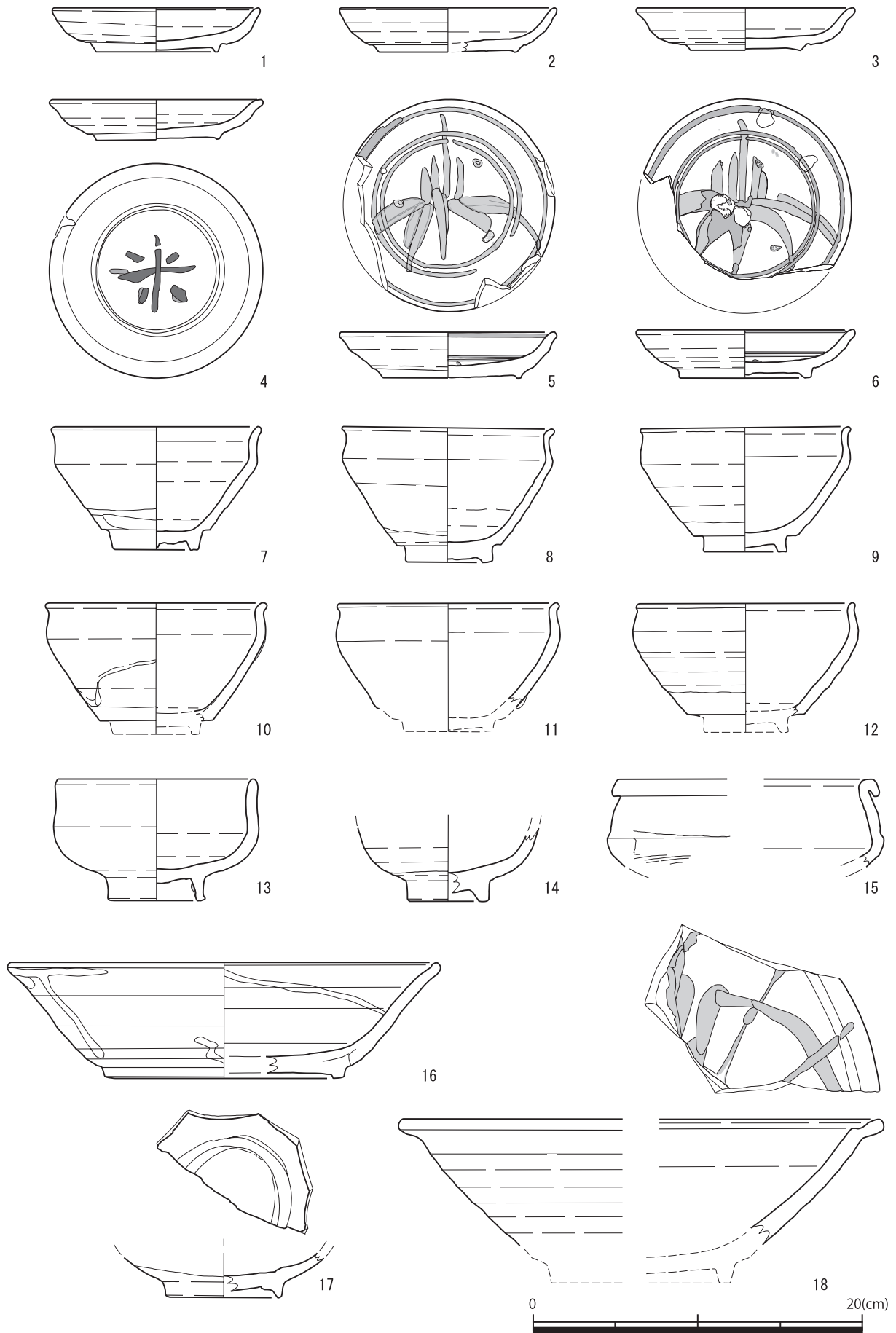


図16 SD1002・1003出土土器

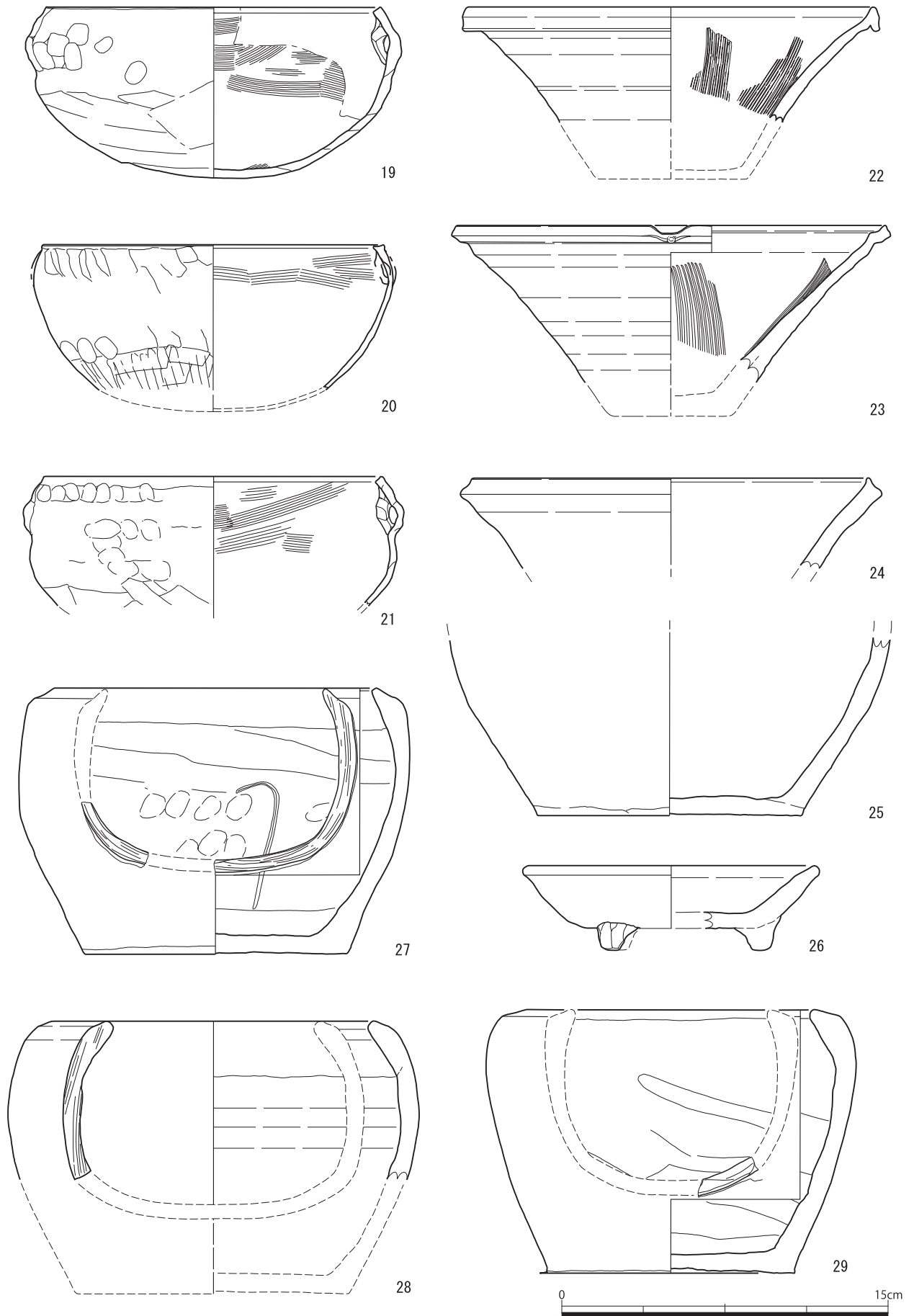


図17 SD1002・1003出土土器②

ない。内部にやや大型の三叉トチ痕跡が明瞭に残る。二次焼成を受けており、底部と割れ口に煤の付着が認められる。1点出土。

錆釉輪禿皿（図16-17・写真18-11） 錆釉を施釉し、内面底部の釉薬を削り「輪禿部」をつくった皿型陶器。「輪禿部」はやや突起している。これは、高台部が貼り付けにより形成され、高台が輪状凸部のほぼ真裏に位置することから、高台形成時の突起とみられる。1点出土。

鉄絵鉢（図16-18・写真19-17） 体部から口縁部のみ残存するため、全体は不明。長石釉を施釉し、内面に鉄絵および緑釉を飾る。口縁は外開きで、口縁下部で段部をつくる特徴がある。1点出土。

錆釉擂鉢（図17-22～23・写真19-19） 錆釉を施釉した擂鉢である。体部は緩やかに外反し、内面には摺目を持つ。口縁の形状がそれぞれ異なり、22は口縁が上下に伸び幅1.8cmの縁帯を形成する。23は口縁が外折し口縁内面に小突起を形成する。更に口縁外側が斜め上方に立ち上がり、口縁端部は角張る。22は大窯3～4、23は大窯4末期～連房式登窯第1小期に比定。

染付大皿（写真18-13） 肥前産と推定される染付花唐草紋大皿である。小片のため全体法量は不明だが、外面に唐草紋を描き、内面は花唐草紋を飾る。高台1.2cmと非常に高い特徴がある。江戸時代前期に比定。1点出土。

青磁碗（写真18-14） 中国龍泉窯系の青磁丸碗である。小片のため全体形や文様構成・法量は不明。

常滑焼（赤物）鉢（図17-24・写真19-20） 常滑焼（赤物）の鉢である。体部両面とも摩滅しており調整が定かではない。口縁部は横方向のナデ。2点出土。

常滑焼（赤物）甕（図17-25） 大型の常滑焼（赤物）甕である。底部にハナレ砂が明瞭に残る。

常滑焼（赤物）火鉢（図17-26） 三足の常滑焼（赤物）火鉢である。浅鉢形で体部内・外ともに横方向のナデ。脚部はへら状工具によるナデ。内面に煤の付着が認められる。1点出土。

常滑焼（赤物）くど（図17-27～29・写真19-23～24） 常滑焼（赤物）の竈（くど）である。受口型の火鉢の一部を大きく「U字」型に切り欠いた形状をなす。図27・29は底部内面に中心から外に向けた渦巻き状の指ナデ痕跡が明瞭に残る。いずれも17世紀前葉に比定。なお、確認できる限りでは5～7個体分の破片が出土している。

内耳鍋（図17-19～21・写真19-21～22） 19～21は非常に薄手の土師質内耳鍋である。いずれも、内面に刷毛または目の粗い板状工具のナデ痕跡が明瞭に残り、外面上部は指圧調整、下部はへら状工具による削り調整痕が残る。19は17世紀中葉、20・21は17世紀中葉～後葉に比定。

羽釜（写真22-32） 土師質羽釜である。確認できたものは口縁部が残存する数点である。体部に関しても出土しているものと考えられるが、内耳鍋や焙烙など他の土師質土器との区別ができなかった。

焙烙（写真22-33） 小片であるため、図や写真には掲載していないが、口縁が二股となる土師質焙烙である。小片を4点確認。17世紀中葉～後葉に比定。

以上がSD1002・1003から出土した主要な土器類である。これらを見ると、江戸時代前期初頭～中葉にかけてのものが多く状況がわかる。したがって、SD1002・1003の機能した年代は当該時期に比定できるものと考えられる。なお、SD1002からは上記の他、山茶碗・灰釉陶器・須恵器・常滑焼甕・土師皿なども出土している。土師皿については、上記の17世紀の遺物に共伴する可能性があるが、いずれも小片であるため年代などの検討は難しい。



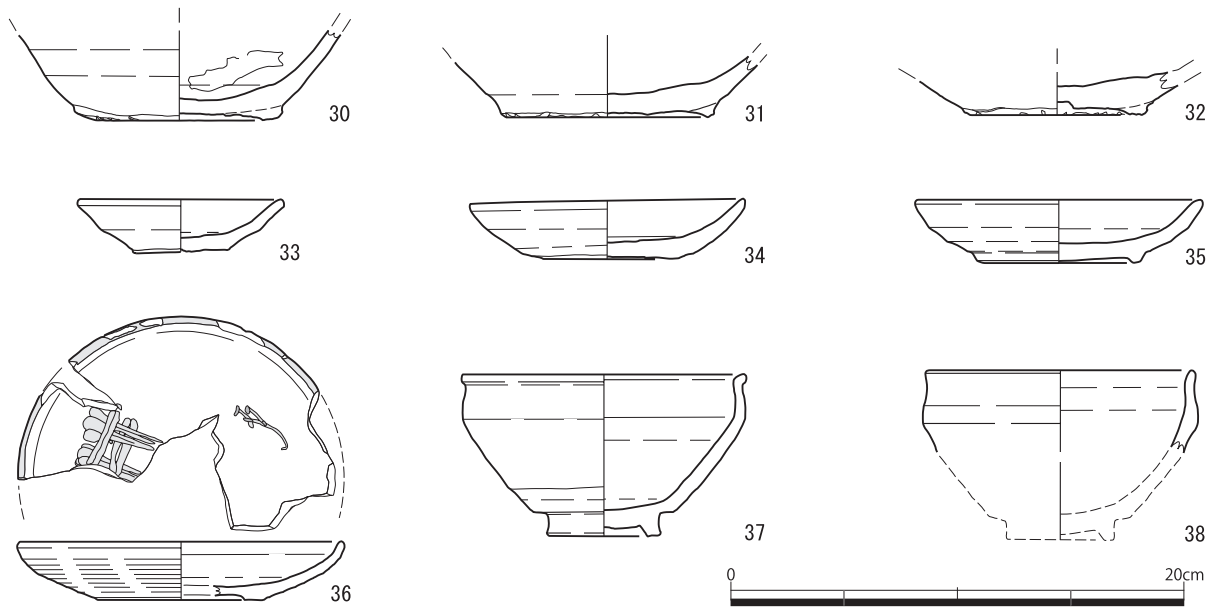


図18 1地点出土の土器類①

## ii. 1地点出土の土器類

山茶碗（図18-30～33・写真21-27） 図30～32は碗、33は皿である。いずれも尾張型とよばれる山茶碗である。いずれも小片であり、全体形の把握できるものは出土していない。そのため、詳細な時期が判明しないが、高台の付け方や底部の形状・調整をみる限り、13世紀後半～14世紀後半のものが多い。碗・皿合わせて140点出土。

土師皿（図18-34） 確認できるものでは22点出土している。その中で図34に掲載したものは遺存状態がよかったものである。年代比定が可能なものは少ないが、江戸時代前期に比定できるものが多い。

志野丸皿（図18-35） 破片資料ばかりだが9点出土。図35に掲載したものは、比較的遺存状態の良いものである。年代比定の可能なものは連房式登窯1小期～3小期である。

鉄絵皿（図18-36） 調査区全体で1点のみ出土した。内面に鉄釉で紋様を描いたいわゆる鉄絵皿であるが、先に記載したSD1002出土のものとは異なる。高台は削り出しであり、SD1002出土の瀬戸美濃陶器類より後出的である。しかしながら、類例が確認できなかったため、産地の特定や年代比定は難しい。ただし、他の共伴遺物から江戸時代後期に比定できる可能性を示唆しておく。

天目茶碗（図18-37～38） 少量の天目茶碗が出土している。SD1002から出土したものと同一型のものである。

常滑焼（赤物）鉢（図19-39・写真19-20） 内面に擦り目などはなく、外面は指圧痕とヨコ方向の指ナデ調整痕が明瞭に残る。底部に成形台から離れやすくするための「はなれ砂」が付着している。図19-39はD1002から出土したものであるが、同製品の小片が包含層より少量出土している。これらは近世初頭に比定できるものが多い。

土師質土器茶釜（図19-41・写真22-30） 確認できたのは3点（うち2点は把手部）のみであった。外面は指圧およびナデ調整。体部内面上部にはヨコ方向の板ナデの痕跡が明瞭に残る。対になる位置に剣先型の把手を付け、中央に直径1.2cm程度の円形の穴をあける。

常滑焼（図19-43～44） 1地点からは常滑焼が点数的には比較的多く出土したが、破片資料すべてを

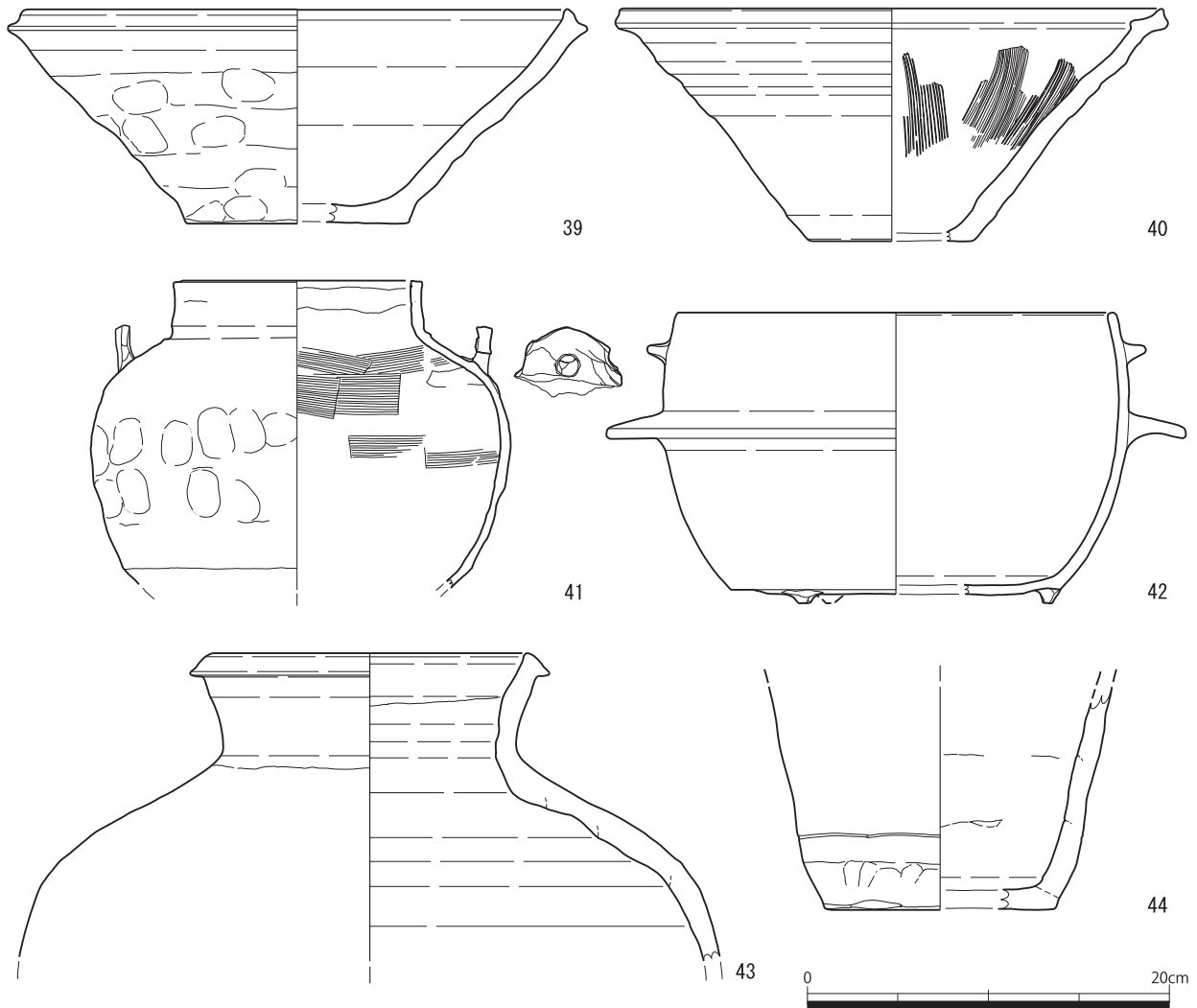


図19 1地点出土土器類②

合わせても、完形の甕1点分にも相当しない量である。このうち、図43は最も残存率がよかったものである。13世紀中葉に比定。また、常滑焼の壺も少量出土している。

脚付施釉羽釜（図19-42・写真31） 三脚の羽釜である。銜部の上面から口縁を経て、口縁の7.5cm下部まで釉が塗付されている。銜と口縁の間には対になる位置にやや短めの把手がつく。類例は、近世の羽釜で確認できなかったため、近・現代に比定しておく。

灰釉陶器（写真21-28） 少量ではあるが灰釉陶器が出土している。灰釉陶器として認識できるものは13点あるが、いずれも小片で器種すら分からないものがほとんどである。器種の識別ができるものとして、耳壺、碗、甕を確認した。

須恵器（写真21-29） 須恵器も非常に少量ながら出土したため掲載する。いずれも小片であるため器種の認識すら困難なものが多い。器種の認識ができたものは坏、壺、小型壺である。

傾向としては、比較的新しい時期のものが多く、古墳時代のものは確認していない。調査区内より24点出土。

弥生土器 4点の弥生土器が出土した。このうち、器種が判別できるものは、小型台付甕の脚部である。詳細な年代は判明しないが、弥生時代後期に属するものと考えられる。



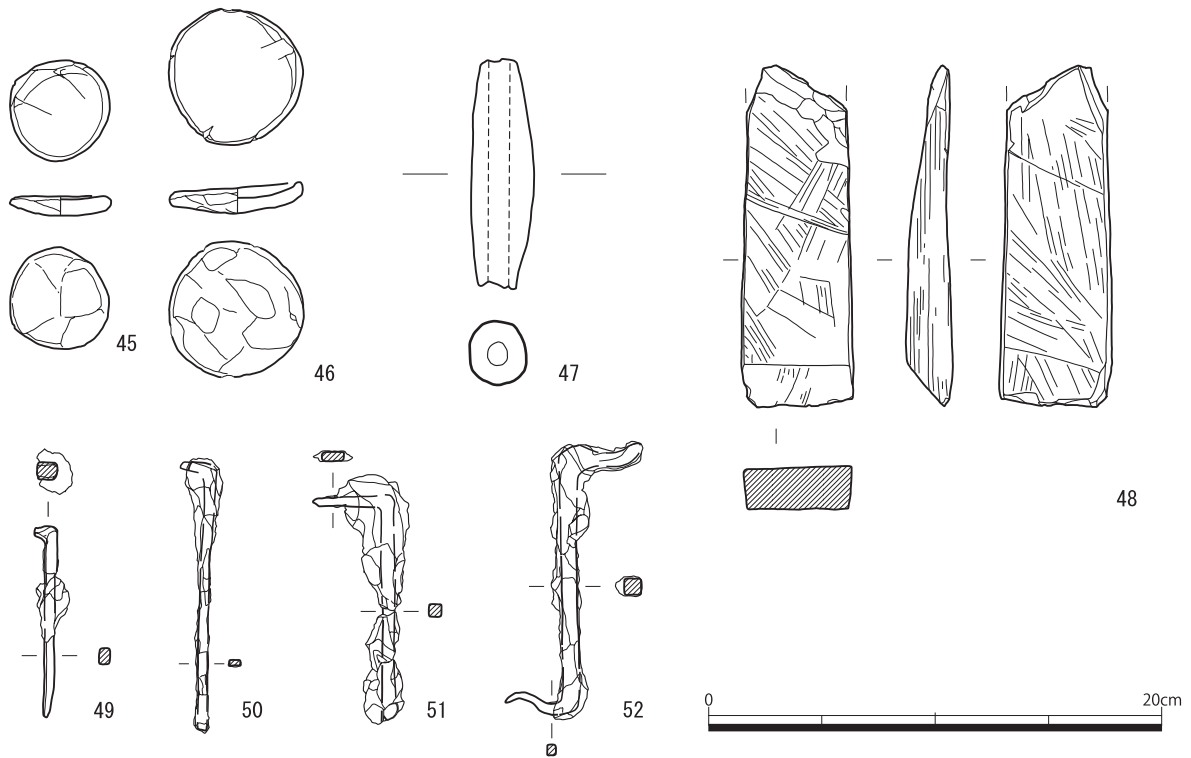


図20 1地点その他出土遺物

## iii. 瓦類

図や写真には掲載していないが、少量の丸瓦・平瓦が出土した糸切痕跡が明瞭な平瓦とこれに共伴すると考えられる丸瓦が少量出土している。これらの年代についての詳細は不明だが、東海市周辺の窯跡採集品との比較から、中世の比較的早い時期のものと考えられる。

また、これとは別に近世の丸・平瓦が出土しているが、江戸時代後期に比定できるものである。ただし、出土量は非常に少なく、周辺部に瓦葺き建物が想定できる量ではない。

## iv. 土製品

ミニチュア土器（図20-45～46・写真22-34） 土師皿を小型化した形状のもので、調査地周辺の各所から出土しているものである。大きさの異なる大小2種が出土しており、いずれも成形は手捏ねによる。各1点ずつ出土。

土錘（図20-47） 小型の環状土錘である。投網の錘として使用されたと考えられる。1点出土。

## v. 石製品

砥石（図20-48・写真22-33） 1点のみであるが砥石が出土している。両面に擦痕が残り、片面は長軸斜方向に擦っており、刃物を研いだ砥石と共通する痕跡が見られる。そのため、包丁などの刃物を研いだものと考えられる。なお、粒子や感触から、現在の砥石で「中間砥」とよばれるものと同じ用途であったと考えられる。SK1010より出土。

## vi. 金属製品

鉄釘（図20-49～52・写真22-34） 鉄釘が4点出土している。図49・51・52は軸部上端を薄く叩いて、叩打方向に折り曲げて頭とした叩折釘。図50は頭部を欠失しているため不明だが、上部で折り曲げた折釘である。軸部の断面形状は片側が長い長方形をなすものと正方形をなすものがある。

## 第5節 2地点の出土遺物

プラスチックコンテナ5箱分（総点数824点）の遺物が出土している。2地点では特別遺物が多く出土した遺構が存在しなかったため、調査区全体から出土した遺物を区別せずまとめて報告する。

### i. 土器類

志野丸皿（図21-53・写真23-40） 小片ながら3点出土した。いずれも連房式登窯1小期～2小期に比定できる。

天目茶碗（図21-54～55・写真23-37・38） 2地点では14点出土した。1地点同様に江戸時代前期前葉に比定できるものである。

鉄釉碗蓋（図21-56・写真23-43） 鉄釉を施釉した碗蓋である。外面の釉薬は光沢があり、内面は光沢がない。外面中央部を中心に直径4.0cmの環状の摘部を貼り付けている。1点出土。

輪髹皿（図21-57・写真23-43） 錆釉を施釉した皿である。1地点で出土したものと同一のもので、2地点でも2点出土。

染付輪花皿（図21-58・写真23-44） 瀬戸窯で生産されたと考えられる染付皿である。内面に紋様が描かれるが、小片のため全体的な紋様構成は不明。口縁部のみ鉄釉を施釉している。

三足飴釉土瓶（図21-59・写真23-46・47） 内面のみ飴釉が施釉された鍋類。底部のみの破片である為、上部の形状は不明。外面底部付近に脚と考えられる突起物が接合されており、こうした類似品が鍋類または土瓶で確認できるため、土瓶として報告しておく。底部は中央が膨らむ底上げ状を呈す。内面は粗い指ナデ痕跡が明瞭に残る。底部裏面に墨書されており、内容は不明だが、確認できる文字は「フ口口ホツニノ」となる。1点出土。

鉄釉碗（？）（図21-60・写真23-39） 鉄釉を施釉した碗形陶器である。底部からの立ち上がり付近が窪み、全体形としては「せんじ」に近い形状の印象がある。ただし、口縁部は出土していないため、詳細は不明。1点出土。

長石釉平鉢（図21-63・写真24-52） 接点がないものの同一個体とみられる2破片が出土している。高台は突出部がないケズリ込み高台。高台部を削って、幅0.7cmを平坦にする。内面に規則性のないトチ痕跡が残る。包含層より出土。

灰釉鉢（写真23-49） 灰釉を施釉した鉢である。高台付近の破片であるため全体形は不明。あるいは大皿の可能性もある。外面は高台周辺のみ施釉をしていない。内面は中央に円形に施釉し、3.0cm程度間隔をあけ、口縁部まで施釉している。これは、重ね焼きした時に高台が接着する部分のみ釉薬による融着を避ける措置と考えられる。

灰釉大鉢（写真23-50） 灰釉を施釉した大型の鉢である。高台付近の破片であるため全体形は不明。高台は削り出しで、接地面が1.2cmと幅広である。内面には灰釉が施釉されるが、トチの設置部のみ施釉されていない。また、施釉されていない素地部の中でも、トチが置かれたと考えられる部分を焼成後に削ったと考えられる擦痕が見られる。1点出土。詳細な時期は不明。

染付端反碗（図21-61・写真23-41） 外面に山水紋を描いた端反碗である。内面底部は2重に圏線を飾り、口縁部内外とも唐草紋を飾る。同一個体と思われる2破片が出土。江戸時代後期に比定。

広東碗（図21-62・写真23-42） 外面に船・凧の水面・鳥を描いた広東碗である。高台外面や口縁部

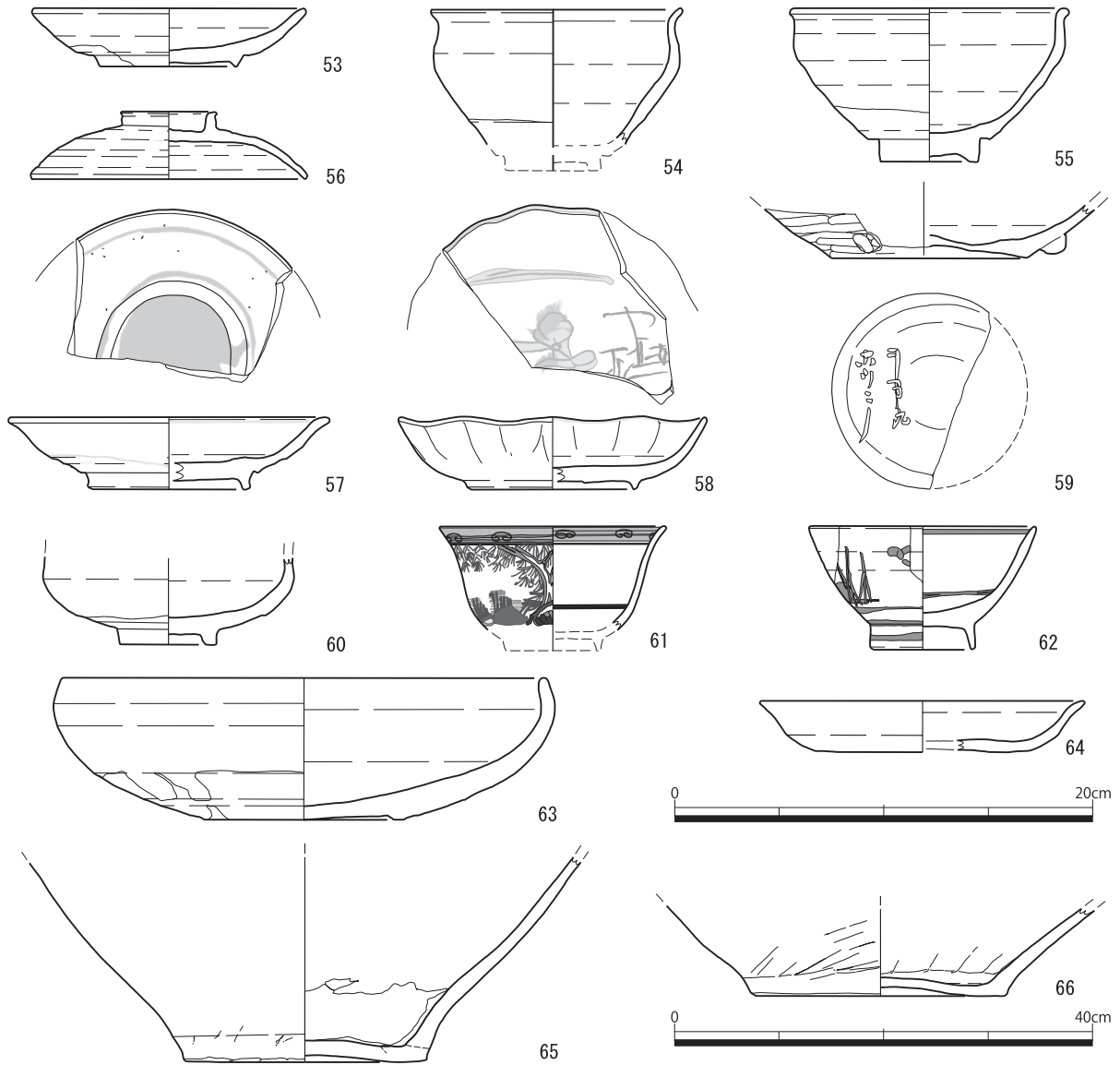


図21 2地点出土土器類

内、面体部内面下方に圈線が廻り、内面底部には花紋が描かれる。1点出土。江戸時代後期に比定。  
 土師皿（図21-64・写真23-48） ロク口調整土師皿である。口径13.8cmで大型の土師皿に類する。包含層より出土。一見すると、中世までは降らない土師皿と考えられ、包含層から、灰釉陶器が出土していることから、灰釉陶器に共伴する時期のものと考えられる。ただし、隣接する東畑遺跡の中世の遺構から類似するものが出土しているため、あるいは中世に比定できることも考えられる。なお、これ以外に土師皿の小片は出土しているが、全体形が不明なものが多く、詳細は不明。

瓦質火鉢（写真23-51） 小ぶりの瓦質火鉢の小片が1点出土している。脚部の形状から、奈良火鉢を意識して製作されたものと考えられる。形状は筒型で、体部外面を丁寧に磨き、光沢がある。小片であるため上記以外の特徴を見出せないが、胎土は奈良で生産される瓦質火鉢とは異なることから、在地で生産されたものと考えられる。

常滑焼（図21-65～66） 常滑焼の甕や壺類が出土した。図65・66は甕の底部で、65は「真焼物」、66は「赤物」である。全体的に「真焼物」の破片が多いが、年代比定のできる口縁が残存しているものはほとんど出土していない。

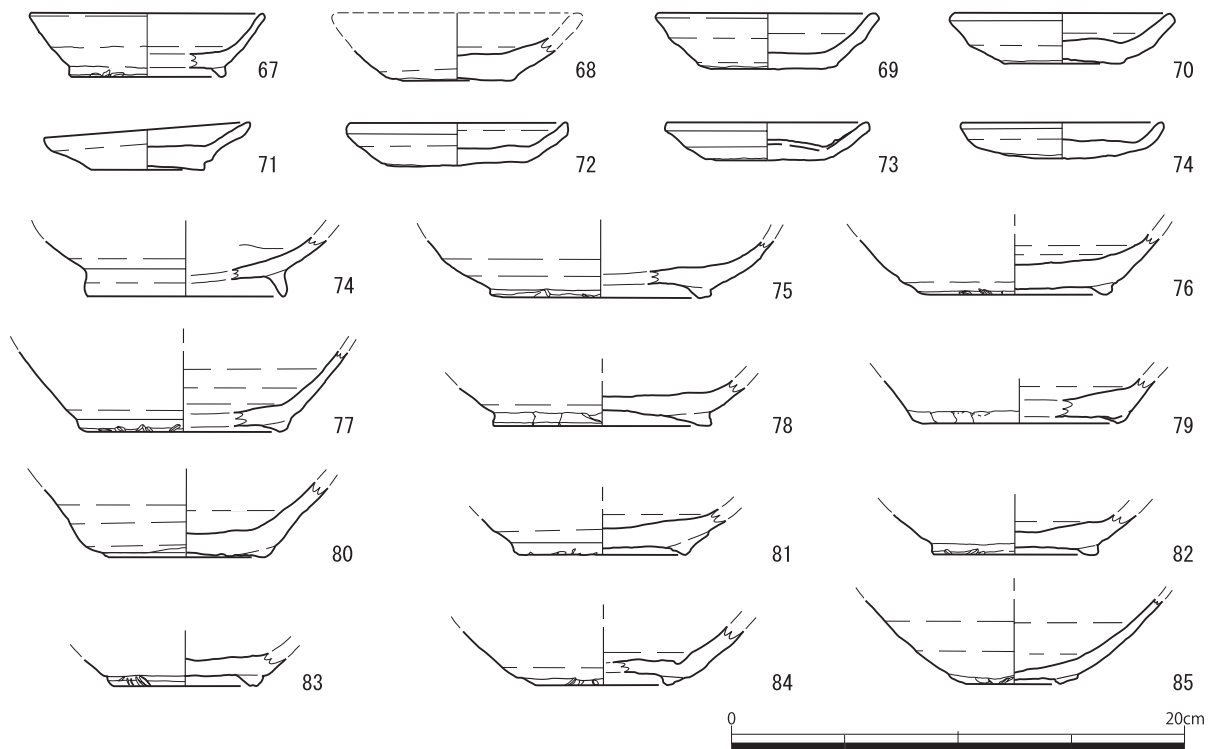


図22 2地点出土山茶碗

山茶碗（図22-67～85・写真24-54・56） 出土した土器類の中で、最も点数が多かったのが山茶碗である。図22に示したように、皿と碗が出土しており、鉢は確認していない。いずれも藤澤編年の4型式～9型式まで確認しているが、7型式が圧倒的に多くその他は非常に少ない。図22に掲載したものは、すべて7型式までのものであるが、これは、8・9型式のものは小片であったため図化が不可能であったからである。なお、出土した山茶碗のうち、9割以上が尾張型のもので、極少量の東濃型の出土が確認できる（図22-85）。

土師質土器類（写真24-55） 破片総数で、118点の土師質土器類が出土している。これらの内訳は、羽釜、伊勢型鍋、内耳鍋、焙烙、土師皿などが確認できるほかは不明である。

須恵器 10点の須恵器が出土している。いずれも小片であるため、器種認識も難しい。

灰釉陶器 4点の灰釉陶器が出土した。このうち1点は三筋壺であったが他は不明。

弥生土器 6点の弥生土器が出土した。多くは小片であるため、器種の認識すら困難である。その中で、平底の甕底部が1点確認できた。

以上が2地点で出土した主要な土器類である。これ以外にも、製塩土器や土師質土器（鍋類）、現代陶磁器も多く出土しているがいずれも破片資料ばかりであった。

## ii. 土製品

ミニチュア土師皿（写真24-55） 手捏ねで製作されたミニチュア土師皿である。1点出土。

## iii. 瓦類

149点の瓦が出土している。多くは棧瓦であり、大半がSX2038から出土したものである。包含層出土の瓦も棧瓦が多い。これらは、いずれも江戸時代後期のものである。

なお、1点のみであるが、古代に比定できうる凸面側に縄叩き痕跡が残る丸瓦の小片が出土している。

## 第3章 東畑遺跡の調査

### 第1節 概要と基本層序

東畑遺跡は、本調査の区割り上、3地点に該当する。ここでは、先行調査において瓦が多く出土していることから、寺院関係の遺構の発見が期待された。ところが、機械掘削段階で調査区全体が後世の開削を受けており、遺構は良好な遺存状態ではないことが判明した。また、今回の調査では期待どおりの寺院関係の遺構は皆無であった。

3地点は7メートル幅のトレンチが3本接続した形をなしており、調査時にそれぞれのトレンチに区分けをした。その内訳は、南北のトレンチを1tr.、東西の北側トレンチを2tr.、南側の東西トレンチを3tr.とした。本報告書でもこのトレンチ名を踏襲して報告する。

調査方法は、包含層の上面まで機械掘削をおこない、以下人力掘削により遺物を取上げ、地山直上で遺構検出をおこなう予定であった。しかし、調査区北端と南端の一部を除いて現代の削平を受け、その範囲に盛り土が置かれ、さらに、この削平を受けた範囲は、地山直上まで昭和期の耕土がおよんでいる状況であった（一部で薄く包含層が残存していた）。そのため、調査区の大部分は地山まで機械掘削をおこない、精査をおこなった上で遺構検出をした。

3地点の基本層序は場所により異なるが、概ね上から以下のとおりである。

- 1：客土（2.5Y8/8 黄色シルト）
- 2：耕土（5BG4/1 暗青灰色土）
- 3：耕土（2.5Y3/1 黄褐色砂質土～10YR3/1 黒褐色砂質土）
- 4：包含層（10YR7/3にぶい黄橙色砂）（中世期の耕土である可能性も）
- 5：地山（10YR7/3にぶい黄橙色砂質土）

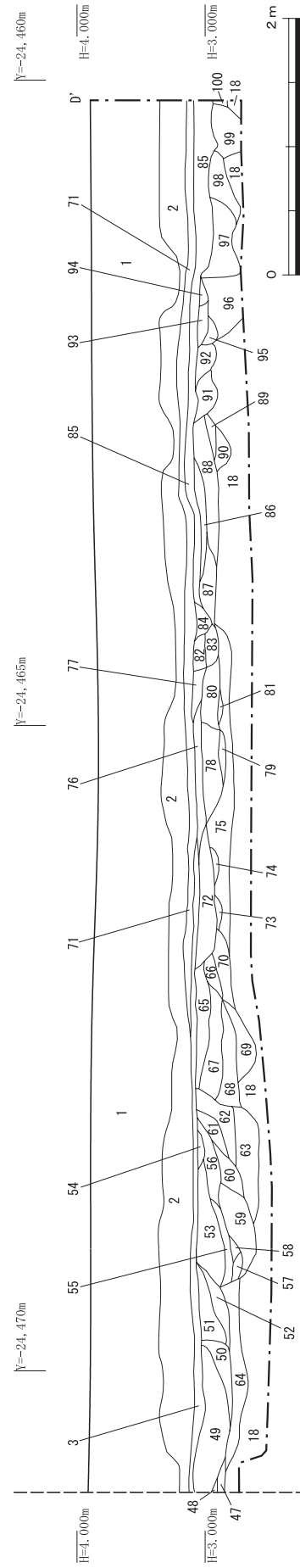
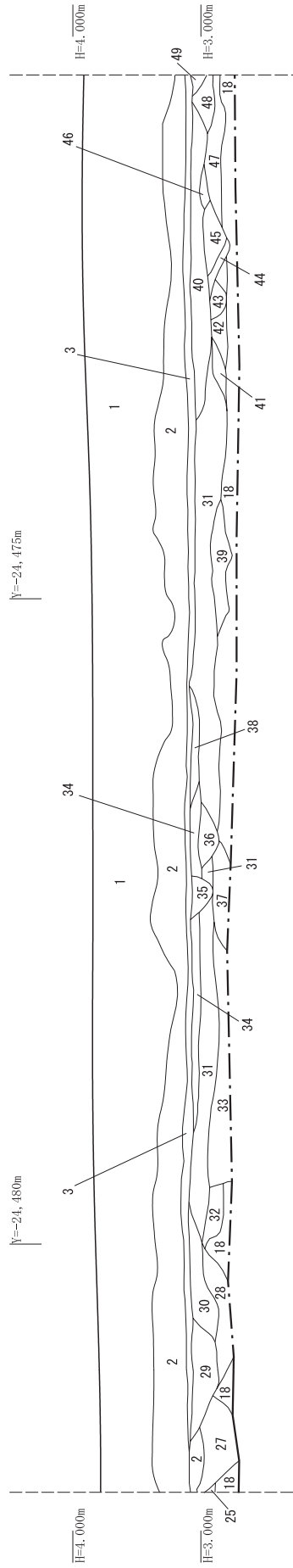
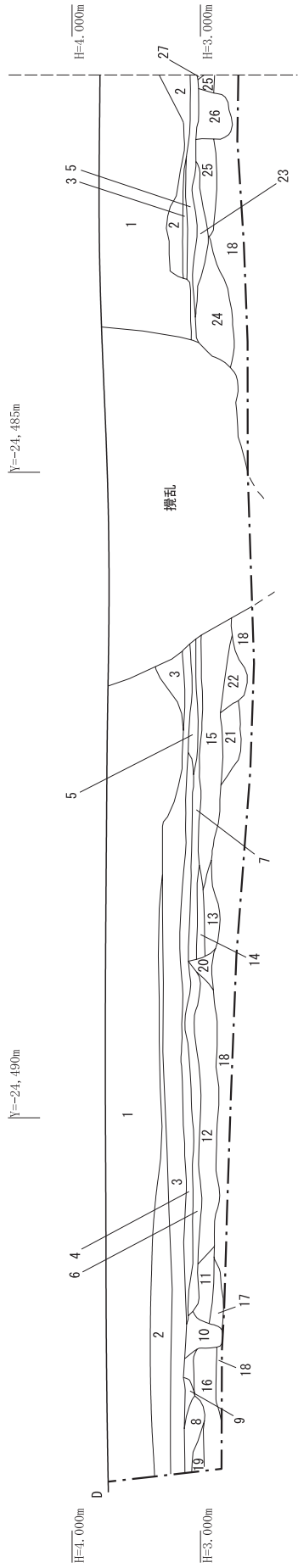
上記5層が基本的な堆積であったが、2tr.では地山直上で10YR1.7/1黒色砂質土（遺物包含層）がみられ、地山上層の堆積の様相が他と異なる。また、3tr.の西半部でも、地山上層が他部とことになっており、10YR1.7/1黒色シルトブロックを含む10YR7/2にぶい黄橙色砂が10YR8/2灰白色砂の上に堆積していた。この層は一見すると人工的な盛り土ないし整地のように見えるが、土中から遺物は確認できず、この層に覆われる遺構は検出できなかった。そのため、この層も人が生活する以前の地山と考えて問題ないものと考えられる。

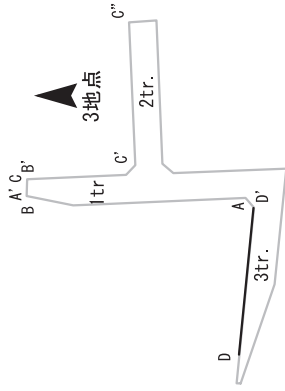
一方、後世の削平がおこなわれていなかった調査区北端や南端では、地山の上層が包含層（上述の4層）という点は他と一致するがこれより上位層は包含層と見分けが付きにくい堆積が表土層直下まで確認している。調査範囲が狭いため確証は得られないが、この状況が後世の削平を受けていない堆積状況と思われ、調査区周辺の包含層より上位の基本的な堆積と考えられる。

なお、機械掘削後は攪乱等との誤認を避けるため、包含層掘削に先行して掘削した土から出土した遺物は、「包含層上層」として取上げたが、包含層として取上げた遺物の中には包含層上面から掘削された遺構の遺物が入っており、純粋に包含層出土遺物として扱うことはできない。



第3章 東畑遺跡の調査



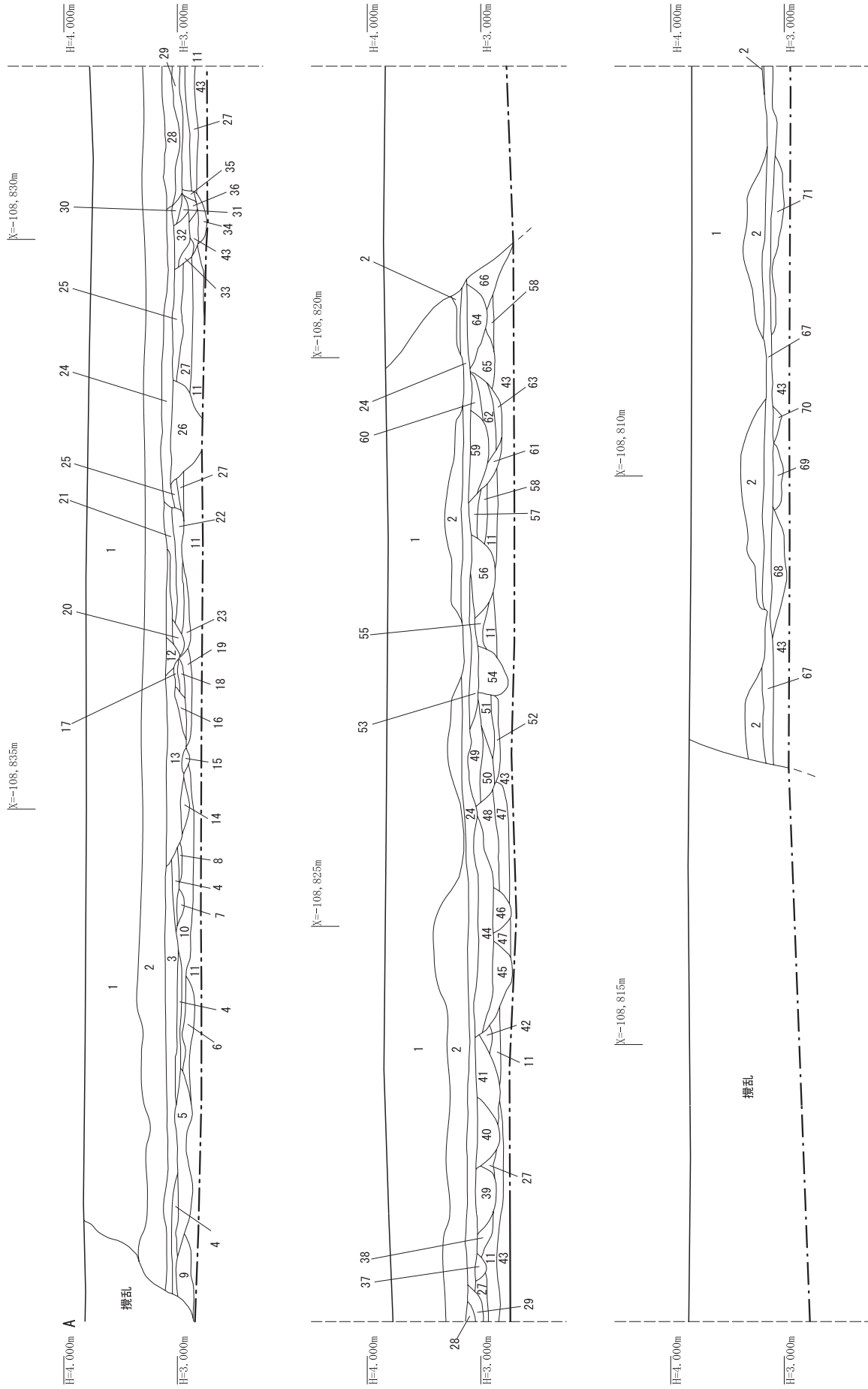


1. 2.5Y8/8 黄色シルト 撈乱土
2. 5B6 暗赤灰砂質土 耕土か
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 (2.5Y4/2暗灰黄色砂質土少量含む)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (10YR7/6暗黄褐色粘質土ブロック状に含む)
5. 2.5Y5/2+10YR3/4 暗灰黄色+暗褐色砂質土
6. 10YR5/3+10YR3/3 にぶい黄褐色+暗褐色砂質土 SD3024
7. 5YR4/4 褐色砂質土 (良く締まる。10YR2/2黒褐色砂質土まだらに含む)
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 (7.5YR4/4褐色砂質土混入)
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/3)にぶい黄褐色砂質土含む)
11. 10YR4/2+7.5YR3/4 灰黄褐色+暗褐色砂質土
12. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 SD3024
13. 10YR3/1 黒褐色砂質土
14. 7.5YR4/4 褐色砂質土
15. 10YR2/2+10YR3/3 黒褐色+暗褐色砂質土 (良く締まる)
16. 7.5YR4/4+10YR4/4 褐色砂質土
17. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 (10YR4/3)にぶい黄褐色砂質土まだらに含む)
18. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 (10YR2/2黒褐色砂質土少量含む) 地山
19. 7.5YR4/3 褐色砂質土
20. 10YR8/1 灰白色砂質土 包含層
21. 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂 SD3126
22. 10YR2/3 黒褐色砂質土 SD3005
23. 10YR2/2+10YR4/3 黒褐色+にぶい黄褐色砂質土 (10YR1.7/1黒色砂質土含む)
24. 10YR4/3+2.5Y5/3 にぶい黄褐色+黄褐色砂質土 (2.5Y2/1黒色砂質土含む)
25. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (10YR4/4褐色粘質土、灰化物含む) 地山か
26. 10YR3/3+10YR4/3+10YR4/1 暗褐色+にぶい黄褐色+褐灰色砂質土 (7.5YR4/4褐色砂質土)
27. 10YR3/2 黒褐色砂質土
28. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 (黄褐色粘土含む)
29. 10YR3/1+10YR5/3 黒褐色+にぶい黄褐色砂質土 (10YR8/4淡黄褐色粘土質、7.5YR2/3暗暗褐色砂質土少量含む)
30. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (10YR1.7/1黒色砂質土含む)
31. 10YR4/2+10YR3/2 灰黄褐色+黒褐色砂質土
32. 10YR3/1 黒褐色砂質土
33. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (遺物、粘土含む)SD3007
34. 10YR3/3+7.5YR4/4 暗褐色+褐色砂質土 (良く締まる)
35. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (10YR2/1黒色砂質土、7.5YR4/4褐色砂質土混じり)
36. 10YR4/2+10YR3/3+10YR5/3 灰黄褐色+暗褐色+にぶい黄褐色砂質土 (遺物、粘土含む)
37. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2暗灰黄色粗砂質土、10YR3/2黒褐色砂質土少量含む)SD3007
38. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
39. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
40. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (7.5YR3/4暗褐色砂質土多量に含む、10YR6/3)にぶい黄褐色砂質土混入)
41. 10YR8/3 淡黄褐色砂質土
42. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (10YR2/1黒色砂質土、灰化物、粘土含む)
43. 10YR4/2+10YR3/2 灰黄褐色+黒褐色粗砂混砂質土
44. 10YR7/3 にぶい黄褐色砂質土
45. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (良く締まる)
46. 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質土
47. 10YR3/1 黒褐色砂質土
48. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (10YR2/2黒褐色砂質土含む、10YR7/2)にぶい黄褐色砂質土、粘土少量含む)
49. 10YR3/2+10YR4/2+10YR6/2 黒褐色+灰黄褐色砂質土 (7.5YR3/4暗褐色砂質土混じり)
51. 10YR3/2+10YR4/2 黒褐色+灰黄褐色砂質土 (良く締まる、10YR5/4)にぶい黄褐色砂質土混じり)
52. 10YR2/2+10YR6/2 黒褐色+灰黄褐色粗砂 (10YR8/2灰白色砂土、10YR4/1褐色砂質土混入)
53. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (良く締まる、遺物含む)SE3015
54. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (粘土少量含む)SE3015
55. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (粘土少量含む)SE3015
56. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 SE3015
57. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土 SE3015
58. 10YR3/2 黒褐色砂質土 SE3015
59. 10YR6/3+10YR3/2 にぶい黄褐色+黒褐色砂質土 SE3015

60. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 SE3015
61. 7.5YR3/2 黒褐色砂質土 (遺物含む)SE3015
62. 10YR3/4 暗褐色砂質土 SE3015
63. 10YR3/3 暗褐色砂質土 SE3015
64. 10YR7/1 灰白色砂質土
65. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (φ0.5~1mm程の砂粒含む)
66. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (遺物含む)
67. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (遺物含む)
68. 2.5Y2/1 黒色砂質土 (φ3mm程の石含む)
69. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (遺物含む)SD3016
70. 10YR1.7/1 黒色砂質土 SD3018
71. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (良く締まる)
72. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (φ0.5~1mm程の砂粒含む)
73. 10YR2/2 黒褐色砂質土
74. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (10YR4/2灰黄褐色砂質土混)
75. 10YR6/3+10YR5/4 にぶい黄褐色+にぶい黄褐色砂質土 10YR1.7/1黒色砂質土少量含む)
76. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土
77. 2.5Y3/2+2.5Y4/3 黒褐色+オリーブ褐色砂質土 (良く締まる)
78. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (10YR3/2黒褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質土少量含む)
79. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土 (7.5YR2/1黒色砂質土含む)
80. 2.5Y4/1 黄褐色砂質土 (2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土混じり)
81. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土
82. 10YR4/4 褐色砂質土 (良く締まる 10YR2/3黒褐色砂質土ブロック状に含む 10YR5/6黄褐色砂質土混じり)
83. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (2.5Y3/3暗オリーブ褐色多量に含む)
84. 10YR3/4 暗褐色砂質土
85. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (10YR4/4褐色砂質土少量含む)
86. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土含む 10YR1.7/1黒色砂質土混じる)
87. 10YR2/1 黒色砂質土 包含層
88. 10YR1.7/1 黒色砂質土 包含層
89. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂
90. 2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂 (2.5Y2/1黒色砂質土ブロック状に含む)
91. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (2.5Y2/1黒色砂質土帯状に含む)
92. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 (良く締まる)
93. 2.5Y2/1 黒色砂質土 (良く締まる)
94. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
95. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 (2.5Y2/1黒色砂質土ブロック状に含む)
96. 2.5Y2/1 黒色砂質土 (22混じる)
97. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
98. 2.5Y2/1 黒色砂質土
99. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (10YR2/1黒色砂質土ブロック状に含む)

図23 3地点3tr. 北壁土層断面図

第3章 東畑遺跡の調査



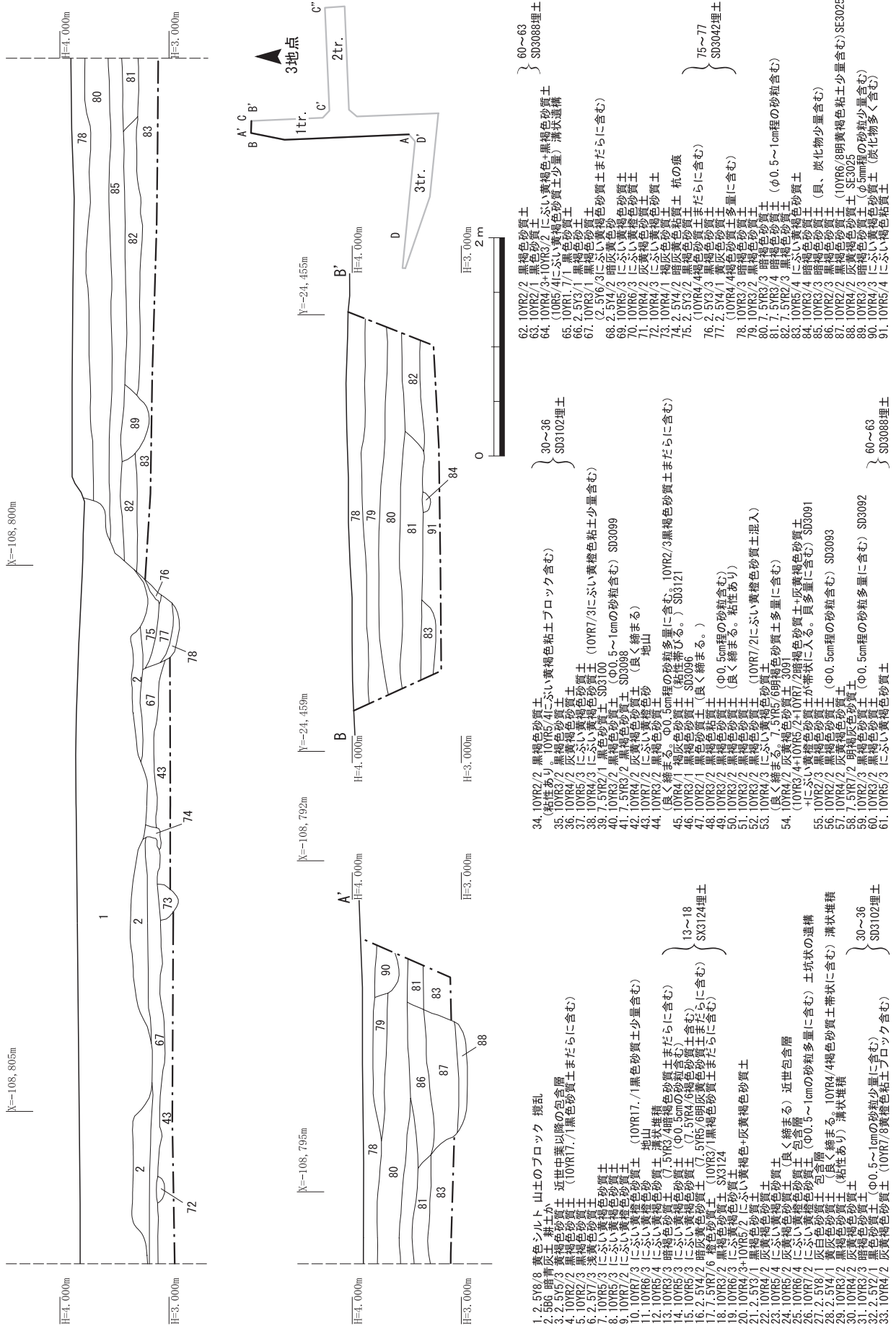
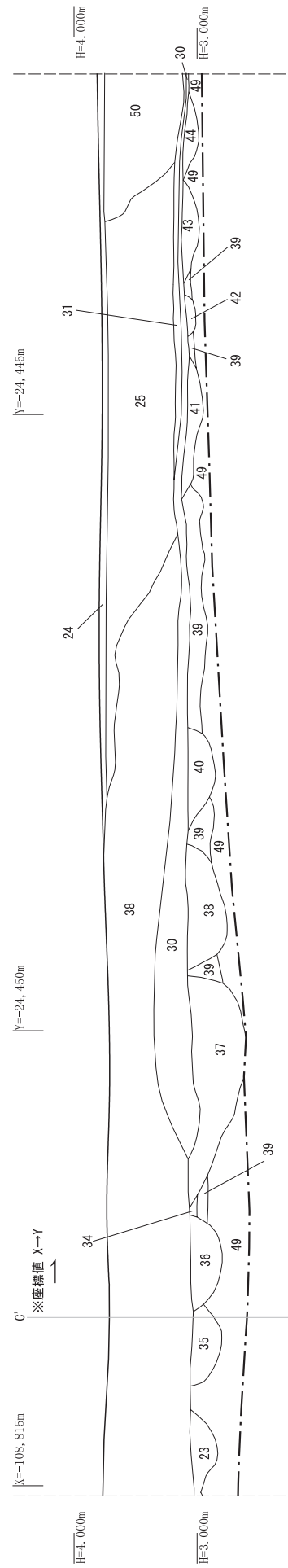
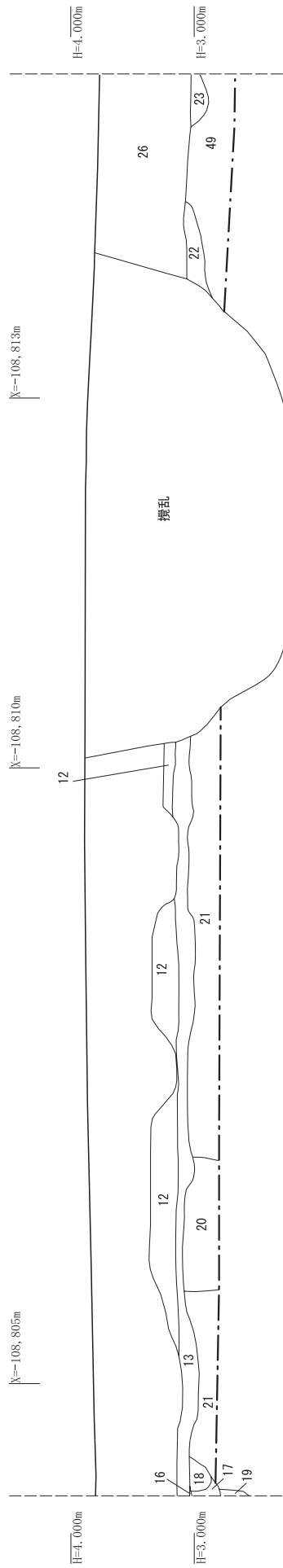
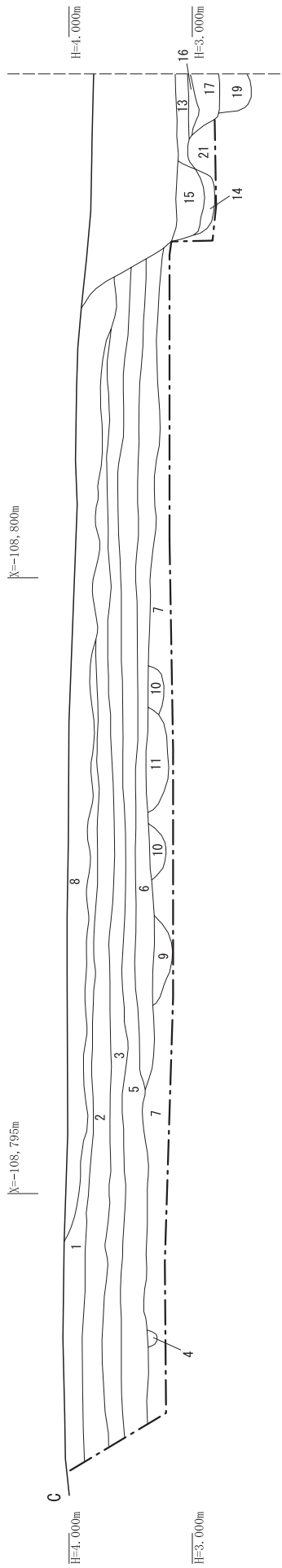


図24 3地点1tr, 西壁・北壁土層断面図

第3章 東畑遺跡の調査





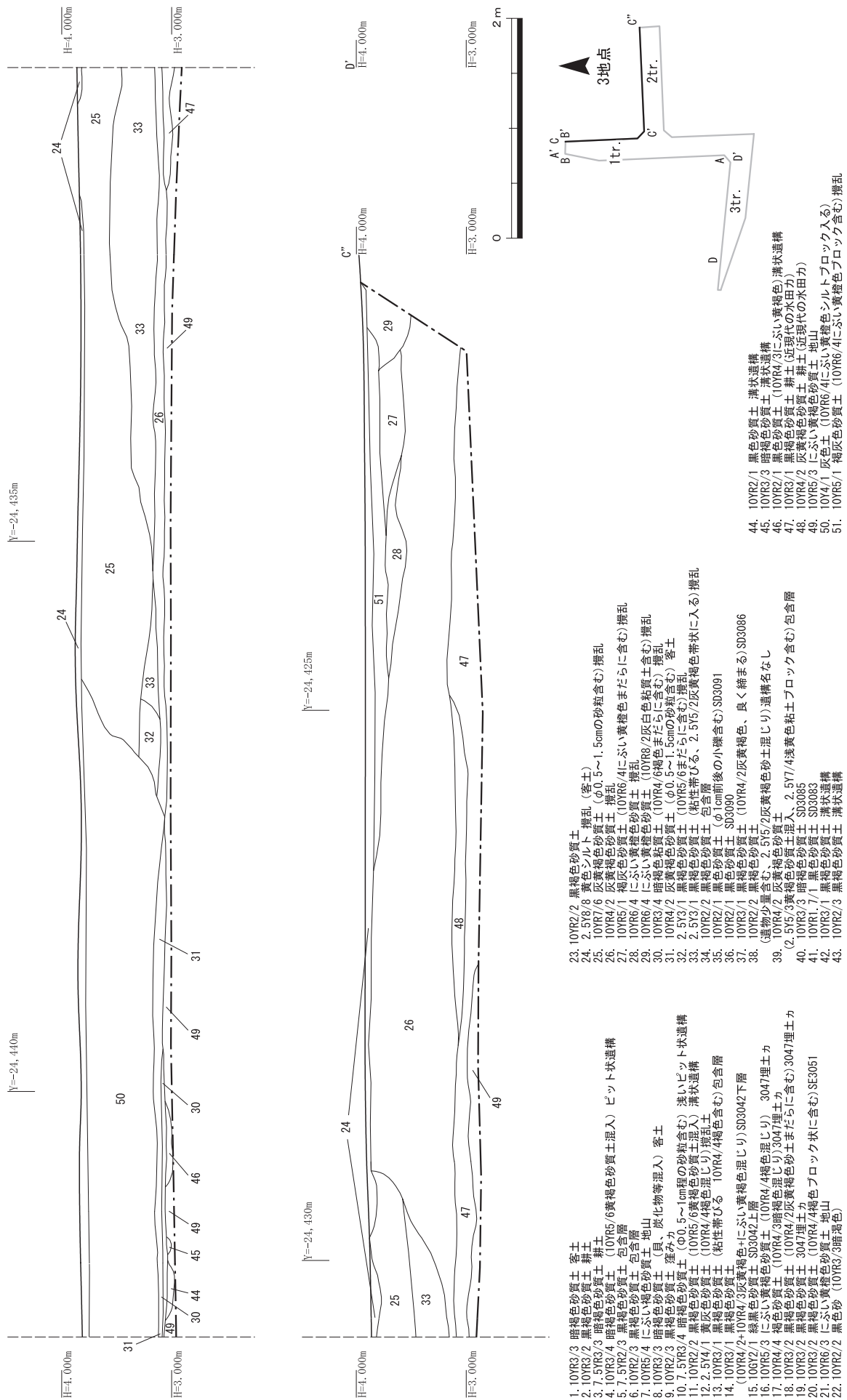


図25 3地点1tr. 東壁~2tr. 北壁土層断面図

第2節 検出遺構

3地点では、溝、耕作溝、井戸、土坑、ピットなどを検出した。いずれも地山直上での検出であったが、壁の断面観察から、多くの遺構が包含層より上面から掘削されていた。特に、3地点では地割に関連する遺構などを検出しており、この点は重要な成果であった。以下これらの遺構のうち主要なものを中心に報告する。

SD3005 (図35) 3tr.の西側で検出した南北溝である。3tr.北壁の断面観察から、近世以降の遺物包含層(耕土)から掘削されており、溝の開削時期は近世以降に比定できる。なお、検出面では幅0.68m、深さ0.02mを測ったが、壁面の断面観察では幅2.3m、深さ0.43mを測った。遺物は常滑焼甕、山茶碗が各1点出土。

SD3009 (図35) 3tr.中央部で検出した幅1.10m、深さ0.13mの南北溝である。検出面では北排水溝の南側で途切れて検出したが、北壁断面では確認できることから、本来はさらに北に延びるものと考えられる。北壁の断面観察から、包含層上面から掘削している状況を確認しており、中世以降に掘削された溝であることがわかった。また、出土遺物からも同様のことがいえる。遺物は、山茶碗を主体とした中世土器類41点が出土した。土器類は年代比定可能なものでは12世紀～15世紀である。

SD3016 (図26・写真8-24～27) 3tr.の中央付近で検出した幅1.57m、深さ0.19mの南北溝。東肩がSD3018と重複し、削平される。検出面は地山直上であったが、断面観察から包含層上面から掘り込まれている状況を確認した。断面は「凸」を逆にした形状で、最も窪んだ部分の上層部から山茶碗、常滑焼を主体とした土器類が167点出土した。出土した土器の多くは溝底ではなく、溝底から10cm程度高い位置からであった。これは、溝が開削された当時は、少なくとも検出幅以上の広さであったが、埋没過程で中心部の幅0.70m程度に狭まり、この段階で土器が入ったものと考えられる。また、埋土の観察から、常時流水していた痕跡は認められず、流水を目的とした機能を有する溝ではないとみられる。

出土した土器の年代については判別可能なものでは12世紀～16世紀に比定できるものである。

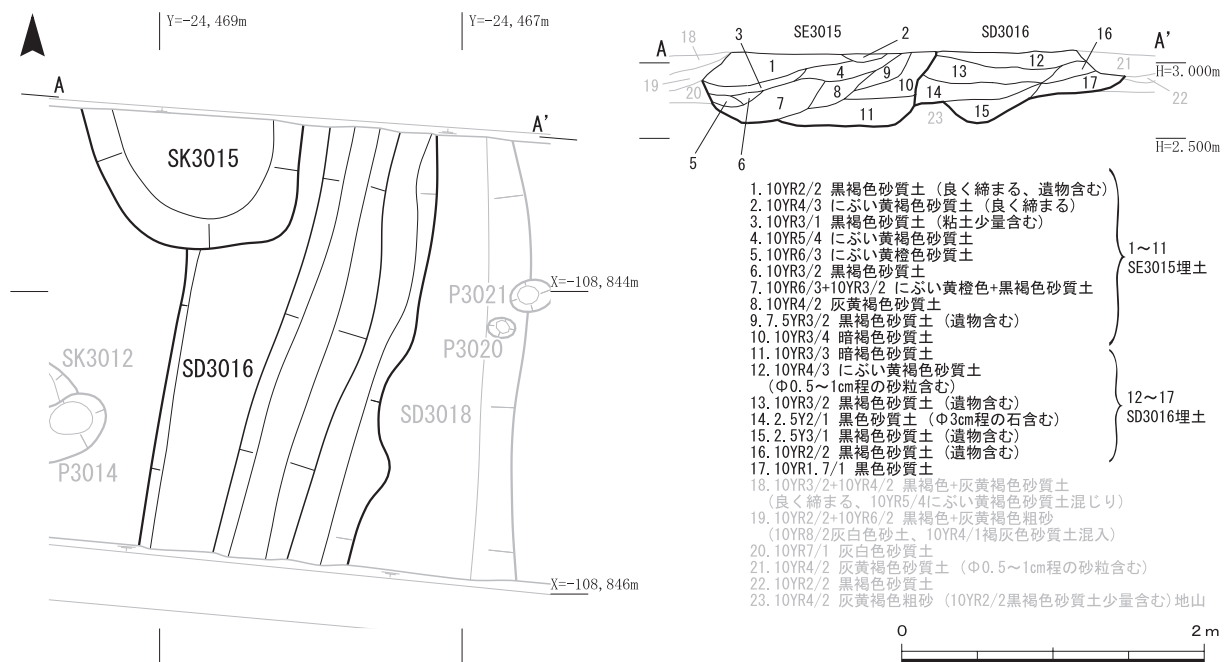


図26 SD3016・SK3015平面・断面図

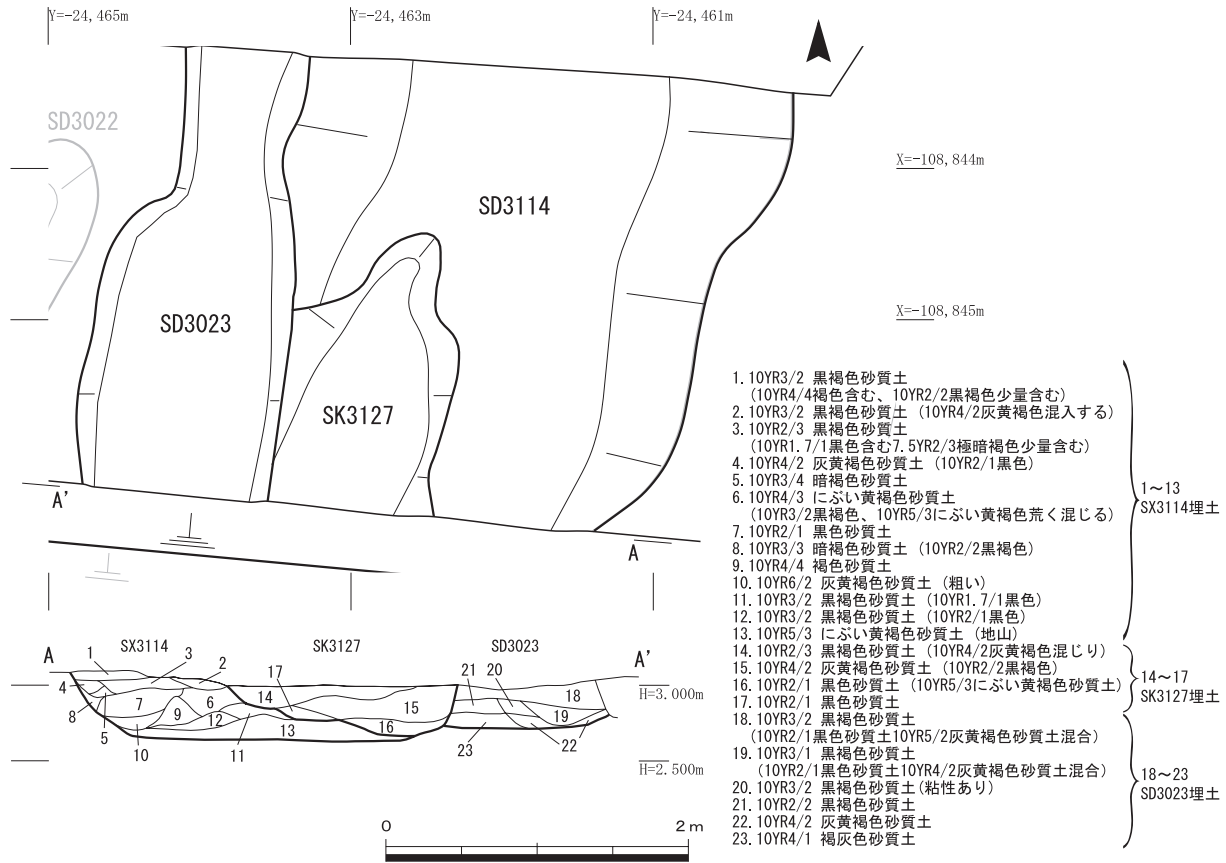


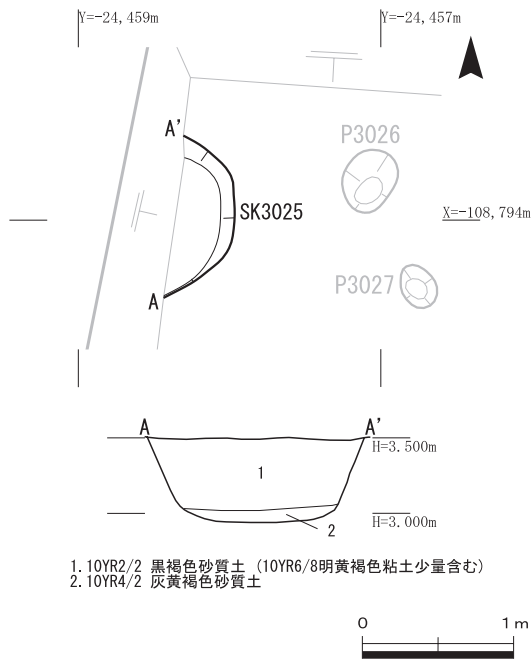
図27 SD3023・SK3127・SX3114平面・断面図

SD3022 (図35) 3tr. 東側で検出した幅0.6m、深さ0.12mの南北溝である。南側は調査区外に延びるが、検出面では北側は北排水溝付近で途切れる。ただし、北壁に断面が残ることから本来は北側も調査区外に延びることがわかる。また、北壁と南壁の断面で溝の最深部の比高差を測ると、0.10m南側が低くなっていた。壁面の断面観察では、この溝周辺に包含層が残存していないため、掘削層位の詳細は不明。ただし、近世の遺物包含層に覆われているため、この土層以前の遺構であることがわかるが、遺物は出土していない。

SD3023 (図27・写真8-28) 3tr. 東端で検出した幅1.25m、深さ0.23mの溝状の遺構であり、南北端ともに調査区外に延長する。東肩部では後述するSX3114・SK3127と重複し、SX3114を切るが、SK3127に削平されるという状況であった。埋土は10YR3/2～2/1の黒褐色～黒色を基調とする粘性のある砂質土であったが、地盤が緩いためか、溝肩から雨水によって帯状に崩落した様子が確認できた。須恵器、常滑焼甕、山茶碗、瓦の4点が出土。

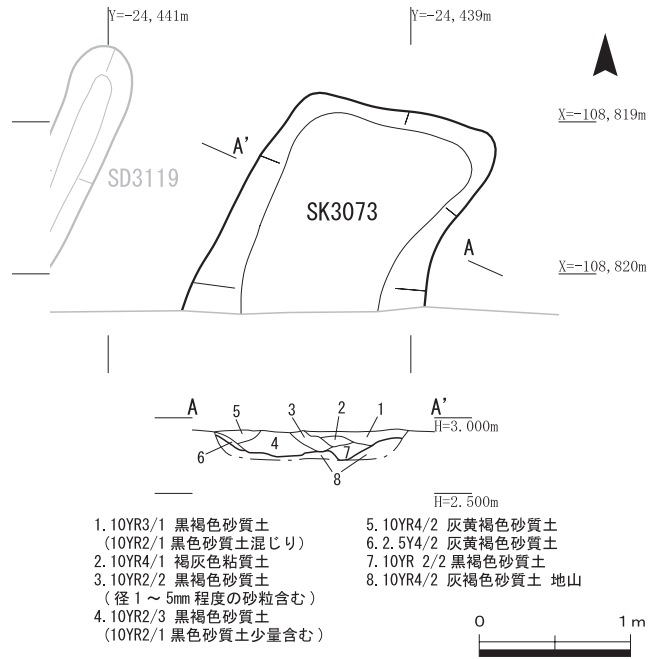
SD3102 (図32) 1tr. 中央南側で検出した幅0.58m、深さ0.23mの斜行溝。西で北に26°振る。後述するST3128の南限とみているが、ST3128に伴う溝群とは若干の方位の振り幅が異なるため無関係の溝である可能性も視野に入れるべきであろう。

SD3126 (図32) 3tr. 西側、SD3005の西側で検出した幅0.51m、深さ0.21mの南北溝である。中軸は北で東に約31°振る。この数値は後述するST3128の溝群の方位に近いものであり、地割の方位に反映された遺構である可能性がある。出土遺物は中世以降のものであり、土師質土器、常滑焼甕、山茶碗が各1点出土した。



1. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (10YR6/8明黄褐色粘土少量含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土

図28 SK3025平面・断面図



1. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (10YR2/1 黒色砂質土混じり)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土
3. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (径1~5mm程度の砂粒含む)
4. 10YR2/3 黒褐色砂質土 (10YR2/1 黒色砂質土少量含む)
5. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
6. 2.5Y4/2 灰黄褐色砂質土
7. 10YR 2/2 黒褐色砂質土
8. 10YR4/2 灰褐色砂質土 地山

図29 SK3073平面・断面図

SK3015 (図26・写真10-37~38) 3tr. のSD3016北西隅で検出した直径1.45m、深さ0.28mの土坑である。調査区北排水溝際にあつたため、南半部のみの検出であつた。掘削層位は断面観察からも重複遺構により判断できなかったが、SD3016より新しいことから、包含層または、それより上位層から掘削されたものと考えられる。出土遺物は中世期の土器類が41点確認できた。

SK3025 (図28) 1tr. 北方で検出した幅1.05m以上、深さ0.25mの土坑状の遺構である。調査区の東壁付近で検出したため、全体形は不明。湧水が確認できたことから、素掘の井戸であつた可能性はあるが、確認できた範囲がせまいため、詳細や性格は不明である。

SK3041 (写真10-39) 1tr. 北方で検出した幅1.00m、深さ0.36mの土坑状の遺構である。後述するST3128の北限の溝SD3042に南半部を削平される。性格は不明だが、規模が後述するSK3075などに近いことや、滞水層まで掘削がおよんでいることから、素掘の井戸であつた可能性が考えられる。

SK3073 (写真10-41~42) 2tr. 中央部南壁付近で検出した幅1.33m深さ0.32mの土坑状の遺構である。南部は南壁よりさらに延長するものとみられ、平面形はやや菱形に近い方形とみられる。埋土は2tr. で地山の上層にみられた黒色砂質土と地山の土が混在した状態のものであり、包含層の上層から掘削されたものと考えられる。山茶碗が4点出土したが時期比定は難しいものであつた。

SK3075 (図30・写真10-43~44) 2tr. 西寄りで検出した直径0.70m、深さ0.40m以上の円形の土坑。掘削深度は、半截・完掘途中で崩落があつたため詳細な数値は判明しないが、地山面からさらに0.50m以上であり、地山層のさらに下層までおよんでいることを確認している。この下層と地山層の境には、現地の通称で「鬼板」と呼ばれる鉄分の沈殿が層を成しており、この「鬼板」層よりさらに下層までおよんでいた。本来、取水以外の目的で土坑を掘る際は滞水層を狙って掘削することはないはずである。滞水層となる条件は砂や礫などの浸透性が高い土性である他に、その層の下に粘土などの浸透性の低い堆積の存在が必要であり、この条件をみたしているのは検出面とした地山層である。となると、その下層まで掘り込んでいるこの遺構は湧水を目的とした可能性が高く、井戸として機能した蓋然性は高い。

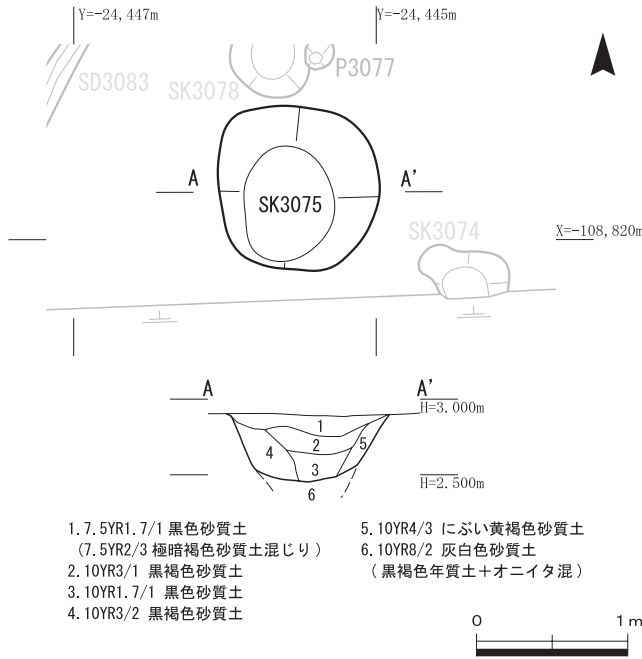


図30 SK3075平面・断面図

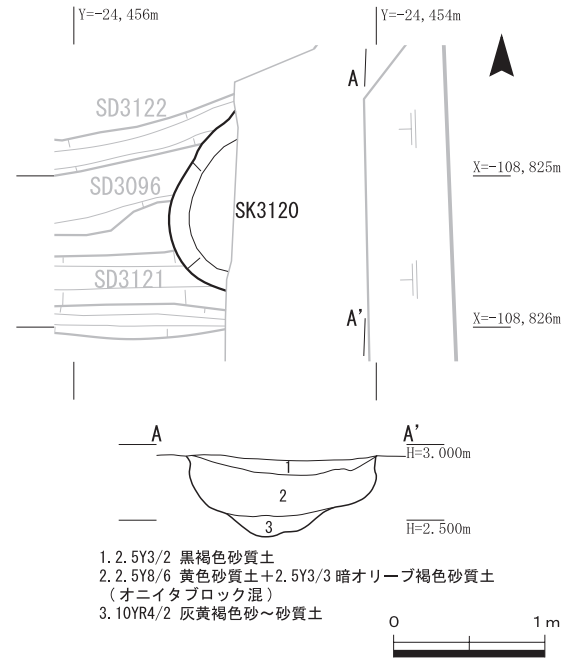


図31 SK3120平面・断面図

ただし、当調査の遺構掘削時において瞬時に湧水による崩落があったことなどを考慮すると、井戸としての存続期間は短かったものと推定する。

SK3120 (図31・写真10-40) 1tr. 中央部、東壁付近で検出した幅1.10m、深さ0.55mの土坑状の遺構。壁際での検出であったため、全体形は不明。掘削深度は、SK3075同様に「鬼板」層よりさらに下層まで掘りこまれており、これも井戸のような取水を目的としたものである蓋然性が高い。ただし、埋土に「鬼板」のブロックが点在しており、掘削土で埋め戻された可能性がある。そのため、遺構の存続期間は極めて短いものと推測できる。出土遺物は少なく、山茶碗が3点出土しているが年代比定は難しいものであった。

SX3007 (図35) 3tr. 中央部西寄りで検出した幅2.54m、深さ0.20mの土坑状の遺構。南北共に調査区外までおよぶため長軸の規模は不明。断面は皿状で流水痕跡は認められず、深さも浅いことから、大型の土坑と考えられるが、規模が不明であるため、溝である可能性も残り、遺構の性格は現状では判断できない。山茶碗や常滑焼甕・鉢などが21点出土。

SX3114 (図27・写真8-30・31) 3tr. 東端で検出した幅3.00m以上、深さ0.39mの溝状の遺構。西肩をSD3023に削平されるため、性格な規模は不明。また、調査範囲が狭いため、溝として南北に延びるのか、土坑状に収まるかの判別はできなかった。堆積土が埋め立てられたようなブロック状である特徴があり流水痕跡を確認していないため、溝として機能した可能性は低いものと思われるが、この東側に1tr.の北端と同じように、地山が一段高くなる地割痕跡があり、これと方位を同じにしている点で、区画溝であった可能性も否定できない。なお、遺物は出土していない。

SX3127 (図27) 3tr. 西端で検出した幅1.88m以上、深さ0.45mの平面不整形の土坑状遺構。SD3023やSX3114掘削中に埋土の違いが明瞭であったため、この遺構が発見できた。これら3つの遺構の中では最も新しく、埋土はSX3116の埋土をさらに粉砕したようなものであった。土坑を想定するが、性格は不明である。



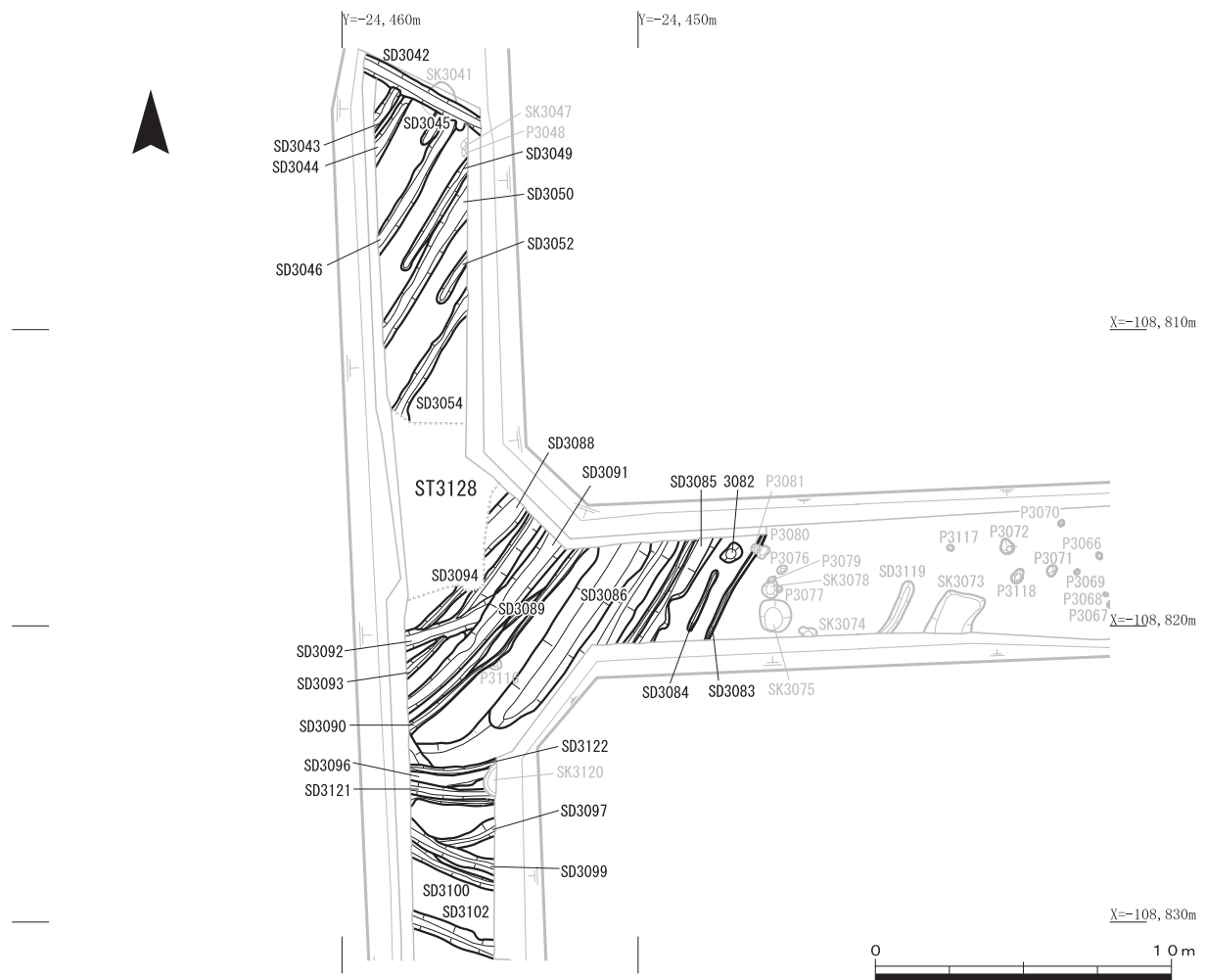


図32 ST3128平面図

ST3128（図32・写真9-32～36） 調査区中央の北側で斜行溝の一群とこれらと垂直方向の溝を検出した。これらの溝の振れ幅は概ね北で東に31°である。この溝群は、田畑の耕作の際に掘られた耕作溝であったものと推定される。

これら方位を同じにする溝はSD3042以南、SD3100以北に限定され、東側はSD3083以東に同方向の溝を検出していないことから、SD3083付近が耕作地の東端と推定できる。特筆すべき点は、SD3042以北は後世の攪乱を受けておらず、純粋な堆積層を呈しており、SD3042直上から南側は削平をうけて、地山面が一段低くなっていた事である。つまりSD3042を境に以北が本来の地山の標高を示すものと考えられ、以南は削平された状態を示している。この削平年代であるが、断面観察では、地山直上には近世の遺物包含層が確認でき、その上には昭和期の耕土が乗ることから、少なくとも近世期には削平されていたものと考えられるが、SD3042以南では中世の遺物を包含する耕作溝が展開することから、中世期まで遡る可能性が高い。また、SD3042を境に段差が生じている事実は、土地の境界がSD3042付近であったことの傍証であろう。このことから、SD3042を境界に南側は耕作地として、北側はピットや井戸が検出されていることから宅地など耕作地とは異なる土地利用が想定され、SD3042が土地利用ないし、地割の境界であった蓋然性が高い。

なお、攪乱がSD3042上を境に南側に展開することは、近現代までこの地割が残っていた結果と考えることができる。

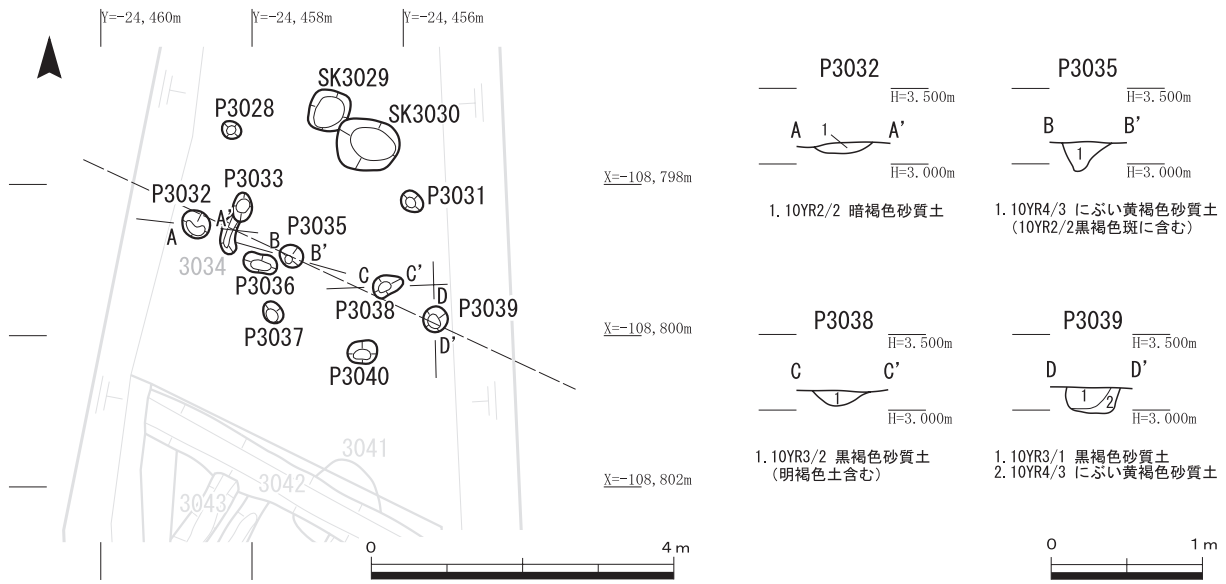


図33 1 tr. 北部ピット群 (SX3129)

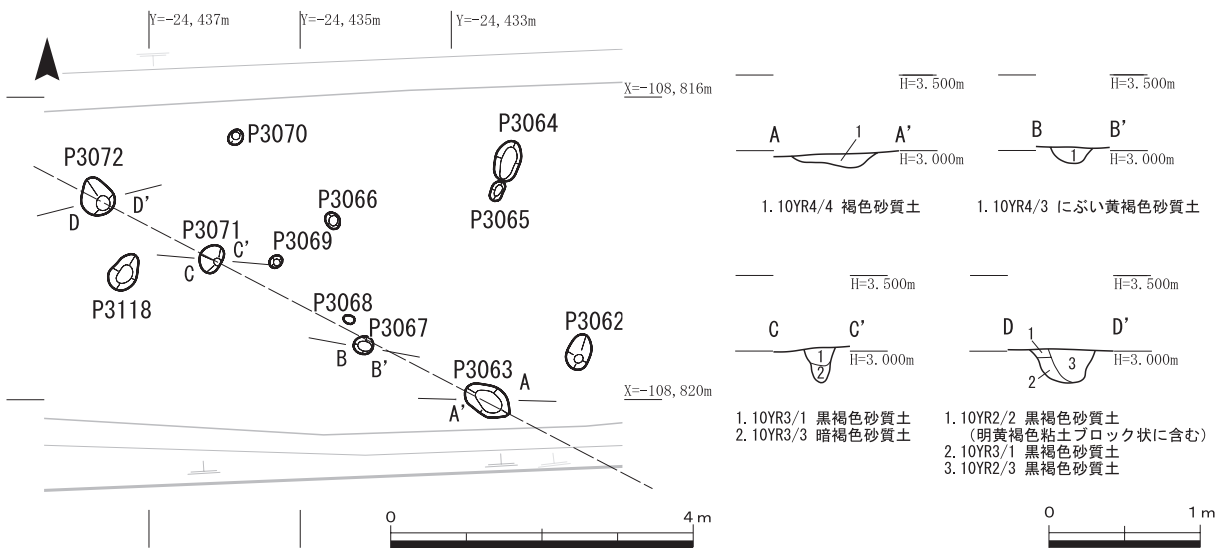


図34 2 tr. 中央部東ピット群 (SX3130)

SX3129 (図33・写真11-45) 1 tr. 北部、SD3042の北側で検出したピットの一群である。いずれも柱痕跡や柱の抜取痕跡が見られないことから、柱穴としては認識できなかったが、SD3042と並行して並んでいる点で、建物ないし柵列であった可能性があるため報告しておく。ピット群並びの軸線は北で西に約60°振れており、これはSD3042の振れとほぼ並行である。したがって、土地の境界を区切る施設等の存在が注目できる。

SX3130 (図33・写真11-46) 2 tr. 中央部東寄りで検出したピット群である。先述の1 tr. のピット群とピットの中軸方位が概ね一致する。これらに関しても柱痕跡や抜取穴は検出できていないため、柱穴であったという確証はないほか、等間隔で並んでいるわけではない。ただし、図面上ではST3128と同じ方位であるため、この場所でも同じ方位で地割されていた痕跡ともみなせる。いずれにしても調査面積が狭いため、建物跡などを特定しづらいのが現状であり、今後の調査のため記述しておく。

### 第3章 東畑遺跡の調査

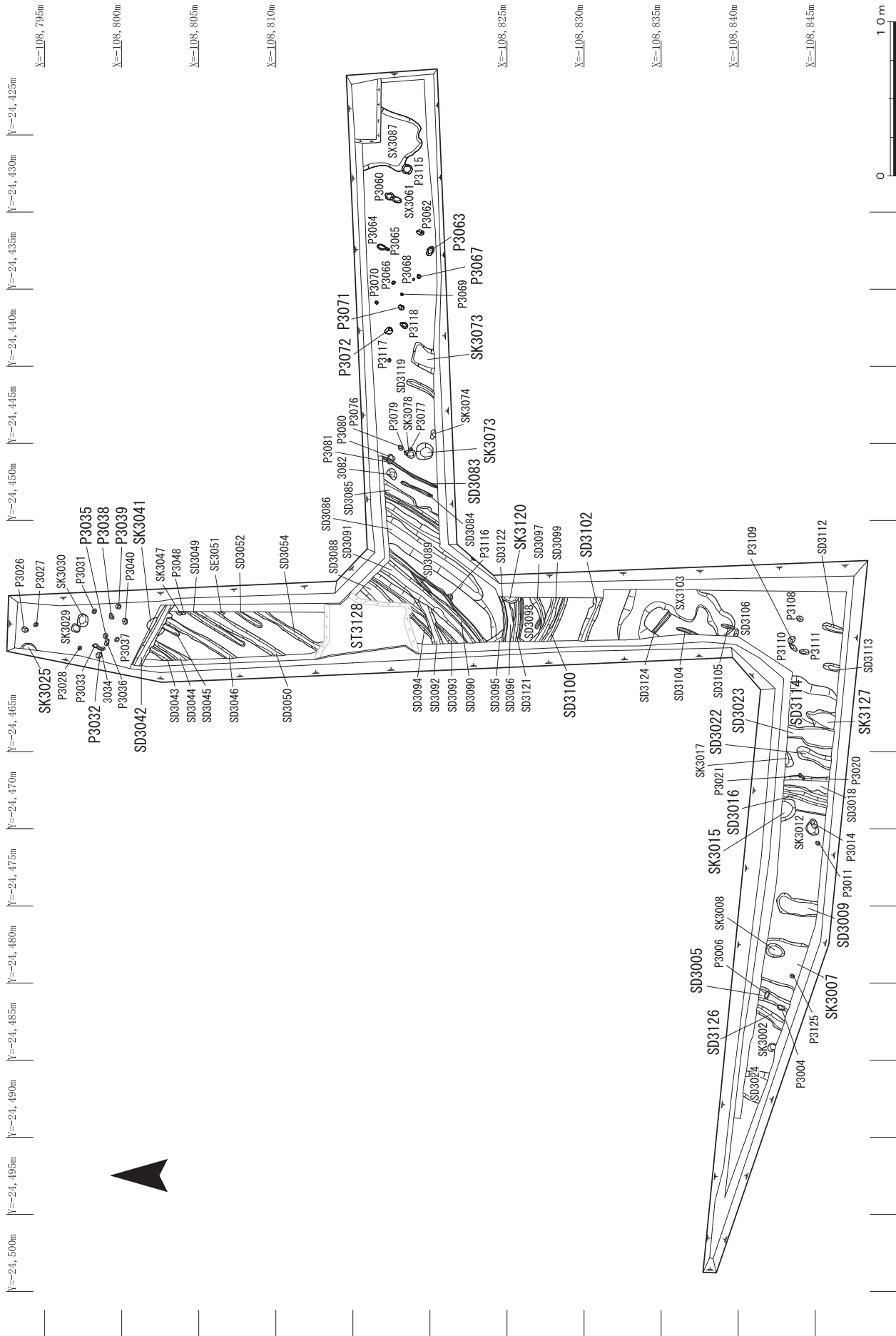


図35 3地点遺構平面図

### 第3節 出土遺物

東畑遺跡（3地点）の調査では、土器・陶器・磁器、瓦類、土製品など1352点の遺物が出土した。この数量は、調査面積に対して非常に少ない上、多くが破片資料であった。そのため、図面として耐えうるものを中心に掲載した。しかし、中には、図化できないものの、事実記載として掲載すべきものがあり、こうした遺物についてはなるべく写真で掲載するようにした。なお、遺構の中で比較的まとまって遺物が出土したものもあったが、どの遺物も接合復元ができない破片であるため、まとめて図化できる量ではなかった。そのため、3地点の出土遺物については調査区全体でまとめて報告する。

#### i. 土器類

3地点の土器類は、主に山茶碗と常滑焼を主体としており、これに土師質土器や陶器類、磁器類、弥生土器、土師器類が加わる。主に中世のものが主体となり、近世以降や中世以前の遺物は非常に少ない状況であった。また、常滑焼については、破片資料の数量は多いが、大型の甕を想定した場合、2個体にも満たない量である。したがって、3地点では特に山茶碗が極めて多い出土傾向にあるといえる。以下これらの土器類を種別ごとに報告する。

山茶碗（図36-1~37・写真25-58~59） 多くの山茶碗が出土した。その中で、皿・碗・鉢の3器種に分類することができる。中でも、碗が最も数量的に多く、次いで皿、鉢となるが、鉢に関しては、破片数量で僅かに5点であった。以下、皿、碗、鉢の順に器種ごとに報告する。

皿（図36-1~15・写真25-58） 1については高台がつくもので、藤澤編年の4型式新段階~5型式に該当する。また、1・2は焼成後に口縁端部を平坦に削っている。これが製品としての特徴か、用途に応じて消費地で行われたものかは不明。1は断面三角形の張付高台で高台端部および底部に靱殻圧痕が観察できる。2~15は高台がなく平底。底部の分離方法は、ヘラ切りが2の1点のみでそれ以外は回転系切りである。いずれも尾張型の皿であり、藤澤編年の4型式~11型式までが確認できる。詳細な型式分類ができない破片資料が多いため、精密な数量調査はできないが、おおよそ7型式~9型式のものが数量として最も多く、それ以外は極めて少量であった。

碗（図36-16~34・写真25-59） 16・17は山茶碗の中でも古い形態をもつもので、高台が精巧につけられたもの。16は靱殻圧痕がなく、断面逆三角形を呈す。16は藤澤編年の3~4型式、17は4の新段階~5型式に該当する。底部の分離方法は22・23が静止系切り。それ以外は回転系切りで、皿同様に圧倒的に系切りが多い。図に掲載しているものは、いずれも尾張型であるが、胎土や焼成の違いから、複数の窯場から供給されたことが想定される。特に、32に見られるような、底部から体部の立ち上がり丸いものは、今回東畑遺跡から出土した碗形の全体の中でも異質なものである。なお、図に掲載したものはすべて尾張型であるが、出土した碗形の中に18点の東濃型のものを確認している。

碗についても、皿同様に藤澤編年の3ないし、4型式~11型式まで出土している。

鉢（図36-35~37） 底部または口縁部の破片資料が5点出土している。35~37はそのうちの底部が残存しているものである。いずれも付高台である。35は内面使用の痕跡があり、内面に擦痕が認められる。いずれも大きさが異なるが、これが時期差なのか、生産地の違いなのか、用途の違いなのかは不明。いずれにしても、山茶碗の出土する消費地の遺跡では鉢の出土量が少ないため年代比定などは難しいのが現状である。

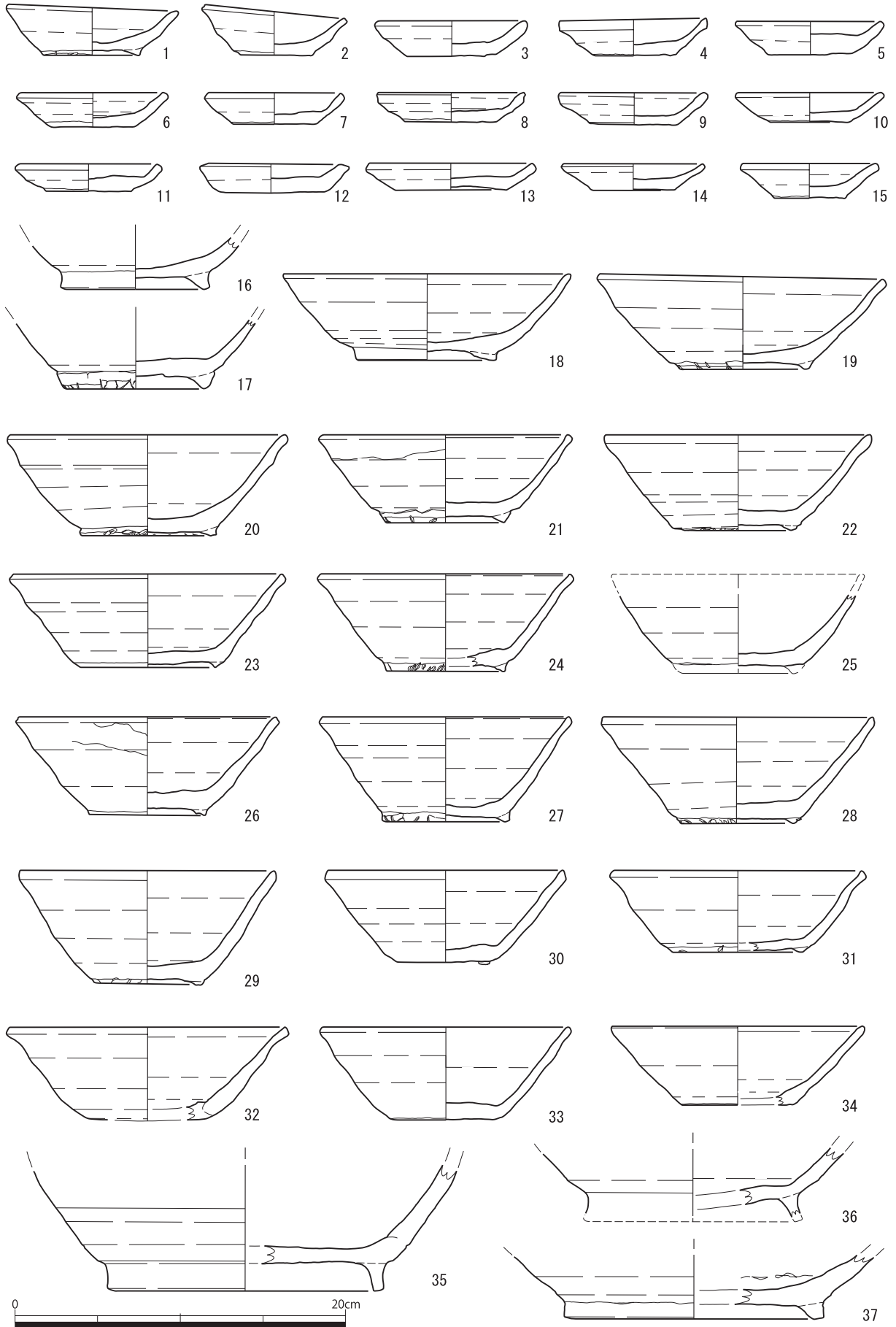


图36 3地点出土山茶碗



灰釉底卸目皿（図37-38・写真28-62～63） 高台内部に卸目を入れた底卸目皿である。高台周辺部の小片であるが、灰釉が施釉されており、内面底部に三重圏線を巡らせている。卸目は高台の内側に格子目状にへらで入れている。包含層より1点出土。

天目茶碗（図37-39） 削出し高台の天目茶碗である。通常露胎となる高台付近に内面の鉄釉とは異なる錆釉を薄く施釉している。包含層より出土。

段付灰釉茶碗（図37-40・写真28-66）

破片資料のため全体形は不明だが、灰釉を施釉し、体部に対してやや大きめの

高台がつくことが考えられる茶碗型陶器である。灰釉天目茶碗に類似するが、口縁部直下の括れから口縁に向けて一旦開いたのち、口縁部で内反するため、天目茶碗とは形状が異なる。また、高台の取り付け位置が天目茶碗とは異なる。SD3009より出土。

播鉢（写真28-72） 錆釉を施釉したいわゆる瀬戸美濃生産の錆釉播鉢である。口縁部の観察から年代比定が可能な器種であるが、今回出土したものでは年代比定ができるものがなかった。掲載したものは、底部に擦り目が見られるもの。今回の畑間・東畑・郷中遺跡の調査でもこのような遺存状態の良好なものは確認していないため、例として写真で報告しておく。

土師皿（図37-41） 非ロクロ調整の土師皿である。磨滅しているため調整の詳細は不明。3地点からは少量の土師皿が出土しているがいずれも小片である。主に中世に比定できるものが出土している。

常滑焼（図38-42～55・写真26・27-60～63） 常滑焼は壺・甕・片口鉢などが出土している。これらはいずれも近世以前のものである。ただし、小片であったため、図や写真には掲載していないが、「赤物」とよばれるものも少量ながら出土している。これに関しては、器種の特定が難しく情報が乏しかったため、出土しているという記載にとどめる。

以下、3地点から出土した近世以前の常滑焼に関して器種ごとに報告する。

壺（図38-42～45・写真26-61） 42～46は常滑焼の壺である。42は頸部がほぼ直立で、口縁が外側に開く。肩部直下に沈線がめぐる。中野編年2型式に比定。43は頸部が短く、口縁が外側に軽く折り曲げたもので、6型式に比定。44・45は口縁を外側に折り返して、縁帯としたもので、9～10型式に比定。46口径が小さいため壺としたが、この種の口縁をもつ甕の口径が小さいため、小型の甕と認識できる。11型式に比定。

甕（図38-46～55・写真26・27-60・62） 47～55は甕である。47～50は底部であるため、年代比定は難しい。51～55は甕の口縁付近が残存していたものである。51は口縁の折り曲げなどがされていない古手の口縁で、1～2型式に比定。52・53は外側に口縁を折り曲げ、N字型口縁になる前段階のものである。6型式に比定できる。54・55はN字型口縁の甕で8～9型式に比定。

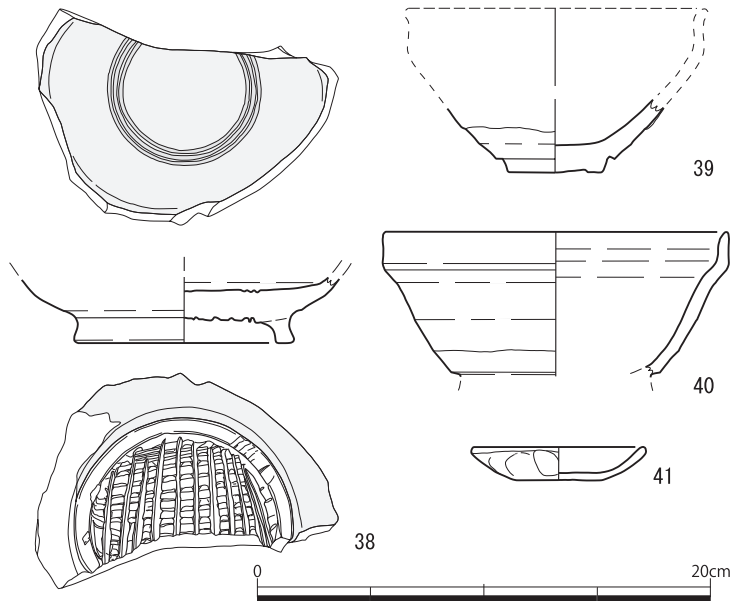


図37 3地点出土陶器・土師皿

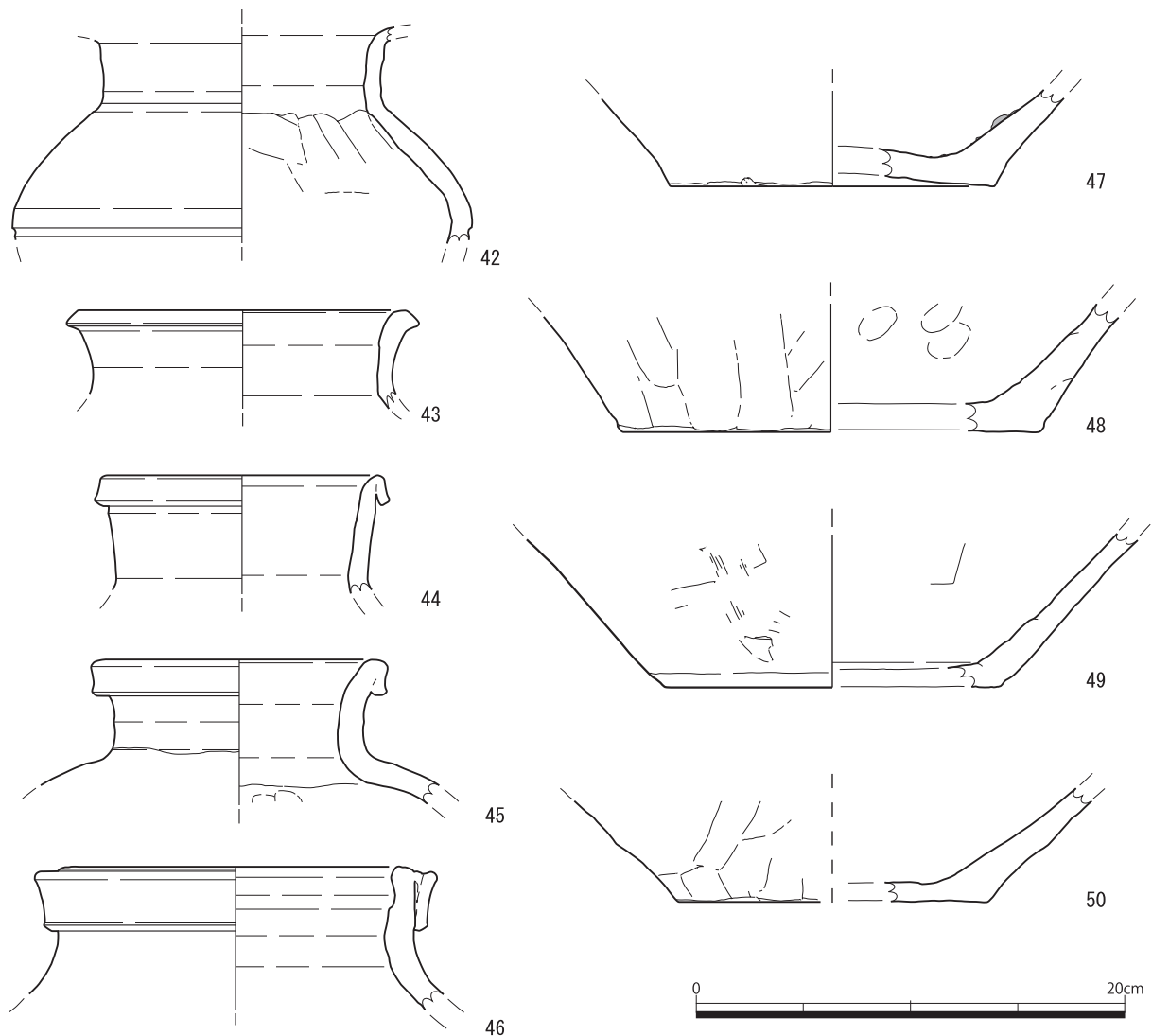


図38 3地点出土の常滑焼甕・壺

鉢（図39-56～58・写27-63） 56～60は鉢である。残存していないため、56・60には片口がないが、いずれも片口鉢であると考えられる。このうち、56～58は小型で古手の片口鉢。中野編年の5型式～6型式に比定できる。59は7型式に比定。60は8型式以降に比定できる。

手持ち鍋（図39-63） 常滑焼「赤物」と考えられる手持ち鍋である。片側の把手付近の小片1点が出土した。把手の体部側2か所に蒸気を逃がす穴がけられている。包含層より出土。

羽釜（図39-61・写真28-69） 土師質羽釜である。小片ばかりで遺存状態のよいものは出土していない。詳細な年代比定は難しいが、中世期に比定できるものが多い。

伊勢型鍋（図-64・写真28-68） 口縁端部を内側に折り返して仕上げ、受け口状口縁にした伊勢型鍋である。65に掲載した以外に、21点の伊勢型鍋が出土しているが、いずれも13世紀～14世紀中葉に比定。

焙烙 少量ながら土師質焙烙が出土している。いずれも小片で磨滅しており、詳細は不明。

古式土師器（図39-65・写真28-70） 古式土師器に相当する甕の小片である。図には1点掲載したが、体部の小片が4点出土している。口縁部を外側に折り返して仕上げたもので、赤塚編年の松河戸様式～宇田様式に相当し、4世紀末～5世紀初頭に比定。

弥生土器 弥生土器は4点出土している。いずれも小片であるため、器種すら不明である。周辺調査で

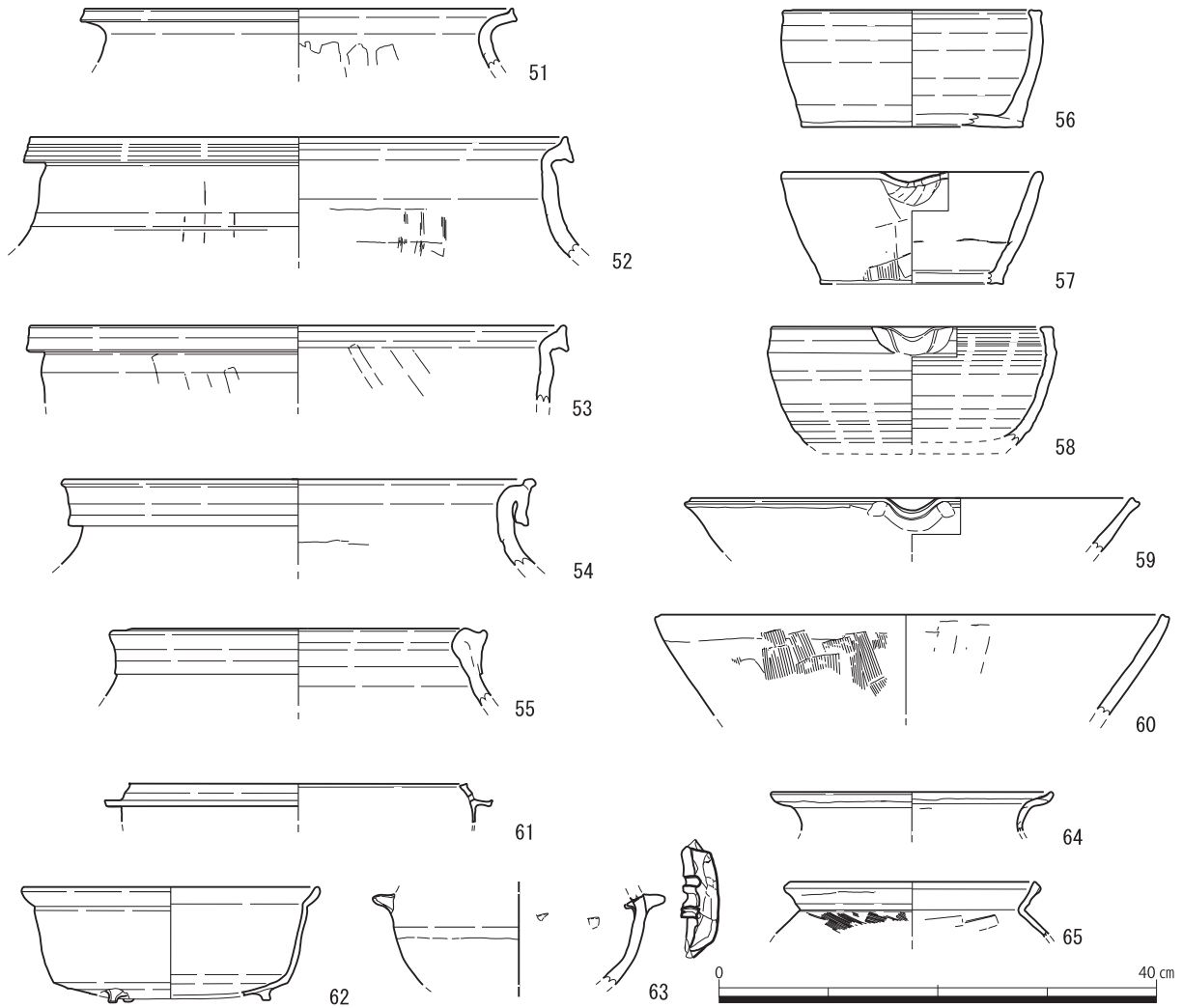


図39 3地点出土の常滑焼甕・鉢・鉢・その他

弥生時代後期の土器が出土しているため、この時期に帰属する蓋然性が高い。

ii. 瓦類

無文軒平瓦（写真28-71） 瓦当が残存する個体と瓦当を欠失した体部のみのものが各1点出土した。瓦当は貼付の曲線顎で、瓦当は無紋でヨコ方向のケズリによって仕上げられる。凸面は縄叩き圧痕が残り、凹面は布目圧痕が残る。軒平瓦としたが、あるいは葺など軒先以外に使用した道具瓦である可能性も考えられる。なお、軒平瓦以外に丸瓦や平瓦も出土しているが、特に平瓦と軒平瓦は胎土や焼成が全く異なり、共伴することは想定しにくい。詳細な年代は不明であるが、顎の作りや調整などをみれば平安時代以降に比定するには難がある。共伴する瓦の出土が重要であろう。

iii. 土製品

加工円盤（写真28-73） 土器類の底部を打ち欠いて加工した転用品である。加工された土器は山茶碗、土師皿、焙烙であった。

土錘 長軸中心に穴をあけた管状土錘である。2点出土しているが、いずれも3 tr. の包含層からである。両者は類似しており、同じ時期に作られたものと考えられるが、年代は不明。

## 第4章 畑間遺跡の調査

### 第1節 概要と基本層序

当調査区は今回の調査区割上、4地点に該当する。この地点では、本来、地山直上で遺構を検出する予定であったが、機械掘削時に地山より1層上層から遺構が確認できた。そのため、この面で遺構検出をおこない、さらに地山上面で遺構検出を行う2面調査に方針変更が行われた。これらの遺構に関しては上位層より検出した遺構を「上層遺構」、地山面で検出した遺構を「下層遺構」と呼称する。

4地点の基本層序は攪乱が多いため上位層は一定しないが下位層では、攪乱のおよんでいない部分では共通していた。攪乱などを除く基本層序以下のとおりである。

- 1 : 10YR3/4 暗褐色土～砂質土（客土）
- 2 : 10YR4/1 灰褐色土（客土）
- 3 : 10YR3/3 暗褐色砂質土（近世遺物を含む包含層）
- 4 : 10YR3/4 暗褐色砂質土（上層遺構ベース土）
- 5 : 2.5Y6/6 黄褐色砂～粗砂（地山）

1・2層は場所により一定しない。また、2層と3層の間に部分的に近世の遺物を含む2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土が確認できる。

4層は中世～近世初頭の遺物を含む包含層であり、この層の中から常滑焼の「赤物」が数点見ついている。また、この包含層に近世の遺物が含まれていたことで、この層の上面から検出した「上層遺構」も近世以降に比定されることになる。ただし、3層と4層は調査区壁面では分層することができたが、色や土質に微妙な差異は認められるものの、平面で掘り分けることは不可能であったため、4層から出土したとしている近世の遺物が、確実に4層に含まれるものであるかという点に疑問が残る。後述する上層遺構群がこの4層をベースとしていることから、現状では近世初頭以降の年代を考えているが、4層と3層の判別が難しいことから考えると、数点の遺物に年代特定を委ねるには荷が重いであろう。

いずれにしても、江戸時代初頭前後の包含層が、地山直上で確認でき、それ以前の堆積が全く確認できない状況は、この周辺が江戸時代前期頃に大規模な削平ないし改変が行われたことを示すものと考えられ、それ以前の堆積はすべて削平されたものと考えられる。したがって、地山から上の層は、この大規模な改変以後に形成された層位であることは特記しておく。

ただし、ここで地山とした5層は、他地点の砂堆とは異なる火山灰質のシルトブロックなどを多量に含有した粗砂層であり、一見すると自然堆積とは思えないようなものであった。また、後述するSX4078はこの地山との区別が難しく、別遺構の断割断面調査を契機に確認できたような検出状況であった。そのため、この地山層と認識した層に遺物が含まれないか、確認のため幾つかの断割調査をおこなったが出土しなかった。現状はこの層を砂堆とは異なる、例えば、丘陵地のような砂堆とは異なる堆積層と考えているが、地山であるか否かの調査は別地点でも確認する必要があると思う。今後、周辺調査の際には同一層の性格等の確認を願いたい。

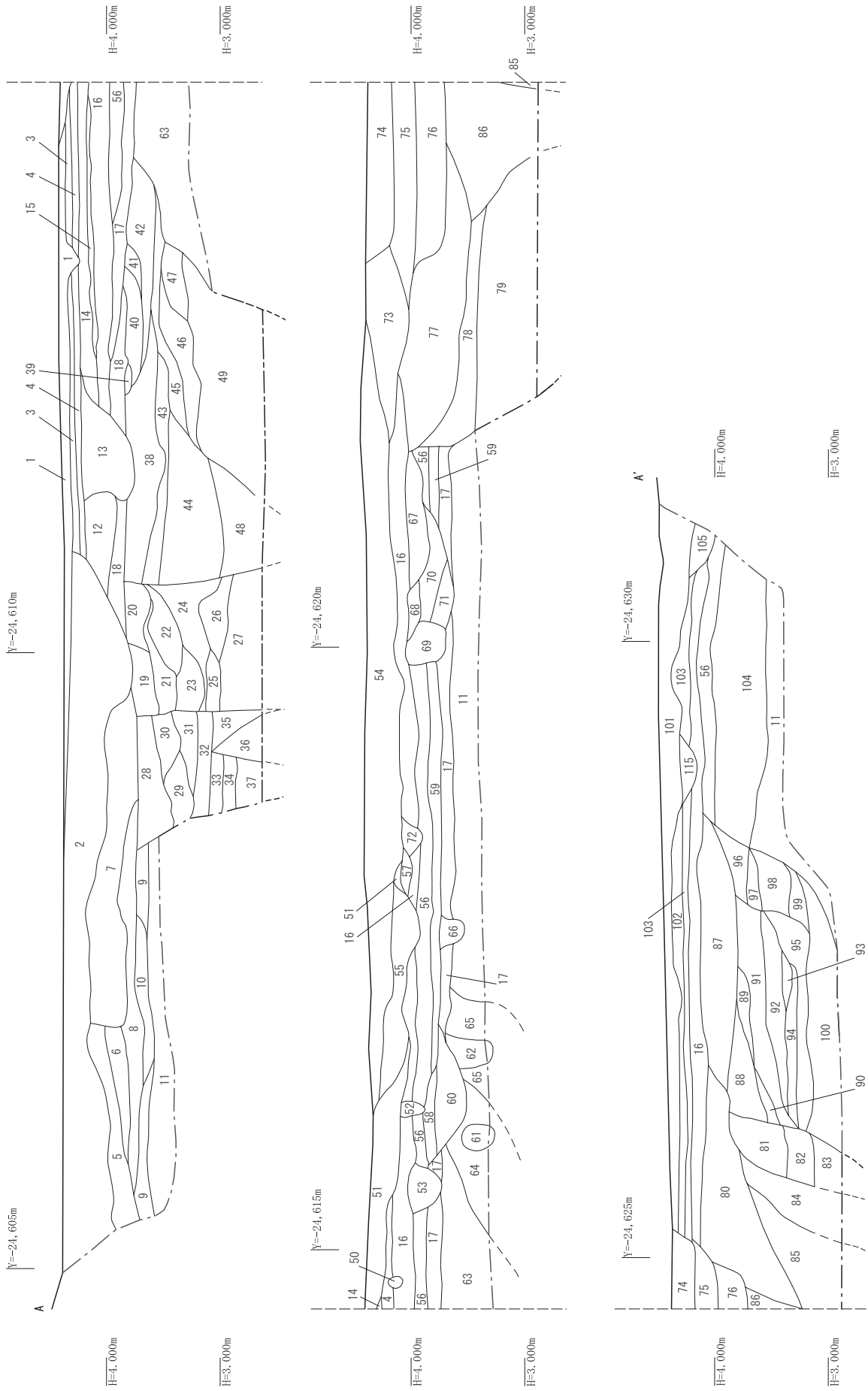


図40 4地点南壁土層断面図



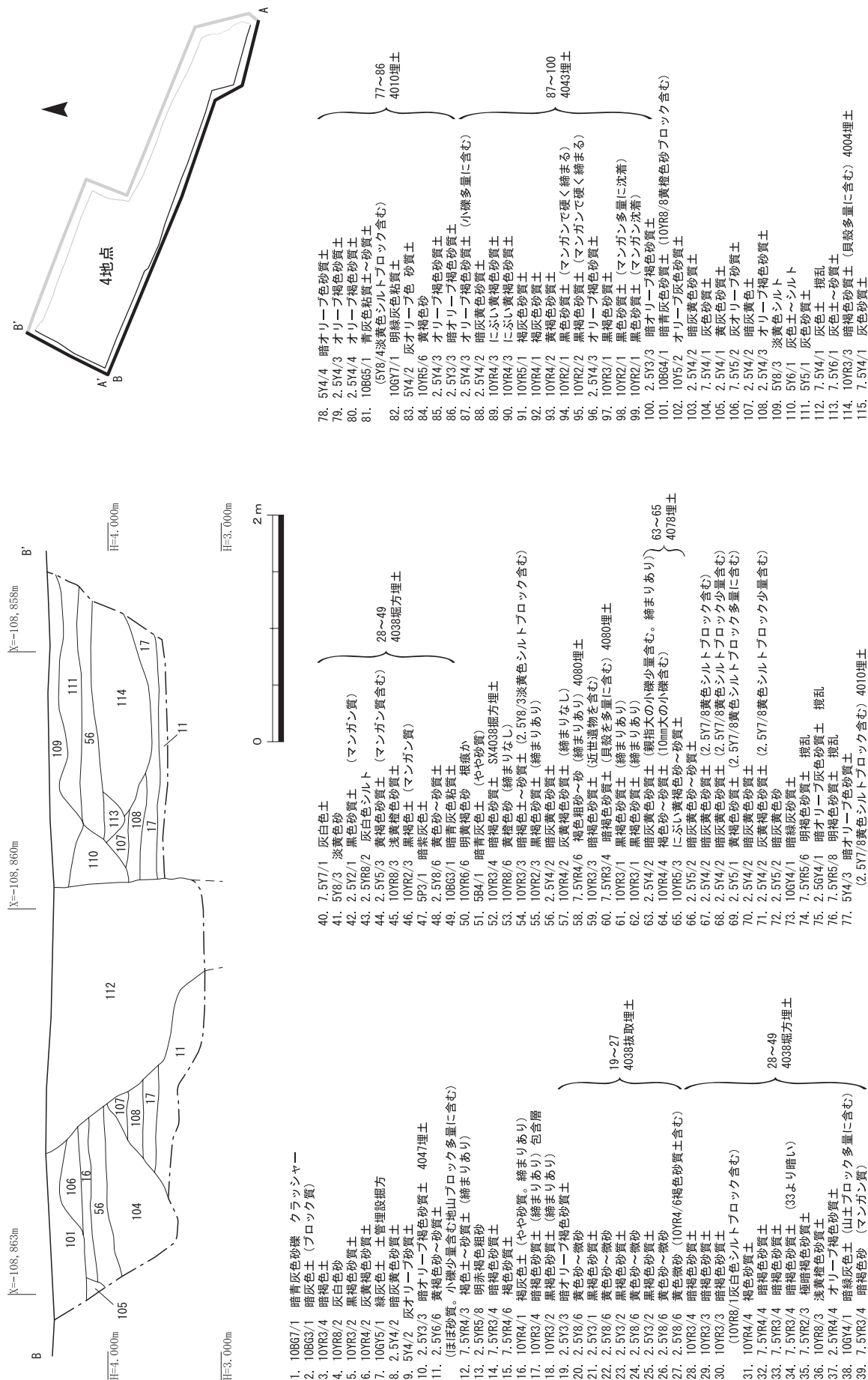


図41 4地点西壁土層断面図

## 第2節 検出遺構

4地点では先述したように地山の1層上面と地山直上の2面調査をおこなった。以下、上層遺構と下層遺構に分けて報告する。

### i. 上層遺構

上層遺構は、地山の1層上の面で検出した。これらに関しては、この面から掘削されているものや、この面より上層から掘削されているものがある。これらについては本来分けて報告するべきであろうが、調査区の壁で断面が確認できるもの以外はどの層から掘削されているのかの判断ができない。そのため、ここでは分けずに報告し、記述の中で明らかな遺構に関しては掘削面についても触れることにした。

なお、掘削の深い遺構に関しては、湧水による崩落があり、完掘出来ていないものもあった。

SB4081（図42・写真13-49～58） 調査区北西で検出した梁行9間×桁行2間以上の掘立柱建物である。柱間は3.6尺等間で、柱間隔は非常に狭い。また、各柱穴の中には重複して柱穴を検出しているものもあり、少なくとも1回の改築が行われたことが考えられる。また、柱穴の中には根石を設置したものもある。根石は西妻柱のP4042、南東隅柱のP4053、東妻柱のP4037、南東隅柱の1間西に位置するP4003で確認した。また、この建物と並ぶ柱穴である可能性があるものとしてP4008でも根石を確認している。これらの根石はすべて平坦面を持っているため、柱座として設置されたものであろう。また、P4003は根石の他、栗石も確認している。これらの柱穴は、先述した層上面で検出したものと地山直上で検出できたものがあった。これは、各柱穴の埋土が4層と判別が難しく、一部のものが4層上面で検出できたに過ぎなかったが、この面で検出できた点上層遺構として確認できた。なお、P4053については調査区の壁面観察により、4層の上面から掘削されたことが判明しており、一連の柱穴についても、掘削面は同様であると考えられる。

柱列は北で東に約19°振る方位を中軸とする。この方位は、4地点の調査区中軸と同様であり、いいかえれば、今回の区画整理の方位と同一のものである。これは、現状の地割が、少なくともこの掘立柱建物が構築された頃まで遡る可能性を示すものと考えられる。

SD4014（図42・写真14-59） SB4081の南で検出した幅0.30m、深さ0.19mの東西溝。SB4081の中央付近で途切れる。掘削面は4層上面からであり、調査区壁面では深さ約0.30mを測る。埋土はすべて砂が堆積しているが、流路痕跡に見られるような粗砂ではなく、微砂が主に堆積していた。

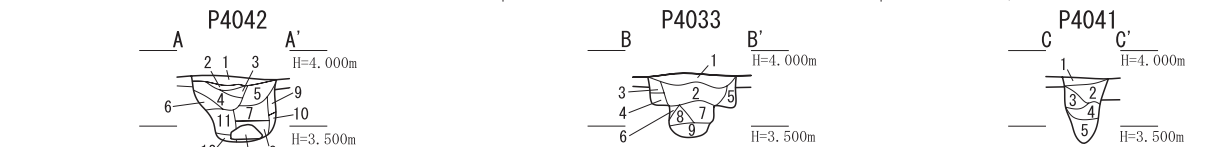
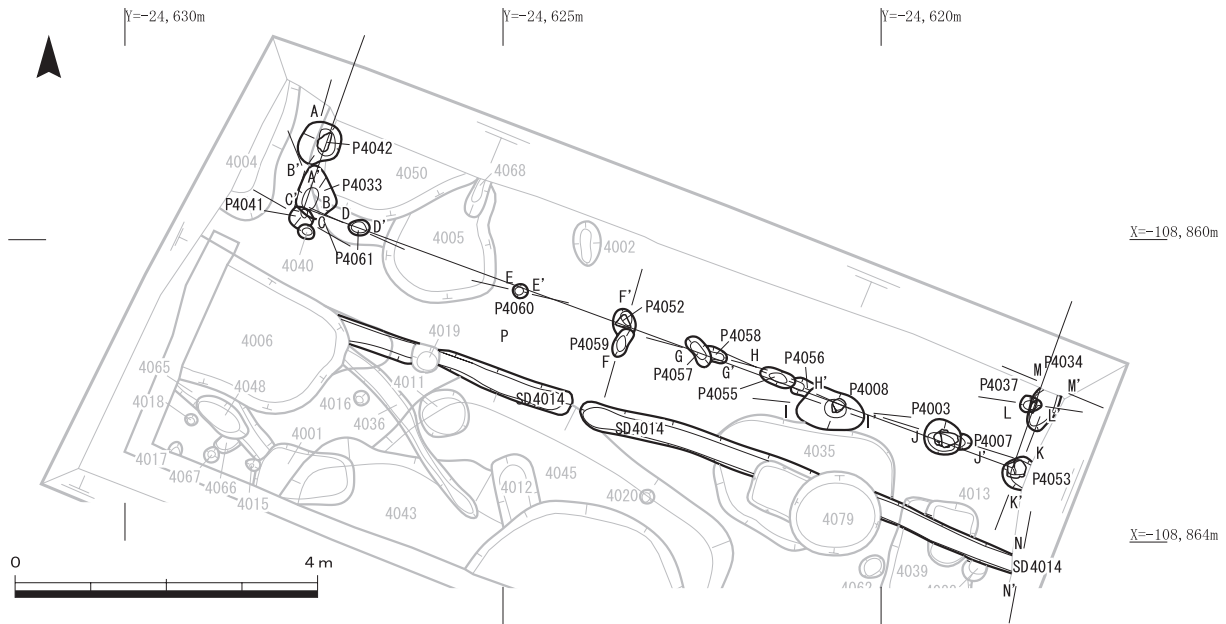
溝の中軸はSB4081とほぼ同じ方位であり、検出層位が同じことを考え合わせると、SB4081の雨落溝であった可能性がある。ただし、SB4081の柱間に対して軒先が側柱列から離れているため、SB4081のたつ土地との区画溝であった可能性も考えられる。

SD4036（図51・写真15-60） 調査区西側で検出した幅0.19～0.25mの斜行溝である。溝の中軸は、南で東に約35°振り、SD4036の南に位置するSD4065と並行する。ただし、別遺構との重複関係から、両者が存在した時期は異なる。埋土は砂の堆積であり、一時的な流路痕跡であったことも考えられる。

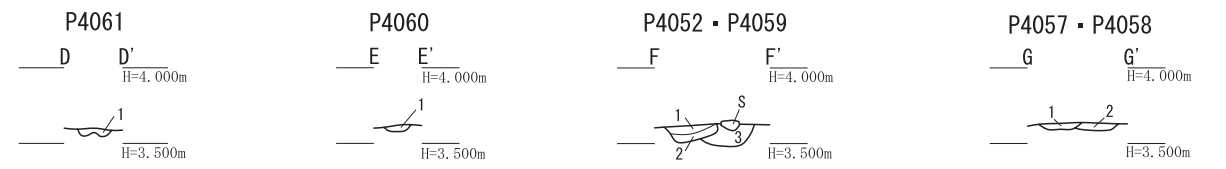
SX4004（図45・写真15-62～63） 調査区西北端で検出した、長軸幅1.97m以上、深さ0.50m以上の貝殻を廃棄したと考えられる土坑状の遺構。埋土の90%以上は貝殻で構成されていた。断面観察から、基本層序でいう3層上面から掘削されている状況を確認しており、近世以降であることは間違いない。

貝殻を同定したところ、ハマグリ、カキ類、アサリ・ヤマトシジミなどを検出した。また、その構成

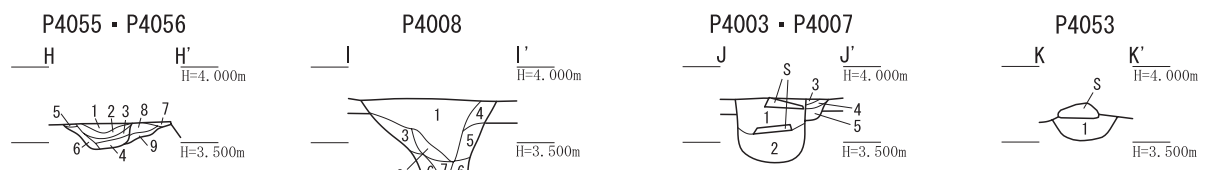
第4章 畑間遺跡の調査



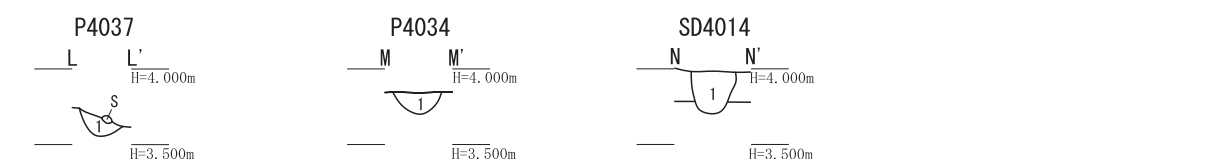
- 1. 7. 5YR5/6 明褐色砂質土 (10YR8/4浅黄褐色砂質土斑状に含む。Φ0.5cm程度の小礫含む)
  - 2. 10YR3/3 暗褐色砂質土
  - 3. 10YR3/4 暗褐色砂質土 (炭化物微量に含む。Φ0.7cm程度の小礫少量含む)
  - 4. 7. 5YR4/3 褐色砂 (10YR3/4暗褐色砂混じる。締まりあり)
  - 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
  - 6. 10YR4/4 褐色砂 (10YR6/8明黄褐色粘質土微量に含む。炭化物微量に含む)
  - 7. 10YR4/6 褐色砂
  - 8. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 (貝殻少量含む)
  - 9. 10YR3/3 暗褐色砂
  - 10. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 (10YR5/8黄褐色砂少量含む)
  - 11. 7. 5YR5/8 明褐色砂
  - 12. 10YR2/1 黒色砂質土 (10YR8/6黄褐色砂混じる)
- 1. 10YR4/4 褐色砂質土 (貝殻少量含む)
  - 2. 10YR4/4 褐色砂質土 (10YR6/6明黄褐色砂質土少量含む)
  - 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
  - 4. 10YR4/4 褐色砂質土
  - 5. 10YR3/4 暗褐色砂質土 (7. 5YR4/6褐色粘土少量含む)
  - 6. 10YR4/6 褐色砂質土 (10YR4/2灰黄褐色砂質土含む)
  - 7. 10YR4/6 褐色砂質土
  - 8. 10YR3/3 暗褐色砂質土
  - 9. 7. 5YR4/4 褐色砂質土 (10YR3/3暗褐色砂質土少量含む)
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
  - 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (1より暗い)
  - 3. 7. 5YR4/3 褐色砂質土
  - 4. 7. 5YR3/2 黒褐色砂質土
  - 5. 10YR3/1 黒褐色砂質土



- 1. 7. 5YR3/1 黒褐色砂質土 (締まりあり)
- 1. 7. 5YR3/1 黒褐色砂質土
- 1. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (締まりあり)
  - 2. 10YR2/1 黒色砂質土 (締まりあり)
  - 3. 10YR3/1 黒褐色砂質土
- 1. 10YR3/1 黒褐色土 (締まりなし)
  - 2. 10YR2/3 黒褐色砂質土



- 1. 10YR5/6 黄褐色砂 (10YR3/1黒褐色砂質土含む)
  - 2. 10YR3/1 黒褐色砂質土
  - 3. 10YR4/4 褐色砂
  - 4. 7. 5YR2/2 黒褐色砂質土
  - 5. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 (締まりなし)
  - 6. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (締まりあり)
  - 7. 10YR2/2 黒褐色砂質土
  - 8. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (10YR5/6黄褐色砂ふくむ)
  - 9. 10YR2/3 黒褐色砂質土
- 1. 10YR3/1 黒褐色土～砂質土 (10YR7/8黄褐色粘土ブロック入る)
  - 2. 10YR4/6 褐色砂質土
  - 3. 10YR4/4 褐色砂質土 (締まりあり)
  - 4. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (締まりあり)
  - 5. 10YR2/1 黒色砂質土 (締まりあり)
  - 6. 10YR2/1 黒色砂質土～土 (10YR7/8黄褐色砂混じる)
  - 7. 10YR4/4 褐色砂質土
- 1. 10YR4/1 褐灰色砂質土
  - 2. 10YR4/4 褐色砂～砂質土
  - 3. 2. 5Y5/6 黄褐色砂
  - 4. 2. 5Y4/6 オリーブ褐色砂質土
  - 5. 2. 5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
- 1~2 SK4003埋土  
3~5 P4007埋土



- 1. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (10YR8/8黄褐色粘土斑状に含む。Φ0.3~2cmの砂粒、小礫少量含む)
- 1. 7. 5Y4/4 褐色砂質土 (Φ0.5mm程度の砂粒少量含む)
- 1. 5YR8/4 淡褐色砂～粗砂



図42 SB4081・SD4014平面・断面図

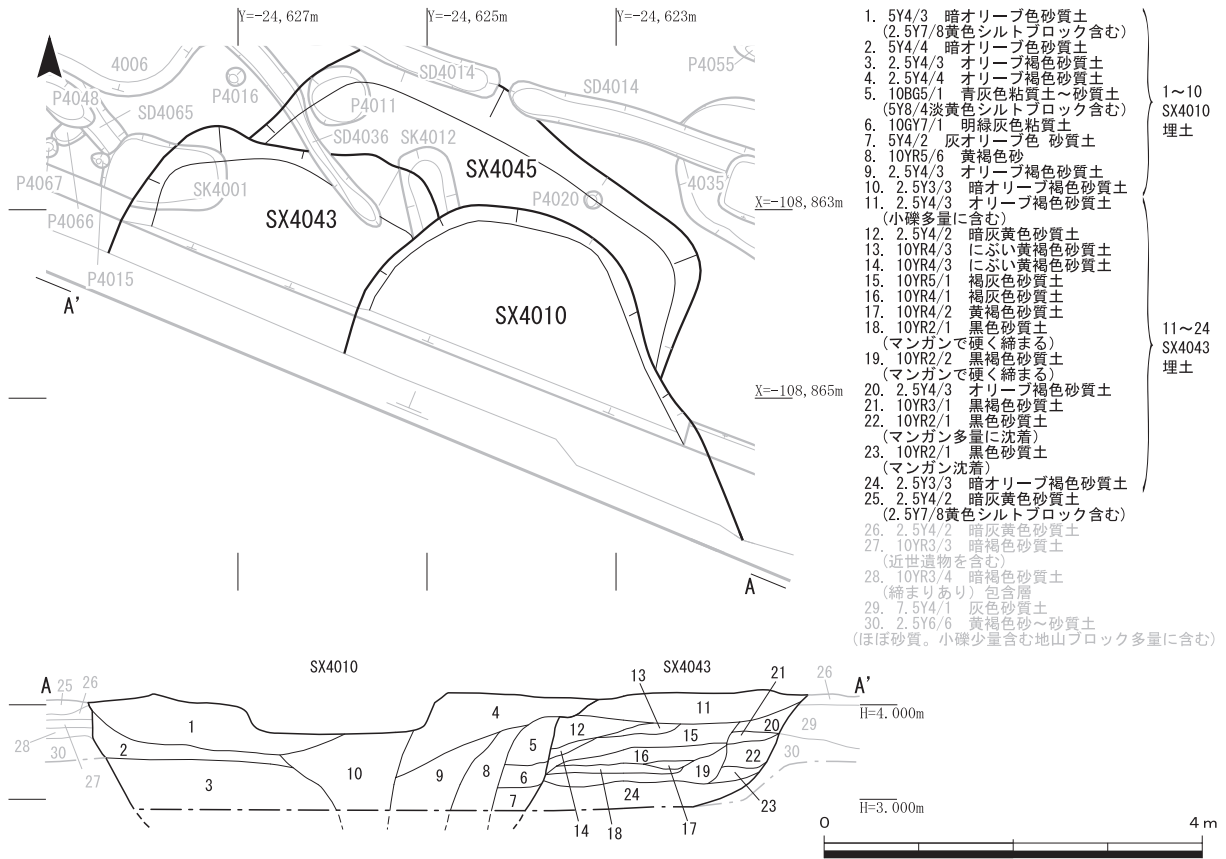


図43 SX4010・4043・4045平面・断面図

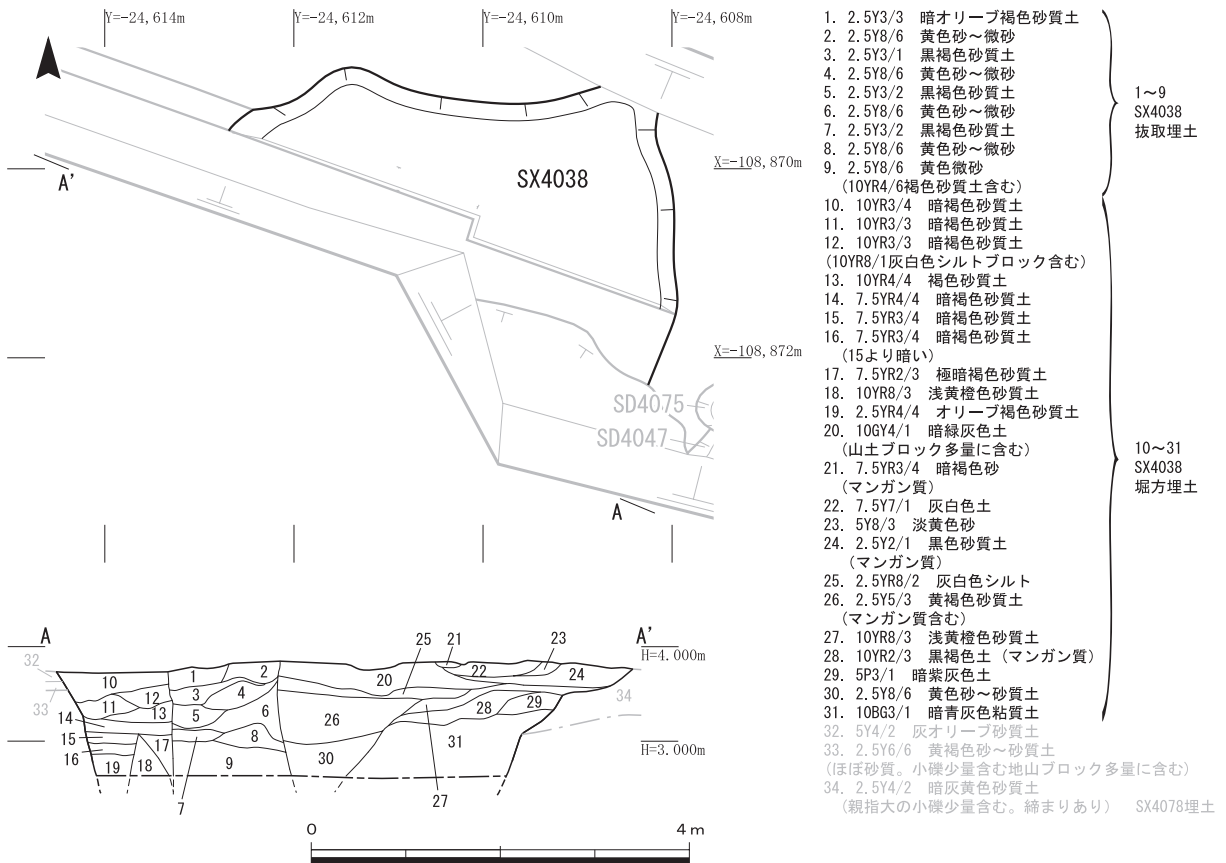


図44 SX4038平面・断面図

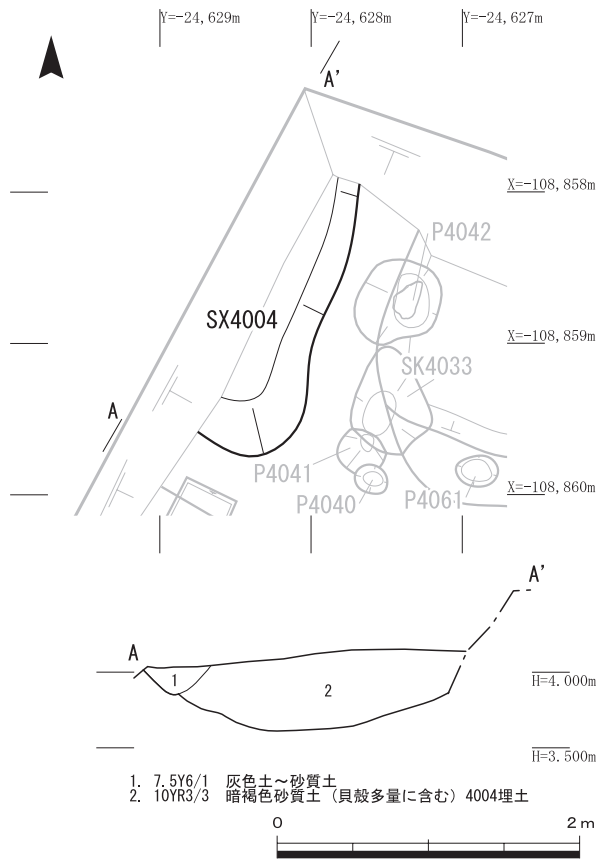


図45 SX4004平面・断面図

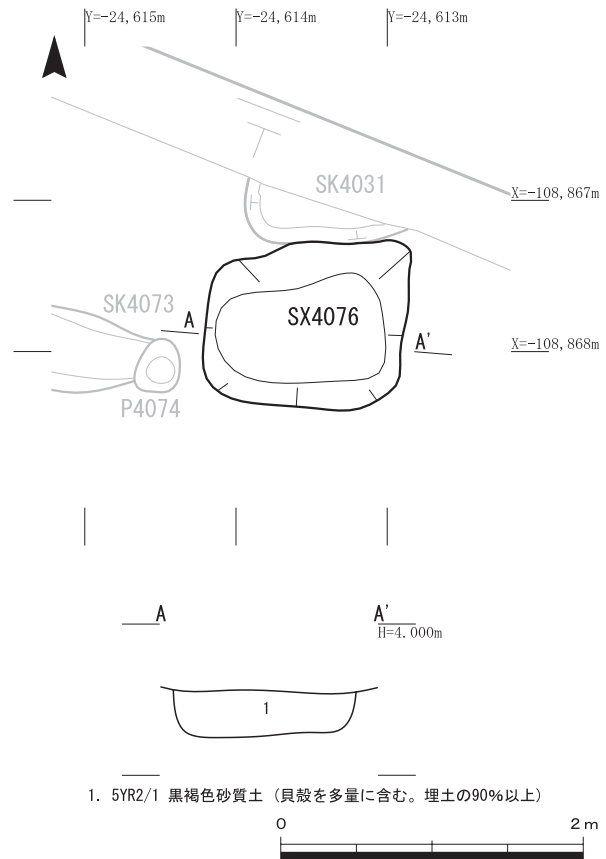


図46 SX4076平面・断面図

は、主に食用のものであることが判明した。土師質土器や山茶碗の小片が10点出土したが、いずれも、年代を特定できるものではなかった。

SX4076 (図46・写真15-64~66) 調査区中央付近で検出した貝殻を廃棄したと考えられる土坑状の遺構。平面形は隅丸方形で幅約1.30m、深さ0.38m。検出層は包含層上面であるが、SX4004同様にさらに上層から掘り込まれた可能性は残る。貝殻の組成はSX4004と大きく変わらない。

SX4080 (写真15-67) SX4076の南方で検出した貝殻を多量に含む幅1.10m、深さ約0.20mの土坑状の遺構。南端は調査区南壁よりさらに南に広がる。調査区南壁の観察から、SX4004同様に3層から掘削されており、SX4004と同時期に比定できるものと考えられる。

SX4010・4043・4045 (図43・写真16-68) SX4010は調査区南西寄りの南壁際で検出した長軸4.75m以上、短軸2.20m以上深さ1.24m以上の大型の遺構。掘削が滞水層までおよんでおり、井戸が想定できる。断面観察から、掘削過程で崩落があったことが確認できており、今回の発掘調査でも掘削途中で調査区壁面が崩落したため、完掘できなかった。そのため、この遺構は当地に井戸を掘削しようとしたものの、地盤が緩く、崩落したために井戸として機能しなかったものと推定する。また、SX4043・4045も同様に井戸を掘削する目的で掘削したが、崩落により機能しなかったものと考えられる。この3つの遺構の重複関係はSX4010が最も新しく、4045が最も古い、ほとんど時期差はないものと考えられる。出土遺物はSX4010や4043から常滑焼の赤物甕が出土しており、掘削年代は近世以降に比定できる。

SX4038 (図44・写真16-69) 調査区南東部で検出した長軸1.80m、深さ1.20m以上の大型遺構。SX4010同様に井戸である可能性がある。なお、遺構が調査区南壁付近で検出したことや攪乱(ガス管



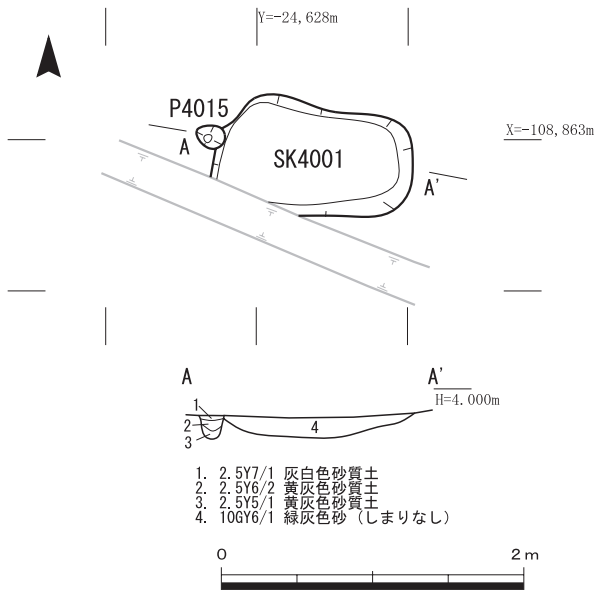


図47 SK4001平面・断面図

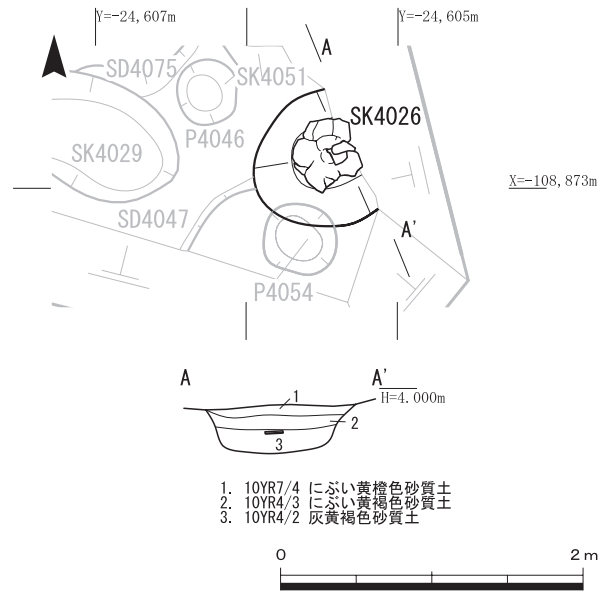


図48 SK4026平面・断面図

埋設溝)などの影響で完掘することはできなかったが、断面観察では抜取状の掘り込みを確認している。したがって、SX4038は井戸であった可能性は高い。出土遺物は常滑焼の赤物甕が出土しており、近世以降に掘削された井戸と考えられる。

SK4001 (図47・写真16-70~71) 調査区東南部で検出した長軸1.29m、短軸0.70m、深さ0.19mの断面皿型の土坑。重複関係では周囲の遺構の中では最も新しかったが、常滑焼甕や山茶碗を主体とした土器の小片36点が出土しており、廃棄土坑と考えられる。土師器、須恵器、山茶碗、常滑焼甕などが出土したが、いずれも小片であり、年代特定は難しい。

SK4026 (図48・写真16-72~73) 調査区東端で検出した、幅0.90m、深さ0.33mの甕埋設土坑である。甕は底部のみ残存しており、上方は後世の削平により破壊されていた。甕は常滑焼の赤物甕で、底部に付着した沈殿物の痕跡から、いわゆる「肥甕」として利用されたものと考えられる。通常、「肥甕」は畑の脇に設置されるものであるが、今回の調査では、耕作地の痕跡が検出されていないため疑問は残る。あるいは調査地東側に耕作地が存在した可能性も指摘できる。

## ii 下層遺構

SD4075 (図49・写真16-74) 調査区東方で検出した幅1.68m、深さ0.96m以上の東西溝。掘削深度が滞水層に達しており、崩落したため、完掘はできなかった。しかし、断面の形状がV字形であったと考えられることから、中世の集落や屋敷地によく見られる環濠のような性格であった可能性がある。出土遺物の中に天目茶碗が確認できた。小片のため時期判別は難しいが、古瀬戸の段階のものであり、中世以降の遺構であることは間違いない。

SD4077 (図50・写真16-75) 調査区東方、SD4075の北肩付近で検出した溝状の遺構。SD4075、SX4078の断割調査時に断面で確認した。南肩はSD4075に破壊され、北肩はSX4078に破壊されている。このことから、当調査区で検出した遺構の中では最も古い遺構。平面検出では調査区東壁まで溝状に延びている状況を確認した。ただし、埋土から遺物の出土がなかったため年代などの詳細については不明。

SX4078 (図50・写真75) 調査区中央付近で検出した大型の溝状遺構。堆積土は地山と区別が付きに

第4章 畑間遺跡の調査

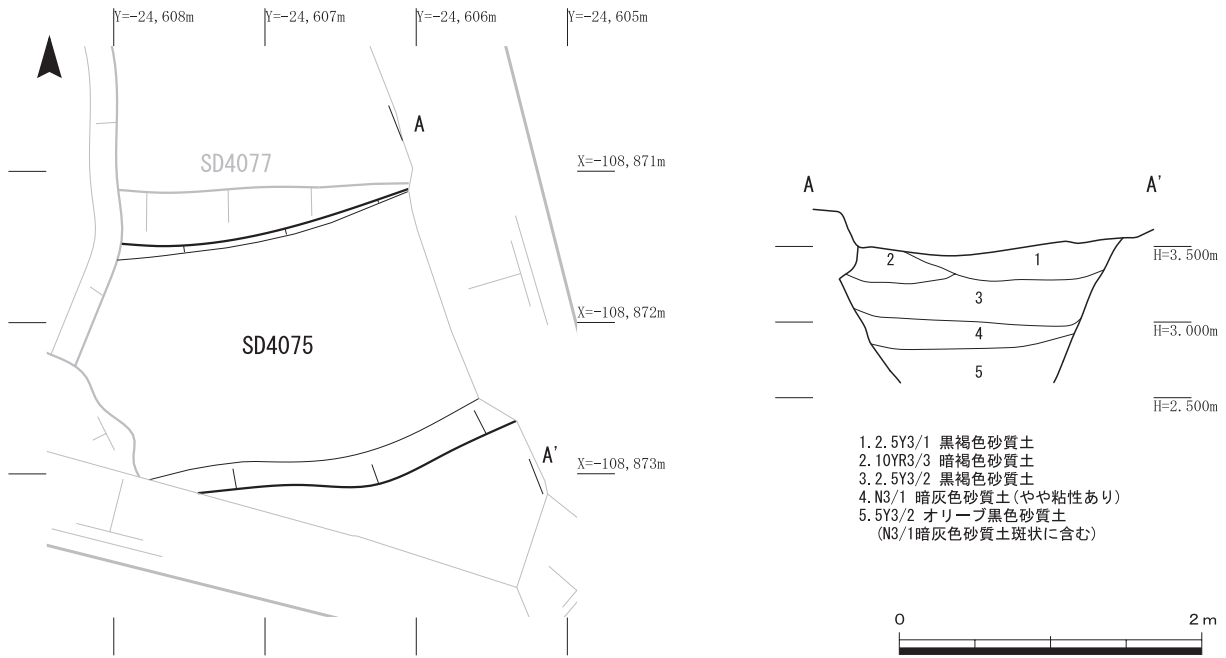


図49 SD4075平面・断面図

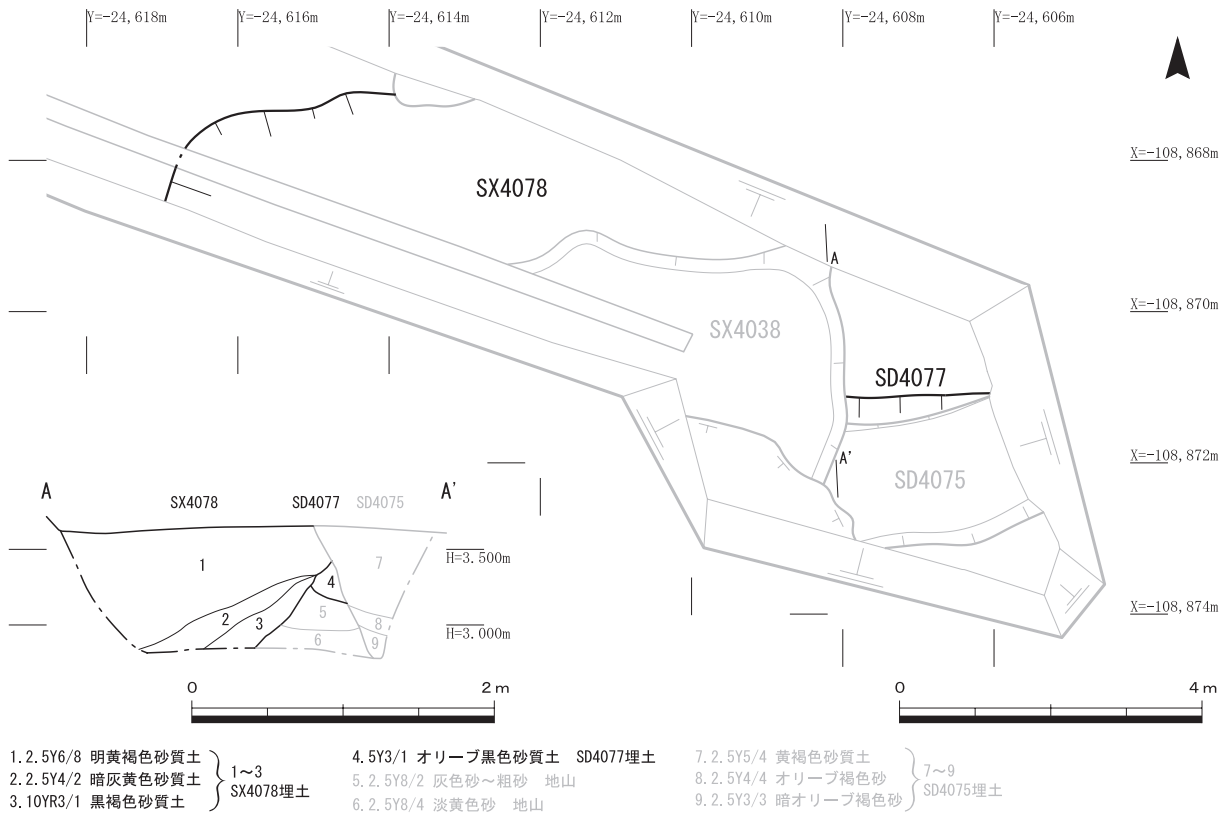


図50 SD4077・SX4078平面・断面図

くいが、その中から数点の常滑焼甕などが出土しており、中世以降の堆積であることがわかる。断面調査所見から、南側が傾斜している状況から溝状であるといえる。埋土が人為的なものか自然堆積であるのかは、調査面積が少ないため判別がつかないが、流水痕跡が確認できなかったことや、地山との見分けがつきにくい点で、遺構ではない可能性も指摘しておく。

N=-24, 610m

N=-24, 615m

N=-24, 620m

N=-24, 625m

N=-24, 630m

X=-108, 860m

X=-108, 865m

X=-108, 870m

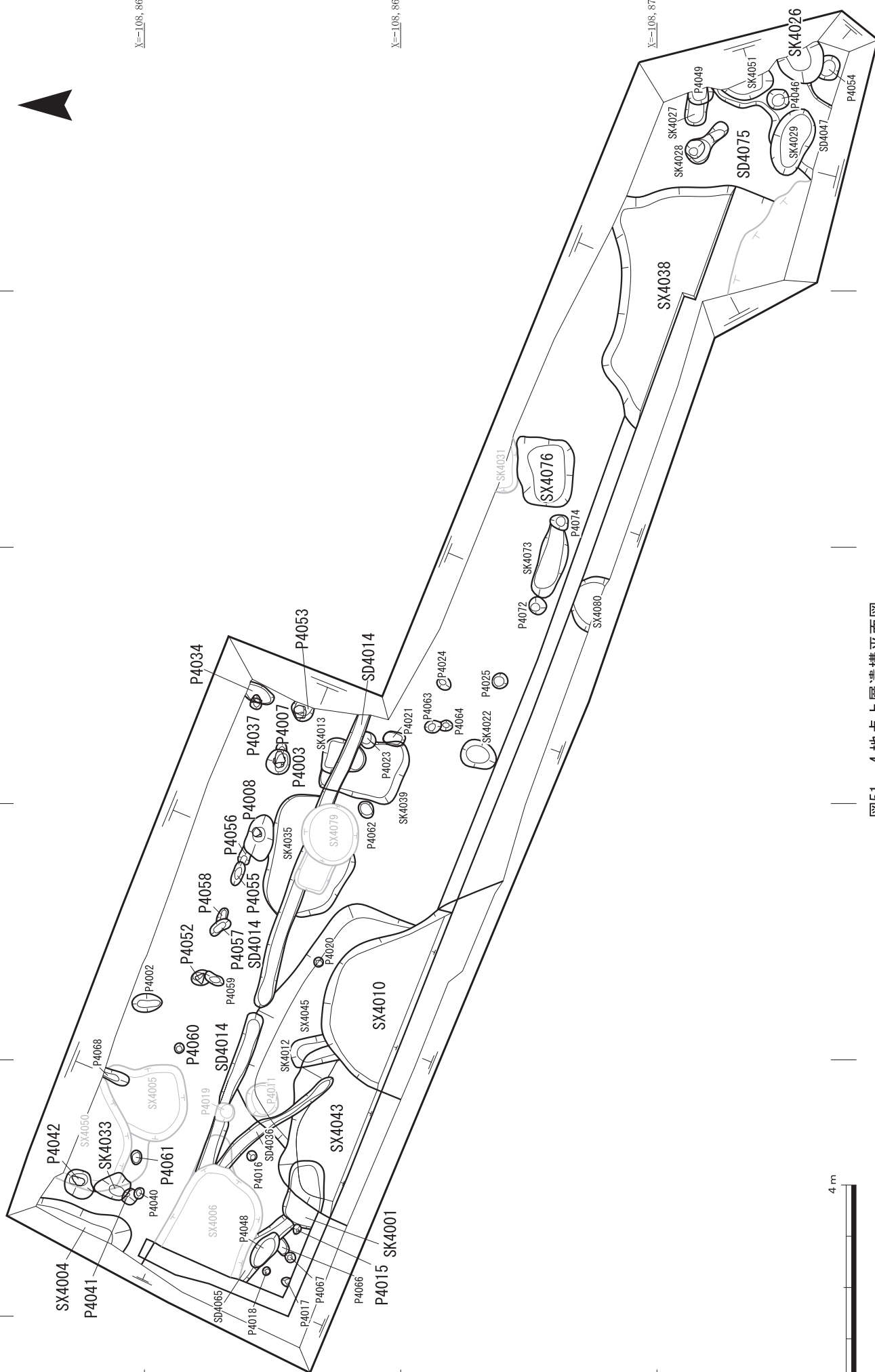


图51 4 地点上層遺構平面图

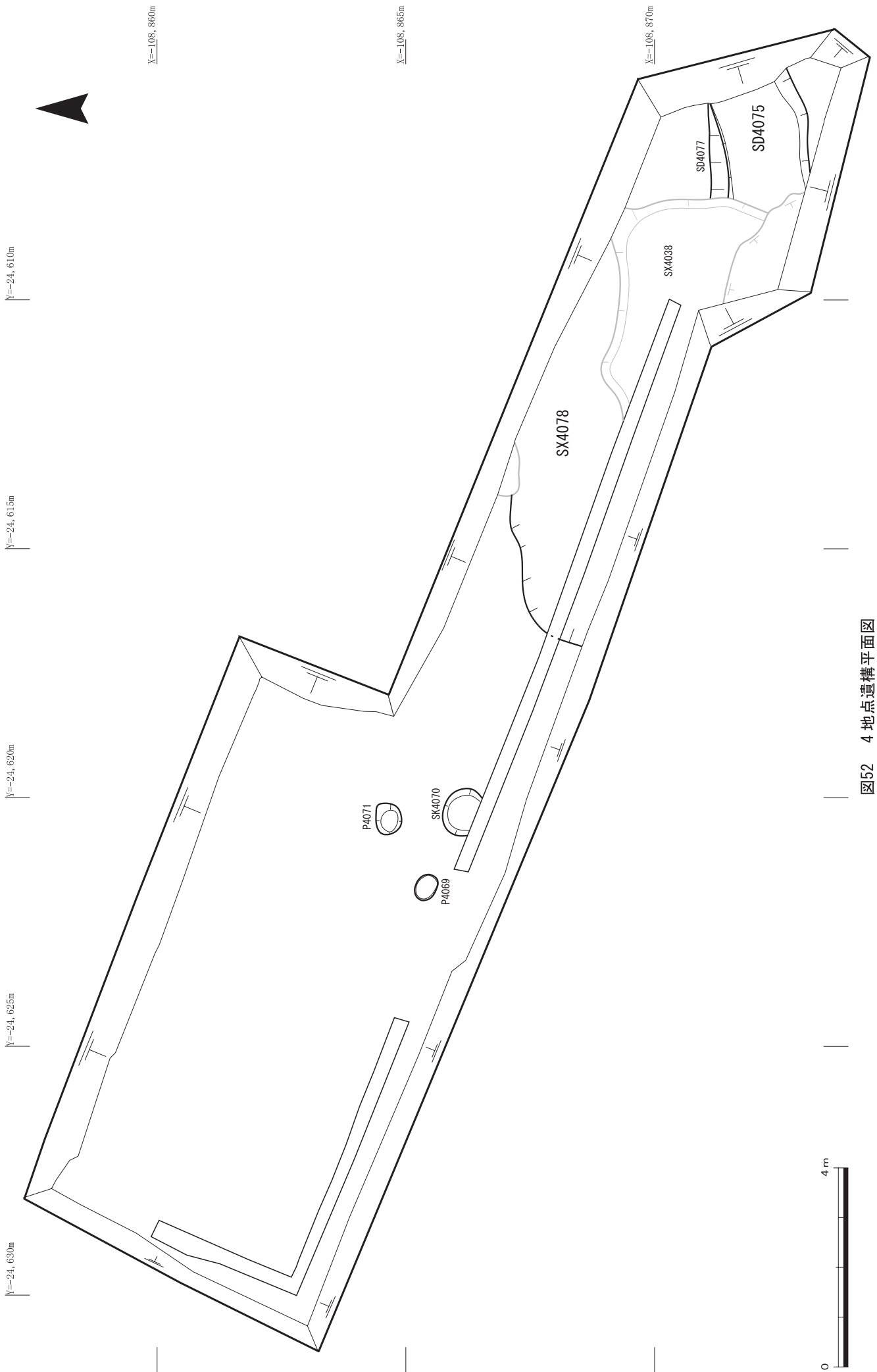


图52 4 地点遺構平面図

## 第3節 4地点出土遺物

4地点では、上層遺構と下層遺構に分けて調査をおこなった。そのため、出土遺物に関しても、本来なら上・下層に分けて報告するべきであろう。しかし、下層遺構検出前に掘削した包含層出土遺物が少量であったことや、下層遺構の数が少ないこと、さらに、下層遺構から出土した遺物が少ないため、遺構単位での報告は難しい。それゆえ、3地点同様に調査区全域から出土した遺物をまとめて報告する。以下、種別ごとに記載する。

## i. 土器類

破片総数で1039点の土器類が出土している。この点数は、調査面積からしてかなり少ない数字である。これは、後世の削平が極めて顕著な場所であったことに起因する。また、後世の削平が多かったゆえに、破片資料が多く、分類も困難であった。こうした中で、検討できうる資料を軸に図化作業をおこない掲載したが、小片資料の中には実測できないものもあり、可能なかぎり写真で掲載した。以下、分類ごとに報告する。

山茶碗（図53-1～14・写真29-74・75） 340点の山茶碗が出土した。器種の内訳は碗、皿、鉢を確認している。このうち大多数が碗であったが、親指の爪程度の小片がかなり多く、器種ごとの正確な点数は把握できない。

図53に掲載したものは比較的遺存状況がよく年代比定が可能なものを抜粋した。14を除き、いずれも尾張型に属するものである。年代比定が可能な資料をみると、高台を丁寧についた古手の3～5型式が多い傾向がある。しかし、あくまで年代比定が可能なもので比較した傾向であるため、遺跡の検討に直接的に繋がるか否かは、慎重を要する。また、数量は少ないが、新手のものでは藤澤編年の11型式までを確認しており、中間期の出土量は不明瞭ながら、尾張型の出現期～終焉期までのものが出土している状況であった。

この他、詳細な産地特定は難しいが、340点中334点は尾張型と考えられるものであり、6点のみ東濃型を確認している。14は東濃型の碗であり、高台がなくなり、底部と体部の屈曲部が丸くなるなど、山茶碗終焉期の特徴を備える。15世紀中葉に比定。

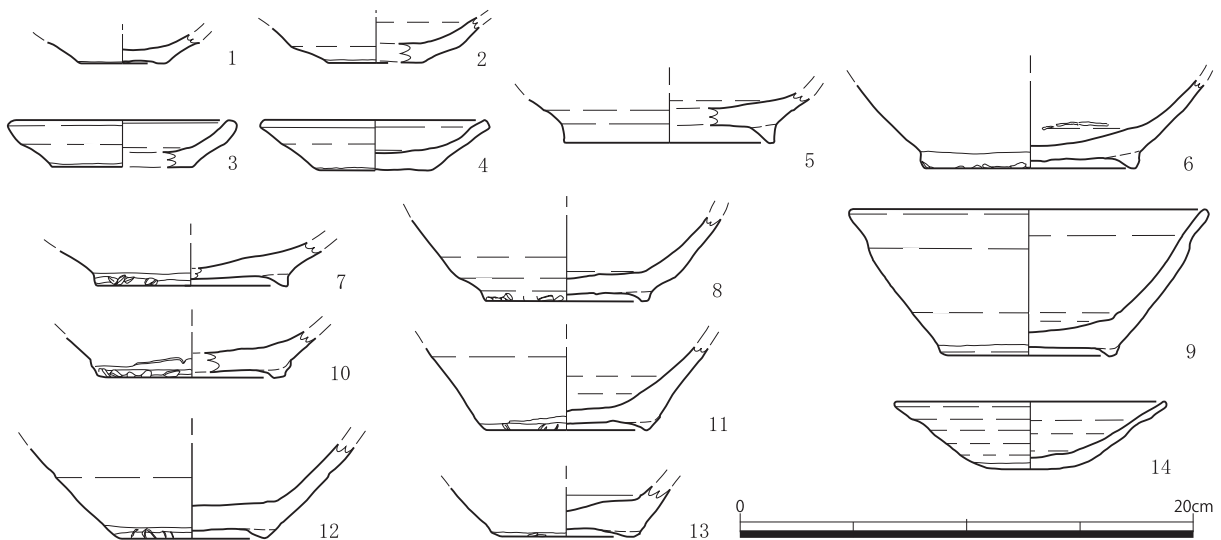


図53 4地点出土山茶碗



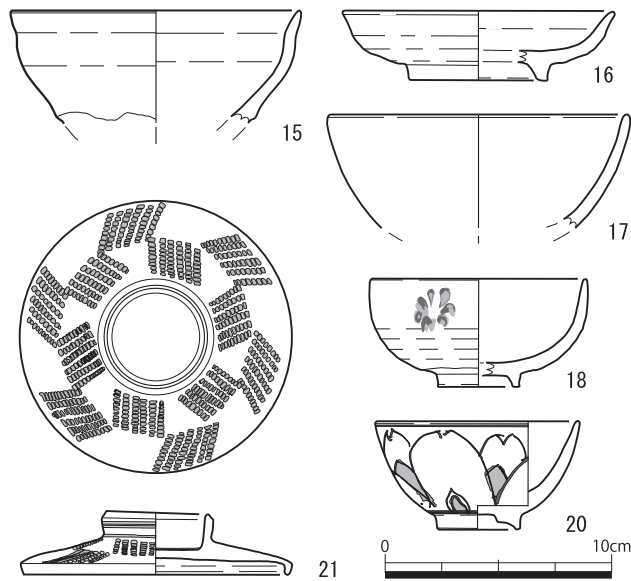


図54 4地点出土陶磁器類

天目茶碗（図54-15・写真29-77） 破片総数で16点出土。遺存状態のよい個体はなく、いずれも部分的な小片であった。

灰釉小皿（図54-16・写真29-78） 内面および外面の高台周辺まで灰釉を施釉した小皿である。丸皿に比べ、見込みがやや高い特徴がある。貼付高台。1点出土。

染付丸碗（図54-18・写真29-79） 陶胎染付とよばれる陶器の染付丸碗である。小片1点の出土であるが、体部外面に花卉紋を付絵している。削出し高台で、径が小さい特徴がある。

SK4038より1点出土。

灰釉丸碗（図54-17・写真29-80） 図18より

ひとまわり大きい碗である。破片であるため付絵こそ確認できなが、18と釉薬などの共通点があり、陶胎染付である可能性もある。1点出土。

染付蓮華紋小碗（図-20・写真30-82） 外面に蓮弁を付絵した染付小碗である。口縁部に圈線が一条する。内面は無文。SK4028から1点出土。

染付碗蓋（図54-21・写真30-81） 外面に縄目状の紋様を付絵した碗蓋である。摘部は円形の突帯で内面に一条、外面に二条の圈線が巡る。摘部上端は施釉されておらず、露胎である。SK4029より1点出土。

鉛釉乗燭（写真30-83） 鉛釉を施文した仏具の脚部。瀬戸美濃生産の乗燭の中に類似した脚のものがある。しかし、上部が残存していないため、全体の形状は不明。あるいは花瓶の可能性も考えられる。1点出土。

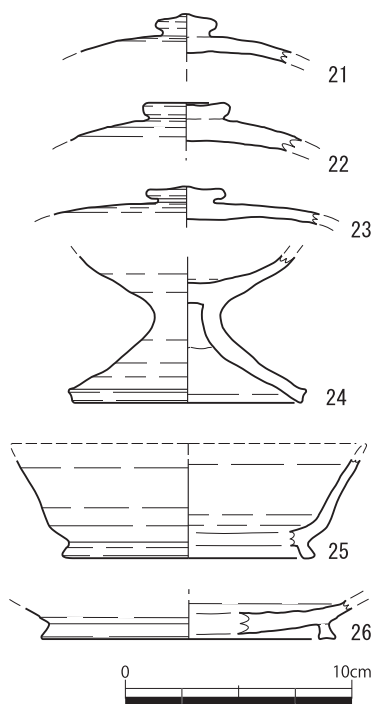


図55 4地点出土須恵器

須恵器（図55-21～26・写真30-74） 器種が確認できるものでは蓋坏、高坏、坏が出土している。図55に掲載したものは、いずれも飛鳥時代末～奈良時代前葉に比定できるものであり、出土点数が少ないながらも年代にまとまりがある。また、図55掲載以外に平安時代前期に比定できる蓋坏なども少量出土している。

瓦質香炉（写真30-84） 体部外面に唐草文を毛描きした瓦質製の香炉である。周辺遺跡での類例はみつからなかったが、瓦質製品の出土は周辺部では珍しいため報告した。小片1点出土。

## ii. 瓦類

瓦類は、丸瓦、平瓦、隅切り平瓦、鳥衾が出土している。丸・平瓦は中世・近世のものが出土している。近世のものに関しては江戸時代後期に比定できるものであり、近接地に常連寺というお寺があるため、この寺院所要の瓦である可能性が指摘できる。隅切り平瓦は、広端部左隅を方形に切り欠いたもので、先述した平

瓦を加工したもの。なお、鳥衾については、尻部の一部の小片であるが、これも江戸時代後期に比定できるものである（写真89）。

中世の平瓦はハナレ砂が多量に付着したもので、アーチがなく扁平な形状のもの。2点出土。また、凸面に縄叩き痕跡が残る丸瓦が1点出土したが、中世の平瓦と共伴するものと考えられる。

iii. 土製品

土錘（図56-27～30・写真30-90） 土師質焼成の管状土錘。包含層などから6点出土。

陶錘（図56-31～41・写真30-91） 陶製の管状錘である。施釉はなく、露胎のままである。土師質の製品に比べ、若干比重が高い特徴がある。表土より9点出土した。

ミニチュア土師皿（図56-43～44・写真30-88） 手捏ねのミニチュア土師皿が2点出土している。2点とも包含層より出土。

瓦質紡錘車（図56-45・写真30-87） 瓦質焼成の紡錘車と考えられる土製品である。上面は半球状、下面は平坦で、中心部で2.9cmの厚みがあり、中心軸に直径1cmの円形孔を入れている。

瓦質温石（図56-42・写真30-85・86） 瓦質焼成の土製品である。破片資料であるため、全体形は不明。中軸部に円形に穴をあけており、滑石や蛇紋岩などを加工した温石に類似した形状である。また、表面に2次的焼成を受けている点でも、温石（懐炉）として使用した可能性はある。なお、近代期には瓦質の行火（あんか）が存在しており、暖房具として瓦質製品が利用されている点に注目できる。

製作年代は類例がみつからなかったため不明だが、出土したのが攪乱からであり、行火同様に近代期に属する可能性はある。

iv. 金属製品

鉄釘（図56-46～48・写真30-92） 鉄釘が3本出土している。丸釘と角釘が出土しており、46は丸釘。他は角釘である。丸釘は近代以降のものと考えられる。角釘については2本とも上位部が欠失しており、全体形は不明。

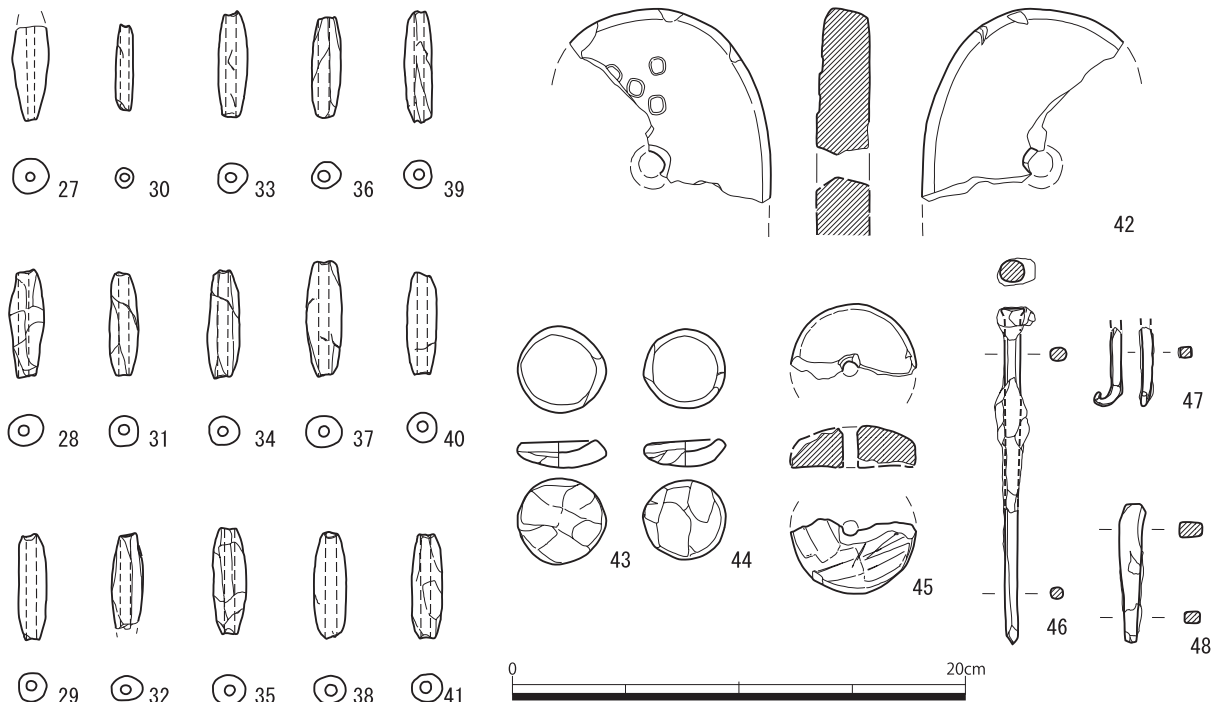


図56 4地点出土土製品・金属製品

## 第5章 郷中遺跡・畑間遺跡の自然科学分析

はじめに

今回の分析調査では、愛知県東海市に所在する郷中遺跡の17～18世紀の溝と、畑間遺跡の17～18世紀の土坑を対象として、出土骨貝類の同定および溝充填物の微細物分析による微小な骨貝類の抽出同定を実施し、遺構内廃棄物の種類に関する情報を得る。

### 第1節 郷中遺跡

#### i. 試料

試料は、17～18世紀の溝SD1002において集中して出土した貝類、発掘段階でピックアップされた骨類とその周辺土壌である。

#### ii. 分析方法

##### A. 骨貝類同定

土壌試料を肉眼で観察し、骨貝類を抽出する。抽出した骨貝類は、肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。また、一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合・復元する。なお、貝類の生態性等については、奥谷編著（2000）を参考とする。

##### B. 微細物分析

微細物分析は、カメ？土壌を肉眼で観察し、骨片が確認されない部分より採取した200cc（389.88g）を対象とする。貝類集中部の土壌は、貝類抽出のための水洗後、粒径4mmの篩を通り抜けた部分より採取した200cc（366.78g）を対象とし、さらに、水洗時に浮いた植物片の一部を概査し、栽培種の種実や新たに確認される分類群を抽出対象とする。

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、骨貝類や種実、花、葉などの大型植物遺体、木材、炭化材（主に径4mm以上）、昆虫類などの遺物をピンセットで抽出する。

抽出した骨貝類は同定対象とし、詳細を別項に示す。大型植物遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、個数を数えて一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間はハイフォンで結んで表示する。炭化材は70°C48時間乾燥後の重量（g）を示す。なお、木材、炭化材、蘚類、昆虫類の同定は未実施である。分析後は、抽出物を種類毎に容器に入れて保管する。大型植物遺体は、約70%のエタノール溶液を入れて保存する。

#### iii. 結果

##### A. 骨貝類同定

微細物分析で検出された骨貝類もここで報告する。検出された種類は、腹足綱19種類（ヒメコザラ・キサゴ・スガイ・ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・カワアイ・タマキビ・ツメタガイ・カゴメガイ・アカニシ・アッキガイ科・ムシロガイ科・オオタニシ・ヒラマキガイ科・オカチョウジガイ・パツラマイマイ・ヒメベッコウマイマイ）、二枚貝綱7種類（サルボウガイ・イガイ科・マガキ・シオフキ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリ）、甲殻綱1種類（フジツボ目）、魚類2種類（ウナギ・

カレイ科)、両生綱1種類(カエル目)、爬虫綱1種類(ニホンスッポン)である(表1)。また、同定結果を表2、サルボウガイとアサリの殻長分布を図1に示す。以下、種類毎に結果を示す。

- ・ヒメコザラ(シボリガイ型)  
1点検出される。ほぼ完存する。
- ・キサゴ  
1点検出される。破損殻である。
- ・スガイ  
3点検出される。ほぼ完存する。
- ・ウミニナ  
ほぼ完存する殻が89点、破片を69点検出。
- ・ホソウミニナ  
ほぼ完存する殻が9点、破片を16点検出。
- ・イボウミニナ  
ほぼ完存する殻が7点、破片を13点検出。
- ・ウミニナ科  
ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナの区別ができない殻片である。46点検出。
- ・ヘナタリ  
ほぼ完存する殻が5点、破片を12点検出。
- ・カワアイ  
ほぼ完存する殻が7点、破片を11点検出。
- ・タマキビ  
1点検出される。ほぼ完存する。
- ・ツメタガイ  
1点検出される。破片である。灰黒色を呈しており、被熱の痕跡が認められる。
- ・カゴメガイ  
1点検出される。ほぼ完存する。
- ・アカニシ  
1点検出。体層部が破損し、穿孔が認められる。
- ・アッキガイ科  
破片が1点検出される。
- ・ムシロガイ科  
破片が1点検出される。
- ・オオタニシ

表1. 郷中遺跡検出動物分類群の一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
カサガイ目	Order Patellogastropoda
エンスイカサガイ亜目	Suborder Acmαιοidea
ユキノカサガイ科	Family Lottiidae
ヒメコザラ(シボリガイ型)	Patelloida pygmaea
古腹足目	Order Vetigastropoda
ニシキウズガイ科	Family Trochidae
キサゴ	Umbonium costatum
サザエ科	Family Turbinidae
スガイ	Turbo (Lunella) cornatus coreensis
盤足目	Order Discopoda
ウミニナ科	Family Batillariidae
ウミニナ	Batillaria multiformis
ホソウミニナ	Batillaria cumingii
イボウミニナ	Batillaria zonalis
フトヘナタリ科	Family Potamididae
ヘナタリ	Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata
カワアイ	Cerithidea (Cerithideopsis) djadjaricensis
タマキビ科	Family Littorinidae
タマキビ	Littorina (Littorina) brevicula
タマガイ科	Family Naticidae
ツメタガイ	Glossaulax didyma
新腹足目	Order Neogastropoda
アッキガイ科	Family Muricidae
カゴメガイ亜科	Subfamily Ergalataxinae
カゴメガイ	Bedeve birileffi
レイシガイ亜科	Subfamily Rapaninae
アカニシ	Rapana venosa
ムシロガイ科	Family Nassariidae
原始紐舌目	Order Architaenioglossa
タニシ科	Family Vivipariidae
オオタニシ	Cipangopaludina japonica
有肺亜綱	Subclass Pulmonata
基眼目	Order Basommatophora
ヒラマキガイ科	Family Planorbidae
柄眼目	Order Sylommatophora
オカチョウジガイ科	Family Subulidae
オカチョウジガイ	Allopeas olaculinum kyotoense
ナタネガイ科	Family Punctidae
バツラマイマイ	Discus pauper
ベッコウマイマイ科	Family Helicarionidae
ヒメベッコウマイマイ	Discoconulus sinapium
二枚貝綱	Class Bivalvia
翼形亜綱	Subclass Pteriomophia
フネガイ目	Order Arcoida
フネガイ科	Family Arcoidae
サルボウガイ	Scapharca kagoshimensis
イガイ目	Order Mytiloidea
イガイ科	Family Mytilidae
カキ目	Order Ostreoida
カキ亜目	Suborder Ostreina
イタボガキ科	Family Ostreidae
マガキ	Crassostrea gigas
異歯亜綱	Order Heterodonta
マルスダレガイ目	Order Veneroida
バカガイ科	Family Mactridae
シオフキ	Mactra veneriformis
シジミ科	Family Corbiculidae
ヤマトシジミ	Corbicula japonica
マルスダレガイ科	Family Veneridae
アサリ	Ruditapes philippinarum
ハマグリ	Meretrix lusoria
節足動物門	Phylum Arthropods
甲殻綱	Class Crustacea
アゴアシ亜綱(顎脚亜綱)	Suborder Maxillopoda
フジツボ目(蔓脚目)	Order Cirripedia
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthys
条鰭亜綱	Subclass Actinopterygii
ウナギ目	Order Anguilliformes
ウナギ亜目	Suborder Anguilloidei
ウナギ科	Family Anguillidae
ウナギ	Anguilla japonica
カレイ目	Order Pleuronectiformes
カレイ科	Family Pleuronectidae
両生綱	Class Amphibia
カエル目(無尾目)	Order Anura
爬虫綱	Class Reptilia
カメ目	Order Testudines
潜頸亜目	Suborder Cryptodira
スッポン科	Family Trionychidae
スッポン亜科	Subfamily Trionychinae
ニホンスッポン	Pelodiscus sinensis

第5章 郷中遺跡・畑間遺跡の自然科学分析

表2. 郷中遺跡の骨貝類同定結果(1)

試料名	種類	部位	左	右	部分	数量	被熱	備考		
GN10-1 1073 7C15t SD1002 (カメ類)	ニホンスッポン1	頭頂骨	左		破損	1				
				右	破損	1				
		上後頭骨			破損	1				
		上顎骨	左		破損	1				
				右		破損	1			
		下顎骨				ほぼ完形	1			
		頭蓋骨				破片	2			
		椎骨				破損	1			
		頂骨板				破損	1			
		第1肋骨板	左			ほぼ完形	1			
		第2肋骨板	左			ほぼ完形	1			
		第3肋骨板	左			ほぼ完形	1			
		第4肋骨板	左			ほぼ完形	1			
		第5・6肋骨板	左			ほぼ完形	1			
		第7肋骨板	左			ほぼ完形	1			
		第2肋骨板		右		ほぼ完形	1			
		第3・4肋骨板		右		ほぼ完形	1			
		第5〜7肋骨板・椎骨板		右		ほぼ完形	1			
		第8肋骨板		右		ほぼ完形	1			
		椎骨板				破片	7			
		肩甲骨+前鳥口骨		右		ほぼ完形	1			
		大腿骨		右		ほぼ完形	1			
		恥骨	左			ほぼ完形	1			
		ニホンスッポン2	頂骨板				ほぼ完形	1		
			第1・2肋骨板	左			破片	1		
			第3肋骨板	左			ほぼ完形	1		
			第4肋骨板	左			ほぼ完形	1		
			第6肋骨板	左			ほぼ完形	1		
			第1〜3肋骨板・椎骨板		右		ほぼ完形	1		
			第4〜7肋骨板・椎骨板		右		ほぼ完形	1		
			第8肋骨板		右		ほぼ完形	1		
			中腹骨板	左			ほぼ完形	1		
					右		ほぼ完形	1		
下腹骨板			右		ほぼ完形	1				
肩甲骨+前鳥口骨	左				ほぼ完形	1				
鳥口骨	左				ほぼ完形	1				
ニホンスッポン1/2	椎骨板					破片	1			
植物遺体					破片	1				
GN10-1 1073 7C15t SD1002 Dot1037 カメ?土壌	カエル類	四肢骨			破片	1				
	ニホンスッポン1	頭蓋骨			破片	3				
		環椎			破損	1				
		椎骨			破損	4				
		椎骨板			破片	2				
		第8肋骨板	左			破損	1			
		第1肋骨板		右		破損	1			
		内腹骨板				ほぼ完形	1			
		中腹骨板	左			ほぼ完形	1			
				右		ほぼ完形	1			
		下腹骨板	左			ほぼ完形	1			
				右		ほぼ完形	1			
		剣上腹骨板	左			ほぼ完形	1			
				右		ほぼ完形	1			
		鳥口骨	左			ほぼ完形	1			
				右		ほぼ完形	1			
		上腕骨	左			ほぼ完形	1			
		大腿骨	左			ほぼ完形	1			
		脛骨	左			ほぼ完形	1			
				右		ほぼ完形	1			
		腓骨	左			ほぼ完形	1			
				右		ほぼ完形	1			
		恥骨		右		ほぼ完形	1			
		指骨				ほぼ完形	4			
		基節骨				ほぼ完形	2			
		中節骨				ほぼ完形	1			
		末節骨				ほぼ完形	1			



表2. 郷中遺跡の骨貝類同定結果 (2)

試料名	種類	部位	左	右	部分	数量	被熱	備考	
GN10-1 1073 7C15t SD1002 Dot1037 カメ?土壌	ニホンスッポン2	第2肋骨板	左		破片	1			
		第5肋骨板	左		破片	1			
		第8肋骨板	左		ほぼ完形	1			
		椎骨板				破片	2		
		剣上腹骨板	左		ほぼ完形	1			
		上腕骨	左		遠位端欠	1		近位端未化骨外	
			右		遠位端欠	1		近位端未化骨外	
		大腿骨	左		ほぼ完形	1			
		脛骨	左		ほぼ完形	1			
		恥骨		右	ほぼ完形	1			
		ニホンスッポン1/2	椎骨板			破片	2		
		魚類	鱗			破片	1		
		植物遺体				破片	7.1g		
		残渣					2235.8g		
GN10-1 SD1002 土壌 サンプル	ヒメコザラ (シボリガイ型)	殻			ほぼ完形	1			
	キサゴ	殻			破片	1			
	スガイ	殻			ほぼ完形	3			
	ウミミナ	殻				ほぼ完形	89		
						破片	69		
	ホソウミミナ	殻				ほぼ完形	9		
						破片	16		
	イボウミミナ	殻				ほぼ完形	7		
						破片	13		
	ウミミナ科	殻				破片	46		
	ヘナタリ	殻				ほぼ完形	5		
	カワアイ	殻				ほぼ完形	7		
						破片	11		
	タマキビ	殻				ほぼ完形	1		
	ツメタガイ	殻				破片	1	○	
	カゴメガイ	殻				ほぼ完形	1		
	アカニシ	殻				破損	1		
	アッキガイ科	殻				破片	1		
	ムシロガイ科	殻				破片	1		
	オオタニシ	殻				ほぼ完形	1	椎貝	
						破片	1		
	オオタニシ?	殻				破片	2		
	腹足綱	殻				破片	3		
	サルボウガイ	殻	左			ほぼ完形	15		
						破片	5		
						右	ほぼ完形	25	
	破片	5							
	マガキ	殻	左			破片	56		
						破片	9	2-3個が癒着	
						破片	1	2個腹足綱癒着	
						右	破片	51	
	破片	190.5g							
	イタボガキ科	殻				破片	2		
	シオフキ	殻	左			破片	2		
						右	破片	2	
	ヤマトシジミ	殻	左	右		ほぼ完形	1	合貝	
	アサリ	殻	左			ほぼ完形	29		
						破片	47		
						右	ほぼ完形	26	
	破片	42							
ハマグリ	殻	左			ほぼ完形	4			
					破片	1			
					右	ほぼ完形	3		
破片	1								
二枚貝類	殻				破片	121.5g			
貝類	殻				破片	1	○		
フジツボ目	殻				破片	2			
不明					破片	4			
土器					破片	2			
残渣						4967.5g			

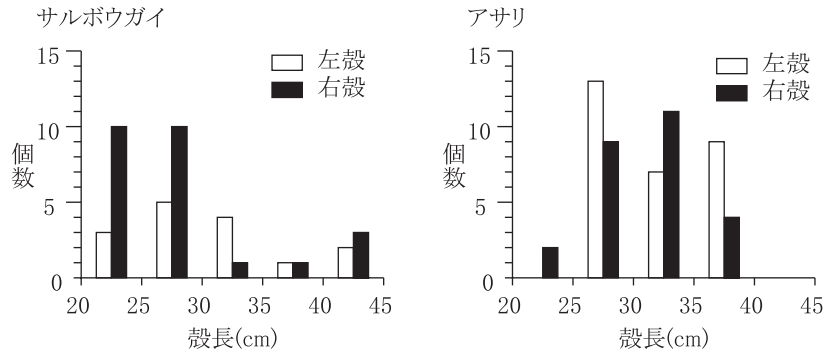


図57 郷中遺跡出土のサルボウガイおよびアサリの殻長分布

2点検出される。ほぼ完存する稚貝1点と破片1点である。なお、この他にオオタニシ成貝の可能性のある破片が2点検出される。

- ・ヒラマキガイ科

微細物分析で破片1点検出される。

- ・オカチョウジガイ

微細物分析で3点検出される。

- ・パツラマイマイ

微細物分析で2点検出される。

- ・ヒメベッコウマイマイ

微細物分析で2点検出される。

- ・腹足綱

破片が3点、微細物分析で2点検出される。

- ・サルボウガイ

ほぼ完存する左殻15点、左殻の破片が5点、ほぼ完存する右殻が25点、右殻の破片が5点検出される。殻長は、20.9～44.1mmであり、20～30mm程度の大きさが多い。

- ・イガイ科

微細物分析で1点検出される。

- ・マガキ

左殻が66点、右殻が50点、左右不明破片が検出される。なお、左殻では、2～3の殻が癒着した状態の殻が9点、腹足綱を取り込む左殻1点が認められる。なお、マガキとみられる破片は、イタボガキ科とした。また、微細物分析で微小な右殻2点検出される。

- ・シオフキ

左殻破片2点、右殻破片が2点検出される。

- ・ヤマトシジミ

左右合貝が1点検出される。

- ・アサリ

ほぼ完存する左殻が29点、左殻の破片が47点、ほぼ完存する右殻が26点、右殻の破片が42点検出される。また、微細物分析で破片1点検出される。殻長は、24.8～37.7mmであり、25～35mm程度の大きさ

が多い。

- ・ハマグリ

ほぼ完存する左殻が4点、左殻の破片が1点、ほぼ完存する右殻が3点、右殻の破片が1点検出される。殻長は28.1～47.3mmを計る。

- ・貝類

種類不明であるが、被熱を受けた痕跡が認められる。

- ・フジツボ目

破片が2点検出される。また、微細物分析で9点検出される。

- ・ウナギ

微細物分析で左歯骨1点検出される。

- ・カレイ科

微細物分析で尾椎1点検出される。

- ・魚類

鱗が1点検出される。種類不明であるが、比較的大きな鱗である。また、微細物分析で鱗棘等3点、部位不明破片6点検出される。

- ・カエル目

四肢骨が1点検出される。

- ・ニホンスッポン

重なる部位が含まれることから、少なくとも2個体は含まれている。両者の大きさが異なることから、結果表においては、大型のものをニホンスッポン1、小型のものをニホンスッポン2とし、不明をニホンスッポン1/2と表記した。

大型の個体は、頭蓋、下顎骨、環椎、椎骨、頂骨板、背甲骨板、腹甲骨板、左右烏口骨、右肩甲骨+前烏口骨、左上腕骨、左右恥骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、指骨、基節骨、中節骨、末節骨が確認される。背甲骨板は椎骨板が一部欠損する程度で、腹甲骨板は上腹甲骨板を除く部位が認められる。小型の個体は、頂骨板、背甲骨板、腹甲骨板、左烏口骨、左肩甲骨+前烏口骨、左右上腕骨、右恥骨、左大腿骨、左脛骨が確認される。背甲骨板は左第7肋骨板が欠損し、腹甲骨板は左右中腹甲骨板・右下腹甲骨板・左剣上腹甲骨板が認められる程度である。なお、大型、小型の判別が付かなかった部位は、椎骨板の破片である。

#### B. 微細物分析

結果を表3に示す。2試料を通じて、骨貝類（ヒラマキガイ科、オカチョウジガイ、パツラマイマイ、ヒメベッコウマイマイ、マイマイ類、腹足綱、イガイ科、マガキ、アサリ、貝類、フジツボ類、ウナギ、カレイ科、魚類）38個+1.9gと、大型植物遺体、木材、炭化材、蘚類、昆虫類が検出された。

大型植物遺体は、裸子植物2分類群（クロマツ、マツ属複雑管束亜属）94個、被子植物40分類群（ヤブニッケイ、キイチゴ属、オモダカ属、ツユクサ、イボクサ、イネ、コムギ、アワ、エノコログサ属、イネ科、ヌカスゲ類、カヤツリグサ属、ミズ属、イラクサ科、ギシギシ属、イヌタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、サナエタデ近似種、スベリヒユ科、ハコベ属、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、タガラシ、キンポウゲ属、タケニグサ、アブラナ科、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダ

イチゴ属、カタバミ属、トウダイグサ、エノキグサ、雑草メロン型、フサモ属、セリ科、アカネ科、エゴマ、ナス近似種、タカサブロウ、キク科) 574個、計668個の種実や花、葉が同定されたほか、分類群の特定に至らなかった広葉樹の葉片が確認された。

大型植物遺体群は、2試料間に大きな差異は認められず、栽培種を含む草本主体の種類構成を示す。栽培種は、イネの穎が53(基部14)個、コムギの胚乳が2個、アワの胚乳、雑草メロン型の種子、エゴマの果実、ナス近似種の種子が各1個確認され、イネ1個とコムギ、アワには炭化が認められた。

栽培種を除いた分類群は、草本類は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、スベリヒユ科、ハコベ属、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科などのやや乾いた場所を好んで生育する分類群や、オモダカ属、イボクサ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、キンポウゲ属、フサモ属、セリ科、タカサブロウなどの水湿地生植物が確認された。木本類は、常緑高木のクロマツを含むマツ属複維管束亜属の葉、短枝と、常緑中高木のヤブニッケイの花や未熟な果実、果托、種子、葉(?)、常緑または落葉低木のキイチゴ属の核が確認された。ヤブニッケイの様々な部位が出土しているのが特徴である。

本分析で確認された大型植物遺体各分類群の写真を写真4、5に示し、木本類と栽培種の形態的特徴等を以下に記す。栽培種の種実の大きさは、デジタルノギスを用いて計測した値である。

〈木本〉

・クロマツ (*Pinus thunbergii* Parlatores) マツ科マツ属

葉は灰褐色、長さ0.8cm以上、径1~1.5mm程度の針形。短枝から2針葉が伸び、先端部は鋭く尖る。葉横断面は半円形で、中心部に2個の維管束がある。葉横断面を観察した結果、4~10個程度の樹脂道が葉肉内に点在する。なお、横断面を確認していない個体を複維管束亜属(subgen. *Diploxylon*)としている(写真4-1,2)。

・ヤブニッケイ (*Cinnamomum japonicum* Sieb. ex Nakai) クスノキ科ニッケイ属

果実、果托、種子、花は黒灰褐色。花は径3.5~4mm。花被は筒型で上部は6裂する。花被片は長さ2.5mm、幅1mmの卵形。花被内には径1mm程度の子房が1個ある。雄蕊は確認されず、一部をスライドガラスに移して生物顕微鏡下で観察したが、花粉は確認されなかった。花柄は長く、花托を含めた長さは最長4.4mm(写真4-3,4)。果実は、長さ2~5.7mm、径1.2~4.7mmの長楕円体。成熟個体(長さ1.5cm程度)に比べると、全て小さく、未熟個体と考えられる。果実基部は、浅い杯状の倒円錐体の果托(花被筒)に包まれる(写真4-8~12)。果托の縁は全縁。果柄は長く、果托を含めた長さは最長8.3mm(写真4-5~7)。種子は、完形成熟個体の場合、長さ1.2cm、径1cm程度の長楕円体。頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く、表面は粗面で縦隆条と斑模様がある。種皮断面は柵状。出土破片は、頂部のみが確認され、残存幅は6.3mm(写真4-13)。

葉片は、葉表は灰褐色で革質、葉裏は灰黄褐色。最も状態が良い葉片は上半部と基部を欠損するが、黒褐色の3行脈が確認される。大きさは、残存長は1.7cm、1次脈からの残存最大幅は1.3cm。1次脈と2次脈間に3次脈が連絡する。葉縁は全縁。ヤブニッケイの花、果実、種子などが供伴することを考慮すると、出土葉片もヤブニッケイに由来すると思われるが、クスノキ(*C. camphora* (L.) Presl)やクロモジ属(*Lindera*)、シロダモ属(*Neolitsea*)などの3行脈をもつ種との比較検討が不十分であるた

め、「ヤブニッケイ？」としている（写真4-14）。

・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核（内果皮）は灰黄褐色、長さ1.7mm、幅1.1mm程度の偏平な半倒卵体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす（写真4-15）。

〈栽培種〉

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎（果）は淡灰褐色、1個のみ炭化しており黒色を呈す。穎は、完形ならば長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稻朮を構成する。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片は基部の果実序柄が確認され、大きさは最大2.5mm程度（写真5-19）。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色、やや偏平な楕円体で、2個とも1側面が窪んでいる。大きさは、長さ3.79mm、幅2.97mm+、厚さ2.18mm（写真5-20）と、長さ3.79mm、幅2.44mm+、厚さ2.07mm。腹面正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面には微細な粒状模様がある。

・アワ近似種 (*Setaria italica* (L.) P. Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ1.6mm、幅1.3mm、厚さ1.2mmの半偏球体で頂部が焼き膨れている。背面は丸みがあり、基部正中線上に径1mmの大きな馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑（写真5-21）。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子は淡灰褐色、偏平な狭倒皮針形。大きさは、長さ5.53mm、幅3.04mm、厚さ1.05mmで、藤下（1984）の基準による雑草メロン型（長さ6.0mm以下）に該当する。種皮表面には縦長の細胞が密に配列する（写真5-47）。

・エゴマ (*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara) シソ科シソ属

果実は灰褐色、長さ2.2mm、幅2.0mm、厚さ0.8mmの倒広卵体で、やや押しつぶされている。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや柔らかく、表面には浅く大きく不規則な網目模様がある（写真5-51）。

・ナス近似種 (*Solanum* cf. *melongena* L.) ナス科ナス属

種子は灰褐色、径3.5mm程度の偏平で歪な腎臓形。破片の残存幅は3.2mm、厚さ0.5mm。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮はやや厚く、表面には微細な星形状網目模様が臍から同心円状に発達する（写真5-52）。

#### iv. 考察

##### A. 骨貝類

検出された貝類のうち、オカチョウジガイ、パツラマイマイ、ヒメベッコウマイマイは、陸産貝類であることから、遺構が埋積する過程で周辺から流れ込んだ可能性がある。また、ヒラマキガイ科、オオタニシは淡水性であり、溝内に本来棲息しており、死後堆積物中に取り込まれた可能性がある。一方、



表3. 郷中遺跡の微細物分析結果

分類群	部位	状態	SD1002			備考
			1073	1002		
			7C15t Dot1037	土壌*		
			カメ?土壌	4mm以下	植物片	
動物遺体	骨貝類					
	ヒラマキガイ科	殻			1	
	オカチョウジガイ	殻			1	
		殻			2	椎貝
	オカチョウジガイ?	殻			2	
	バツラマイマイ	殻			2	
	ヒメベッコウマイマイ	殻			2	
	マイマイ類	殻			2	
	腹足綱	殻			1	
	腹足綱	殻			1	
	イガイ科	殻			1	
	マガキ	殻			2	右
	アサリ	殻			1	
	貝類	殻			1.9g	
	フジツボ類	殻			9	
	ウナギ	歯骨			1	左
	カレイ科	尾椎	1			
	魚類	鰓棘等	2		1	
		不明	6			
植物遺体	木本					
	クロマツ	葉			1	横断面確認
	マツ属複雑管束亜属	短枝			3	
		葉	3		6	
		破片 (先端部)	3		6	
			53	1	24	
	ヤブニッケイ	果実	5		10	長さ2~5.7mm, 径1.2~4.7mm
		完形	3			
		果実・果托	5		5	
		果托	1		5	
		種子				
		破片		1		残存幅6.3mm
		花	18		3	径3.5~4mm
	ヤブニッケイ?	葉		2		
	キイチゴ属	核	1		15	
	広葉樹	葉	17		1	
	木材				+	
	炭化材	炭化	0.04g	0.07g	0.13g	
	草本					
	オモダカ属	果実			1	
	ツクサ	種子	3		2	
	イボクサ	種子	1			
	イネ	類			1	
		破片 (基部)			6	
		破片 (基部)	3	4	6	
			14	19	6	
	コムギ	胚乳			2	長さ3.79, 幅2.97+, 厚さ2.18mm/長さ3.79, 幅2.44+, 厚さ2.07mm
	アワ	胚乳			1	長さ1.6mm, 幅1.3mm, 厚さ1.2mm
	エノコログサ属	果実	1			
	イネ科	果実	8	1	11	
		破片	2			
	ヌカスゲ類	果実			3	
	カヤツリグサ属	果実	1		16	
	ミス属	果実	27	2	52	
		破片	2	2		
	イラクサ科	果実			2	
	ギシギシ属	花被			7	
		果実	2		1	
		破片	2			
	イヌタデ近似種	果実	1		5	
	ヤナギタデ近似種	果実	1		2	
	ポントクタデ近似種	果実	6	1	39	
		破片		1	1	
	サナエタデ近似種	果実			2	
	スベリヒユ科	種子	6	2	+	植物片: 抽出対象外
		破片	1			
	ハコベ属	種子	13	3	+	植物片: 抽出対象外
		破片	3	1		
	ナデシコ科	種子	36	4	+	植物片: 抽出対象外
		破片	2			
	アカザ科	種子	12		+	植物片: 抽出対象外
		破片	1			
	ヒユ科	種子	1	1	+	植物片: 抽出対象外
		破片		3		
	タガラシ	果実	8	2	30	
		破片	6	3	29	
	キンボウゲ属	果実	1	2		
	タケニグサ	種子	1			
	アブラナ科	種子	1			
	キジムシロ類*	核			6	
	カタバミ属	種子	3	1	7	
		破片	2	2		
	トウダイグサ	種子			1	
	エノキグサ	種子	3		6	
	雑草メロン型	種子	1			長さ5.53mm, 幅3.04mm, 厚さ1.05mm
	フサモ属	果実		1		
	セリ科	果実			1	
	アカネ科	核		1	8	
	エゴマ	果実			1	長さ2.2mm, 幅2.0mm, 厚さ0.8mm
	ナス近似種	種子	1			残存幅3.2mm, 厚さ0.5mm
	タカサブロウ	果実	4		12	
		破片	1			
	キク科	果実	1			
	不明		8		1	
	蕨類	葉	13			
昆虫類			65	36	168	
分析量			200cc	200cc	-	
			389.88g	366.78g	-	

注) \* 土壌: 貝同定試料水洗後の径4mm以下の土壌と、水洗時に浮いた植物片の一部を対象としている  
 注) \* キジムシロ類: キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

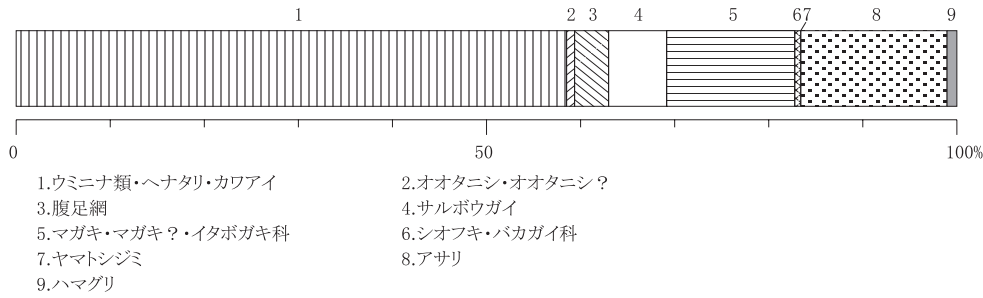


図58 郷中遺跡SD1002出土貝類の種類構成

腹足綱のヒメコザラ（シボリガイ型）・キサゴ・スガイ・ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・カワアイ・タマキビ・ツメタガイ・カゴメガイ・アカニシ・ムシロガイ科、二枚貝綱のサルボウガイ・イガイ科・マガキ・シオフキ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリなどは、海水域あるいは汽水域に棲息する貝類である。これらの中には、ツメタガイなど、焼けた痕跡が認められる貝類も存在する。また、アカニシには、肉質を取り出すために開けられたとみられる穿孔が体層部に認められる。これらのことから、海水域あるいは汽水域に棲息する貝類は食糧資源等として付近の海浜で採取されたものが持ち込まれたものと思われる。生息域別にみると、岩礁地に棲息する種類（ヒメコザラ・スガイ・タマキビ・イガイ科）、潮間帯付近の砂礫底や砂泥底（キサゴ・ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・カワアイ・ツメタガイ・カゴメガイ・アカニシ・サルボウガイ・シオフキ・アサリ・ハマグリ）、汽水域の砂礫底・砂泥底に棲息する種類（マガキ・ヤマトシジミ）などからなる。これらの中でも潮間帯付近の砂礫底や砂泥底に棲息する種類が多い。このような砂礫底に棲息するカレイ科の仲間、河口に棲息していたウナギなども当時の食糧資源として利用されていたと思われる。

ここで、本遺跡で出土した貝類の種類構成を図2に示す。ここでは、腹足綱については各種類の殻数を、二枚貝綱については最小個体数に基づいて比率を求めている。ほぼ同時期とされる後述する畑間遺跡と比較すると、本遺跡ではアサリが多く、ハマグリが少ない点で違いがみられる。このような違いが何を反映しているのかは発掘調査成果を踏まえた評価が必要である。

また、2個体確認されたニホンスッポンは、大きさに違いがみられ、大型の個体は背甲骨板長68mm程度、小型の個体は背甲骨板長53mm程度である。これらニホンスッポンは、2個体とも解体した痕跡が認められない。一部確認することができない部位もあるが、2個体ともほぼ全身骨格が残っている。特に大型のものは、背甲骨板・腹甲骨板とも、その残りが良好である。残存する部位には、切断された痕跡や調理の際に付けられるカットマークなどは認められない。したがって、ここで出土したニホンスッポンは食材として利用されていたものでなく、溝内で死亡して埋積した可能性がある。

#### B. 大型植物遺体

微細物分析の結果、17～18世紀の溝SD1002からは、骨貝類のほかに、大型植物遺体、木材、炭化材、蕨類、昆虫類が確認された。これらの出土遺物は、上記の骨貝類とともに、当時の生活残滓や周辺環境に由来するものと示唆される。

大型植物遺体群には、栽培種のイネの穎が53（基部14）個、コムギの胚乳が2個、アワの胚乳、雑草メロン型の種子、エゴマの果実、ナス近似種の種子が各1個確認された。これらの栽培種は、当時利用された植物質食糧・食料と示唆される。イネ1個とコムギ、アワは炭化しており、炭化した木材なども

出土することを合わせ考えると、食糧残滓や燃料材として利用されたものの残滓であることが推定される。

栽培種を除いた分類群は、草本類は、人里植物に属する分類群が多く確認された。スベリヒユ科、ハコベ属、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科などのやや乾いた場所を好んで生育する分類群は、調査地周辺域の明るく開けた草地環境に由来すると推定される。オモダカ属、イボクサ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、キンポウゲ属、フサモ属、セリ科、タカサブロウなどの水湿地生植物は、溝内および周辺域の水湿地に由来するものと推定される。

木本類は、キイチゴ属は、伐採地や崩壊地、林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する常緑または落葉低木である。本遺跡周辺域の森林の林縁部などに生育したものに由来すると考えられる。針葉樹のクロマツを含むマツ属複雑管束亜属は、本遺跡の立地を考慮すると、周辺に生育していたものに由来する可能性と、植栽されていたものに由来する可能性が考えられる。

ヤブニッケイは、暖地の二次林に多くみられる常緑中高木で、6月に開花し、果実は10～11月に黒紫色に熟す。SD1002からは、花や未熟な果実、果托、種子、葉(?)など、様々の部位が出土しており、特に、堆積物中に残りにくい花や未熟な果実の出土は特筆すべき分析成果の一つと言える。当時の溝の近傍にヤブニッケイが生育していたことと、溝内充填物の堆積季節が夏であった可能性、短期間に堆積したことが考えられる。

堆積季節に関して、小林ほか(2009)は、千葉県館山市の沖ノ島遺跡からみつかったタブノキの花や果実を含む大型植物化石群が堆積した季節を推定するために、現在のリター層中でタブノキの生殖器官の落花時期や季節による形態変化、分解過程を観察し、出土化石と検討した結果、5月下旬から6月中旬に発生した洪水によって堆積したと結論づけている。この研究手法をヤブニッケイに適用することで、本遺跡の溝SD1002充填物のより詳細な堆積季節の推定が期待される。

第2節 畑間遺跡

i. 試料

試料は、17～18世紀の土坑SX4004・SX4007で出土した貝類である。

ii. 分析方法

試料は、肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、貝類の生態性等については、奥谷編著（2000）を参考とする。

iii. 結果

検出された種類は、ウニ綱1種類、腹足綱14種類（ヒメコザラ・キサゴ・イボキサゴ・ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・カワアイ・タマキビ・カワザンショウガイ・カゴメガイ・ムシロガイ・ヒメムシロ・オオタニシ）、二枚貝綱7種類（サルボウガイ・ウミギク科・マガキ・シオフキ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリ）、甲殻綱1種類（フジツボ目）である（表4）。また、同定結果を表5に、シオフキ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリの殻長分布を図3に示す。以下、遺構別に結果を示す。

<SX4004>

・ウニ類

破片が2点検出される。

・ヒメコザラ（シボリガイ型）

2点検出される。ほぼ完存する。

・キサゴ

破片が1点検出される。

・イボキサゴ

破片が1点検出される。

・ウミニナ

ほぼ完存する殻が32点、破片を175点検出。

・ホソウミニナ

ほぼ完存する殻が16点、破片を26点検出。

・イボウミニナ

ほぼ完存する殻が19点、破片を24点検出。

・ウミニナ科

ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナの区別

ができない殻片である。73点検出される。

表4. 畑間遺跡検出動物分類群の一覧

棘皮動物門	Phylum Echinodermata
ウニ綱	Class Echinoidea
軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
カサガイ目	Order Patellogastropoda
エンスイカサガイ亜目	Suborder Acmaeioidea
ユキノカサガイ科	Family Lottiidae
ヒメコザラ（シボリガイ型）	Patelloida pygmaea
古腹足目	Order Vetigastropoda
ニシキウスガイ科	Family Trochidae
キサゴ	Umbonium costatum
イボキサゴ	Umbonium moniliferum
盤足目	Order Discopoda
ウミニナ科	Family Batillariidae
ウミニナ	Batillaria multiformis
ホソウミニナ	Batillaria cumingii
イボウミニナ	Batillaria zonalis
フトヘナタリ科	Family Potamididae
ヘナタリ	Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata
カワアイ	Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis
タマキビ科	Family Littorinidae
タマキビ	Littorina (Littorina) brevicula
カワザンショウガイ科	Family Assimineidae
カワザンショウガイ	Assiminea japonica
新腹足目	Order Neogastropoda
アツキガイ科	Family Muricidae
カゴメガイ亜科	Subfamily Ergalataxinae
カゴメガイ	Bedeve birileffi
ムシロガイ科	Family Nassariidae
ムシロガイ	Niotha livescens
ヒメムシロ	Reticunassa multigranosa
原始紐舌目	Order Architaenioglossa
タニシ科	Family Vivipariidae
オオタニシ?	Cipangopaludina japonica ?
二枚貝綱	Class Bivalvia
翼形亜綱	Subclass Pteriomophia
フネガイ目	Order Arcoida
フネガイ科	Family Arcidae
サルボウガイ	Scapharca kagoshimensis
カキ目	Order Ostreoida
イタヤガイ亜目	Suborder Pectinina
ウミギク科	Family Spondylidae
カキ亜目	Suborder Ostreina
イタボガキ科	Family Ostreidae
マガキ	Crassostrea gigas
異歯亜綱	Order Heterodonta
マルスダレガイ目	Order Veneroida
バカガイ科	Family Mactridae
シオフキ	Mactra veneriformis
マテガイ科	Family Solenidae
シジミ科	Family Corbiculidae
ヤマトシジミ	Corbicula japonica
マルスダレガイ科	Family Veneridae
アサリ	Ruditapes philippinarum
ハマグリ	Meretrix lusoria
節足動物門	Phylum Arthropods
甲殻綱	Class Crustacea
アゴアシ亜綱（顎脚亜綱）	Suborder Maxillopoda
フジツボ目（蔓脚目）	Order Cirripedia

表5. 畑間遺跡の貝類同定結果(1)

試料名	種類	部位	左	右	部分	数量	被熱	備考
HM10-4 4020 9D12o SX4004 サンプル	ウニ類	殻			破片	2		
	ヒメコザラ(シボリガイ型)	殻			破片	2		
	キサゴ	殻			ほぼ完形	1		
	イボキサゴ	殻			ほぼ完形	1		
	ウミニナ	殻			ほぼ完形	32		
		殻			破片	175		
	ホソウミニナ	殻			ほぼ完形	16		
		殻			破片	26		
	イボウミニナ	殻			ほぼ完形	19		
		殻			破片	24		
	ウミニナ科	殻			破片	73		
	ヘナタリ	殻			ほぼ完形	11		
		殻			破片	7		
	カワアイ	殻			ほぼ完形	5		
		殻			破片	20		
	タマキビ	殻			ほぼ完形	1		
	カワサンショウガイ	殻			ほぼ完形	1		
	カゴメガイ	殻			ほぼ完形	1		
	ムシロガイ	殻			ほぼ完形	2		
	ヒメムシロ	殻			ほぼ完形	14		
	ムシロガイ科	殻			破片	7		
	オオタニシ	殻			ほぼ完形	2		権貝
	オオタニシ?	殻			破片	22		
	腹足綱	殻			破片	20		
	サルボウガイ	殻		左	ほぼ完形	3		
		殻			右	ほぼ完形	2	
	ウミギク科	殻			破片	1		
	マガキ	殻		左	破片	7		
		殻			右	破片	1	3個癒着
		殻			破片	4		
		殻			破片	24		
		殻			破片	1		
	イタボガキ科	殻			破片	1		
	シオフキ	殻		左	ほぼ完形	53		
		殻			破片	67		
		殻			右	ほぼ完形	65	
		殻			破片	70		
	バカガイ科	殻		左	破片	37		
		殻			右	破片	29	
	マテガイ科	殻			破片	5		
	ヤマトシジミ	殻		左	ほぼ完形	7		
		殻			右	ほぼ完形	9	
		殻			破片	2		
	アサリ	殻		左	ほぼ完形	5		
		殻		左	破片	8		
		殻			右	ほぼ完形	5	
		殻			右	破片	5	
ハマグリ	殻		左	右	ほぼ完形	1	合貝	
	殻		左	ほぼ完形	86			
	殻			破片	118			
	殻			右	ほぼ完形	94		
	殻			破片	146			
	殻		左	破片	26			
	殻			右	破片	51		
	二枚貝類	殻			破片	1313.3g		
貝類	殻			破片	850.0g			
フジツボ類	殻			破片	3			
残渣					1265.6g			



表5. 畑間遺跡の貝類同定結果(2)

試料名	種類	部位	左	右	部分	数量	被熱	備考
HM10-4 4145 9D14g SX4076 サンプル⑧	ウミミナ	殻			ほぼ完形	28		
		殻			破片	15		
	イボウミミナ	殻			ほぼ完形	18		
		殻			破片	17		
	ホソウミミナ	殻			ほぼ完形	10		
		殻			破片	20		
	ウミミナ科	殻			破片	51		
	ヘナタリ	殻			ほぼ完形	5		
		殻			破片	2		
	カワアイ	殻			ほぼ完形	1		
		殻			破片	7		
	カゴメガイ	殻			ほぼ完形	2		
	アッキガイ科	殻			破片	1		
	ムシロガイ	殻			ほぼ完形	3		
	ヒメムシロ	殻			ほぼ完形	9		
	オオタニシ?	殻			破片	9		
	腹足綱	殻			破片	2		
	サルボウガイ	殻		左		破片	1	
	マガキ	殻		左		破片	3	
		殻				破片	12	
	マガキ?	殻			破片	1		腹足綱取込む
	シオフキ	殻		左		ほぼ完形	12	
						破片	9	
		殻			右		ほぼ完形	8
						破片	10	
	バカガイ科	殻		左		破片	14	
		殻			右	破片	4	
	マテガイ科	殻				破片	1	
	ヤマトシジミ	殻		左		ほぼ完形	4	
						破片	1	
		殻			右		破損	1
	アサリ	殻		左		破片	3	
		殻			右	破片	1	
	ハマグリ	殻		左		ほぼ完形	35	
						破片	35	
		殻			右		ほぼ完形	24
						破片	40	
	マルスダレガイ科	殻		左		破片	14	
		殻			右	破片	16	
	二枚貝類	殻				破片	546.9g	
	残渣						1147.9g	

- ・ヘナタリ  
ほぼ完存する殻が11点、破片が7点検出される。
- ・カワアイ  
ほぼ完存する殻が5点、破片が20点検出される。
- ・タマキビ  
1点検出される。ほぼ完存する。
- ・カワサンショウガイ  
1点検出される。ほぼ完存する。
- ・カゴメガイ  
1点検出される。ほぼ完存する。
- ・ムシロガイ

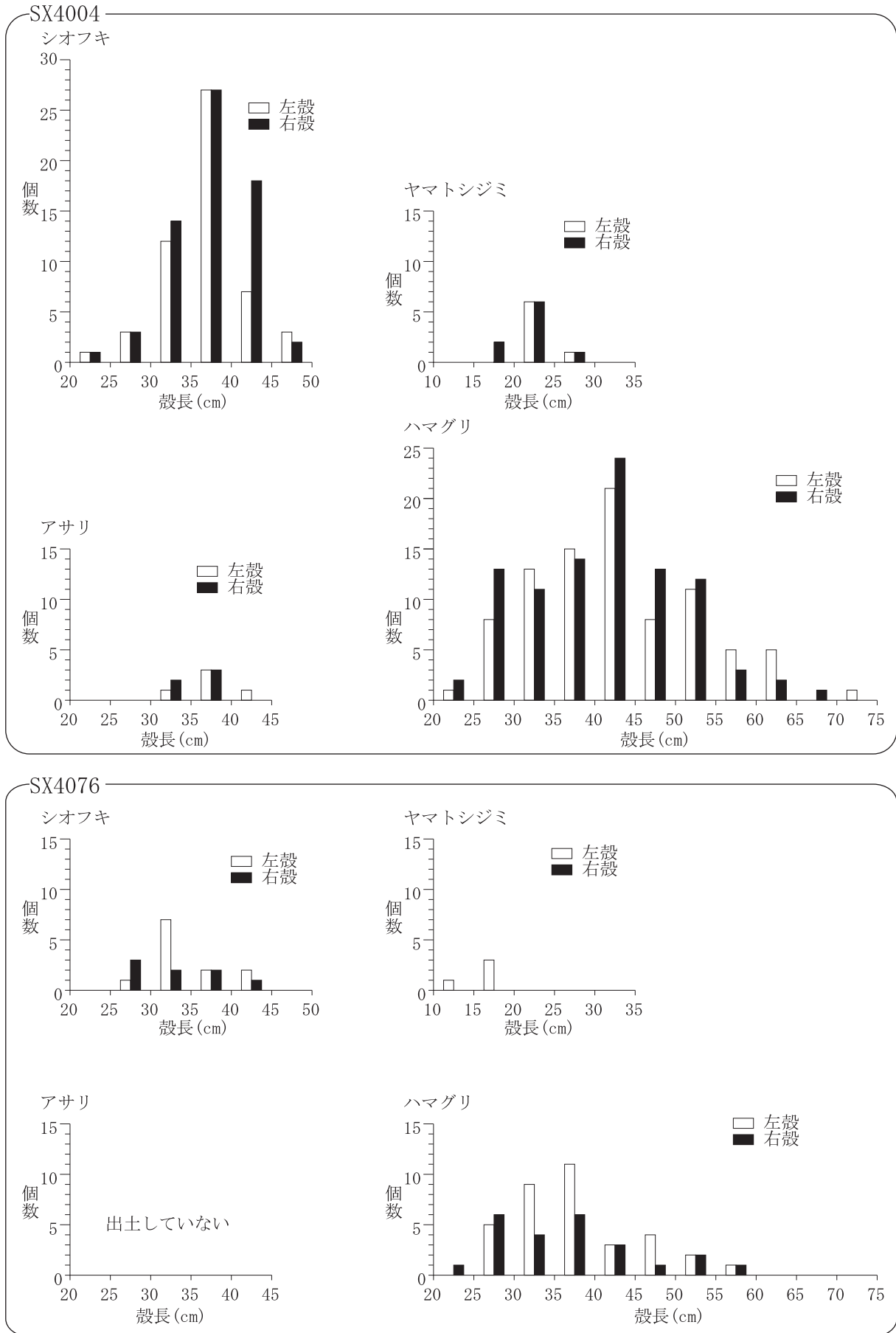


図59 畑間遺跡出土のシオフキ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリ の殻長分布

2点検出される。ほぼ完存する。

・ヒメムシロ

14点検出される。ほぼ完存する。

・ムシロガイ科

破片が7点検出される。

・オオタニシ

ほぼ完存する稚貝2点が検出される。この他にオオタニシ成貝の可能性のある破片を22点検出。

・腹足綱

破片が20点検出される。

・サルボウガイ

ほぼ完存する左殻3点、ほぼ完存する右殻が2点検出される。殻長27.5～42.1mmを計る。

・ウミギク科

破片が1点検出される。

・マガキ

左殻8点、右殻が4点、破片24点検出される。なお、左殻の内1点は、3個が癒着する。

・イタボガキ科

破片が1点検出される。

・シオフキ

ほぼ完存する左殻53点、左殻の破片が67点、ほぼ完存する右殻が65点、右殻の破片が70点検出される。殻長は、21.5～47.9mmを計り、35～40mm程度の大きさが多い。

・バカガイ科

シオフキと思われる破片である。左殻37点、右殻が29点検出される。

・マテガイ科

破片が5点検出される。

・ヤマトシジミ

左殻7点、右殻が11点検出される。殻長は、19.7～28.2mmを計り、20～25mm程度の個体が多い。

・アサリ

ほぼ完存する左殻5点、左殻の破片が8点、ほぼ完存する右殻が5点、右殻の破片が5点検出される。殻長は、32.6～41.2mmを計る。

・ハマグリ

左右合貝1点、ほぼ完存する左殻86点、左殻の破片が118点、ほぼ完存する右殻が94点、右殻の破片が146点検出される。殻長は、21.9～70.5mmを計り、40～45mm程度の大きさが多い。

・マルスダレガイ科

左殻の破片26点、右殻の破片51点検出される。

・フジツボ類

破片が3点検出される。

<SX4076>

- ・ウミニナ  
ほぼ完存する殻が28点、破片が15点検出される。
- ・ホソウミニナ  
ほぼ完存する殻が18点、破片が17点検出される。
- ・イボウミニナ  
ほぼ完存する殻が10点、破片が20点検出される。
- ・ウミニナ科  
ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナの区別ができない殻片である。51点検出される。
- ・ヘナタリ  
ほぼ完存する殻が5点、破片が2点検出される。
- ・カワアイ  
ほぼ完存する殻が1点、破片が7点検出される。
- ・カゴメガイ  
2点検出される。ほぼ完存する。
- ・アッキガイ科  
破片1点検出される。
- ・ムシロガイ  
3点検出される。ほぼ完存する。
- ・ヒメムシロ  
9点検出される。ほぼ完存する。
- ・オオタニシ？  
オオタニシ成員の可能性がある破片が9点検出される。
- ・腹足綱  
破片が2点検出される。
- ・サルボウガイ  
左殻の破片が1点検出される。
- ・マガキ  
左殻3点、破片12点検出される。この他、腹足綱を取り込むマガキと思われる破片が1点検出される。
- ・シオフキ  
ほぼ完存する左殻12点、左殻の破片が9点、ほぼ完存する右殻が8点、右殻の破片が10点検出される。  
殻長は、28.6～44.9mmであり、30～35mm程度の大きさが多い。
- ・バカガイ科  
シオフキと思われる破片である。左殻14点、右殻が4点検出される。
- ・マテガイ科  
破片が1点検出される。
- ・ヤマトシジミ  
左殻が5点、右殻が1点検出される。殻長は、10.9～20mmを計る。

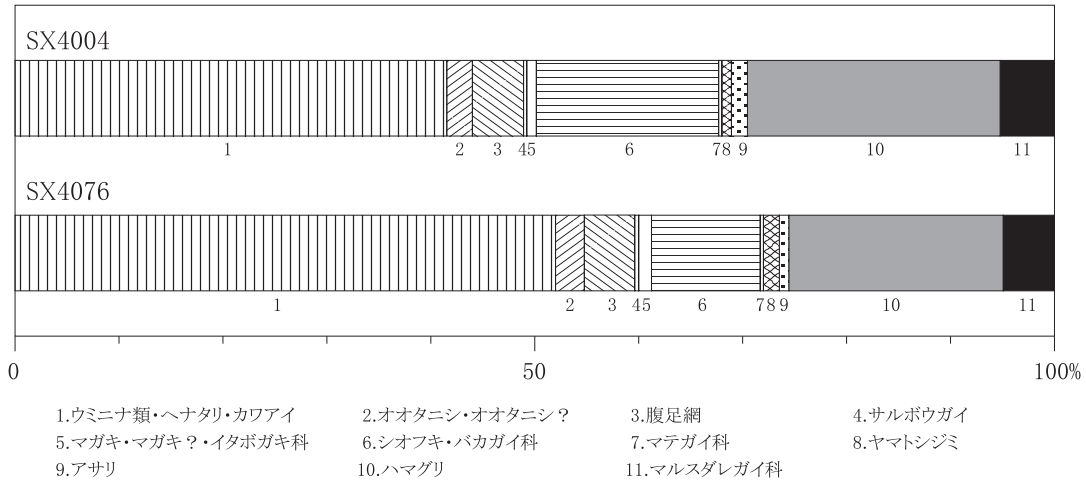


図60 畑間遺跡出土の遺構別種類構成

・アサリ

左殻の破片が3点、右殻の破片が1点検出される。

・ハマグリ

ほぼ完存する左殻35点、左殻の破片が35点、ほぼ完存する右殻が24点、右殻の破片が40点検出される。殻長は、22.5～56.1mmを計り、30～40mm程度の大きさが多い。

・マルスダレガイ科

左殻の破片14点、右殻の破片16点検出される。

4. 考察

SX4004・SX4076両遺構から出土した貝類は、オオタニシの可能性のある破片を除き、大部分は海水域あるいは汽水域に棲息する貝類からなる。棲息域別にみると、岩礁地に棲息する種類（ヒメコザラ・タマキビ・ウミギク科）、潮間帯付近の砂礫底や砂泥底（キサゴ・イボキサゴ・ウミナ・ホソウミナ・イボウミナ・ヘナタリ・カワアイ・カゴメガイ・ムシロガイ・ヒメムシロ・サルボウガイ・シオフキ・アサリ・ハマグリ）、汽水域の砂礫底・砂泥底に棲息する種類（カワザンショウガイ・マガキ・ヤマトシジミ）からなり、特に潮間帯付近の砂礫底や砂泥底に棲息する種類が多いことが特徴として認識される。これらの貝類は、食糧資源等として持ち込まれ、利用された後の残滓と思われる。

両遺構の種類構成を図4に示す。ここでは、腹足綱については各種類の殻数を、二枚貝綱については最小個体数に基づいて比率を求めている。これによると、SX4004でシオフキが、SX4076でウミナ類やヘナタリ・カワアイが若干多いが、極端に組成が異なっているわけではない。このことは、遺構の大きさや遺構の利用期間などの違いにより、廃棄された量が多少異なっていたものの、概ね同様な貝類の利用が行われていたことが推定される。



## 第6章 まとめ

本調査では、3つの遺跡が発掘調査対象となっており、それぞれの遺跡で調査成果が異なる。そのため、ここでは、遺跡ごとにまとめおよび考察をおこない、過去の調査成果と考え合わせた上で、各遺跡の歴史的意義についても若干ではあるが考察を加えた。なお、1・2地点については調査区が隣接することや同じ遺跡であることから、区別はしていない。以下遺跡ごとに記述する。

### 第1節 郷中遺跡の調査成果

#### i. SD1002について

郷中遺跡は第2章でふれた1・2地点に該当する。ここでは、中世～近世の遺物が出土しており、特に江戸時代前期初頭～中葉にかけての遺物が多く出土した。この近世の出土遺物に対応する遺構はSD1002・1003に限定され、他は不明であるが、出土した土器の組成から注目すべき特徴があった。それは、住居内で使用する土器類が多く出土している点である。SD1002・1003から出土した土器類は破片総数で489点。これは、1地点から出土した土器類の総破片点数の61.2%を占める数字である。

SD1002の性格は不明だが、第2章でふれたように、流水痕跡が確認できることから、少なくとも、流水を目的として人工的に掘削された溝であることは間違いない。また、出土した土器類は破片のものしかなく、完形品は一点も出土していないことから、この溝に廃棄されたものである蓋然性が高い。これらの土器類は溝の西肩やコーナー部分から集中して出土している状況であった。これらの土器類の組成は、丸皿や絵皿、竈、内耳鍋、土釜、天目茶碗などのように、食に関わる食器やいわゆる調理器具が多い。これらが、家中で使用する日常雑器であることは溝周辺に宅地が存在したことを物語るものと思われる。

また、第2章で報告したように溝のコーナー付近からは、大量の貝殻や少量ながら動物遺体などが出土しており、これも食に関わる「食べ殻」が廃棄されたものと考えられ、この場が恒常的な「ゴミ捨て場」であった蓋然性が高い。

このように、郷中遺跡の調査では17世紀初頭～後葉にかけての溝が確認できたことが主な成果であった。ここで問題なのはこの溝の機能性である。先述したが、SD1002は恒常的なごみ捨て場であった可能性があるが、そのための溝であったことは考えにくい。本来はゴミ捨て以外の目的で掘削されたものであろう。出土土器の組成や食べ殻の廃棄状況から、溝周辺には宅地が想定でき、溝そのものは、宅地や集落内の区画溝であった可能性は指摘できよう。

近世の調査区周辺の資料で興味深い資料がある。それは、「知多郡大里村絵図」という旧大里村の古絵図である。大里村は明治9年に木田村と合併し大田村となり、その後、現在の大田町へと変遷しており、今回調査した畑間・東畑・郷中遺跡もこの村落内に位置する。描かれた詳細時期は不明ながら、村の中央部に描かれた大田川の河口に「浜新田」や「南浜新田」が見られるため、これらが築かれた寛政9年（1797）以降に作成されたものと考えられる。また、絵図にみられないこの干拓地を包む形で新たに干拓された川北新田や、川南新田が築かれた安政元年（1854）までに完成しており、安政元年までが絵図成立の上限年代と考えられる。したがって、18世紀末以降が絵図の成立年代となる。この年代はSD1002の埋没年代より後出するため、この絵図そのものにSD1002との関連はない。しかし、集落の立

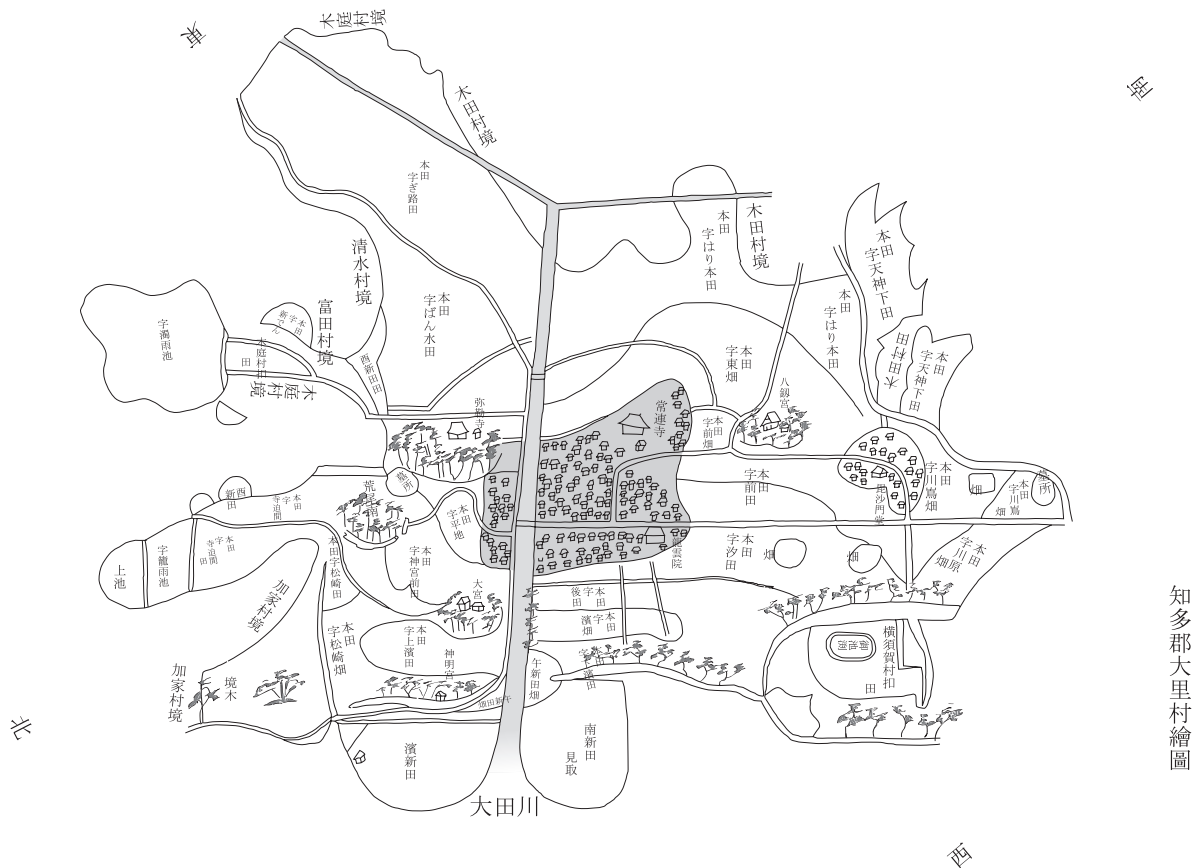


図61 知多郡大里村繪圖 ※『東海市史 資料編』巻別

地や範囲などは大きく変貌していないものと推定される。その根拠は、絵図にみえる大田川の南北に集落が展開する点である。この大田川は人口的に流路変更されたものであり、尾張藩2代藩主徳川光友が寛文6年（1666）、現在の高横須賀町に「横須賀御殿」を造営した際に改修されたものと伝えられる。集落を分離する形で改修された大田川が描かれている状況は、この集落の形成は大田川改修以前であった可能性が高い。少なくとも、SD1002から出土した遺物は、大田川改修年代以前のものがまとまって出土しており、大田川改修以前から、当地に集落が展開していたことは間違いない。となると、集落を分断する形でおこなわれた大田川改修にともない、大里村の集落も大規模な改変が行われたものと考えられる。SD1002出土の土器類が大田川改修時期頃までに比定されるもので構成されている状況は、大田川改修→集落改変といった一連の事業の中で消失した遺構であったことを物語っているであろう。

なお、2地点からも同じような規模の溝SD2022・2036を検出しているが、この溝とSD1002の関係は不明である。この溝からは中世の山茶碗などを主体とした遺物は出土しているが、江戸時代以降に比定できる遺物は皆無であった。しかし、調査区壁面の観察から、中世遺物包含層より上位層から掘削されている状況を確認しており、これらの溝がSD1002と併存した可能性は残る。

1・2地点で検出した遺構は年代や性格など不明なものが多いが、比較的出土量の多い近世遺物の組成から、農村というより、町屋を連想させるものである。絵図にみられるように、近世については、その初頭から当地に町屋が形成されていたものとみられる。ただし、今回の調査区では削平が著しかったため、周辺部での遺構の検討が重要であろう。

ii. 出土土器類の検討

郷中遺跡から出土した遺物のほとんどは土器類であった。その土器類のうち、破片総数で最多のものは山茶碗であり、常滑焼、土師質土器類が続く。このうち、土師質土器類については近世のものが主体であり、出土量の多い土器の組成は中世では山茶碗と常滑焼、近世では土師質土器類と瀬戸美濃陶磁器の組み合わせとなる。

中世に比定する山茶碗と常滑焼については、様々な性格の遺跡から豊富に出土しており、ことに山茶碗に関しては多目的な用途が考えられて、一定量の出土があっても遺跡ないし遺構との性格的関連を考察することは非常に難しい。したがって、今回の郷中遺跡の調査において出土した中世土器類と調査地の関連性を把握するのは困難である。しかしながら、出土した中世土器類の組成は山茶碗や常滑焼の破片が大多数を占めており、それ以外が少量の羽釜や土師皿などであることから、住居で使用される土器類は希薄であることはいえる。このことは、中世期の当地が集落の中心ないし宅地ではなかったことを示すものと考えられる。対して、SD1002から出土した土器類は、調理具や共膳具、喫茶具といったいわゆる食器類であり、宅地ないし、居住地で使用される土器類によって構成されている。この状況は、集落の中でも居住域が近接することが考えられる。SD1002出土の土器類は、古手のもので大窯期3～4段階のものであり、少なくとも江戸時代初頭頃には周辺部に居住区が形成されていたことが考えられる。

ところが、SD1002埋没以後に比定できる出土土器類は極端に減少傾向にある。特に、江戸時代中期に比定できる土器類は数点出土しているだけで、ほとんど出土していない。これは、SD1002埋没年代と考えられる17世紀中葉～後葉以後と埋没以前と調査地の土地利用の様相がことなることを示すものと思われる。このような集落内における宅地や土地利用の変化や、土器の出土傾向の変化は、先述した横須賀御殿造営や大田川改修にともなって集落改変がおこなわれた傍証と考えられ、17世紀後葉頃に革新的な改変事業があったものと推察できる。

また、近世以前の調査地の様相に関して、山茶碗生産終焉後～江戸時代初頭までに比定できる土器類に注目すると、確認できるのは常滑焼の甕だけであり、居住地ないし集落に伴う土器類はほとんど出土していない。これは、当地の近世以前の様相を示すものと考えられ、中世期から江戸時代初頭に宅地化する以前は、居住地以外の土地利用がなされていたと考えられる。中世期における集落の拠点は現状では判明していないが、少なくとも、当調査地周辺でないことは確かであろう。

なお、中世以前に比定できる土器類については、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、土師皿などを確認しているがいずれも小片を数点確認している程度の出土量である。弥生土器については調査地より南東200メートル地点で弥生時代後期の遺構をともなって大量に出土する地点が確認されており、弥生時代後期の集落遺跡が周辺部に存在したことが明らかになっている。この例のように、今回出土した少量の土器類は、周辺部に集落が存在した傍証であり、弥生時代以降の土器類については周辺部に断続的に集落が営まれたことを示すものと考えられ、中心部が変わりながらも、3世紀以降の周辺部は集落が断続的に存在し続けたものと考えられる。そして、こうした集落が近世期になって、現在の集落により近い姿を形成するようになったものと考えられる。今後、周辺調査が進むにつれ、こうした状況は解明されることであろう。

## 第2節 東畑遺跡の調査成果

東畑遺跡は3章で報告した3地点に相当する。この調査地は2008年度に行われた東畑遺跡の調査地の南に位置している。2008年度の調査では、瓦葺き建物が想定される遺構の発見などがあり、本調査でもこれに関連する遺構の発見が期待された。しかし、本調査地ではこうした遺構の関連は全くなく、検出された主な遺構は溝、土坑、素掘井戸、ピット群、耕作地などであり、様相を異にする結果となった。2008年度調査では、建物遺構そのものは検出されていなかったが、12世紀後半と14世紀中葉に比定される瓦が一定量出土したことや火舎などの仏教関連遺物の出土などから、寺院の存在が想定された。しかし、この瓦を含めた遺物が寺院に付属するものであるか、持仏堂などが一堂のみの存在であったか遺構が発見されていないため不明瞭な部分が多かった。仮に寺院であるならば、今回の調査地において寺域内や関連施設の発見となる可能性もあったが、そのような遺構や寺院関連遺物は皆無に近く、瓦が数点出土したのみであった。したがって、2008年度の調査で想定された瓦葺堂宇は寺院関連のものではなく、持仏堂などの単独の堂宇であった蓋然性が高いといえる。

さて、今回の調査成果であるが、簡略に説明すると調査区中央部に耕作地（ST3128）があり、その北側、東側にピット群、南側に溝群が存在する状況であった。ST3128は耕作に伴う溝状の掘り込みと、この耕作地を区画する北限の溝（SD3042）を検出しており、これらの溝から、主に山茶碗・常滑焼甕の破片の出土がみられた。こうした状況から、この耕作地は中世期に比定することができる。また、ST3128の北側は耕作地の北限と考えられるSD3042を境に地山が一段高くなっている状況であった。この段差はSD3042を境に地山が掘り窪められた結果と考えられ、ST3128は水田遺構であった蓋然性が高い。なお、調査区南東隅でも、地山の高低差がある場所を確認しており、これが、SD3042と直交する方位であったため、この高まり以外の場所は、ある時期水田化していたことが想定される。ST3128の東限については、SD3083を境に同じ方位の溝が確認されていないため、この付近を想定しているが、この溝の東側で北側と同じようにピット群を検出している。この東側ピット群については、SD3042以北のような高まりの上に立地していないが、これは、攪乱が地山直上までおよんでいた結果であり、SD3083以东の中世段階での状況は定かではない。

ところで、ST3128の耕作溝の中軸方位は、現在実施されている中心街整備以前の周辺地割と同じ方位であることが判明した。この方位は当調査区の北で西流する大田川と一致しており、大田川が江戸時代前期に人工的に改変された河川であることから、少なくとも、江戸時代前期まで遡る地割であることは判明している。今回発見したST3128の方位はこの方位と一致することは、この地割が、ST3128が耕作された中世まで遡る傍証であろう。ST3128から出土した遺物は小片が多いため具体的年代の考察はできないが、現代に残る地割が中世まで遡る可能性があることにおいては非常に興味深い調査結果となった。

3地点3tr.で検出した溝や土坑は、大型でかつ遺物が比較的多く出土するものがあり、耕作以外の機能が想定される。これについては範囲が狭かったため、機能性については不明とせざるをえない。ただし、調査地の南側に広く展開する可能性が指摘でき、それが集落関連施設である可能性がある。SD3016やSE3015のように中世期の土器類を多量に含む遺構の存在は、当調査地周辺で中世期の集落関連の遺構の発見が期待される。



### 第3節 畑間遺跡の調査成果

畑間遺跡は4章で報告した4地点に相当する。調査面積が286㎡と非常に狭い範囲であったことや、上位層のほぼ全域が後世の削平によって消失していたため、成果としてあげられる情報はかなり少ない。その中で、成果報告をまとめつつ若干の考察を記述する。

4地点では、遺物包含層と考えられる上面まで機械掘削をおこない、人力で地山直上まで遺物を取り上げつつ掘削し、地山面で遺構検出をおこなう予定であった。しかし、包含層上面で遺構が確認できたため、包含層上面と地山上面の2面調査となった。以下、上層遺構と下層遺構にわけてまとめる。

#### i. 上層遺構

上層では主に掘立柱建物（SB4081）とそれに付随すると考えられる溝（SD4014）、地点貝塚（SX4004・4076・4080）、井戸（SX4010・4038・4043・4045）などである。

上層遺構は、下層遺構面を覆う包含層上面の遺構であることから、包含層出土遺物が上層遺構の上限年代を決めるカギであった。包含層出土遺物の中で確認できる新時代の土器類は江戸時代前期に比定できる常滑焼甕などであり、上層遺構はこの土器類を包含する堆積以後にその上限年代を求めることができる。したがって、上層遺構の年代は江戸時代前期末葉以降と位置付けることができる。地点貝塚については上層遺構として扱うが、SX4004などは上層遺構を検出した遺構面よりさらに上位層から掘り込まれており、遺構面より上位層が堆積していく過程の生活痕跡として捉えることができる。これらの地点貝塚から出土した貝殻類は、ハマグリなど食用のものであり、食べ殻を廃棄した土坑と考えられる。沿岸部に立地する当地ならではの食の歴史を窺わせる発見といえよう。また、これら上層遺構は先述した「知多郡大里村絵図」が描かれた年代に近い時期にも比定できる。絵図にみえる中心部の集落の南側に常連寺という寺院がみえるが、この寺院は現存しており、4地点のすぐ北に位置する。したがって、上層遺構はこの絵図に描かれた中心部に位置する集落の南端に位置すると考えられる。SB4081などの存在は、集落内の宅地の様相を示す成果といえる。

#### ii. 下層遺構

下層遺構として検出したものは、素掘溝（SD4075・4077・SX4078）、土坑（SK4070）ピット（P4069・P4070）に限定される。このうち、SK4078、P4069、P4070については、出土遺物がなかったため年代検討ができなかったほか、上層遺構面で検出できなかった可能性もある。SD4075・4077・SX4078については、包含層が遺構上面を覆っている状況を確認しているため下層遺構として間違いはないが、SD4075出土遺物の中に山茶碗や天目茶碗の小片を確認している。ただし、遺物の具体的な年代が判別できるものは少なく、中世期の溝という以外に詳細な年代の検証はできなかった。また、SX4078についても同様のことがいえる。したがって、具体的な年代は不明ながら、中世に比較的規模の大きい溝などが掘削されている状況は確認できた。

第4章でも報告したことであるが、当調査地では、1～3地点で確認したものと地山の状況が異なることが明らかとなっている。1～3地点については、いわゆる砂堆上に立地したものと考えられる砂へ粗砂を基本とした地山であったが、当調査区に関しては、砂へ粗砂にシルトブロックが混ざったものであり、他地点とは色調までも異質なものであった。これは、他地点にくらべ、地形そのものが異なる状況をしめすものと考えられる。推定になるが、調査地近辺は、砂堆に対して、微高地を形成していたも



のと考えられ、そうした状況がこうした堆積土を形成したものと考えられる。このように考えると、この微高地は中世期に何らかの形で土地利用され、その際に掘削された溝がSD4075やSX4078と考えられる。したがって、両者は同じ機能の溝であり、SX4078が埋め戻された後にSD4075を掘削したものと考えられる。なお、SD4075の肩の傾斜は中世期に見られる山城や居館の堀を思わせるものである。確証はないが、中世期の集落ないしその拠点が近接地に存在した可能性はあると考えられる。

### iii. 出土遺物の検討

4地点から出土した遺物は、破片総数で1084であった。この数字は決して多い数量ではない。また、年代も多期に亘っており、傾向がつかみにくい調査区でもあった。その中で、須恵器に関して特記しておきたい内容があったため記述しておく。

4地点から出土した須恵器は70点。これは全体からするとかなり少ない数値である。このうち、年代比定が可能なものは30点未満であったが、平安前期の数点を除くと、概ね飛鳥後期～奈良時代前半に比定できるものであった。また、これらの多くは調査区東側から多く出土しており、特に、飛鳥時代のものは調査区東端に集中していた。これは、調査区の東側に当該期の遺構の存在を示すものと考えられ、今後の調査の指針になるものと考えられる。

また、古代以降についても、他の調査地ではほとんど確認していない瓦質土器や土製品が出土している点にも注目できる。これについては出土量が微量であったため、言及することはできないが、周辺調査の際には注目すべき出土品であるといえる。今後の調査に期待したい。

以上、まとまりのない内容となったが、2010年度調査の成果を遺跡ごとにまとめた。今回の調査では、どの調査区も共通して後世の土地改変による削平が多く、遺構の遺存状況は決してよいものではなかった。その結果、出土遺物も同じように遺存状態のよいものではなかった。しかし、こうした状況は古くから集落や街並みが形成された土地ではありがちなことであり、今回もそうした状況を確認したに過ぎない。逆にいえば、古くから集落や町であったがために削平が多かったものと考えている。また、今回の調査地だけでは解明できない課題も多く浮上した。これに関しては周辺調査の成果と考え合わせた上で解決していくべきであり今後の課題である。

最後に、本報告書を刊行するにあたって、芦田淳一、宇佐美亜紀、國分篤志、齊藤 理、辻本裕也氏をはじめ多くの方の助言、協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

参考文献

- 愛知県史編さん委員会編 2007 『愛知県史』別編窯業2（中世・近世 瀬戸系） 愛知県
- 赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『シンポジウム 中世常滑焼を追って』資料集 同  
シンポジウム実行委員会
- 石川松衛 1928 『横須賀町誌』愛知県史編纂会・知多郡横須賀町役場
- 石黒立人・宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考  
古学論文集』 同刊行会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 貿易陶磁研究会
- 岡本直久 2005 「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相へ生産技術の展開と編年  
～資料集（第2版）』同シンポジウム実行委員会。
- 尾野善裕 2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築  
—』（第1回東海土器研究会資料） 東海土器研究会
- 北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮炊具の編年」『年報平成7年度』（財）愛知県埋蔵  
文化財センター
- 北村和宏1996 「尾張の『伊勢型鍋』『鍋と甕 そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム資料集） 東海  
考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『清洲城下町遺跡（Ⅱ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書  
第27集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『名古屋三の丸遺跡（Ⅲ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書  
第37集
- 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの—生産と流通—』記念講演会・  
シンポジウム資料集
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1999 『研究紀要』第7輯
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『研究紀要』第10輯
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター  
企画展図録）
- 齋藤孝正 2000 「猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」『日本の美術』第409号 至文堂
- 柴垣勇夫ほか 2004 『東海地方山茶碗研究の現在と課題』（中世土器・陶器編年研究会記録） 「中世土器・  
陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班
- 瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂—愛知県瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調  
査報告—』
- 立松彰ほか 1998 『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 立松彰・永井伸明 2004 『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 東海市教育委員会 1997 『愛知県東海市 東畑遺跡等試掘調査報告』
- 東海市教育委員会 1999 『愛知県東海市 上浜田遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2004 『愛知県東海市 畑間遺跡発掘調査報告』

- 東海市教育委員会 2005 『愛知県東海市 松崎遺跡確認調査報告』
- 東海市教育委員会 2009 『愛知県東海市 畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 常滑市教育委員会 2004 『特養建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書 金山屋敷遺跡』（『常滑市文化財調査報告書』第27集）
- 永井伸明・宮澤浩司 2007 「伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概報—」東海市文化調査委員会編『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会
- 永井宏幸・村木誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年—東海編—』木耳社
- 長島宏・柴田直光 1999 『愛知県 知多半島遺跡詳細分布調査 報告書』愛知県教育委員会
- 中野晴久 1996 「常滑羽釜」『甕と鍋 そのデザイン』（第4回考古学フォーラム資料集）東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 同 2005 「常滑・渥美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集（第2版）』同シンポジウム実行委員会
- 西本豊弘 松井章 1999 『考古学と動物学』（『考古学と自然科学』②）同成社
- 半田市立博物館 1993 『知多の古瓦』
- 福岡猛志 1991 『知多の歴史』松籟社
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2009 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 松井章 2008 『動物考古学』京都大学学術出版会
- 宮澤浩司 2009 「伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）—平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査概要報告—」東海市文化財調査委員会編『研究報告とうかい』第2号 東海市教育委員会
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

## 引用文献（自然科学）

- 藤下典之, 19, 84, 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究古文化財編集委員会編, 同朋舎, 638—654
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p
- 小林真生子・百原 新・岡崎浩子・岡本東三・柳澤清一, 2009, タブノキの生殖器官化石に基づく前期完新世のイベント堆積物の季節推定. 第四紀研究, 48 (6), 395—404
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p
- 奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤 寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷巖・速水格・堀 成夫・松隈明彦, 2000, 日本近海産貝類図鑑. 奥谷喬司編, 東海大学出版会, 1173p

郷中遺跡遺物観察表 \* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	口径 (高さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
1	3	1	7C15t	-	SD1002	瀬戸美濃	志野丸皿	11.2	2.4	6.7	長石少量	5Y5/1灰白色	長石釉	削り出し高台 トチン痕3ヶ所		
2	4	1	7C16t	-	SD1002	瀬戸美濃	志野丸皿	11.6	2.4	7.6	緻密	5Y8/1灰白色	長石釉	削り出し高台 トチン痕		口縁外周味?
3	-	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	志野丸皿	11.8	2.3	6.0	長石少量	5Y8/1灰白色	長石釉	削り出し高台	トチン痕2ヶ所	
4	1・2	1	7C16t	-	SD1002	瀬戸美濃	志野丸皿	11.4	2.2	6.7	長石微量	2.5Y8/2灰白色	長石釉	削り出し高台		外面底部墨書
5	5	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	鉄絵皿	11.6	2.5	7.5	長石少量	5Y7/2灰白色	灰釉・ 鉄釉	削り出し高台	トチン痕3ヶ所	花卉紋
6	6	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	鉄絵皿	11.6	2.6	7.1	長石微量	5Y8/2灰白色	灰釉・ 鉄釉	削り出し高台 トチン痕3ヶ所		花卉紋
7	9	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	天目茶碗	11.1	6.7	4.5	長石	釉7.5YR4/4褐色 胎部2.5Y7/3淡黄色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	
8	7	1	7C15t	-	SD1002	瀬戸美濃	天目茶碗	11.4	7.4	4.7	緻密	釉7.5YR3/3暗褐色 胎部10YR7/2灰黄褐色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	外面頸部帯状の釉N2/黒
9	8	1	7C15t 7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	天目茶碗	11.3	7.8	4.5	長石少量	釉5YR2/1黒褐色 胎部5Y7/1灰白色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	外面口縁部10YR5/6黄褐色
10	-	1	7C15t	-	SD1002 SD1003	瀬戸美濃	天目茶碗	11.6	(6.4)	-	長石少量	釉10YR3/1黒褐色 胎部2.5Y8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ 底面釉厚	
11	-	1	7C14t	-	SD1002	瀬戸美濃	天目茶碗	11.8	(5.7)	-	長石少量	釉10YR2/2黒褐色 胎部2.5Y8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	
12	-	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	天目茶碗	11.6	(6.1)	-	長石少量	釉N2/黒色 胎部2.5Y8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	
13	10	1	7C16t	-	SD1002	瀬戸美濃	半筒碗 (せんじ)	8.8	6.5	4.5	長石少量	釉2.5Y7/1灰白色 胎部10YR8/2灰白色	長石釉			口縁部内外面に破損後の二次焼成
14	-	1	7C15t	-	SD1003	瀬戸美濃	碗	-	(4.0)	4.2	長石少量	釉5Y7/2灰白色 胎部2.5Y8/1灰白色	灰釉			
15	12	1	7C15t	-	SD1003	瀬戸美濃	香炉	-	(4.8)	-	長石少量	釉7.5YR3/2黒褐色 胎部5Y7/2灰白色	鉄釉			外面屈曲部下に煤附着
16	18	1	7C15t	-	SD1002	瀬戸美濃	鉢	23.2	6.3	13.0	長石少量	2.5Y6/3にふい黄色	灰釉	回転ナデ	トチン痕1ヶ所	三つ又トチン
17	11	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	輪壳皿	-	(2.4)	5.9	長石 やや多量	釉5YR5/4にふい赤褐色 胎部2.5Y8/3淡黄色	錆釉			
18	17	1	7C15t	-	SD1003	瀬戸美濃	鉄絵鉢	-	(6.8)	-	長石少量	釉2.5Y8/2灰白色 胎部5Y8/2灰白色	灰釉・ 鉄釉			
19	21	1	7C15t	-	SD1002	土師質土器	内耳鍋	24.5	12.4	-	金雲母多量	10YR4/1褐灰色	-	体部斜へラケズリ 後ナデ	ハケ→一部ナデ	外面口縁～体部 ・内面底部煤附着
20	22	1	7C15t	-	SD1002	土師質土器	内耳鍋	25.0	(10.7)	-	雲母多量 石英・長石	10YR6/3にふい黄褐色	-	口縁部指圧痕 体部へラケズリ	横ハケ 体部工具 によるナデ?	外面煤厚く付着 内面受火による変色
21	-	1	7C14t 7C15t	-	SD1002 SD1003	土師質土器	内耳鍋	24.8	(9.5)	-	雲母多量	10YR6/3にふい黄褐色	-	口縁部指圧痕 体部へラケズリ	原体の異なるハケ →ナデ	外面煤厚く付着 粘土紐接合痕明瞭

郷中遺跡遺物観察表 \* 底径 (高台径・脚径を含む)、( ) は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考	
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面		
22	-	1	7C15t	-	SD1002 SD1003	瀬戸美濃	擂鉢	29.6	(8.5)	-	白色砂粒	10YR3/2暗赤褐	鉄釉		擂目18本/単位		
23	-	1	7C15t	-	SD1002 SD1003	瀬戸美濃	擂鉢	31.4	(11.5)	-	クサリ礫多量	2.5Y3/1暗赤灰色 外面 体部5YR5/6明赤褐色 下位5YR5/6明赤褐	鉄釉		擂目12本/単位		
24	-	1	7C16t	-	SD1002 SX1007	常滑焼 (赤物)	鉢	28.9	(6.6)	-	クサリ礫少量	10YR8/3浅黄褐色	-		口縁部ヨコナデ 磨滅	口縁部黒斑	
25	-	1	7C15t	-	SD1002	常滑焼 (赤物)	甕	-	(12.1)	19.4	石英 長石少量	2.5Y6/6褐色	-		器壁剥離 底部周 辺へラケズリ 底部周縁へラケズ リ	体部ヨコナデ 底部粗いナデ 部粗いナデ	
26	-	1	7C15t	-	SD1003	常滑焼 (赤物)	火鉢	11.0	6.2	12.1	クサリ礫・雲母 白色砂粒	5YR6/4にふい橙色	-		ロクロ成形 脚部へラナデ	内面煤付着 脚残存1つ	
27	23	1	7C15t	-	SD1002	常滑焼 (赤物)	くど	23.4	19.5	19.3	クサリ礫 雲母 長石	7.5Y7/4にふい橙色	-		板ナデ・指ナデ 工具痕	内面に煤	
28	-	1	7C15t	-	SD1003	常滑焼 (赤物)	くど	23.4	(11.6)	-	クサリ礫 石英・長石	7.5YR7/6褐色	-		粘土継接合痕明瞭	内面に煤	
29	24	1	7C15t	-	SD1003	常滑焼 (赤物)	くど	21.0	19.3	18.2	クサリ礫・雲 母	7.5YR6/6褐色	-		ヨコナデ及びナデ へラ状工具痕 ナデ	内面炭素吸着	
30	27	1	7C15t	-	SD1002	山茶碗	碗	-	(3.4)	6.4	石英・長石	10YR7/3にふい黄橙色	-		底部静止糸切り	高台粉殻圧痕	
31	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	碗	-	(2.4)	8.0	長石微量	N7/灰色	-			高台粉殻圧痕	
32	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	碗	-	(1.2)	6.8	石英・長石 微量	10YR7/2にふい黄橙	-		底部回転糸切り 底部中央部凹む	高台粉殻圧痕	
33	27	1	7C16s	-	SD1002	山茶碗	皿	8.0	2.1	3.7	長石 石英少量	10YR6/1褐灰色	-		底部回転糸切り		
34	-	1	7C16t	-	SD1002	土師器	皿	10.9	2.3	5.1	長石少量	2.5Y7/3浅黄褐色	-		底部回転糸切り 一ナデ		
35	-	1	7C15t	包含層	-	瀬戸美濃	志野丸皿	11.2	2.5	5.9	長石少量	5Y8/1灰白色	長石釉		削り出し高台 トチン痕3ヶ所	外面底部蒸着痕	
36	-	1	7C	包含層	-	瀬戸美濃	鉄絵皿	13.0	2.3	6.8	長石少量	2.5Y8/3淡黄褐色	鉄釉				
37	-	1	7C15t	-	SX1007	瀬戸美濃	天目茶碗	11.2	6.4	4.3	長石少量	釉7.5YR4/4褐色 胎部2.5Y8/1灰白色	鉄釉				
38	-	1	7C15s	包含層	-	瀬戸美濃	天目茶碗	10.4	(3.2)	-	長石少量	釉10YR3/3暗褐色 胎部10YR5/1褐灰色	鉄釉				
39	20	1	7C16s	-	SD1002	瀬戸美濃	擂鉢	29.8	11.8	12.0	長石 石英	2.5YR5/8明赤褐色	鉄釉			顕著な指圧痕 底部雑なナデ	
40	19	1	7C15t	-	SD1002 SX1007	瀬戸美濃	擂鉢	29.8	12.8	8.8	長石少量	10YR3/1暗赤灰色	鉄釉			擂目12本/単位	内面下方剥離



郷中遺跡遺物観察表 \* 底径 (高台径・脚径を含む)、( ) は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
41	30	1	7C	-	包含層	土師質土器	茶釜	12.6	(17.6)	-	雲母多量 長石	-	体部明瞭な指圧痕 下方ケズリ さえ	横ハケ→ナデ	把手部・体部煤付着	
42	31	1	7C18s	-	SX1026	陶器	羽釜	24.0	16.0	-	クサリ礫・金 雲母・長石	-			脚?つ残存 外面煤付着	
43	-	1	7C15t	-	SD1002	常滑焼	壺	17.4	(17.0)	-	長石少量	-			ロク口成形	
44	-	1	7C15t	-	SD1003	常滑焼	壺	-	(12.3)	12.5	長石多量	-	底部周辺工具痕	ナデ	内面粘土接合痕アリ	
45	34	1	7C15t	-	SX1007	土師器	ミニチュア 皿	3.7	0.8	-	長石	-	指ナデ 指圧痕	指ナデ 指圧痕	手握ね	
46	34	1	7C16s	-	SD1002	土師器	ミニチュア 皿	5.0	1.2	-	クサリ礫	-	指ナデ 指圧痕	板ナデ?	手握ね	
47	-	1	7C15t	-	SX1007	土師質土器	土錘	0.75	3.0	0.25	緻密	-	ナデ	ナデ	管状	
48	35	1	7C15t	-	SX1010	石器	砥石	4.25	(13.5)	1.7	-	-	表面に擦痕アリ			
49	36	1	7C	-	包含層	鉄製品	釘	0.4	7.55	0.6	-	-				
50	36	1	7C15t	-	SX1007	鉄製品	釘	0.45	11.8	0.2	-	-				
51	36	1	7C18s	-	SX1026	鉄製品	鏝	0.85	9.9	0.5	-	-				
52	36	1	7C18s	-	SX1026	鉄製品	鏝	0.7	11.0	0.7	-	-				
-	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	皿	-	(1.9)	4.4	石英・長石	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ	内面底部重ね焼痕 高台粉殻圧痕	
-	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	皿	-	(1.0)	5.4	長石少量	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ	高台粉殻圧痕	
-	27	1	7C15t	-	SD1002	山茶碗	皿	-	(1.3)	4.1	長石 石英少量	-	回転ナデ	回転ナデ		
-	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	碗	-	(2.4)	6.6	長石 石英少量	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ→指ナデ		
-	27	1	7C15t	-	SD1003	山茶碗	碗	-	(2.7)	8.6	石英・長石	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ		
-	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	碗	-	6.1	-	長石少量	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ		
-	27	1	7C15t	-	SD1003	山茶碗	碗	-	(2.1)	6.6	長石少量	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ		
-	27	1	7C15t	-	SX1007	山茶碗	鉢	27.8	(7.8)	-	長石	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ		

郷中遺跡遺物観察表 \* 底径 (高台径・脚径を含む)、( ) は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
-	28	1	7C16s	-	SD1002	灰釉陶器	碗	-	-	-	長石少量	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	口縁部のみ施釉	
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	(1.4)	-	-	長石少量	釉7.5Y6/3オリーブ黄 胎部2.5Y7/2灰黄色	灰釉	回転ナデ	内面施釉	
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	-	-	-	長石少量	釉7.5Y6/3オリーブ黄 胎部2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	内面施釉 内面底部釉剥ぎ	
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	(1.9)	-	6.2	長石少量	釉5Y6/4オリーブ黄 胎部2.5Y7/1灰白色	灰釉	底部回転糸切り →指ナデ		
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	(1.3)	-	-	長石少量	2.5Y7/1灰白色	灰釉	底部回転糸切り →指ナデ		
-	28	1	7C	包含層	-	灰釉陶器	甕	-	-	-	長石少量	釉7.5Y6/3オリーブ 胎部2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	外面刻線2条	
-	29	1	7C16s	-	SD1002	須恵器	坏身	-	-	-	長石少量	2.5Y7/2灰黄色	-	回転ナデ+回転へ ラケズリ		
-	29	1	7C15t	-	SD1002	須恵器	短頸壺	-	-	-	長石微量	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ		
-	29	1	7C15t	-	SD1002	須恵器	坏蓋	-	-	-	長石少量	2.5Y6/2灰黄色	-	回転ナデ		
-	29	1	7C	包含層	-	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英 微量	2.5Y7/1灰白色	-	ナデ		
-	29	1	7C15t	-	SD1003	須恵器	壺	-	-	-	長石微量	2.5Y7/2灰黄色	-	回転ナデ		
-	57	2	8C	包含層	-	土師器	ミニチュア 皿	4.5	1.1	-	長石・石英 微量	2.5Y7/2灰黄色	-	指ナデ指圧痕	手捏ね	
53	-	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	志野丸皿	11.6	2.5	5.9	長石少量	釉2.5Y8/1灰白色 胎部2.5Y8/1灰白色	長石釉	ロクロ成形 削り出し高台	ロクロ成形	
54	45	2	8C3p 8C4o	-	P2034 SK2021	染付	蓋	11.8	2.9	-	長石少量	釉10YR2/2黒褐色 胎部7.5YR4/1褐灰色	?	底部回転糸切り →ナデ	回転ナデ	
55	37	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	天目茶碗	11.8	(6.0)	-	長石少量	釉10YR3/2黒褐色 胎部2.5Y8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	
56	38	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	天目茶碗	11.6	6.6	4.2	長石少量	釉10YR2/1黒色 胎部2.5Y8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ 削り出し高台	回転ナデ	
57	43	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	輪壳皿	15.6	3.1	6.4	長石少量	釉7.5Y4/6褐色 胎部10YR8/4浅黄褐色	錆釉	回転ナデ	回転ナデ	
58	44	2	8C2o	-	SX2031	染付	輪花皿	13.0	3.1	7.0	緻密	釉5Y8/1灰白色 胎部5Y8/2灰白色	?			
59	46・47	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	土瓶?	-	(2.3)	8.4	長石少量	釉10YR5/8黄褐色 胎部2.5Y8/2灰白色	鉛釉	ロクロ回転へ →ナデ	回転ナデ	底部外面に墨書 脚1つ残存 三脚カ?
60	39	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	せんじ?	-	(3.7)	4.2	長石少量	釉10YR2/1黒褐色 胎部2.5Y8/1灰白色	鉄釉	回転へラケズリ 削り出し高台	回転ナデ	
61	41	2	8C 8C4p	包含層	SK2021	染付	端反碗	9.6	(4.4)	-	緻密	7.5Y8/1灰白色	?			

郷中遺跡遺物観察表 \* 底径 (高台径・脚径を含む)、( ) は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
62	42	2	8C	包含層	-	染付	広東碗	9.6	5.3	4.2	緻密	10YR8/1灰白色	?	外面	内面	
63	52	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	平鉢	20.8	6.1	8.6	長石少量	釉2.5Y8/3淡黄色 胎部2.5Y灰白色	-	体部へラケズリ 軸だれ	トチン痕2ヶ所 工具痕	
64	48	2	8C2q	包含層	-	土師質土器	皿	13.8	2.2	9.2	クサリ礫	10YR8/4浅黄褐色	-	口縁部ヨコナデ 底部粗いナデ	ヨコナデ	
65	-	2	8C2o 8C	包含層	SD2035	常滑焼	甕	-	(17.65)	21.0	長石多量	2.5YR5/8明赤褐色	-	底部周辺へラケズリ 工具痕		内面に有機物付着
66	-	2	7C	包含層	-	常滑焼	甕	-	(7.2)	20.4	クサリ礫 石英	5YR6/1褐灰色	-	へラ状工具痕 底部ナデ	へラナデ	
67	-	2	8C4p	包含層	-	山茶碗	皿	9.2	2.5	6.0	長石少量	5Y6/1灰色	-	底部不明		高台に粉殻圧痕
68	-	2	8C3o	-	SD2022	山茶碗	皿	-	(1.7)	4.4	クサリ礫・雲 母 石英	2.5Y5/1黄灰色	-	底部回転糸切り →ナデ		
69	55	2	8C1g	-	SD2042	山茶碗	皿	8.6	2.2	4.4	長石少量	2.5Y6/1黄灰色	-	底部丁寧なナデ	回転ナデ→指ナデ	
70	55	2	8C	包含層	-	山茶碗	皿	8.6	2.0	4.6	長石 石英	2.5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	
71	55	2	8C	包含層	-	山茶碗	皿	8.2	1.9	4.4	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-			
72	55	2	8C1q	-	SD2042	山茶碗	皿	8.6	1.7	5.1	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	
73	-	2	8C	包含層	-	山茶碗	皿	8.0	1.5	4.8	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	
74	55	2	8C2o	-	SK2007	山茶碗	皿	8.0	1.4	4.6	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り	回転ナデ→指ナデ	
75	54	2	8C2p	包含層	-	山茶碗	碗	-	(2.4)	7.8	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	底部不明		
76	54	2	8C2p	-	SD2036	山茶碗	碗	-	(2.25)	7.8	長石少量	10YR7/2にふい黄褐色	-	底部静止糸切り →ナデ		
77	54	2	8C	包含層	-	山茶碗	碗	-	(2.4)	7.2	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	底部静止糸切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台に粉殻圧痕
78	54	2	8C	包含層	-	山茶碗	碗	-	(3.2)	7.6	長石 クサリ礫少量	2.5Y7/1灰白色	-			高台に粉殻圧痕
79	54	2	8C2o	-	SK2007	山茶碗	碗	-	(1.8)	8.6	長石多量	5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り		
80	54	2	8C2o	-	SK2007	山茶碗	碗	-	(1.6)	7.7	長石多量	2.5Y7/1灰白色	-			
81	54	2	8C1q	-	SD2042	山茶碗	碗	-	(3.0)	6.1	長石多量	5Y8/1灰白色	-	底部回転糸切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	

郷中遺跡遺物観察表 \* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
82	54	2	8C	-	包含層	山茶碗	碗	-	(1.8)	6.6	石英 長石多量	5Y6/1灰白色	-	底部不明	回転ナデ→指ナデ	高台に粉殻圧痕・乾燥時の板痕
83	54	2	8C	-	包含層	山茶碗	碗	-	(1.6)	6.4	長石多量 クサリ礫	2.5Y7/1灰白色	-	底部静止系切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台に粉殻圧痕
84	54	2	8C3o	-	SD2022	山茶碗	碗	-	(1.7)	4.4	長石多量	N7/灰色	-	底部不明	回転ナデ→指ナデ	高台に粉殻圧痕
85	54	2	8C	-	包含層	山茶碗	碗	-	(2.35)	5.1	長石多量	5Y7/1灰白色	-	底部静止系切り →ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台に粉殻圧痕
86	54	2	8C3o	-	SD2022	山茶碗	碗	-	(3.4)	3.8	緻密	2.5Y8/1灰白色	-	底部回転系切り →ナデ		真美濃系 高台に粉殻圧痕
-	15	1	7C15t	-	SD1002	染付	大皿	-	-	-	緻密	-	染付			肥前系
-	16	1	7C15t	-	SD1002	青磁器	碗	-	-	-	長石微量	2.5Y7/1灰白色	青磁			竜泉系
-	32	1	7C15t	-	SD1002	土師質土器	羽釜	-	-	-	クサリ礫やや 多い	7.5Y5/4にふい褐色	-	ヨコナデ	板ナデ	
-	33	1	7C15t	-	SD1002	土師質土器	焔烙	-	-	-	クサリ礫やや 多い	7.5Y5/4にふい褐色	-	ヨコナデ	ナデ	
-	27	1	7C15t	-	SD1003	山茶碗	碗	-	(2.7)	8.6	石英・長石	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台粉殻圧痕
-	27	1	7C14t	-	SD1002	山茶碗	碗	-	6.1	-	長石少量	2.5Y6/1灰白色	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台粉殻圧痕
-	27	1	7C15t	-	SD1003	山茶碗	碗	-	(2.1)	6.6	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ	内面底部重ね焼痕 高台粉殻圧痕
-	27	1	7C15t	-	SX1007	山茶碗	鉢	27.8	(7.8)	-	長石	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ	
-	28	1	7C16s	-	SD1002	灰釉陶器	碗	-	-	-	長石少量	2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	口縁部のみ施釉
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	-	(1.4)	-	長石少量	釉7.5Y6/3オリーブ黄 胎部2.5Y7/2灰黄色	灰釉	回転ナデ		内面施釉
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	-	-	-	長石少量	釉7.5Y6/3オリーブ黄 胎部2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	内面施釉 内面底部釉剥ぎ
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	-	(1.9)	6.2	長石少量	釉5Y6/4オリーブ黄 胎部2.5Y7/1灰白色	灰釉	底部回転系切り →指ナデ	回転ナデ	
-	28	1	7C15t	-	SD1003	灰釉陶器	碗	-	(1.3)	-	長石少量	2.5Y7/1灰白色	灰釉	底部回転系切り →指ナデ	回転ナデ	
-	28	1	7C	-	包含層	灰釉陶器	甕	-	-	-	長石少量	釉7.5Y5/3灰オリーブ 胎部2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	外面刻線2条
-	29	1	7C16s	-	SD1002	須恵器	坏身	-	-	-	長石少量	2.5Y7/2灰黄色	-	回転ナデ+回転へ ラケズリ	回転ナデ	
-	29	1	7C15t	-	SD1002	須恵器	短頸壺	-	-	-	長石微量	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	

郷中遺跡遺物観察表

\* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	図版 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
-	29	1	7C15t	-	SD1002	須恵器	坏蓋	-	-	-	長石少量	2.5Y6/2灰黄色	-	回転へう削り	回転ナデ	
-	29	1	7C	包含層	-	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英 微量	2.5Y7/1灰白色	-	平行叩き目	ナデ	
-	29	1	7C15t	-	SD1003	須恵器	壺	-	-	-	長石微量	2.5Y7/2灰黄色	-	回転ナデ	回転ナデ	
-	49	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	-	長石少量	N8/1灰白色	-	回転ナデ	不明	
-	50	2	8C	包含層	-	瀬戸美濃	灰釉大鉢	-	-	-	長石少量	N8/1灰白色	-	回転ナデ	不明	
-	51	2	8C2o	-	SX 2029	瓦質土器	火鉢	-	-	-	雲母・砂粒子 多い	2.5Y5/3黄褐色	-	ミガキ	ナデ	
-	56	2	8C1p	-	SX 2003	土師質土器	伊勢型鍋	-	-	-	クサリ礫少量	2.5Y5/3黄褐色	-	ナデ	ナデ	
-	56	2	8C3o	-	SD 2018	土師質土器	伊勢型鍋	-	-	-	クサリ礫少量	2.5Y8/4浅黄色	-	ナデ	ナデ	
-	56	2	8C2o	包含層	-	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	クサリ礫多い	10YR7/6明黄褐色	-	ナデ	板ナデ	
-	56	2	8C2o	包含層	-	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	クサリ礫多い	10YR7/6明黄褐色	-	ナデ	ナデ	
-	56	2	8C3o	-	SX 2003	土師質土器	羽釜	-	-	-	砂粒子多い	10YR7/6明黄褐色	-	ヨコナデ	ナデ	
-	56	2	8C1p	-	SD 2018	土師質土器	羽釜	-	-	-	砂粒子多い	10YR7/6明黄褐色	-	ヨコナデ	ナデ	
-	57	2	8C	包含層	-	土師器	ミニチュア 皿	4.5	1.1	-	長石・石英 微量	2.5Y7/2灰黄色	-	指ナデ指圧痕	指ナデ指圧痕	手捏ね



東畑遺跡遺物観察表 \* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)		胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	底径 (長さ)				器高 (高さ)	底径 (厚さ)	
1	58	3	9F4i	-	SD3091	山茶碗	皿	9.1	2.8	5.2	5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粉殻圧痕
2		3	9F1i	包含層	-	山茶碗	皿	7.7	2.8	4.4	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
3	58	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	皿	7.8	1.95	4.8	5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
4	58	3	9F10f	包含層	-	山茶碗	皿	7.9	2.05	4.0	5Y7/2灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	内面煤・炭化物付着
5	58	3	9F1i	包含層	-	山茶碗	皿	7.8	1.85	4.6	2.5Y6/1黄灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	
6	58	3	9F	包含層	-	山茶碗	皿	7.6	1.9	4.6	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
7		3	8F20i	-	SK3030	山茶碗	皿	7.2	1.7	4.4	N7/灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	
8	58	3	9F1i	包含層	-	山茶碗	皿	7.9	1.65	4.9	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
9	58	3	9F9g	-	SD3016	山茶碗	皿	7.9	1.8	4.7	N8/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
10	58	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	皿	7.8	1.6	4.3	10YR7/2にふい黄橙色	-	回転ナデ	回転ナデ	
11	58	3	8F20j 9F1i	包含層	-	山茶碗	皿	7.4	1.5	4.6	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
12	58	3	9F9f	-	排水溝	山茶碗	皿	7.1	1.6	6.85	7.5YR5/2灰褐色	-	回転ナデ	回転ナデ	
13	58	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	皿	8.8	1.55	6.0	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
14	58	3	9F5o	包含層	-	山茶碗	皿	7.6	1.45	4.6	2.5Y7/2灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
15		3	9F5i	包含層	-	山茶碗	皿	7.3	1.9	3.9	2.5Y7/3浅黄色	-	回転ナデ	回転ナデ	
16		3	9F	-	重機掘 削	山茶碗	碗	-	(2.8)	7.4	2.5Y8/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	内面重ね焼き痕
17	59	3	9F10g	包含層	-	山茶碗	碗	-	(3.7)	7.4	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粉殻圧痕
18	59	3	9F4i	-	SD3091	山茶碗	碗	15.6	4.7	7.4	10YR7/2にふい黄橙色	-	回転ナデ	回転ナデ	
19	59	3	9F1i	包含層	-	山茶碗	碗	15.3	5.2	6.4	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粉殻圧痕
20	59	3	9F7j	包含層	-	山茶碗	碗	15	5.5	6.8	2.5Y8/2灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粉殻圧痕
21	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	13.3	4.8	6.4	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	外面口縁部重ね焼き痕 高台に粉殻圧痕

東畑遺跡遺物観察表 \* 底径 (高台径・脚径を含む)、( ) は残高

図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
22	59	3	9F10g	包含層	-	山茶碗	碗	14.4	5.2	5.8	長石	2.5Y7/2灰白色	-	底部静止糸切り	回転ナデ	高台に粗殻圧痕
23	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	14.4	5.1	7.3	長石	2.5Y7/1灰白色	-	底部静止糸切り	回転ナデ	
24	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	13.6	5.3	6.4	長石少量	5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粗殻圧痕
25	59	3	9F10g	包含層	-	山茶碗	碗	-	(3.8)	-	長石	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台剥離
26	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	14	5.35	6.3	長石	N7灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
27	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	13.4	5.7	6.4	長石	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粗殻圧痕 外面底部木状圧痕
28	59	3	9F5o	包含層	-	山茶碗	碗	14.6	5.75	6.2	長石	2.5Y7/2灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粗殻圧痕
29	59	3	9F9p	-	SE3015	山茶碗	碗	13.8	6.2	5.8	石英少量	10YR7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粗殻圧痕
30	59	3	9F10g	包含層	-	山茶碗	碗	12.8	5.0	5.2	石英 長石	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台剥離
31	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	13.4	4.45	7.0	長石少量	2.5Y7/2灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台に粗殻圧痕
32	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	15	5.1	6.4	長石微量	5Y6/1灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	
33	59	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	碗	13.4	5.05	5.4	長石少量	2.5Y6/1黄灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	
34	59	3	9F9e	包含層	-	山茶碗	碗	13.4	4.3	6.0	石英	2.5Y8/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
35	59	3	9F5o	包含層	-	山茶碗	鉢	-	(6.5)	14.0	長石	2.5Y5/1黄灰色	-	体部回転ヘラケズ リ	回転ナデ	
36	64・ 65	3	9F9g	包含層	-	山茶碗	鉢	-	(3.7)	-	長石少量	2.5Y6/1黄灰色	-	体部回転ヘラケズ リ 底部糸切り	回転ナデ	
37	64・ 65	3	9F10g	包含層	-	山茶碗	鉢	-	(3.5)	13.0	長石	2.5Y6/2黄灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	
38	64・ 65	3	9F9g	包含層	-	瀬戸美濃	底卸皿	-	(2.6)	8.4	緻密	7.5YR6/3オリーブ黄色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付
39	64・ 65	3	9F9f	包含層	-	瀬戸美濃	天目茶碗	-	(2.9)	3.7	緻密	N5/1黒色	鉄釉	回転ナデ	回転ケズリ	削り出し高台
40	66	3	9F9f	-	SD3009	瀬戸美濃	灰釉天目?	13.5	(5.7)	-	石英微量	7.5YR6/3オリーブ黄色	灰釉	回転ナデ	回転ケズリ	高台部欠失
41	66	3	9F9f	-	SD3009	土師質土器	土師皿	6.8	1.3	3.4	クサリ礫少量	10YR8/3淺黄橙	-	ヨコナデ	指押え	
42	61	3	9F5j	包含層	-	常滑	壺	-	-	-	長石微量	5YR4/2灰褐色	-	回転ナデ	ヨコナデ 頸部付近乱ナデ	

東畑遺跡遺物観察表 \* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	口径 (幅)	法量 (cm)		胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構				器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
43	61	3	9F5o		包含層	常滑	壺	13.8	(4.1)	-	砂粒少量	7.5YR7/1明褐色	-	回転ナデ	ヨコナデ	
44	61	3	9F10 f		包含層	常滑	壺	11.4	(5.0)	-	長石やや多い	2.5YR5/4にぶい赤褐色	-	回転ナデ	ヨコナデ	
45	61	3	9F5o		包含層	常滑	壺	11.0	(6.0)	-	長石少量	5YR4/2灰褐色	-	回転ナデ	ナデ 頸部付近指押え	
46	61	3	9F9g		SD3016	常滑	甕?	13.4	(6.0)	-	石英少量	7.5YR4/3褐色	-	回転ナデ	ヨコナデ	
47	-	3	9F9g		SD3016	常滑	甕	-	(4.0)	13.6	長石多量	7.5R4/3にぶい赤褐色	-	板ナデ・ヘラナ デ?	乱ナデ	
48	-	3	9F9g		SD3016	常滑	甕	-	(5.4)	17.6	長石少量	10YR5/1褐色	-	タテナデ(板状工 具による)	指押え+軽いナデ	
49	-	3	9F9g		SD3016	常滑	甕	14.0	(6.4)	-	石英・長石 多量	2.5Y8/2灰白色	-	板状工具によるナ デ+押え+ヘラケ スリ	板状工具によるナ デ	
50	-	3	9F9g		SD3016	常滑	甕	-	(4.8)	-	長石少量	5YR5/1褐色	-	ヘラ状工具による 軽いナデ	弱いナデ	粘土紐積み上げ
51	60	3	9F9g		包含層	常滑	甕	25.2	(4.9)	-	石英少量	5YR3/4暗赤褐色	-	回転ナデ	ヨコナデ+乱ナデ	
52	60	3	9F9g		SD3007	常滑	甕	44.2	(9.8)	-	長石多量	7.5YR5/1褐色	-	回転ナデ	乱ナデ	粘土紐積み上げ
53	60	3	9F9g		SD3016	常滑	甕	44.0	(6.4)	-	クサリ礫少量	7.5YR5/1褐色	-	ヨコナデ+工具に よる押え	乱ナデ	粘土紐積み上げ
54	60	3	9F9g		包含層	常滑	甕	38.4	(7.1)	-	長石少量	10YR5/4にぶい黄褐色	-	回転ナデ	乱ナデ	粘土紐積み上げ
55	60	3	9F9g		包含層	常滑	甕	27.3	(6.35)	-	白色粒子少量	7.5YR4/4褐色	-	回転ナデ	乱ナデ	
56	63	3	9F10g		包含層	常滑	鉢	19.6	9.6	18.2	石英多量	7.5YR4/2灰褐色	-	回転ナデ	回転ナデ	底部にハナレ砂付着
57	63	3	9F9g		SE3015	常滑	鉢	21.0	9.2	15.0	長石少量	5YR5/4にぶい赤褐色	-	板状工具によるナ デ	ヨコナデ	粘土紐積み上げ
58	63	3	9F9g		SE3015	常滑	鉢	23.0	9.7	-	長石少量	5YR4/2灰褐色	-	軽い回転ナデ	粗い回転ヘラナデ	
59	63	3	9F9g		包含層	常滑	鉢	42.0	(8.3)	-	長石微量	10YR4/1褐色	-	タテ方向の板ナデ	板状工具による乱 ナデ	
60	63	3	9F9g		包含層	常滑	鉢	36.2	(4.5)	-	長石少量	10YR4/1褐色	-	板ナデ	ヨコナデ	
61	69	3	9F9g		包含層	常滑	羽釜	27.6	(3.2)	-	緻密	7.5YR7/4にぶい橙	-	ナデ	ナデ+板ナデ	鑄部上端に有孔アリ
62	67	3	9F9f		SD3009	土師質土器	鉄鍋	24.2	(9.3)	-	雲母多量	2.5Y5/1黄灰色	-	ヘラケズリ+ナデ	強いナデ	鉄鍋を模倣した土師質鍋

東畑遺跡遺物観察表 \* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
63		3	9F9g	包含層	-	常滑	把手付鍋	-	(7.6)	-	5YR6/6橙色		ナテ+指ナデ	工具によるナデ	常滑焼赤物?	
64	68	3	9F9g	包含層	-	土師質土器	伊勢型鍋	32.8	(3.25)	-	石英少量		ヨコナデ	ナデ		
65	70	3	9F9f	包含層	-	古式土師器	甕	20.0	(4.5)	-	雲母多量		ハケメ 口縁部ヨコナデ	ハケメ→ナデ	宇田型鍋	
-	60	3	9F9g	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石多量		粗い回転ナデ	乱ナデ	粘土組織み上げ	
-	60	3	9F1i	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石・石英 少量		回転ナデ	乱ナデ		
-	60	3	9F9g	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石・石英 多量		回転ナデ	乱ナデ	粘土組織み上げ	
-	60	3	9F10f	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石多量		回転ナデ	回転ナデ		
-	62	3	9F10g	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石多量		乱ナデ	乱ナデ 指押え	外面格子叩き目	
-	62	3	9F10g	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石多量		乱ナデ	乱ナデ 指押え	外面格子叩き目 粘土組織み上げ	
-	62	3	9F4o	-	SX3087	常滑	甕	-	-	-	石英・長石 やや多い		ヨコナデ	ヨコナデ 指押え	外面格子叩き目	
-	62	3	9F9g	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石多量		柝状工具によるナ デ	粗いヨコナデ	外面格子叩き目	
-	62	3	9F9f	-	SD3009	常滑	甕	-	-	-	長石多量		タテ方向のナデ	ヨコナデ 指押え	外面格子叩き目	
-	62	3	9F5j	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	石英・長石 少量		弱いナデ	粗いヨコナデ	平行叩き目 粘土組織み上げ	
-	62	3	9F9g	包含層	-	常滑	甕	-	-	-	長石やや多い		弱いナデ	弱いヨコナデ	平行叩き目 粘土組織み上げ	
-	63	3	9F9g	包含層	-	常滑	鉢	-	(7.5)	-	長石少量		弱い乱ナデ	ヨコナデ		
-	63	3	9F9g	包含層	-	常滑	鉢	-	(4.6)	-	長石微量		弱い乱ナデ	ヨコナデ		
-	63	3	9F9g	包含層	-	常滑	鉢	-	(4.6)	-	長石・石英 多量		粗いヨコナデ	ヨコナデ		
-	63	3	9F9g	包含層	-	常滑	鉢	-	(6.7)	-	長石やや多い		指押え	回転ナデ		
-	68	3	9F9g	包含層	-	土師質土器	伊勢型鍋	-	-	-	長石少量		ヨコナデ	ヨコナデ		
-	68	3	9F9g	-	SD3016	土師質土器	伊勢型鍋	-	-	-	石英微量		ヨコナデ	ナデ		
-	68	3	9F1i	包含層	-	土師質土器	伊勢型鍋	-	-	-	雲母		ヨコナデ	ナデ		

東畑遺跡遺物観察表 \* 底径（高台径・脚径を含む）、（ ）は残高

図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
-	68	3	9F1i	包含層	-	土師質土器	伊勢型鍋	-	-	-	石英微量	2.5Y6/2灰黄色	-	ヨコナデ	ナデ	
-	70	3	9F9g	-	SE3015	古式土師器	甕	-	-	-	雲母少量	10YR4/2灰黄褐色	-	ハケメ	指押え	宇田型鍋
-	71	3	9F9g	包含層	-	瓦	軒平	-	-	-	クサリ礫・ 長石少量	10YR7/2にふい黄橙色	-	指押え	布目	無文
-	71	3	9F9g	包含層	-	瓦	軒平	-	-	-	クサリ礫・ 長石少量	10YR7/2にふい黄橙色	-	指押え	布目	無文
-	72	3	9F10f	包含層	-	陶器	擂鉢	-	(4.4)	-	石英微量	10YR8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ	摺目	
-	73	3	9F1i	包含層	-	土師器	加工円盤	6	0.8	5.5	長石微量	7.5YR7/6橙色	-	外縁部打ち欠き		
-	73	3	9F10g	包含層	-	土師器	加工円盤	6.2	0.8	4.3	長石微量	10YR8/3浅黄色	-	外縁部ナデ		
-	73	3	9F5j	包含層	-	山茶碗	加工円盤	4.9	0.9	3.6	長石・石英 多量	10YR6/1褐灰色	-	外縁部打ち欠き		
-	73	3	9F9g	-	SD3016	山茶碗	加工円盤	5.8	0.7	5.5	長石少量	2.5Y7/1灰白色	-	外縁部打ち欠き		
-	73	3	9F9g	包含層	-	土師器	加工円盤	-	0.7	-	長石微量	7.5YR7/6橙色	-	外縁部研磨		
-	75	3	9F9f	-	SD3009	山茶碗	碗	-	(2.2)	-	緻密	2.5Y8/3淡黄色	-	回転ナデ	回転ナデ	東濃型
-	75	3	9F9c	包含層	-	山茶碗	碗	-	-	-	緻密	2.5Y8/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	東濃型
-	75	3	9F10g	包含層	-	山茶碗	碗	12.2	(3.0)	-	長石微量	2.5Y8/2灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	東濃型
-	75	3	9F9f	-	SD3009	山茶碗	碗	-	-	-	緻密	2.5Y8/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	東濃型 高台刳殻圧痕

図面 番号	写真 番号	地点	グリップ	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
1	72	4			東西排水溝	山茶碗	皿	-	-	3.4	石英少量	2.5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台なし
2	72	4	9D15s		包含層	山茶碗	皿	-	-	3.8	長石少量	10YR7/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台なし
3	72	4	9D13p		SX4079	山茶碗	皿	8.6	2.0	4.2	長石少量	2.5Y6/1黄灰色	-	回転ナデ	?	高台なし 自然釉付着により内面調整不明
4	72	4	9D15s		4038	山茶碗	皿	8.3	1.9	5.6	長石少量	2/5Y7/2灰白色	-	布?ナデ	回転ナデ	端部自然釉
5	72	4	9D13o		SK4001	山茶碗	碗	-	(2.0)	8.4	長石少量	N8/1灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付
6	72	4	9D14r		4075上層	山茶碗	碗	-	(3.5)	8.4	白色・黒色 砂粒	N7/灰白色	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ→指ナデ	内面底部重ね焼痕 高台外面自然釉
7	72	4	9D13p		SX4043	山茶碗	碗	-	(1.7)	7.6	長石多量	5Y7/1灰白色	-	回転ナデ	ヨコナデ	
8	72	4	9D14r		4075 最下層	山茶碗	碗	-	(1.8)	6.5	白色砂粒	2.5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台初段圧痕
9	72	4	9D13o		SK4001	山茶碗	碗	14.0	5.8	6.4	長石多量	2.5Y6/1黄灰色	-	回転ナデ	回転ナデ	高台初段圧痕
10	-	4	9D14r		4075 最下層	山茶碗	碗	-	(1.8)	6.5	白色砂粒	2.5Y7/1灰白色	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台初段圧痕
11	-	4	9D		東西排水口	山茶碗	碗	-	(3.8)	5.6	1~2mm大 の礫	2.5Y7/2灰黄色	-	回転ナデ→布ナ デ?	回転ナデ→指ナデ	
12	-	4	9D		東西排水口	山茶碗	碗	-	(3.8)	5.6	1~2mm大 の礫	2.5Y7/2灰黄色	-	回転ナデ→布ナ デ?	回転ナデ→指ナデ	
13	-	4	9D12o		4050	山茶碗	碗	10.6	2.75	6.1		2.5Y8/1灰白色	-	回転ナデ	回転ナデ	
14	73	4	9D14r		P4074	山茶碗	碗	10.8	2.8	3.5	長石・石英多 量	2.5Y8/1灰白色	-	底部回転糸切り →指ナデ	回転ナデ→指ナデ	高台なし
15	75	4	9D14r		4075	瀬戸美濃	天目茶碗	11.4	(4.5)	-	顕著な砂粒無 し	釉10Y2/1黒 胎土7.5YR5/6明褐色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	
16	76	4	9D12o		SX4050	瀬戸美濃	小皿	8.3	1.9	5.6	緻密	釉7.5Y8/1灰白色 胎土5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ+指ナデ	回転ナデ+指ナデ	
17	77	4	9D		表土掘削	瀬戸美濃	丸碗	8.4	4.3	3.2	長石微量	釉5Y7/2灰白色 胎土2.5Y8/1灰白色	染付	回転ナデ	回転ケズリ	陶胎染付
18	78	4	9D		表土掘削	瀬戸美濃	丸碗	11.8	(4.5)	-	緻密	5Y8/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ケズリ	陶胎染付カ
19	79	4	9D15s		SX4029	磁器	蓋	10.5	2.5	4.2	緻密	2.5Y7/2灰黄色	染付	回転ナデ	回転ケズリ	近・現代?
20	80	4	9D15s		SX4028	磁器	小碗	8.0	4.3	3.1	緻密	N8/1灰色	染付	回転ナデ	回転ナデ	連弁紋
21	74	4	9D4r		SD4075	須恵器	坏蓋	-	(1.9)	-	長石少量	2.5Y6/1黄灰色	-	回転ナデ+回転ヘ ラケズリ	回転ナデ	

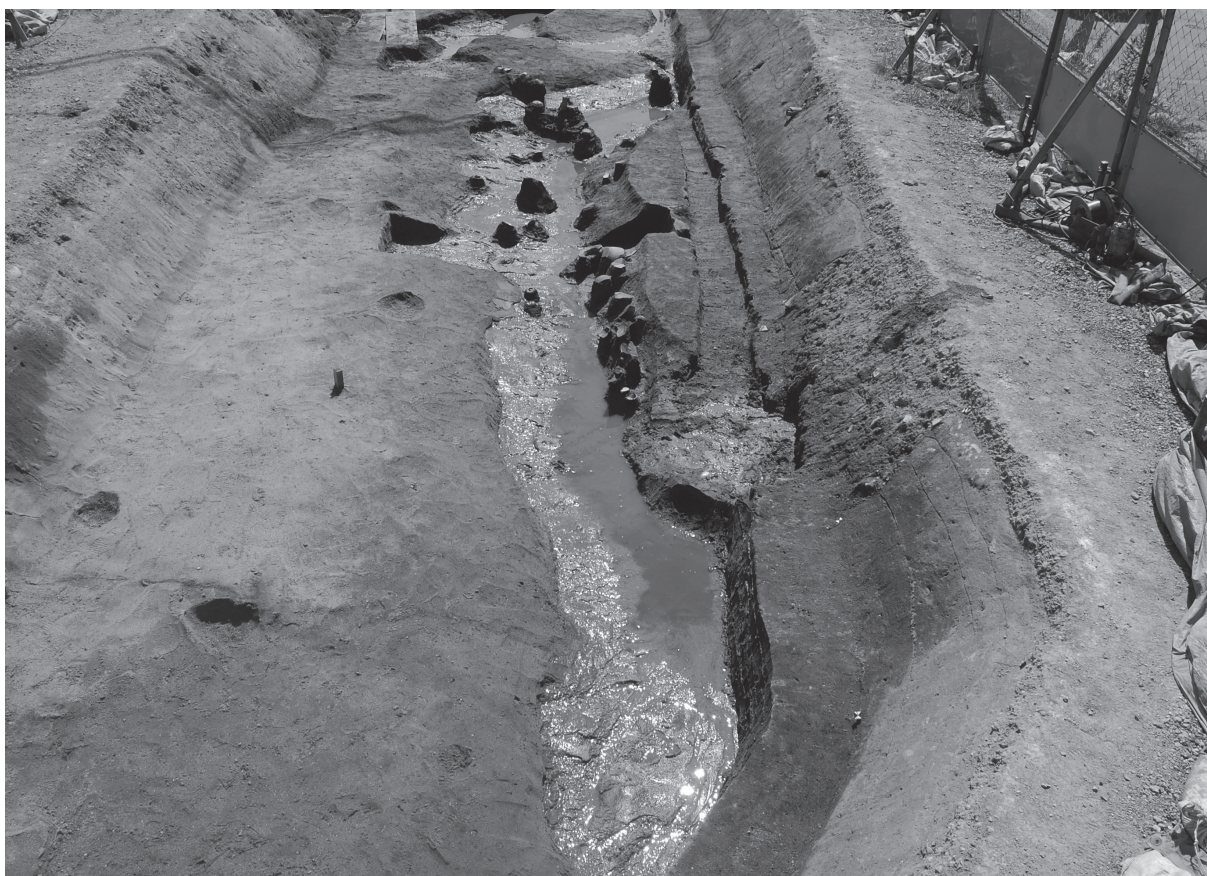


図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
22	74	4	9D15s	-	SX4038	須恵器	坏蓋	-	(1.9)	-	長石少量	10YR5/2灰黄褐色	-	回転ナデ+回転ヘラケズリ	回転ナデ	
23	74	4	9D15s	-	SX4038	須恵器	坏蓋	-	(1.4)	-	長石少量	N7/1灰白色	-	回転ナデ+回転ヘラケズリ	回転ナデ	
24	74	4	9D14r	最上層	SD4075	須恵器	高坏	-	(5.8)	9.0	長石少量	2.5Y6/1黄灰色	-	回転ナデ+回転ヘラケズリ	回転ナデ	
25	74	4	9D14r	最上層	SD4075	須恵器	坏	-	(3.9)	9.2	長石少量	N5/1灰色	-	回転ナデ+回転ヘラケズリ	回転ナデ	
26	74	4	9D15s	包含層	-	須恵器	坏	-	(1.5)	11.6	長石少量	10YR7/4にふい黄橙	-	回転ナデ+回転ヘラケズリ	回転ナデ	
27	88	4	9D13g	(半截)	P4003	土製品	土錘	1.4	(3.8)	-	雲母やや多い	10YR4/1褐灰色	-	ナデ	-	
28	88	4	9D13o	包含層 上層		土製品	土錘	1.4	4.3	-	雲母やや多い	5YR6/4にふい橙	-	ナデ	-	
29	88	4	9D15s	-	P4046	土製品	土錘	1.1	4.2	-	石英・雲母少量	10YR8/3浅黄橙	-	ナデ	-	
30	88	4	9D	表土掘 削	-	土製品	土錘	0.7	3.4	-	雲母少量	5YR6/6橙	-	ナデ	-	
31	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.25	3.8	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
32	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.15	4.2	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
33	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.15	4.3	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
34	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.3	4.2	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
35	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.15	4.0	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
36	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.4	4.6	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
37	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.25	4.2	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
38	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.15	4.0	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
39	89	4	9D	表土	-	土製品	陶錘	1.2	4.1	-	緻密	2.5Y6/8橙	-	ナデ	-	陶製
40	83・ 84	4	9D12o	-	SX4005	瓦質土製品	温石(糠炉)	6.4	(7.7)	2.1	雲母多い	10YR7/1灰白色	-	工具によるナデ	工具によるナデ	中央部に有孔
41	86	4	9D14p	包含層	-	土製品	ミニチュア 土師皿	3.0	1.1	-	長石少量	5YR6/6橙	-	指圧+ナデ	指圧+ナデ	手捏ね
42	86	4	9D14p	包含層	-	土製品	ミニチュア 土師皿	2.6	1.1	-	長石少量	5YR6/6橙	-	指圧+ナデ	指圧+ナデ	手捏ね

図面 番号	写真 番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
				層位	遺構			口径 (幅)	器高 (長さ)	底径 (厚さ)				外面	内面	
43	85	4	9D	表土掘 削	-	瓦質土製品	紡錘車	2.3	5.0	1.6	長石少量	M4/1灰色	-	ナデ	ケズリ	中央部に有孔
44	90	4	9D15s	-	SX4038	金属器	鉄釘	0.6	13.35	0.55	-	10YR7/4にふい黄橙	-	-	-	丸釘
45	90	4	9D13p	包含層	-	金属器	鉄釘	0.4	(3.15)	0.4	-	10YR7/4にふい黄橙	-	-	-	角釘
46	90	4	9D13p	包含層	-	金属器	鉄釘	0.9	(5.5)	0.6	-	10YR7/4にふい黄橙	-	-	-	角釘



1 SD1002 検出状況 (北より)



2 SD1002 土器出土状況① (北より)



写真2 郷中遺跡 (1 地点)



3 SD1002 土器出土状況② (北より)



4 SD1002 土器出土状況③ (南西より)



写真3 郷中遺跡 (1地点)



5 SD1002 土器出土状況④ (東より)



6 SD1002 土器出土状況⑤ (東より)



7 SD1002 土器出土状況⑥ (西より)



8 SD1002 動物遺体出土状況 (東より)



9 SD1002 完掘状況 (北より)



写真4 郷中遺跡（1地点）



10 SE1012 半截状況（東より）



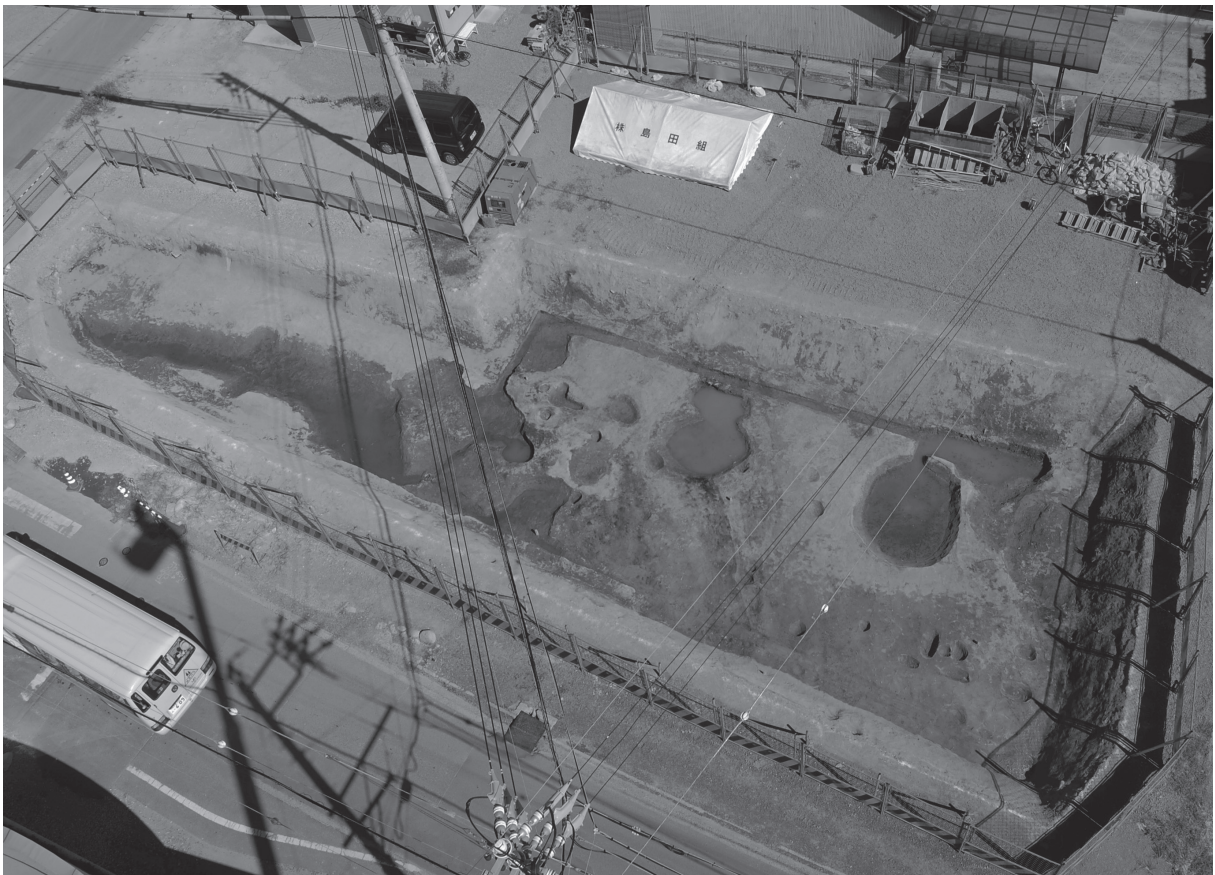
11 SE1012 完掘状況（南より）



12 SK1010 半截状況（西より）

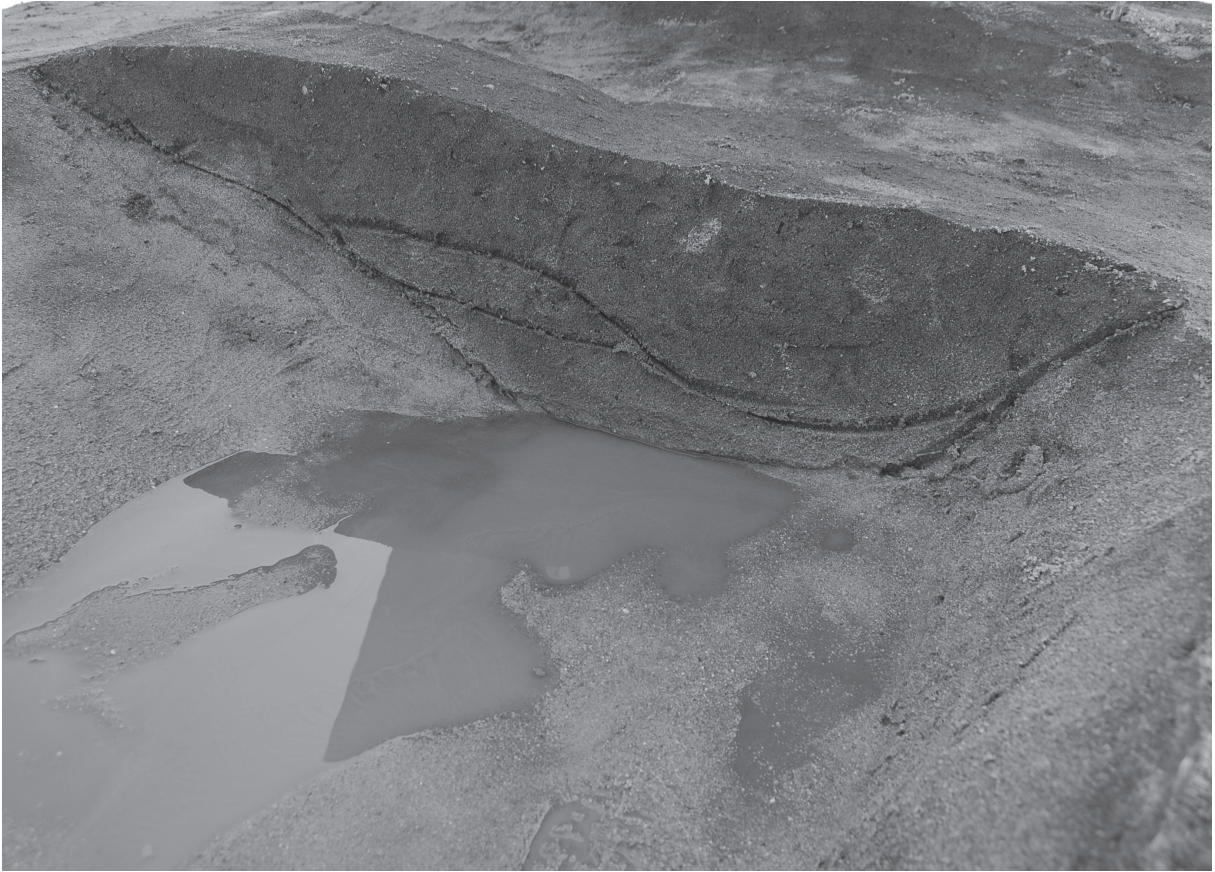


13 P1001 半截状況（南より）

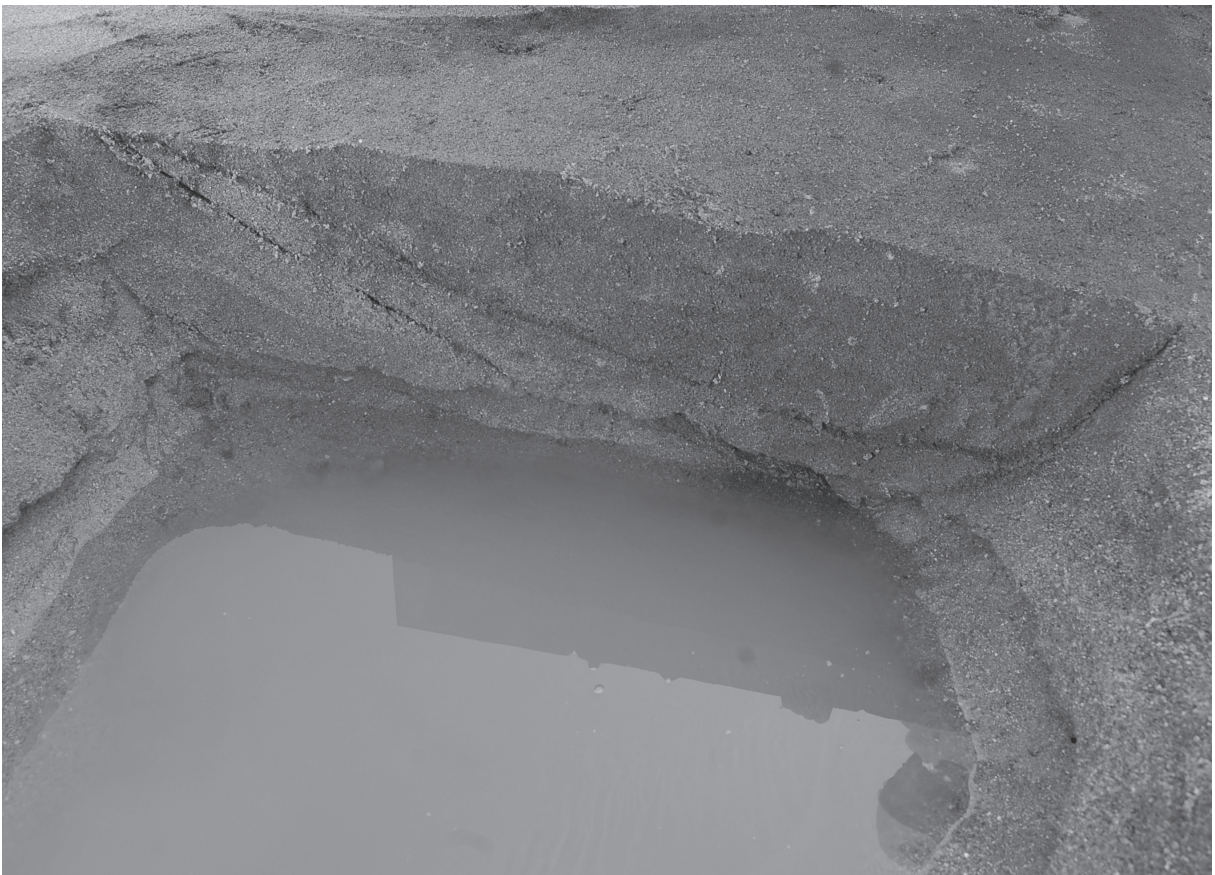


14 1工区全景（東より）





15 SD2022 断面（北より）



16 SD2036 断面（北より）



写真6 郷中遺跡（2地点）



17 SD2002・2036 重複部断面（東より）



18 SD2022・2036 完掘状況（南より）



写真7 郷中遺跡（2地点）



19 SX2023 半截状況（西より）



20 SX2023 棧瓦出土状況（西より）



21 SX2039 井筒出土状況（南より）



22 SX2041 井筒出土状況（南より）



23 2工区全景（南西より）



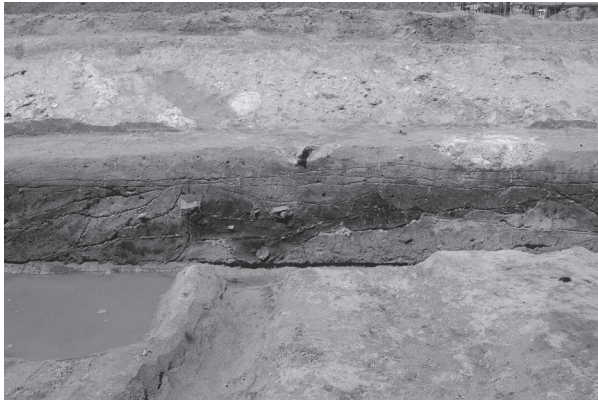
写真8 東畑遺跡（3地点）



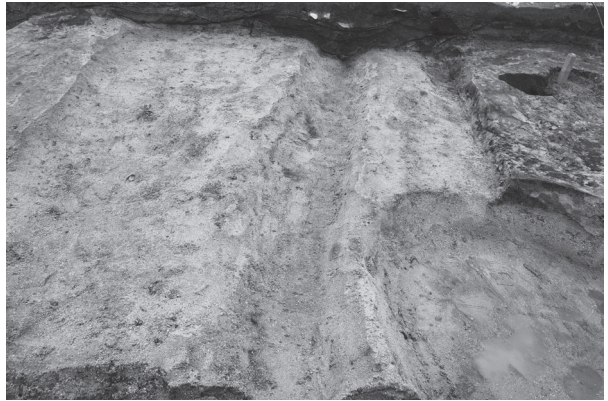
24 SD3016 土器出土状況（北より）



25 SD3016 土器出土状況（北西より）



26 SD3016 断面（南より）



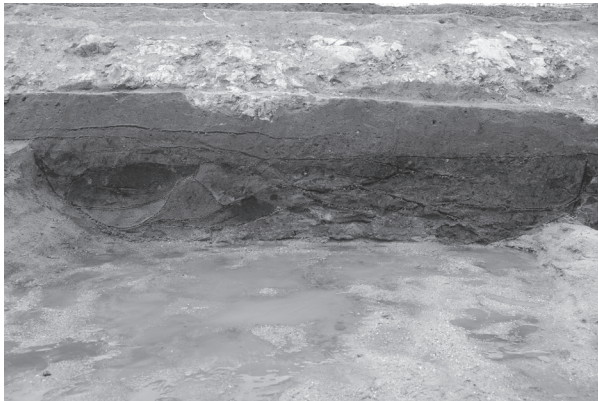
27 SD3016 完掘状況（北より）



28 SD3023 掘削状況（北より）



29 SD3023 断面（北より）



30 SX3114 断面（北より）



31 SX3114 完掘状況（南東より）



写真9 東畑遺跡（3地点）



32 ST3128 北方溝群検出状況（南東より）



33 ST3128 北方溝群完掘状況（南東より）



34 SD3042 断面（東より）



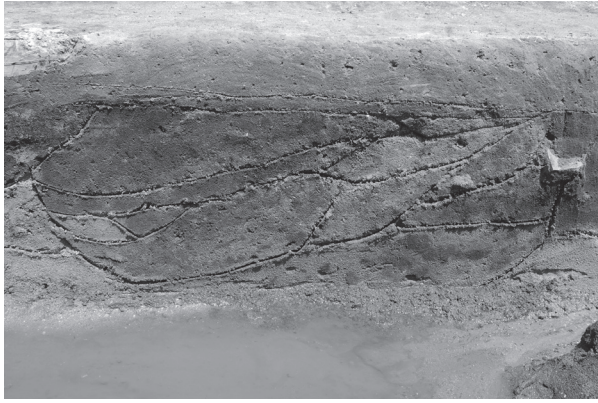
35 SD3042 完掘状況（東より）



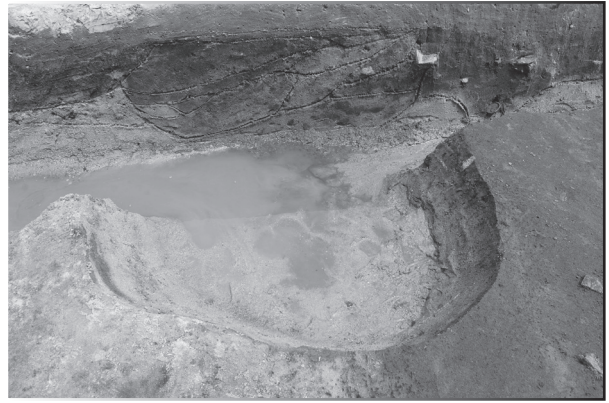
36 ST3128 全景（南東より）



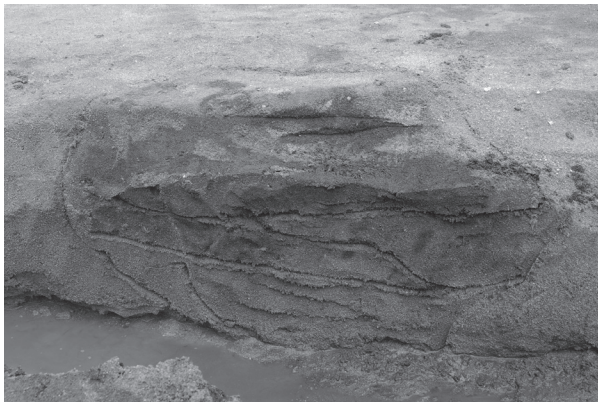
写真 10 東畑遺跡 (3地点)



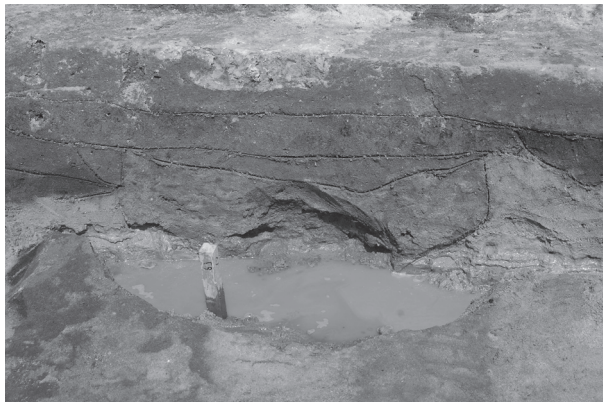
37 SK3015 断面 (南より)



38 SK3015 完掘状況 (南より)



39 SK3041 断面・検出状況 (南より)



40 SK3120 断面・完掘状況 (西より)



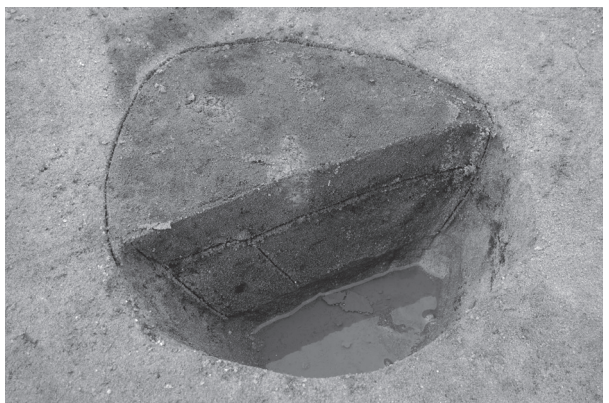
41 SK3073 検出状況 (北西より)



42 SK3073 完掘状況 (北より)



43 SK3075 検出状況 (西より)



44 SK3075 半截状況 (南西より)





45 1tr. 北部ピット群 SX3129（南東より）



46 2tr. 東部ピット群 SX3130（南西より）



写真 12 東畑遺跡（3地点）

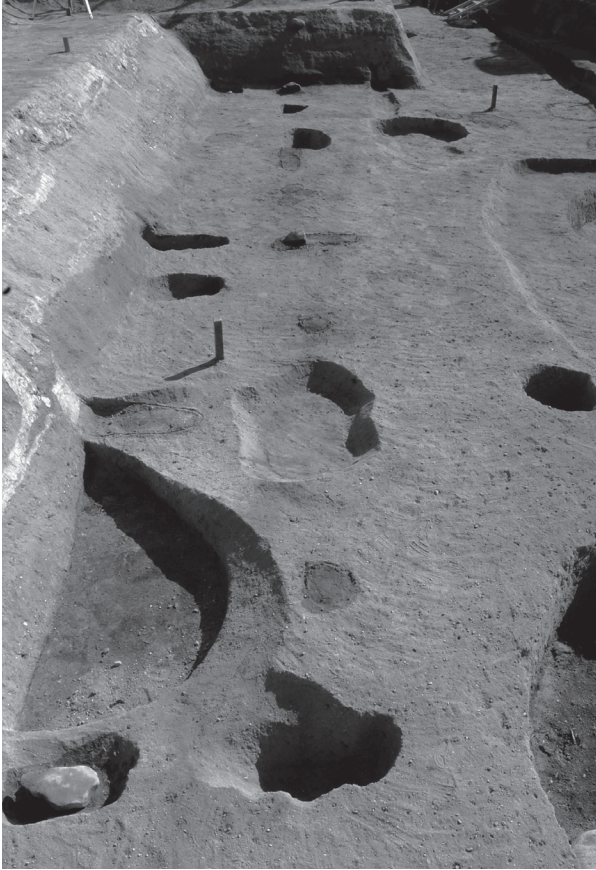


47 3工区全景①（南東より）



48 3工区全景②（南東より）





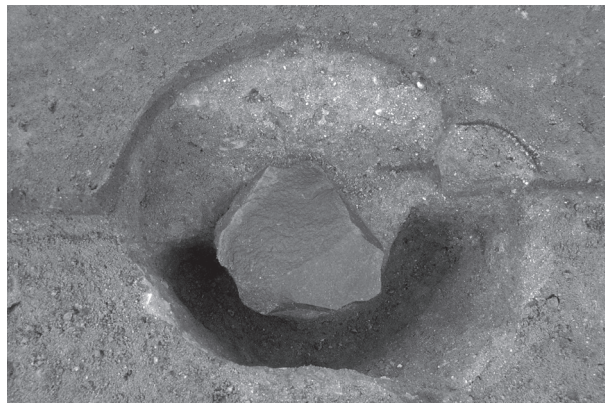
49 SB4081 検出状況（南西より）



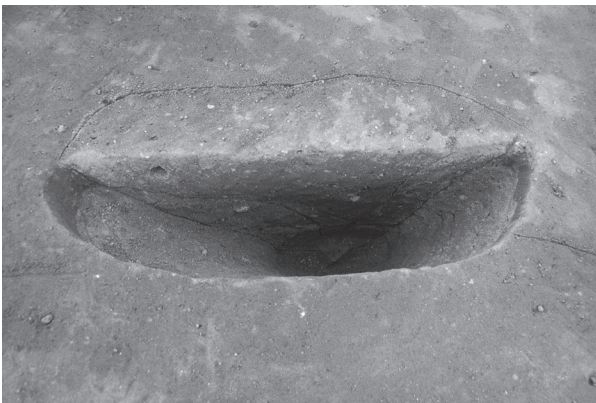
50 SB4081 検出状況（北東より）



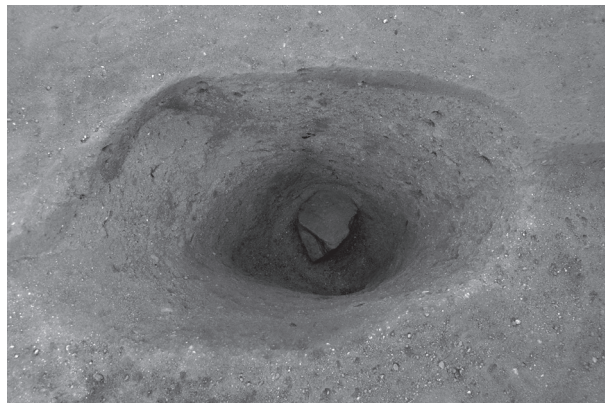
51 P4003 半截・栗石出土状況（南より）



52 P4003 根石出土状況（南より）



53 P4008 半截状況（南より）



54 P4008 完掘・根石出土状況（南より）



写真 14 畑間遺跡（4地点）



55 P4053 検出状況（北西より）



56 P4042 半截状況（西より）



57 P4052・4059 完掘状況（南西より）



58 P4037 完掘状況（東より）



59 SD4014 完掘状況（東より）



写真 15 畑間遺跡（4地点）



60 SD4036 完掘状況（北西より）



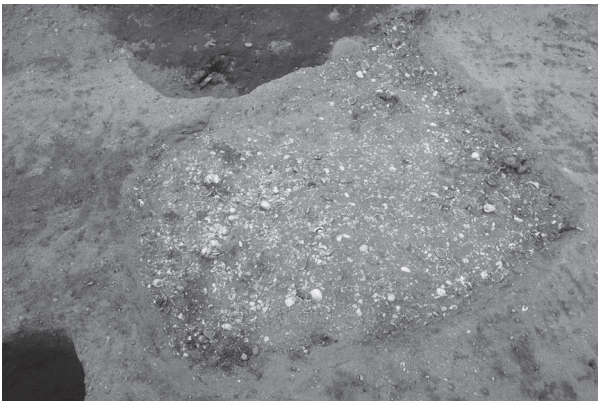
61 SD4036 断面（北西より）



62 SX4044 半截状況（北より）



63 SX4042 断面（東より）



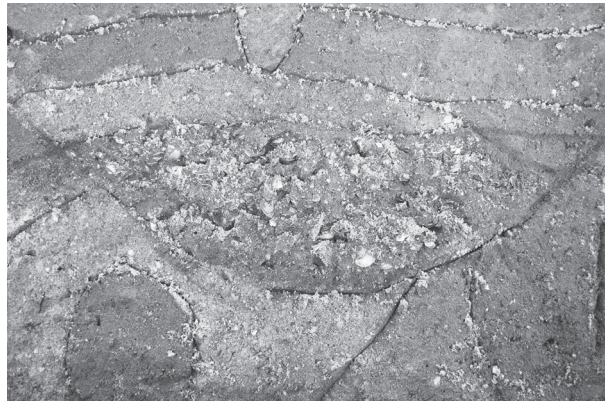
64 SX4076 検出状況（南東より）



65 SX4076 半截状況（南より）



66 SX4076 完掘状況（南西より）



67 SX4080 断面（北より）



写真 16 畑間遺跡 (4 地点)



68 SX4043 検出状況 (北より)



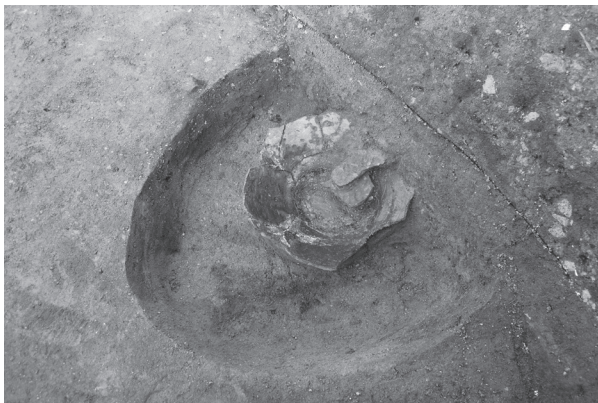
69 SX4038 抜取穴断面 (北より)



70 SK4001 半截状況 (南より)



71 SK4001 完掘状況 (南東より)



72 SK4026 甕出土状況 (南西より)



73 SK4026 完掘状況 (西より)



74 SD4075 断面 (西より)



75 SX4038・SD4075・4077 断面 (西より)





76 4区上層調査区全景（南東より）



77 4区下層調査区全景（南東より）



写真 18 郷中遺跡（1地点）出土遺物



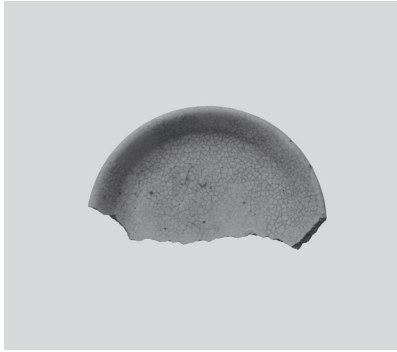
1 志野丸皿



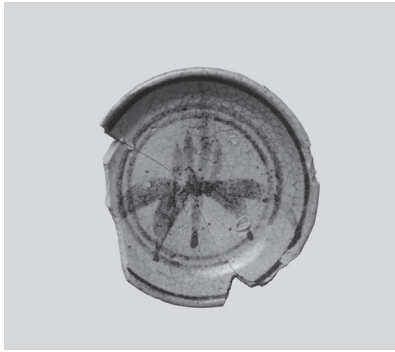
2 志野丸皿裏面に墨書「米」か



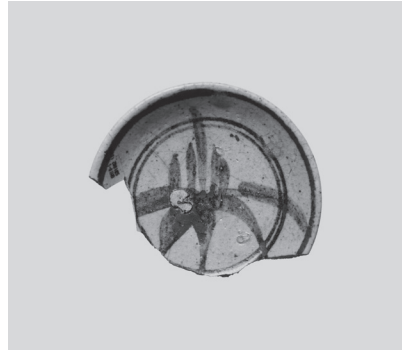
3 志野丸皿



4 志野丸皿



5 鉄絵皿



6 鉄絵皿



7 天目茶碗



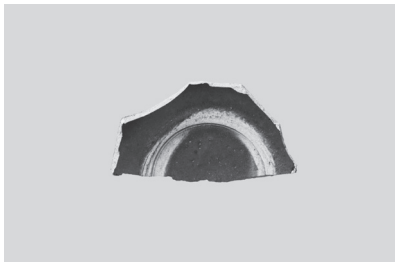
8 天目茶碗



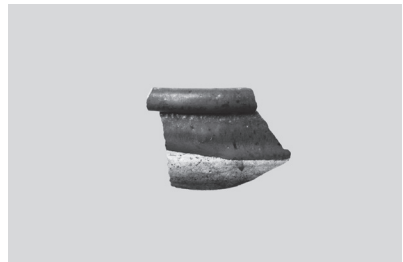
9 天目茶碗



10 志野碗（せんじ？）



11 輪禿皿



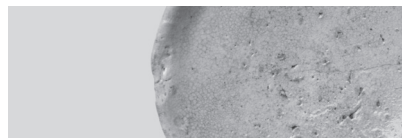
12 鉄釉香炉



13 染付花唐草紋大皿



14 龍泉系青磁碗

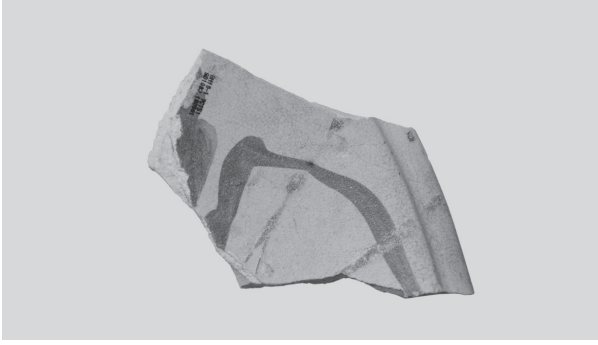


15 志野丸皿割れ口に釉薬

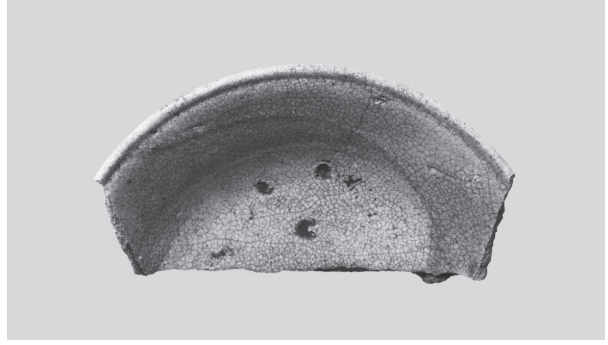


16 天目茶碗割れ口に釉薬

写真 19 郷中遺跡（1地点）出土遺物



17 鉄絵鉢



18 灰釉大鉢



19 鉄釉擦鉢



20 常滑焼（赤物）鉢



21 内耳鍋



22 内耳鍋



23 常滑焼（赤物）くど



24 常滑焼（赤物）くど

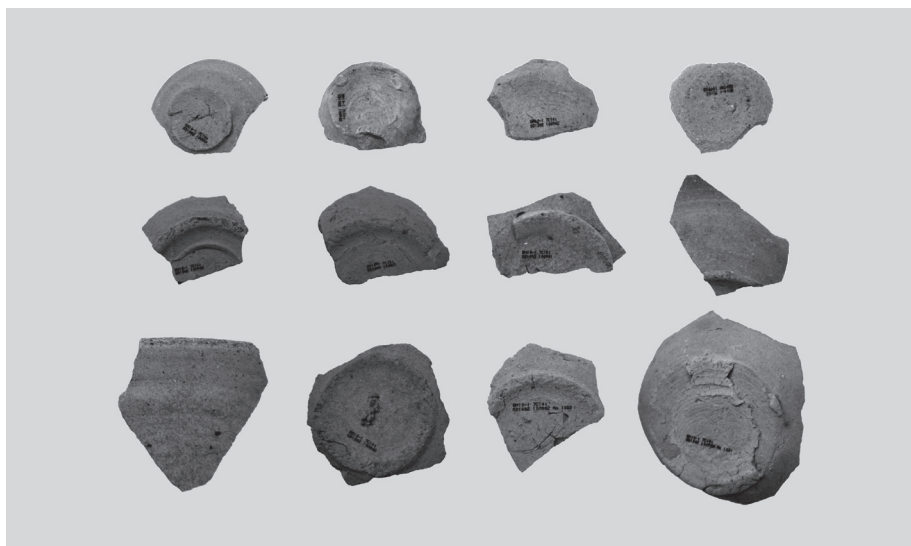


25 SD1002 出土瀬戸美濃陶器

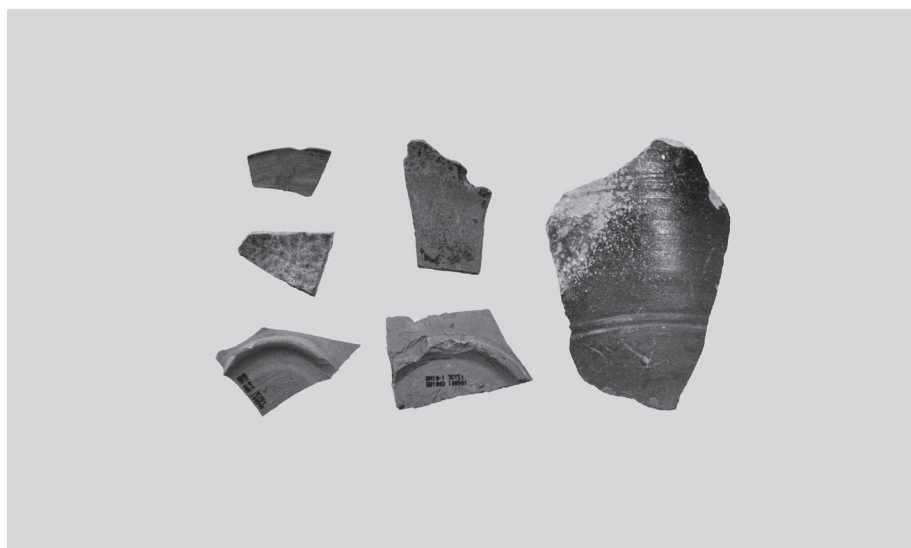


26 SD1002 出土土師質土器煮炊具

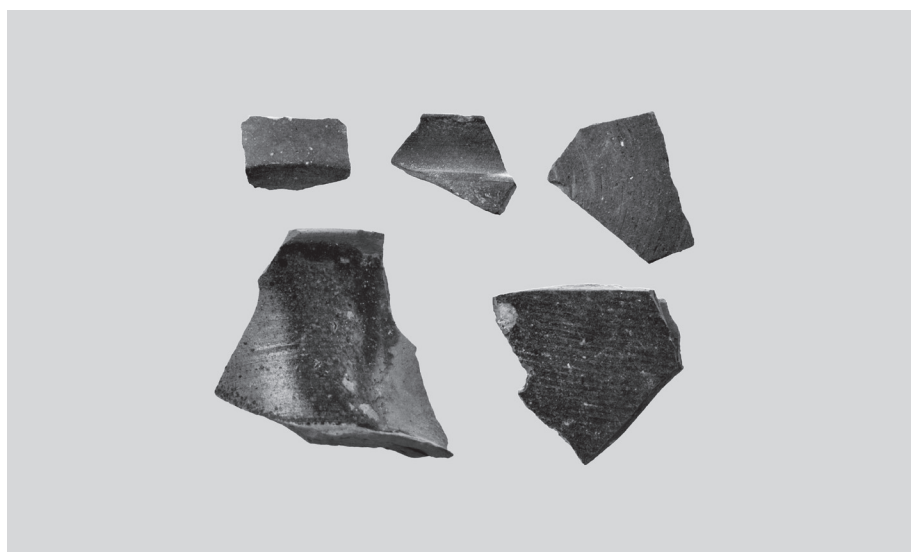




27 山茶碗



28 灰釉陶器



29 須恵器



写真 22 郷中遺跡 (1 地点) 出土遺物



30 茶釜



31 羽釜 (近・現代)



32 羽釜



33 焙烙



34 ミニチュア土師皿



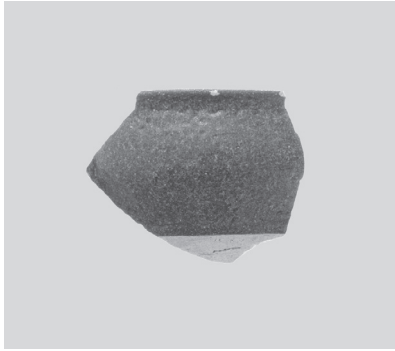
35 砥石



36 鉄釘



37 天目茶碗



38 天目茶碗



39 鉄釉碗（せんじ？）



40 志野丸皿



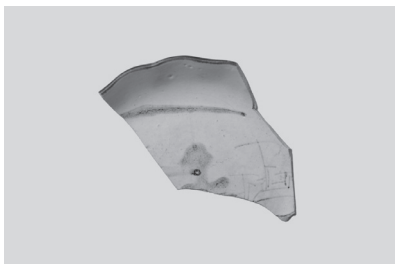
41 染付反端碗



42 染付広東碗



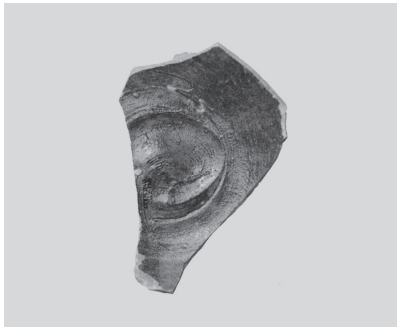
43 輪禿皿



44 染付輪花皿



45 鉄釉碗蓋



46 土瓶？



47 土瓶？底部（墨書アリ）



48 土師皿



49 灰釉皿



50 灰釉大鉢



51 瓦質火鉢

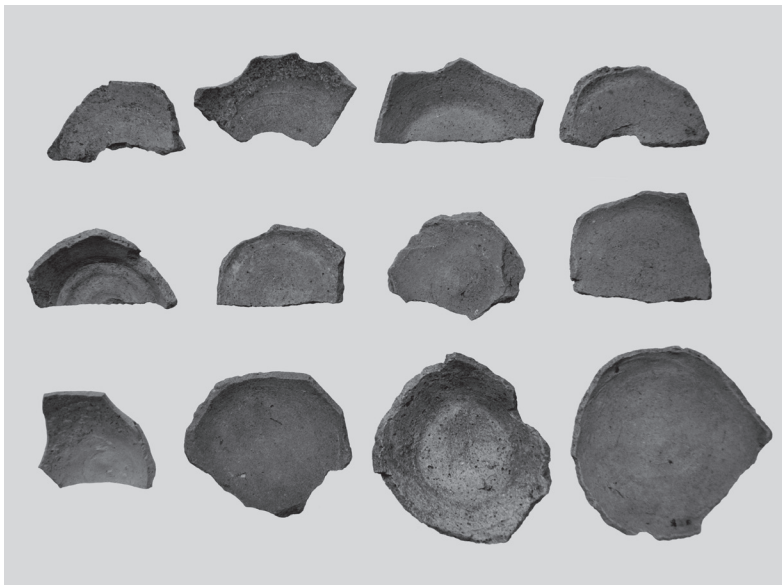
写真 24 郷中遺跡（2地点）出土遺物



52 長石釉平鉢



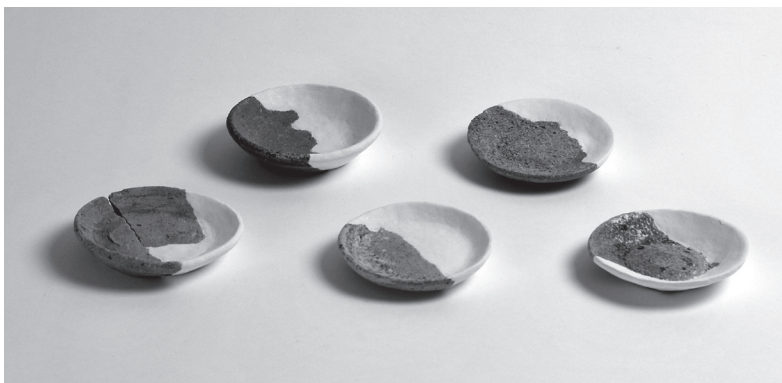
53 鉄釉播鉢



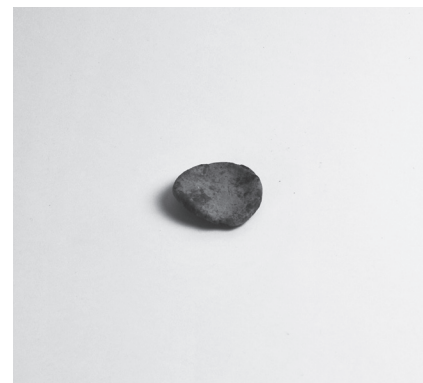
54 山茶碗（碗）



55 伊勢型鍋・内耳鍋・羽釜



56 山茶碗（皿）

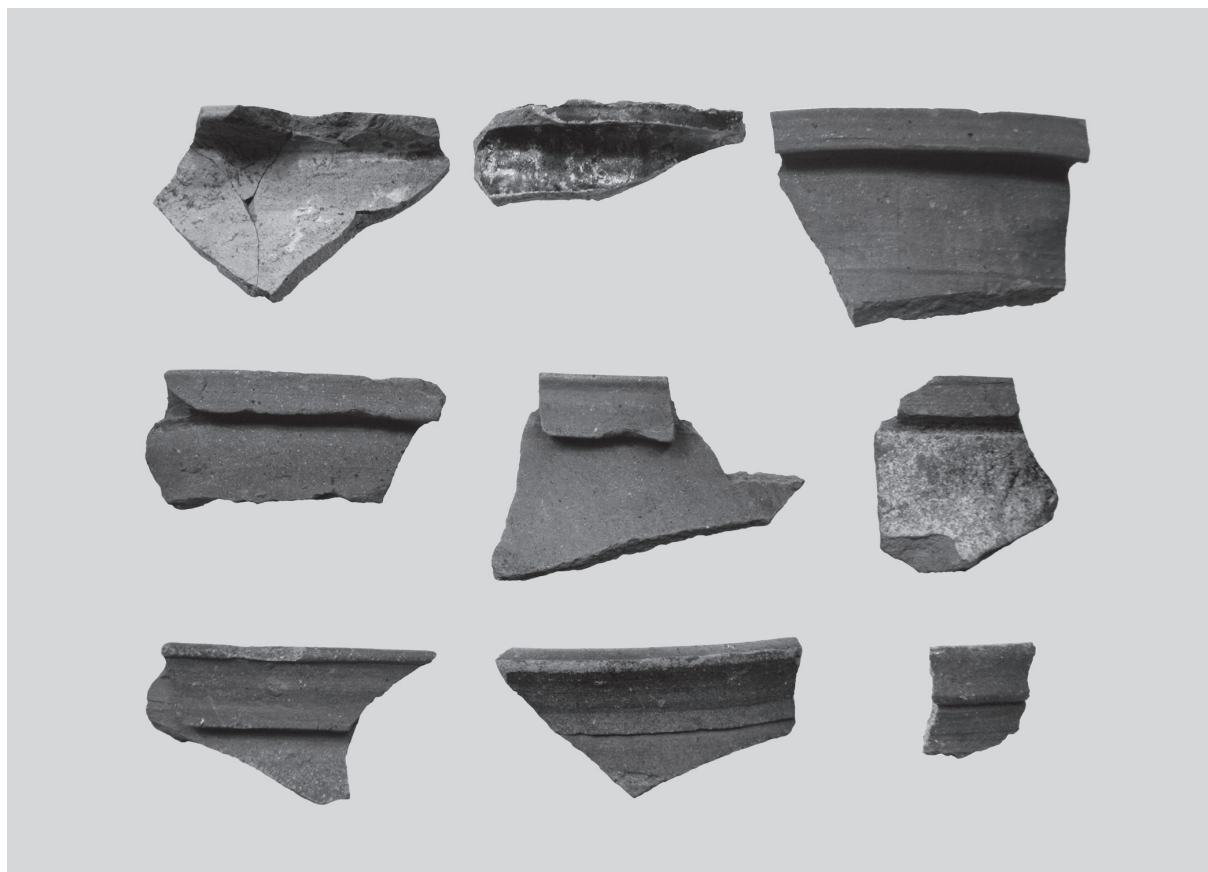


57 ミニチュア土師皿





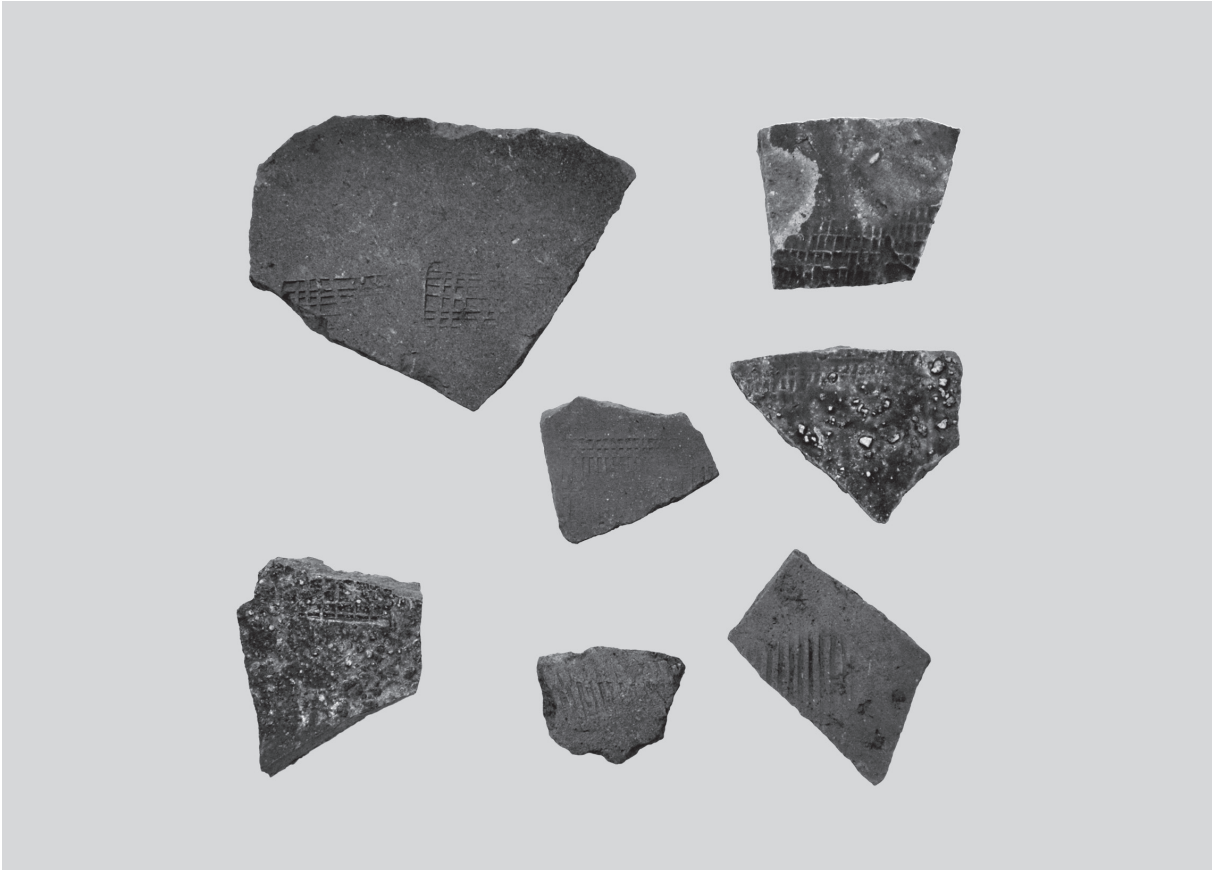




60 常滑焼・甕口縁部



61 常滑焼小型甕・壺口縁部



62 常滑焼甕・（紋様）叩き部



63 常滑焼片口鉢口縁部

写真 28 東畑遺跡（3地点）出土遺物



64 底御目皿



65 底御目皿（裏面）



66 灰釉天目（？）茶碗



67 土師質鉄鍋



68 伊勢型鍋



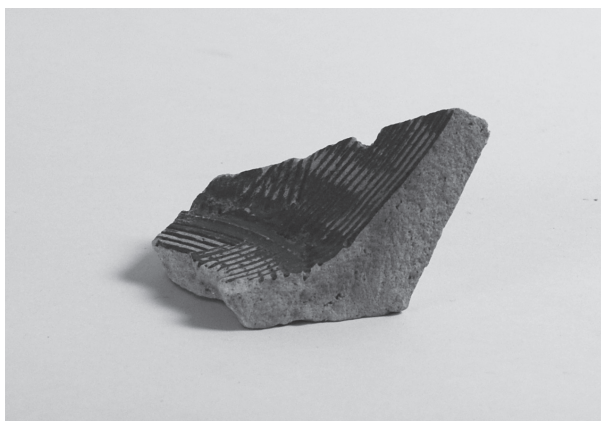
69 羽釜



70 宇田型甕



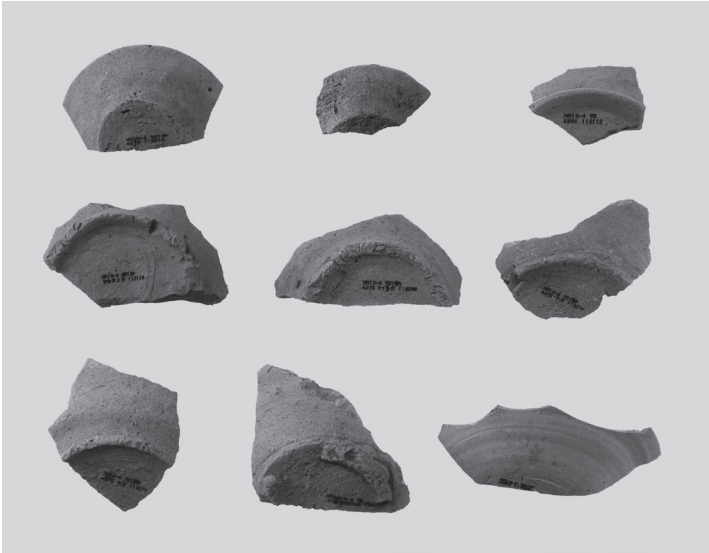
71 軒平瓦



72 鉄釉播鉢



73 加工円盤



74 山茶碗（尾張型）



77 天目茶碗



75 山茶碗（東濃型）



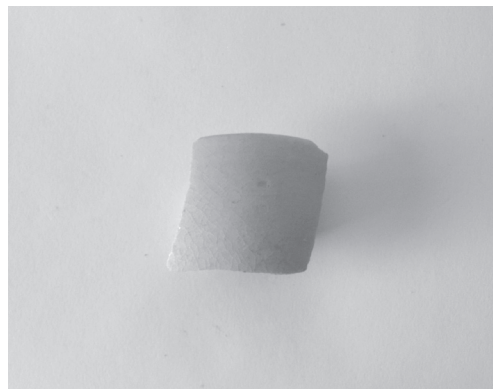
78 灰釉皿



76 須恵器



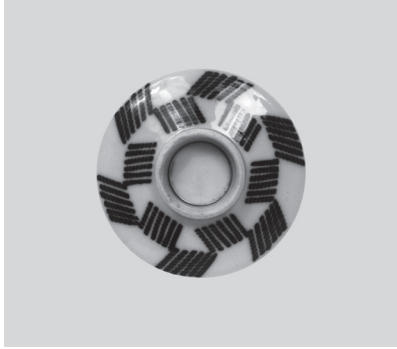
79 染付花紋小碗



80 灰釉碗（陶胎染付カ）



写真 30 畑間遺跡（4 地点）出土遺物



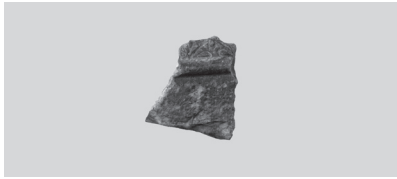
81 染付碗蓋



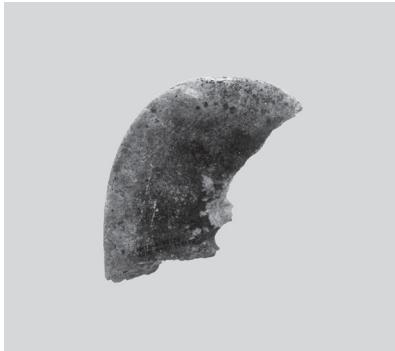
82 染付蓮華紋小碗



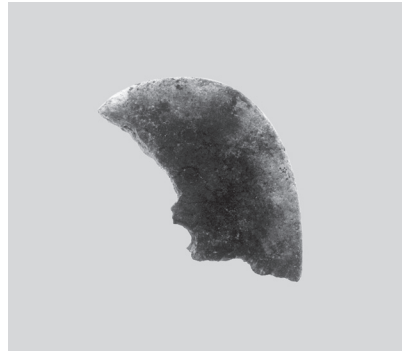
83 乗燭脚部



84 瓦質香炉（下：紋様部拡大）



85 瓦質温石



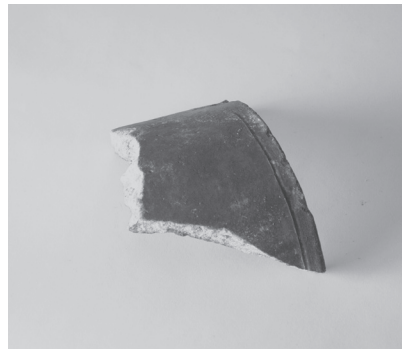
86 瓦質温石（裏面）



87 瓦質紡錘車



88 ミニチュア土師皿



89 鳥衾瓦尾部



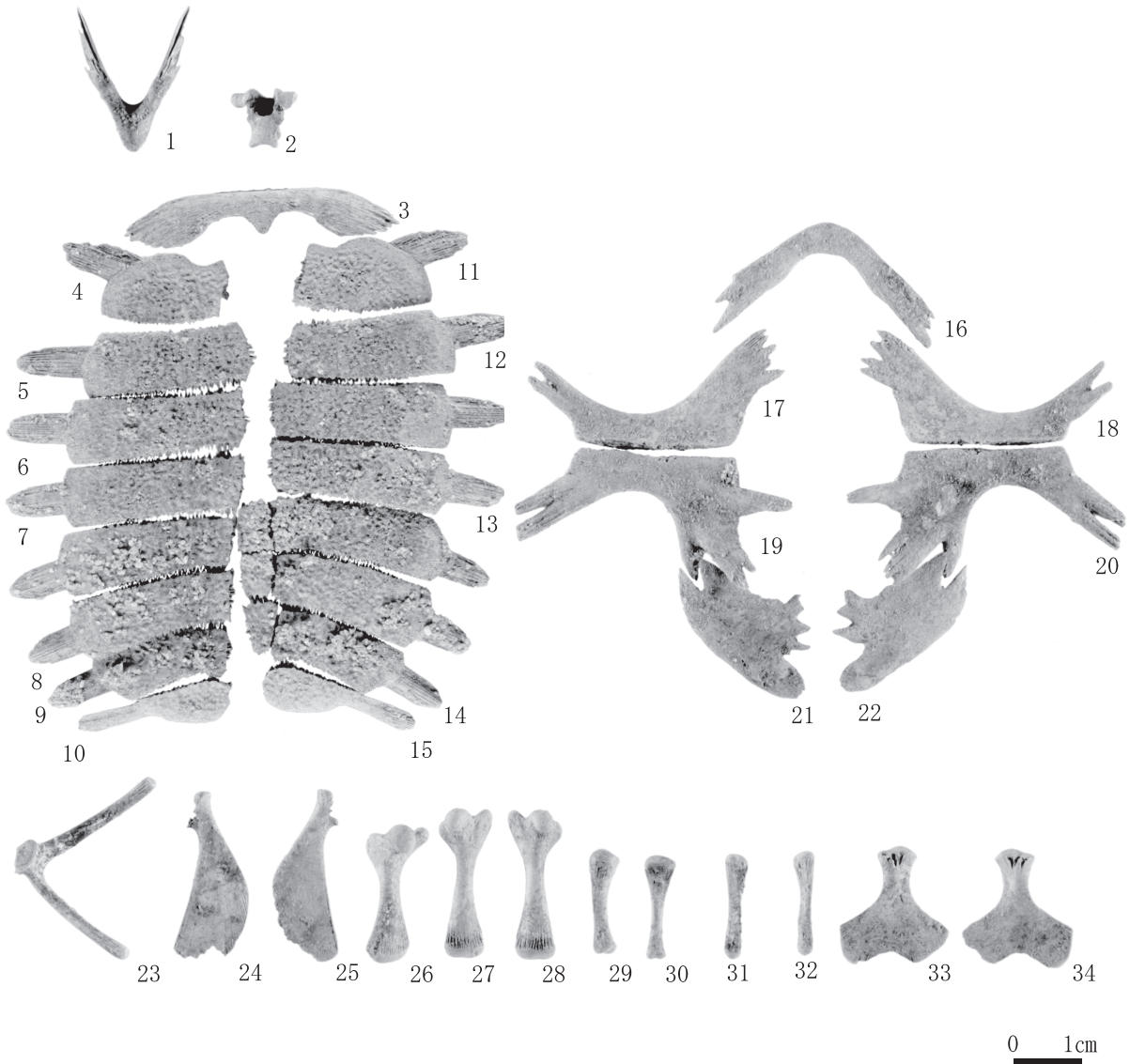
90 土錘



91 陶錘

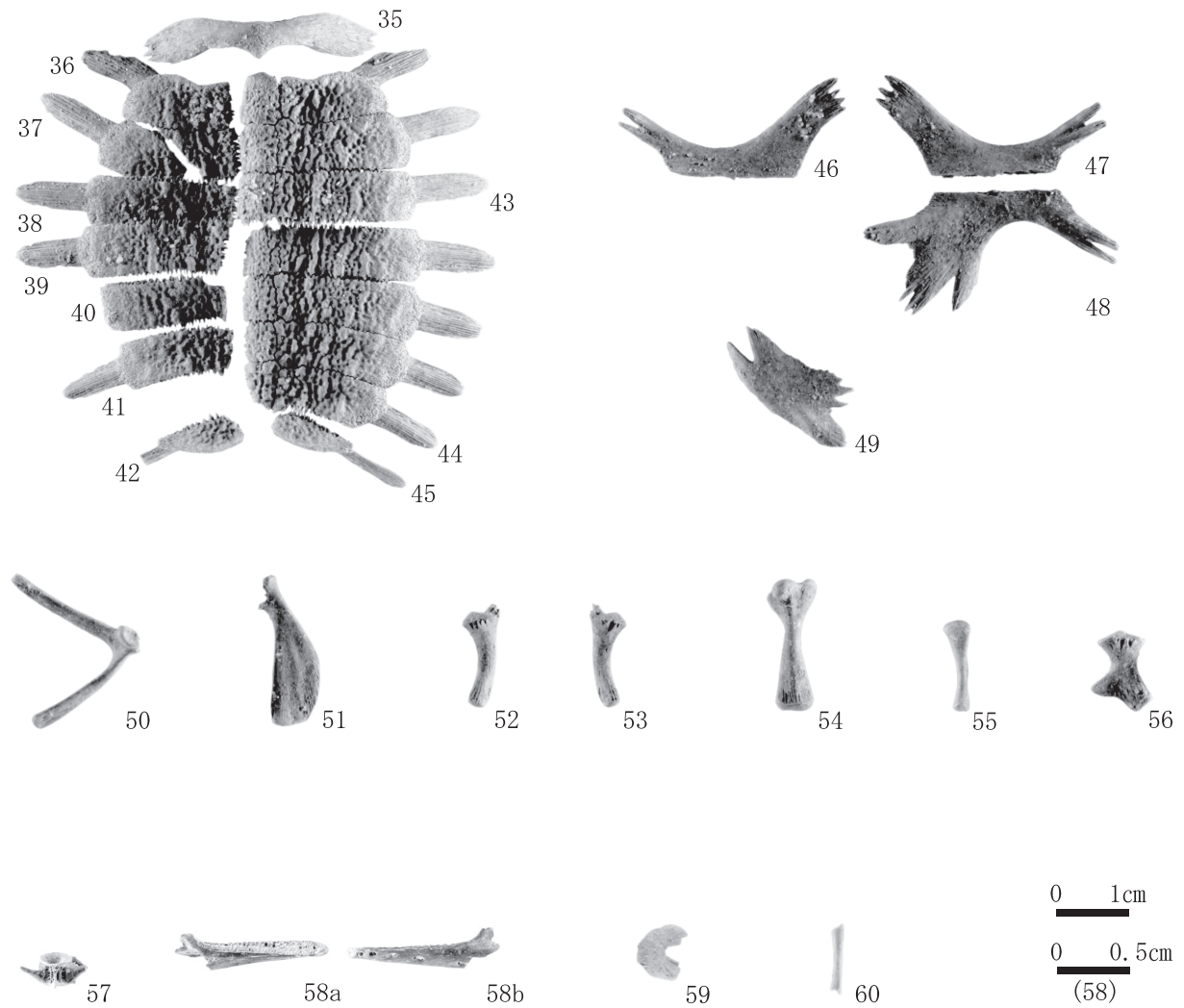


92 鉄釘



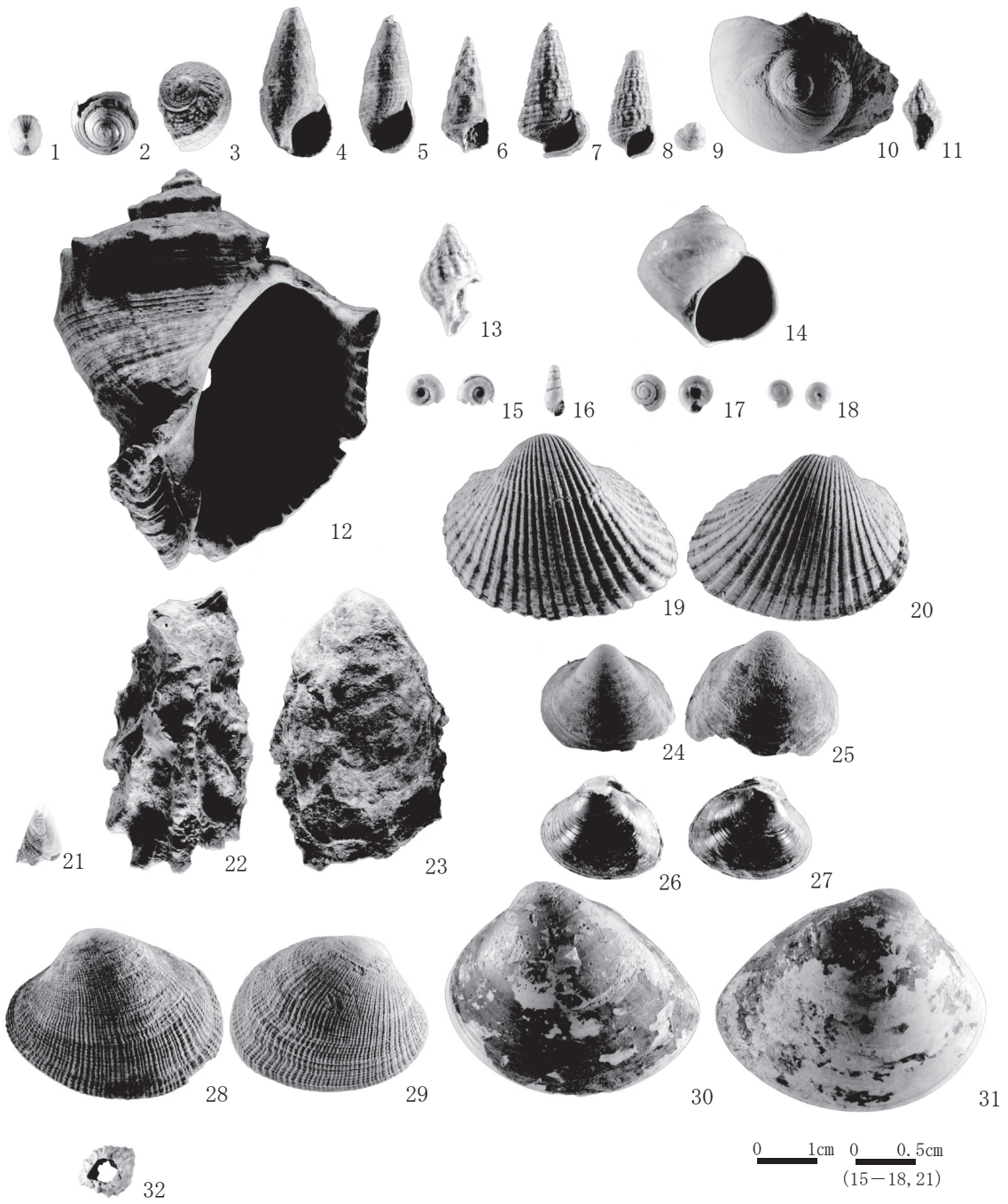
- |                                 |                                    |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 1. ニホンスッポン下顎骨(SD1002カメ類)        | 2. ニホンスッポン環椎(SD1002カメ?土壌)          |
| 3. ニホンスッポン頂骨板(SD1002カメ類)        | 4. ニホンスッポン第1左肋骨板(SD1002カメ類)        |
| 5. ニホンスッポン第2左肋骨板(SD1002カメ類)     | 6. ニホンスッポン第3左肋骨板(SD1002カメ類)        |
| 7. ニホンスッポン第4左肋骨板(SD1002カメ類)     | 8. ニホンスッポン第5・6左肋骨板(SD1002カメ類)      |
| 9. ニホンスッポン第7左肋骨板(SD1002カメ類)     | 10. ニホンスッポン第8左肋骨板(SD1002カメ?土壌)     |
| 11. ニホンスッポン第1右肋骨板(SD1002カメ?土壌)  | 12. ニホンスッポン第2右肋骨板(SD1002カメ類)       |
| 13. ニホンスッポン第3・4右肋骨板(SD1002カメ類)  | 14. ニホンスッポン第5~7肋骨板・右椎骨板(SD1002カメ類) |
| 15. ニホンスッポン第8右肋骨板(SD1002カメ類)    | 16. ニホンスッポン内腹骨板(SD1002カメ?土壌)       |
| 17. ニホンスッポン左中腹骨板(SD1002カメ?土壌)   | 18. ニホンスッポン右中腹骨板(SD1002カメ?土壌)      |
| 19. ニホンスッポン左下腹骨板(SD1002カメ?土壌)   | 20. ニホンスッポン右下腹骨板(SD1002カメ?土壌)      |
| 21. ニホンスッポン左剣上腹骨板(SD1002カメ?土壌)  | 22. ニホンスッポン右剣上腹骨板(SD1002カメ?土壌)     |
| 23. ニホンスッポン肩甲骨+右前鳥口骨(SD1002カメ類) | 24. ニホンスッポン左鳥口骨(SD1002カメ?土壌)       |
| 25. ニホンスッポン右鳥口骨(SD1002カメ?土壌)    | 26. ニホンスッポン左上腕骨(SD1002カメ?土壌)       |
| 27. ニホンスッポン左大腿骨(SD1002カメ?土壌)    | 28. ニホンスッポン右大腿骨(SD1002カメ類)         |
| 29. ニホンスッポン左脛骨(SD1002カメ?土壌)     | 30. ニホンスッポン右脛骨(SD1002カメ?土壌)        |
| 31. ニホンスッポン左腓骨(SD1002カメ?土壌)     | 32. ニホンスッポン右腓骨(SD1002カメ?土壌)        |
| 33. ニホンスッポン左恥骨(SD1002カメ類)       | 34. ニホンスッポン右恥骨(SD1002カメ?土壌)        |

写真 32 郷中遺跡出土骨（2）



- |                                 |                                  |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 35 .ニホンスッポン頂骨板 (SD1002カメ類)      | 36 .ニホンスッポン第1・2左肋骨板 (SD1002カメ類)  |
| 37 .ニホンスッポン第2左肋骨板 (SD1002カメ?土壌) | 38 .ニホンスッポン第3左肋骨板 (SD1002カメ類)    |
| 39 .ニホンスッポン第4左肋骨板 (SD1002カメ類)   | 40 .ニホンスッポン第5左肋骨板 (SD1002カメ?土壌)  |
| 41 .ニホンスッポン第6左肋骨板 (SD1002カメ類)   | 42 .ニホンスッポン第8左肋骨板 (SD1002カメ?土壌)  |
| 43 .ニホンスッポン第1~3右肋骨板 (SD1002カメ類) | 44 .ニホンスッポン第4~7右肋骨板 (SD1002カメ類)  |
| 45 .ニホンスッポン第8右肋骨板 (SD1002カメ類)   | 46 .ニホンスッポン左中腹骨板 (SD1002カメ類)     |
| 47 .ニホンスッポン右中腹骨板 (SD1002カメ類)    | 48 .ニホンスッポン右下腹骨板 (SD1002カメ類)     |
| 49 .ニホンスッポン左剣上腹骨板 (SD1002カメ?土壌) | 50 .ニホンスッポン肩甲骨+前左鳥口骨 (SD1002カメ類) |
| 51 .ニホンスッポン左鳥口骨 (SD1002カメ類)     | 52 .ニホンスッポン左上腕骨 (SD1002カメ?土壌)    |
| 53 .ニホンスッポン上腕骨右 (SD1002カメ?土壌)   | 54 .ニホンスッポン左大腿骨 (SD1002カメ?土壌)    |
| 55 .ニホンスッポン左脛骨 (SD1002カメ?土壌)    | 56 .ニホンスッポン右恥骨 (SD1002カメ?土壌)     |
| 57 .ウナギ左歯骨 (SD1002)             | 58 .カレイ科尾椎 (SD1002カメ?土壌)         |
| 59 .魚類鱗 (SD1002カメ?土壌)           | 60 .カエル類四肢骨 (SD1002カメ?土壌)        |

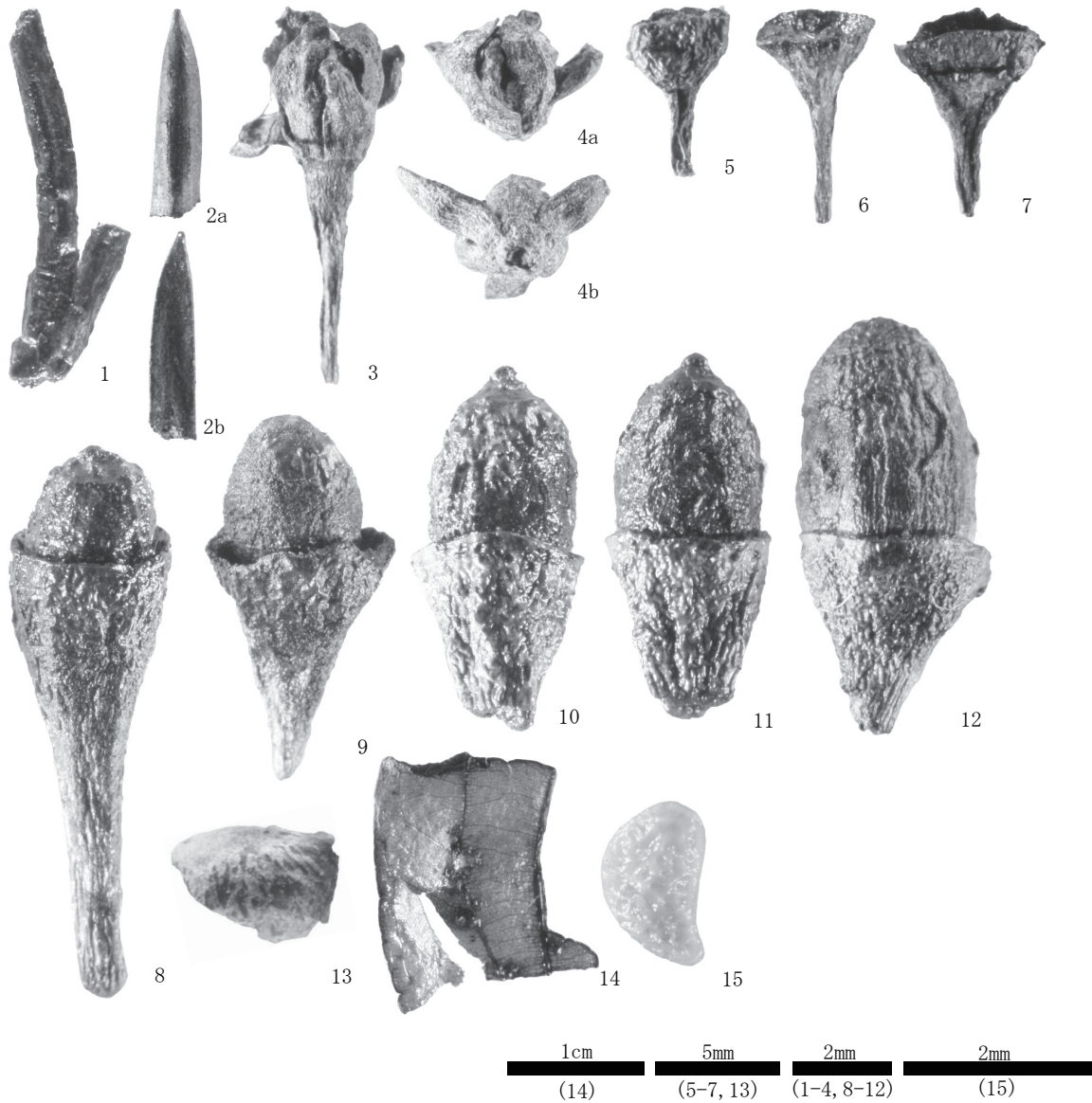




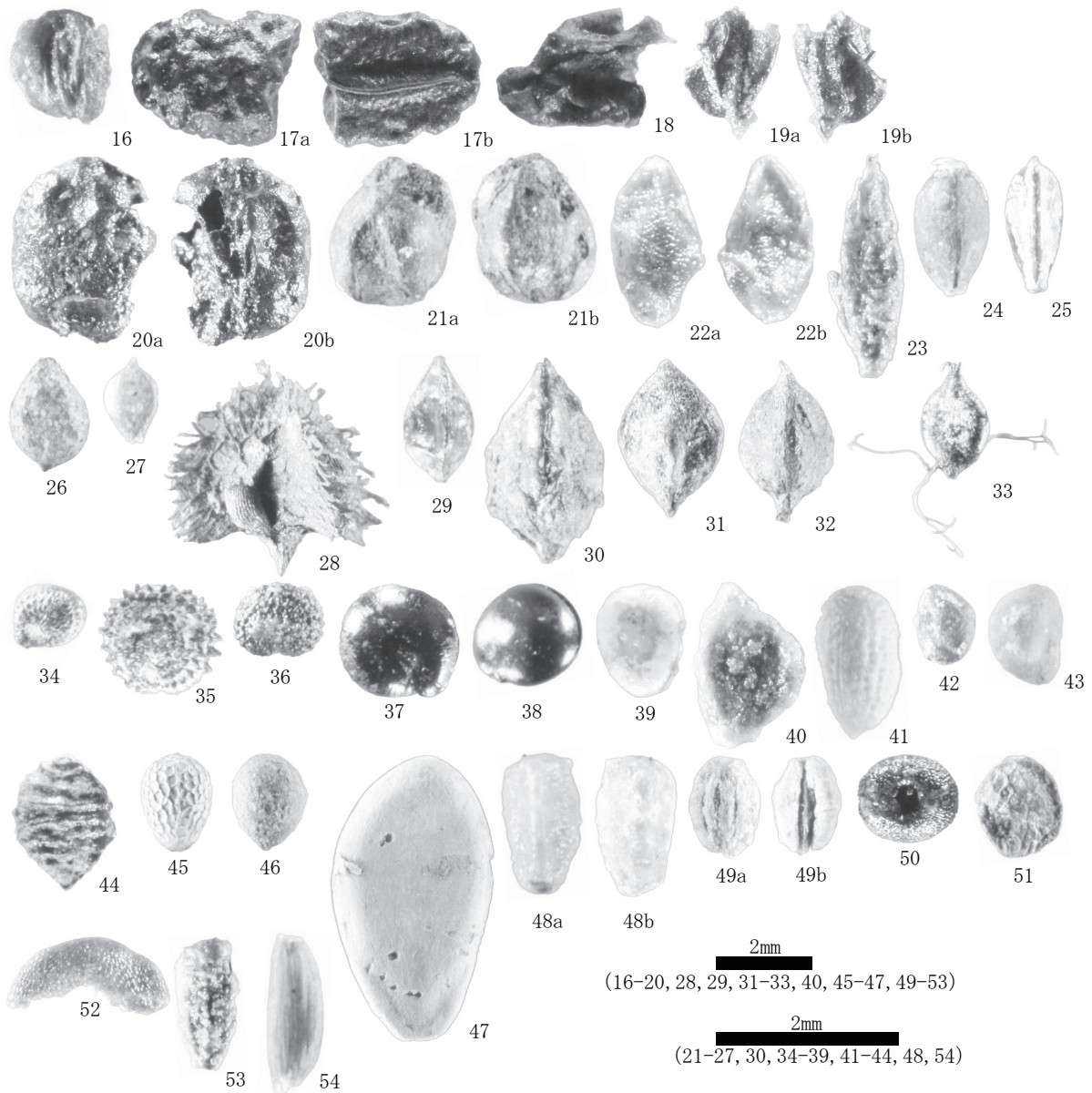
- |                       |                       |                         |
|-----------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1. ヒメコザラ (SD1002)     | 2. キサゴ (SD1002)       | 3. スガイ (SD1002)         |
| 4. ウミニナ (SD1002)      | 5. ホソウミニナ (SD1002)    | 6. イボウミニナ (SD1002)      |
| 7. ヘナタリ (SD1002)      | 8. カワアイ (SD1002)      | 9. タマキビ (SD1002)        |
| 10. ツメタガイ (SD1002)    | 11. カゴメガイ (SD1002)    | 12. アカニシ (SD1002)       |
| 13. ムシロガイ科 (SD1002)   | 14. オオタニシ (SD1002)    | 15. ヒラマキガイ科 (SD1002)    |
| 16. オカチョウジガイ (SD1002) | 17. パツラマイマイ (SD1002)  | 18. ヒメベッコウマイマイ (SD1002) |
| 19. サルボウガイ左殻 (SD1002) | 20. サルボウガイ右殻 (SD1002) | 21. イガイ科 (SD1002)       |
| 22. マガキ左殻 (SD1002)    | 23. マガキ右殻 (SD1002)    | 24. シオフキ左殻 (SD1002)     |
| 25. シオフキ右殻 (SD1002)   | 26. ヤマトシジミ (SD1002)   | 27. ヤマトシジミ右殻 (SD1002)   |
| 28. アサリ左殻 (SD1002)    | 29. アサリ右殻 (SD1002)    | 30. ハマグリ左殻 (SD1002)     |
| 31. ハマグリ右殻 (SD1002)   | 32. フジツボ類 (SD1002)    |                         |



写真 34 郷中遺跡出土大型植物遺体 (1)



- |                                    |                                    |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属 短枝 (SD1002カメ? 土壌)     | 2. マツ属複維管束亜属 葉 (SD1002)            |
| 3. ヤブニッケイ 花 (SD1002カメ? 土壌)         | 4. ヤブニッケイ 花 (SD1002)               |
| 5. ヤブニッケイ 果托 (SD1002)              | 6. ヤブニッケイ 果托 (SD1002)              |
| 7. ヤブニッケイ 果托 (SD1002カメ? 土壌)        | 8. ヤブニッケイ 未熟な果実・果托 (SD1002カメ? 土壌)  |
| 9. ヤブニッケイ 未熟な果実・果托 (SD1002カメ? 土壌)  | 10. ヤブニッケイ 未熟な果実・果托 (SD1002カメ? 土壌) |
| 11. ヤブニッケイ 未熟な果実・果托 (SD1002カメ? 土壌) | 12. ヤブニッケイ 未熟な果実・果托 (SD1002カメ? 土壌) |
| 13. ヤブニッケイ 種子 (SD1002)             | 14. ヤブニッケイ? 葉 (SD1002)             |
| 15. キイチゴ属 核 (SD1002カメ? 土壌)         |                                    |

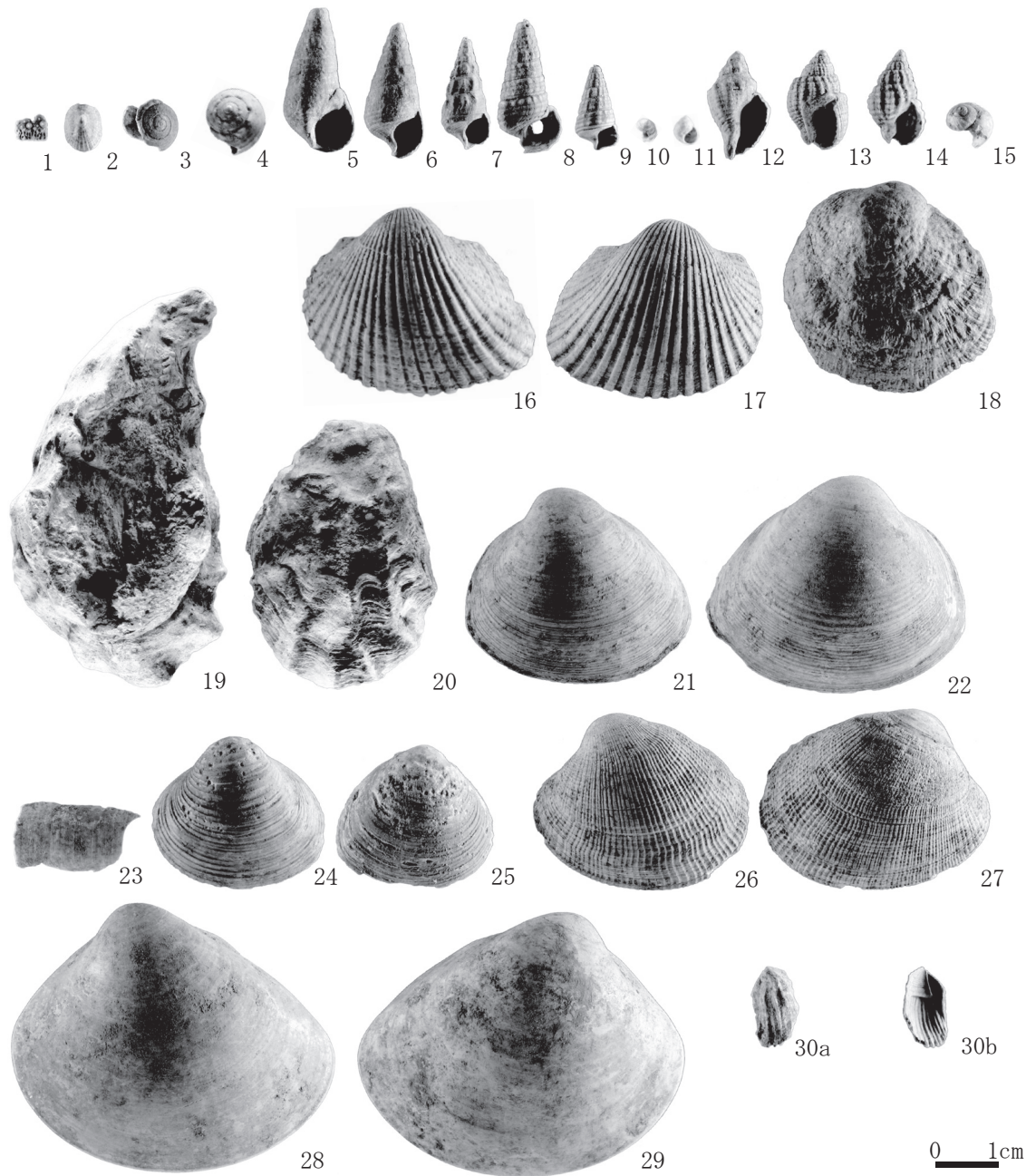


- 16. オモダカ族 果実 (SD1002)
- 18. イボクサ 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 20. コムギ 胚乳 (SD1002)
- 22. エノコログサ属 果実 (SD1002カメ? 土壌)
- 24. スカスグ類 果実 (SD1002)
- 26. ミズ属 果実 (SD1002)
- 28. ギンギン属 花被 (SD1002)
- 30. イヌタデ近似種 果実 (SD1002)
- 32. ポントクタデ近似種 果実 (SD1002)
- 34. スベリヒユ科 種子 (SD1002)
- 36. ナデシコ科 種子 (SD1002)
- 38. ヒユ科 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 40. キンボウゲ属 果実 (SD1002カメ? 土壌)
- 42. アブラナ科 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 44. カタバミ属 種子 (SD1002)
- 46. エノキグサ 種子 (SD1002)
- 48. フサモ属 果実 (SD1002)
- 50. アカネ科 核 (SD1002)
- 52. ナス近似種 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 54. キク科 果実 (SD1002カメ? 土壌)

- 17. ツルクサ 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 19. イネ 穎 (SD1002)
- 21. アワ 胚乳 (SD1002)
- 23. イネ科 果実 (SD1002)
- 25. カヤツリグサ属 果実 (SD1002)
- 27. イラクサ科 果実 (SD1002)
- 29. ギンギン属 果実 (SD1002カメ? 土壌)
- 31. ヤナギタデ近似種 果実 (SD1002)
- 33. サナエタデ近似種 果実 (SD1002)
- 35. ハコベ属 種子 (SD1002)
- 37. アカザ科 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 39. タガラシ 果実 (SD1002)
- 41. タケニグサ 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 45. トウダイグサ 種子 (SD1002)
- 47. 雑草メロン型 種子 (SD1002カメ? 土壌)
- 49. セリ科 果実 (SD1002)
- 51. エゴマ 果実 (SD1002)
- 53. タカサブロウ 果実 (SD1002)



写真 36 畑間遺跡出土貝



- |                       |                        |                     |
|-----------------------|------------------------|---------------------|
| 1. ウニ類 (SX4004)       | 2. ヒメコザラ (SX4004)      | 3. キサゴ (SX4004)     |
| 4. イボキサゴ (SX4004)     | 5. ウミニナ (SX4004)       | 6. ホソウミニナ (SX4004)  |
| 7. イボウミニナ (SX4004)    | 8. ヘナタリ (SX4004)       | 9. カワアイ (SX4004)    |
| 10. タマキビ (SX4004)     | 11. カワザンショウガイ (SX4004) | 12. カゴメガイ (SX4004)  |
| 13. ムシロガイ (SX4004)    | 14. ヒメムシロ (SX4004)     | 15. オオタニシ (SX4004)  |
| 16. サルボウガイ左殻 (SX4004) | 17. サルボウガイ右殻 (SX4004)  | 18. ウミギク科 (SX4004)  |
| 19. マガキ左殻 (SX4004)    | 20. マガキ右殻 (SX4004)     | 21. シオフキ左殻 (SX4004) |
| 22. シオフキ右殻 (SX4004)   | 23. マテガイ科 (SX4004)     | 24. ヤマトシジミ (SX4004) |
| 25. ヤマトシジミ右殻 (SX4004) | 26. アサリ左殻 (SX4004)     | 27. アサリ右殻 (SX4004)  |
| 28. ハマグリ左殻 (SX4004)   | 29. ハマグリ右殻 (SX4004)    | 30. フジツボ類 (SX4004)  |